

一般国道9号(福光・浅利道路)改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

# 下和田遺跡・高丸遺跡

2023

島根県教育委員会







一般国道9号(福光・浅利道路)改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

# 下和田遺跡・高丸遺跡

2023

島根県教育委員会



# 序

本書は、島根県教育委員会が国土交通省中国地方整備局浜田河川国道事務所から委託を受けて、令和2(2020)から令和4(2022)年度に実施した一般国道9号(福光・浅利道路)改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査の成果をまとめたものです。

下和田遺跡は、江津市後地町に所在し、古墳時代終末期から平安時代にかけての掘立柱建物や加工段、土器溜などの遺構が見つかりました。土器溜は、大型甕や線刻のある壺、甕、高坏などの須恵器群で構成され、古墳時代後期から終末期にかけての水辺の祭祀の様子を示すものと考えられます。掘立柱建物は、奈良時代を中心に平安時代まで続く集落に伴うもので、古代の人々の営みを今に伝えています。そして、加工段は、鎌倉時代以降の墓地であったことが判明しました。このように、下和田遺跡は、祭祀の場から日常生活の空間へ、さらには、墓域へと移り変わっていったことが明らかになりました。

高丸遺跡は、江津市黒松町に所在し、丘陵斜面から谷部にかけて位置します。丘陵斜面の窪地から、弥生時代や古墳時代の土器が出土しました。谷部では古墳時代後期以降の土師器や須恵器が出土しました。また、中世以降には遺跡の北側に砂丘が広がっていることがわかりました。

本書が、この地域の歴史を解明していくための基礎資料として広く活用されることを願っております。

最後になりましたが、発掘調査および本書の作成にあたりご協力をいただきました江津市黒松地区、後地地区の方々をはじめ、国土交通省中国地方整備局浜田河川国道事務所ならびに関係者の皆様に厚くお礼申し上げます。

令和5年3月

島根県教育委員会

教育長 野津 建二



## 例　言

1. 本書は国土交通省浜田河川国道事務所の委託を受けて、島根県教育委員会が令和2年度から4年度にかけて実施した一般国道9号(福光・浅利道路)改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査の報告書である。
2. 本報告書の発掘調査対象遺跡は以下のとおりである。  
高丸遺跡 江津市黒木松町393ほか(令和2年度:2,200m<sup>2</sup>、令和3年度:1,800m<sup>2</sup>、令和4年度:400m<sup>2</sup>)  
下和田遺跡 江津市後地町713-1ほか(令和3年度:1,300m<sup>2</sup>)
3. 発掘調査は島根県教育庁埋蔵文化財調査センターが実施し、大庭俊次(下和田遺跡)、中川 寧(高丸遺跡)が担当した。
4. 発掘調査作業(安全管理、発掘作業員の雇用、機械による掘削、測量など)については、下記の業者に委託した。  
高丸遺跡:株式会社堀工務店(大田市波根町:令和2・3年度)、株式会社トーエンジニアリング(出雲市萩原町:令和4年度)  
下和田遺跡:株式会社大畑建設(益田市大谷町)
5. 現地調査及び報告書作成において、以下の方々から御指導をいただいた(五十音順 所属は当時)。  
内田律雄(元島根県教育庁埋蔵文化財調査センター職員)、近江俊秀(文化庁主任調査官)、大橋泰夫(島根大学法文学部教授)、榎原博英(浜田市教育委員会文化振興係長)、中村唯史(島根県立三瓶自然館企画情報課調整監)、花谷 浩(出雲市弥生の森博物館館長)
6. 現地調査及び報告書作成において、以下の方々から御協力、御助言をいただいた(五十音順 所属は当時)。  
伊藤 創(江津市教育委員会社会教育課統括主任)、神 英雄(加納美術館参与)、持田直人(江津市教育委員会社会教育課主任主事)  
江津市教育委員会、黒木地域コミュニティ交流センター、都治地域コミュニティ交流センター、波積地域コミュニティ交流センター
7. 高丸遺跡の自然科学分析は文化財調査コンサルタント株式会社に委託して実施し、その成果を第5章に記した。
8. 下和田遺跡出土鉄器の保存処理は次の機関に委託した。  
令和4年度 (一財) 大阪市文化財協会
9. 掲載した遺構・遺物の実測図の作成・浄書は各調査員が行った。また、本書に掲載した遺構・遺物の写真は大庭、中川が撮影した。
10. 本書の執筆は第5章を除き大庭、中川が行い、第5章は文化財調査コンサルタント株式会社の渡辺正巳氏に執筆を依頼した。編集は大庭と中川が協議して行った。
11. 本書に掲載した遺構・遺物の実測図、写真などの資料は島根県教育庁埋蔵文化財調査センター(松江市打出町33番地)にて保管している。
12. 本書の編集にあたっては、DTP方式を採用した。

## 凡 例

1. 本書で示す方位は座標北を使用し、座標値は世界測地系（平面直角座標第Ⅲ系）に基づく。
2. 本書で示す標高値はメートル表記である。標高値は東京湾平均海面（T.P.）値を使用した。
3. 本書の第2～4、92、93図は国土地理院発行の1/25,000電子地形図「浅利」を使用し作成したものである。
4. 本書に掲載する土色名は、『新版 標準土色帳』農林水産省農林水産技術会議事務局 監修・財団法人日本色彩研究所 色票監修に従って表記した。
5. 本書で使用した遺構略記号は次のとおりである。SB：掘立柱建物、SD：溝状遺構
6. 本書で使用した挿図の縮尺は以下のとおりである。  
遺構：1/20、1/30、1/40、1/60、1/80、1/100、1/150 土器・土製品：1/3、1/4、1/6  
石器・石製品：1/1、1/3、1/4、1/6、 鉄器・鉄製品：1/2、1/3
7. 遺物実測図のうち、須恵器は断面を黒塗りにし、陶器は断面を網掛けにした。鉄器、石器、石製品、土製品の断面は斜線を入れた。
8. 本文、挿図、写真図版中の遺物番号は一致する。
9. 本書で用いた土器の編年観は以下の論文・報告書に依拠している。

### 【弥生土器・古式土師器】

松本岩雄 1992「石見地域」松本岩雄・正岡睦夫編『弥生土器の様式と編年 山陽・山陰編』木耳社  
【須恵器】

岡田裕之・土器検討グループ 2010「出雲地域における古代須恵器の編年」島根県古代文化センター編『出雲国の形成と国府成立の研究』13-43

榊原博英 2010「石見国の須恵器生産と出雲産須恵器」島根県古代文化センター編『出雲国の形成と国府成立の研究』65-83

### 【陶磁器】

上田秀夫 1982「14～16世紀の青磁碗の分類について」『貿易陶磁研究』第2号 日本貿易陶磁学会  
九州近世陶磁器学会編 2000『九州陶磁の編年 —九州近世陶磁学会10周年記念—』

# 本文目次

第1章 調査の経過 .....	1
第1節 調査に至る経緯 .....	1
第2節 調査体制 .....	3
第3節 試掘確認調査 .....	3
第2章 遺跡の位置と環境 .....	5
第1節 地理的環境 .....	5
第2節 歴史的環境 .....	5
第3章 下和田遺跡 .....	9
第1節 発掘調査の経過 .....	9
第2節 調査の方法 .....	14
第3節 基本層序 .....	14
第4節 検出遺構とその遺物 .....	16
第5節 遺構外出土遺物 .....	32
第6節 まとめ .....	50
第4章 高丸遺跡 .....	65
第1節 発掘調査の経過 .....	65
第2節 調査の方法 .....	68
第3節 層序 .....	73
第4節 遺構 .....	92
第5節 遺物 .....	112
第6節 まとめ .....	114
第5章 高丸遺跡発掘調査に伴う自然科学分析 .....	125
第6章 総括 .....	147
第1節 遺跡の位置づけ .....	147
第2節 遺物の検討 .....	148

# 挿図目次

## 【第1章】

- 第1図 下和田遺跡・高丸遺跡の位置 ..... 1  
第2図 事業予定地内の試掘調査対象遺跡 ..... 4

## 【第2章】

- 第3図 遺跡周辺の地形分類図 ..... 6  
第4図 遺跡の位置と周辺の遺跡分布図 ..... 8

## 【第3章】

下和田遺跡

- 第5図 試掘調査位置図 ..... 10  
第6図 トレーン配置図 ..... 11  
第7図 トレーン土層図 ..... 12

- 第8図 TR3出土遺物実測図 ..... 13

- 第9図 グリッド配置図（調査前地形図） ..... 15

- 第10図 グリッド配置図（完掘状況平面図） ..... 16

- 第11図 道構平面図 ..... 17

- 第12図 調査区横断土層図 ..... 18

- 第13図 調査区縦断土層図 ..... 19

- 第14図 土器溜実測図 ..... 20

- 第15図 土器溜出土状況図 ..... 21

- 第16図 土器溜遺物実測図 ..... 22

- 第17図 土器溜周辺遺物出土状況図 ..... 23

- 第18図 土器溜周辺遺物実測図1 ..... 24

- 第19図 土器溜周辺遺物実測図2 ..... 25

- 第20図 SB01実測図 ..... 26

- 第21図 SB02道構実測図・出土遺物実測図 ..... 27

- 第22図 SB05実測図 ..... 28

- 第23図 SB03実測図 ..... 28

- 第24図 SB04実測図 ..... 29

- 第25図 加工段及びその周辺で検出した道構平面図 ..... 29

- 第26図 SD01及び石列実測図 ..... 30

- 第27図 SD01出土土器実測図 ..... 30

- 第28図 集石土坑実測図 ..... 31

- 第29図 焼土溜実測図 ..... 31

- 第30図 その他の道構実測図 ..... 32

- 第31図 包含層出土遺物実測図1（古墳時代） ..... 33

- 第32図 包含層出土遺物実測図2（第2層） ..... 34

- 第33図 包含層出土遺物実測図3（第3層） ..... 34

- 第34図 包含層出土遺物実測図4（第4層） ..... 36

- 第35図 包含層出土遺物実測図5（第5層） ..... 37

- 第36図 包含層出土遺物実測図6（須恵器層） ..... 39

- 第37図 包含層出土遺物実測図7（須恵器層） ..... 40

- 第38図 包含層出土遺物実測図8（その他の須恵器） ..... 41

- 第39図 包含層出土遺物実測図9（その他の須恵器） ..... 42

- 第40図 包含層出土遺物実測図10（土師器層） ..... 44

- 第41図 包含層出土遺物実測図11（土師器層） ..... 45

- 第42図 包含層出土遺物実測図12（その他の土師器） ..... 46

第43図	包含層出土遺物実測図13（上製品等）	47
第44図	包含層出土遺物実測図14（陶磁器・中世土師器）	48
第45図	包含層出土遺物実測図15（鉄器・鉄製品）	48
第46図	包含層出土遺物実測図16（石器・石製品）	49
第47図	包含層出土遺物実測図17（石造物）	49
【第4章】		
高丸遺跡		
第48図	調査区位置図	66
第49図	試掘トレーンチ土層図	67
第50図	調査範囲・グリッド配置図	69
第51図	道構配置図1	70
第52図	道構配置図2	71
第53図	土層図作成位置図1	72
第54図	畦1 土層図	74
第55図	畦2 土層図	75
第56図	畦3 土層図	76
第57図	畦4 土層図	77
第58図	畦6・畦7・畦10 土層図	79
第59図	畦8 土層図	80
第60図	畦9 土層図1	81
第61図	畦9 土層図2	82
第62図	土層図作成位置図2	84
第63図	畦11 土層図	85
第64図	畦11-2 土層図	86
第65図	畦13 土層図	87
第66図	畦14・畦16・畦17・畦18 土層図	88
第67図	畦15 土層図	89
第68図	畦19・畦20・畦21・畦22 土層図	90
第69図	畦22 土層図	91
第70図	002炭窯・炭の範囲	93
第71図	002炭窯・炭化材出土状況	94
第72図	002炭窯土層図	95
第73図	014溝	97
第74図	034土坑・048土坑	98
第75図	001溝	99
第76図	003道構	100
第77図	032溝	101
第78図	046石列・062溝・063溝	103
第79図	033溝・064溝	104
第80図	黒褐色土の範囲	105
第81図	砂丘の砂層の範囲	106
第82図	ピット平面図1	107
第83図	ピット平面図2	108
第84図	ピット平面図3	109
第85図	完掘状況1	110
第86図	完掘状況2	111

第87図	出土遺物1	113
第88図	出土遺物2	114
第89図	出土遺物3	115
第90図	遺物出土位置図1	116
第91図	遺物出土位置図2	117
<b>【第5章】</b>		
第1図	調査区位置図	125
第2図	R2年度調査区平面図(試料採取地点)	125
第3図	R3年度調査区平面図(試料採取地点)	125
第4図	R2年度毎3試料採取位置	126
第5図	R2年度毎8試料採取位置	126
第6図	R3年度毎11試料採取位置	127
第7図	R2年度002炭窯試料採取地点	127
<b>【第6章】</b>		
第92図	弥生・古墳時代の浅利地区	149
第93図	奈良・平安時代、鎌倉・室町時代の浅利地区	150

## 表目次

<b>【第1章】</b>		
第1表	文化財保護法に基づく提出書類	2
第2表	調査体制	3
第3表	福光浅利試掘対象遺跡一覧	3
<b>【第3章】</b>		
第4表	SB01計測表	53
第5表	SB02計測表	54
第6表	SB05計測表	54
第7表	SB03計測表	54
第8表	SB04計測表	54
第9表	下和田遺跡遺構一覧表	54
第10表	下和田遺跡ピット等遺構一覧表	55
第11表	ヘラ記号・線刻・刻書等上器一覧表	55
第12表	下和田遺跡遺物観察表	56
第13表	下和田遺跡遺物数量表	63
<b>【第4章】</b>		
第14表	土層対応表	82
第15表	高丸遺跡土器觀察表	120
第16表	高丸遺跡その他の遺物觀察表	121
第17表	高丸遺跡出土遺物数量表	122
第18表	高丸遺跡遺構計測表	123
第19表	高丸遺跡ピット計測表	123
<b>【第5章】</b>		
第1表	微化石検査結果	127
第2表	花粉化石組成表	130-131
第3表	微化石検査結果	130
第4表	植物珪酸化石組成表	132
第5表	樹種同定・年代測定結果	133

## 写真図版目次

<b>【下和田遺跡】</b>		
図版1	1 下和田遺跡完掘状況	
	2 下和田遺跡から日本海を望む	
図版2	1 下和田遺跡調査前遠景(東から)	
	2 下和田遺跡調査前全景(東から)	
	3 下和田遺跡調査前近景(北から)	
図版3	1 土器溜出状況	
	2 SB01・SB02・SB05完掘状況	
図版4	1 西斜面遺構検出状況(東から)	
	2 完掘状況(北から)	
図版5	1 横断土層南端(西から)	
	2 横断土層E3グリッド(西から)	
	3 横断土層D3グリッド(西から)	
	4 横断土層北端C3グリッド(東から)	
図版6	1 縦断土層E端E2グリッド(南から)	
	2 縦断土層E2-E3グリッド(南から)	
	3 縦断土層E3グリッド(南から)	
	4 縦断土層E3-D3グリッド(南から)	
	5 縦断土層D3-D3グリッド(南から)	
	6 縦断土層D3グリッド(南から)	
	7 縦断土層D4グリッド(北から)	
	8 縦断土層D3-D4グリッド(北から)	
図版7	1 土器溜下層検出状況(東から)	
	2 土器溜下部土層堆積状況(北から)	

3	SB01・SB02検出状況(東から)	図版25	包含層7
図版8	1 SB01・SB02検出状況(東から) 2 SB02完掘状況 3 SB02・P8遺物検出状況(東から)	図版26	包含層8
		図版27	包含層9
		図版28	包含層10
図版9	1 SB01発掘状況 2 P1～P3検出状況(北から) 3 SB05検出状況(南から)	図版29	包含層11・遺構(a～h)
図版10	1 SB05完掘状況(東から) 2 加工段・石列検出状況(南西から) 3 SB03検出状況(北から)	図版30	線刻(線を強調して表現)
図版11	1 SB03発掘状況(北から) 2 SB04発掘状況(南西から) 3 SB04発掘状況(北東から)	【高丸遺跡】	
図版12	1 SB04完掘状況 2 SB03・SD03切合い関係(南西から) 3 SD01発掘状況(南から)	図版31	1 Tr3 2 Tr4 3 Tr5 4 Tr7 5 Tr8 6 調査前空撮
図版13	1 加工段下部構造(東から) 2 加工段下部構造(南東から) 3 加工段・SB03・満完掘状況(北から)	図版32	1 調査前1(西から) 2 調査前2(南から) 3 調査前3(北から)
図版14	1 SB03・加工段・集石土坑発掘状況 2 集石土坑検出状況 3 集石土坑検出状況 4 集石土坑発掘状況 5 集石土坑発掘状況	図版33	1 畦2土層1(西側) 2 畦2土層2(002炭窯部分) 3 畦2土層3(中央)
図版15	1 集石土坑発掘状況 2 集石土坑土層堆積状況 3 集石土坑最下層石検出状況 4 集石土坑最下層石除去 5 集石土坑掘削状況 6 包含層遺物出土状況(第37図140)	図版34	1 畦3土層1(中央) 2 畦3土層2(東側) 3 畦3土層3(西側)
	7 包含層遺物出土状況(第16図11ほか) 8 包含層遺物出土状況(第16図11ほか)	図版35	1 畦4土層1(中央) 2 畦4土層2(西側) 3 畦4土層3(東側)
図版16	1 包含層遺物出土状況(第19図28ほか) 2 包含層遺物出土状況(第19図29) 3 包含層遺物出土状況(第47図251) 4 包含層遺物出土状況(第47図251) 5 包含層遺物出土状況(第47図251) 6 焼土溜検出状況(東から) 7 焼土溜発掘状況 8 焼土溜完掘状況(北東から)	図版36	1 畦1土層 2 畦10土層 3 001溝土層
		図版37	1 畦7土層1(西側) 2 畦7土層2(東側) 3 畦8土層1(北端)
		図版38	1 畦8土層2(北側) 2 畦8土層3(中央) 3 畦9土層4(南側)
		図版39	1 畦9土層1(北端) 2 畦9土層2(北側) 3 畦9土層3(中央)
		図版40	1 畦9土層4(中央) 2 畦9土層5(南側) 3 畦9土層6(南側)
図版17	土器溜・土器溜周辺1(12～16,18)	図版41	1 003遺構検出 2 003遺構検出
図版18	土器溜周辺2・遺構(30～32)		3 003遺構土層
図版19	土器溜周辺3(28,29)・包含層1	図版42	1 002炭窯検出 2 002炭窯検出
図版20	包含層2・試掘確認調査(1～4)		3 002炭窯完掘
図版21	包含層3	図版43	1 002炭窯土層(AA') 2 002炭窯土層(BB')
図版22	包含層4		
図版23	包含層5		
図版24	包含層6		

3	002炭窯土層(中央)	図版53	1	畦19土層2(北側)
図版44	1 黒褐色土検出1 2 黒褐色土検出2 3 黒褐色土検出3		2	畦20土層 3 畦21土層
図版45	1 014溝検出1(AA'上層) 2 014溝検出2	図版54	1	032溝検出1(北から) 2 032溝検出2(南から) 3 032溝完掘
図版46	1 014溝土層1(CC) 2 014溝土層2(BB') 3 014溝土層3(AA')	図版55	1	034土坑検出 2 034土坑土層 3 034土坑完掘
図版47	1 畦11-2土層1(JJ') 2 畦11-2土層2(JJ') 3 畦11-2土層3(JJ')	図版56	1	046石列 2 062溝・063溝 3 048土坑
図版48	1 畦11土層1(KK';南端) 2 畦11土層2(KK';南側) 3 畦11土層3(分層前)	図版57	1	頂部完掘 2 頂部完掘
図版49	1 畦11土層4(分層後) 2 畦11土層5(KK';北側) 3 畦11土層6(KK';北端)	図版58	1	落ち込み確認 2 丘陵部完掘
図版50	1 畦12土層1(西側) 2 畦12土層2(中央) 3 畦12土層3(全体)	図版59	1	完掘状況1(南から) 2 完掘状況2(北から)
図版51	1 畦13土層 2 畦14土層 3 畦15土層	図版60	1	完掘状況3 2 完掘状況4(東から)
図版52	1 畦17土層 2 畦18土層 3 畦19土層1(南側)	図版61		出土遺物1
		図版62		出土遺物2
		図版63	1	出土遺物3-1 2 出土遺物3-2
		図版64	1	出土遺物4 2 出土遺物5

## 本文中写真目次

### 【第3章】

TR2掘削状況	.....	13
TR3掘削状況	.....	13

### 【第5章】

畦8試料採集状況	.....	146
畦11試料採集状況1	.....	146
畦11試料採集状況2	.....	146



# 第1章 調査の経過

## 第1節 調査に至る経緯

### 1 事業計画の概要

一般国道9号は京都府京都市から山口県下関市に至る総延長約730kmで、山陰地方の諸都市を結ぶ幹線道路である。

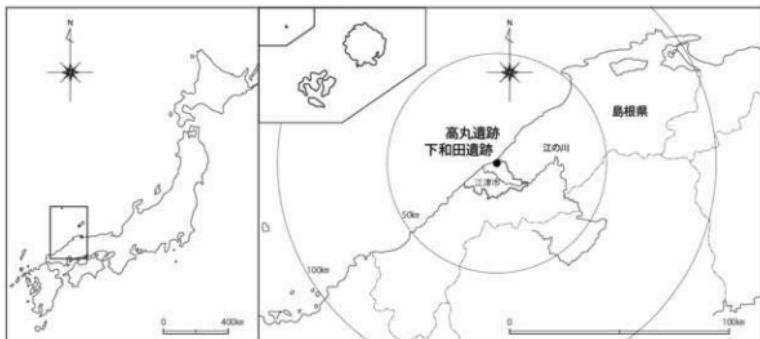
このうち島根県大田市温泉津町福光から江津市松川町上河戸間の現道は、防災対策必要箇所を抱える険路区間となっている。また、当該地域周辺には代替路線が存在しないため、事故や災害などにより東西方向における主要路線としての機能を確保することができない状況にある。こうした問題を解決するため、大田市温泉津町福光から江津市松川町上河戸に至る延長約6.5kmを結ぶ自動車専用道路が計画され、平成28年度から「福光・浅利道路」として事業着手されている。

### 2 埋蔵文化財保護部への照会と調整

福光・浅利道路の計画・事業化にあたり、島根県教育委員会は国土交通省中国地方整備局浜田河川国道事務所から、福光・浅利道路の計画地内の埋蔵文化財の有無について平成26年8月8日付け国中整備調査第51号にて意見照会を受けた。島根県教育委員会は、地元の江津市・大田市教育委員会の協力を得て平成26年度に最初の分布調査を実施し、平成27年度、28年度、30年度にも分布調査を実施した。その結果、試掘調査をする要注意箇所を複数確認したため、島根県教育委員会は浜田河川国道事務所に対し、平成31年4月12日付け島教文財第92号で、本線予定地内に所在する波来浜遺跡と23カ所の要注意箇所を回答した。

島根県教育委員会と国土交通省は、江津市教育委員会・大田市教育委員会も含めて協議を重ね、分布調査の結果を踏まえた試掘確認調査を、国庫補助事業により令和元年度は大田市温泉津町地内や江津市黒松町地内、後地町地内の11カ所で、令和2年度は同じく黒松町地内や後地町地内の11カ所で実施した。

これらの結果を受けて、国土交通省と島根県教育委員会の間で予定地内の埋蔵文化財の取り扱いについて協議を行い、国土交通省浜田河川国道事務所は文化財保護法第97条の第1項に基づく埋蔵



第1図 下和田遺跡・高丸遺跡の位置

文化財発見通知を令和2年3月5日付け国中整浜調設第92号で島根県教育委員会教育長に提出した。これに対し島根県教育委員会は令和2年3月10日付け島教文財第103号の10で、島根県教育委員会教育長から高丸遺跡について工事着手前に発掘調査を行うよう勧告した。

下和田遺跡については、同様に、国土交通省中国地方整備局浜田河川国道事務所から文化財保護法第94条の第1項に基づく埋蔵文化財発掘調査通知を令和2年10月5日付国中整浜調設第79号で島根県教育委員会教育長に提出した。これに対し、島根県教育委員会は、令和2年10月22日付島教文財第13号の76で島根県教育委員会教育長から下和田遺跡について工事着手前に発掘調査を行うよう勧告した。

### 3 法的手続き

第1表 文化財保護法に基づく提出書類

遺跡の発見に関する通知と勧告(法第97条第1項)

文書番号 日付	種類	所在地	発見年 月日	発見の事象	届出者	参考事項	勧告文書番号 日付	主な指示 事項
国中整浜調設第92号 R2.3.5	その他の遺構 （道路遺構） ほか	津市黒松町391 ほか	R2.3.5	福光浅利道路改築工事に伴 う埋蔵文化財試掘確認調査	国土交通省中国地方整備局 浜田河川国道事務所	島教文財第103号の10 R2.3.10	島教文財第103号の10 R2.3.10	発掘調査

埋蔵文化財発掘の通知と勧告(法第94条)

文書番号 日付	種類および 名称	所在地	土地所有者	面積(㎡)	原因	届出者	勧告文書番号 日付	主な指示 事項
国中整浜調設第79号 R2.10.5	集落跡 下和田遺跡	津市後地町713-1ほか	国土交通省	1,300	道路改築	国土交通省中国地方整備局浜田 河川国道事務所	島教文財第13号の76 R2.10.22	発掘調査

埋蔵文化財発掘調査の報告(法第99条)

文書番号 日付	種類および 名称	所在地	面積(㎡)	原因	報告者	担当者	期間
島教理第27号 R2.4.6	散布地 高丸遺跡	津市黒松町392-3ほか	2,200	道路改築	島根県教育厅埋蔵文化財調査センター所長	中川 実	R2.6.1～R2.12.25
島教理第8号 R3.4.2	散布地 高丸遺跡	津市黒松町393-1ほか	1,800	道路改築	島根県教育厅埋蔵文化財調査センター所長	中川 実	R3.5.11～R3.12.25
島教理第111号 R3.6.17	集落跡 下和田遺跡	津市後地町713-1ほか	1,300	道路改築	島根県教育厅埋蔵文化財調査センター所長	大庭徳次	R2.7.5～R2.12.17
島教理第10号 R4.4.7	散布地 高丸遺跡	津市黒松町392-3ほか	400	道路改築	島根県教育厅埋蔵文化財調査センター所長	中川 実	R4.7.1～R4.10.14

埋蔵文化財の発見通知(法第100条第2項)

文書番号 日付	物件名	出土地	発見者	土地所有者	保管場所
島教文財第114号の23 R3.2.3	土器部、須恵器、陶磁器、 鉄製品 計14箱	津市黒松町392-3ほか	島根県教育委員会教育長 新田英夫	国土交通省	島根県教育厅埋蔵文化財調査センター
島教文財第374号の12 R3.12.14	弥生土器、土器部、須恵器、 石器、鉄製品 計10箱	津市黒松町393-1ほか	島根県教育委員会教育長 野津建二	国土交通省	島根県教育厅埋蔵文化財調査センター
島教文財第374号の14 R4.1.18	土器部、須恵器、土製品、 鉄製品、計60箱	津市後地町713-1ほか	島根県教育委員会教育長 野津建二	国土交通省	島根県教育厅埋蔵文化財調査センター
島教文財第104号の8 R4.9.29	土器部、須恵器、陶磁器 計1箱	津市黒松町392-3ほか	島根県教育委員会教育長 野津建二	国土交通省	島根県教育厅埋蔵文化財調査センター

統了報告

文書番号 日付	遺跡名	調査期間	面積(㎡)	提出者	提出先
島教文財第99号 R3.2.2	高丸遺跡	R2.6.22～R3.1.19	2,200	島根県教育委員会教育長 新田英夫	国土交通省中国地方整備局浜田河川国道事務所長
島教文財第95号 R4.1.7	高丸遺跡	R3.6.10～R3.11.26	1,800	島根県教育委員会教育長 野津建二	国土交通省中国地方整備局浜田河川国道事務所長
島教文財第95号 R4.1.7	下和田遺跡	R4.7.6～R4.12.6	1,300	島根県教育委員会教育長 野津建二	国土交通省中国地方整備局浜田河川国道事務所長
島教文財第582号の3 R4.9.21	高丸遺跡	R4.7.15～R4.9.20	400	島根県教育委員会教育長 野津建二	国土交通省中国地方整備局浜田河川国道事務所長

## 第2節 調査体制

発掘調査、整理作業は以下の体制で行った。

調査主体 島根県教育委員会

調査組織 島根県教育庁埋蔵文化財調査センター

第2表 調査体制

		令和2年度		令和3年度		令和4年度	
事務局	課長	萩原雅人	課長	中島正顕	課長	中島正顕	
	教育庁文化財部 文化財グループ GL	田中明子	文化財グループ GL	田中明子	文化財グループ GL	田中明子	
	管理指導スタッフ調整室 所長	池淵俊一 椿 真治	管理指導スタッフ調整室 所長	池淵俊一 椿 真治	管理指導スタッフ調整室 所長	池淵俊一 椿 真治	田中敏照 田中敏保
埋蔵文化財調査センター	総務課長 高速道路調査推進スタッフ調整室 管理課長	和田 謙 守岡正司	総務課長 高速道路調査推進スタッフ調整室 管理課長	和田 謙 守岡正司	総務課長 高速道路調査推進スタッフ調整室 管理課長	和田 謙 守岡正司	坂根祐二 深田 浩
	調査員 (高丸跡)		調査員 (下和田跡)		調査員 (高丸跡)		調査員 (下和田跡)
埋蔵文化財調査センター	高速道路調査推進スタッフ主幹 会計年度任用職員調査員	中川 軍	高速道路調査推進スタッフ企画幹 会計年度任用職員調査員	大庭俊次 岩橋康子	高速道路調査推進スタッフ企画幹 会計年度任用職員調査員	大庭俊次 岩橋康子	高速道路調査推進スタッフ企画幹 会計年度任用職員調査員
	会計年度任用職員調査員	園山 嘉	調査補助員	福田市子	調査補助員	太田晴美	調査補助員
	会計年度任用職員調査員	松山智弘	調査補助員	柳浦俊一	調査員 (高丸跡)	福田市子	柳浦俊一
	会計年度任用職員調査員	柳浦俊一	調査員 (高丸跡)	阿部智子	高速道路調査推進スタッフ主幹	中川 軍	調査員 (高丸跡・報告書作成)
	調査補助員	飯田由起	会計年度任用職員調査員	松山智弘	高速道路調査推進スタッフ主幹	中川 軍	調査補助員
	調査補助員		調査補助員	柳浦俊一	会計年度任用職員調査員	柳浦俊一	柳浦俊一

## 第3節 試掘確認調査

福光浅利道路の試掘調査は令和元(2019)年度の調査を令和元年9月～11月、令和2年2月に、令和2(2020)年度調査を令和2年6月、9～10月に実施した。試掘確認調査の結果、令和元年度に高丸遺跡、令和2年度に下和田遺跡を発見した。試掘確認調査の結果はそれぞれ第3章、第4章で述べる。

第3表 福光浅利試掘対象遺跡一覧

No.	所在地	試掘調査年度	試掘調査結果	遺跡名	本発掘調査年度
1	江津市後地町	令和元年度	本発掘調査不要		
2	江津市後地町	令和2年度	本発掘調査不要		
3	江津市後地町	令和2年度	本発掘調査不要		
5	江津市後地町	令和2年度	本発掘調査不要		
6	江津市後地町	令和2年度	本発掘調査不要		
7	江津市後地町	令和2年度	本発掘調査不要		
8	江津市後地町	令和元年度	本発掘調査不要		
9	江津市後地町	令和元年度	本発掘調査不要		
10	江津市後地町	令和元年度	本発掘調査不要		
11	江津市後地町	令和2年度	本発掘調査	下和田遺跡	令和3年度
12	江津市黒松町	令和元年度	本発掘調査不要		
13	江津市黒松町	令和2年度	本発掘調査不要		
14	江津市黒松町	令和2年度	本発掘調査不要		
15	江津市黒松町	令和元年度	本発掘調査	高丸遺跡	令和2～4年度
17	江津市黒松町	令和2年度	本発掘調査不要		
18	江津市後地町	令和2年度	本発掘調査不要		
19	江津市黒松町	令和元年度	本発掘調査不要		
20	大田市温泉津町吉浦	令和元年度	本発掘調査不要		
21	大田市温泉津町吉浦	令和元年度	本発掘調査不要		
22	大田市温泉津町吉浦	令和元年度	本発掘調査不要		
25	江津市後地町	令和2年度	本発掘調査不要		



第2図 事業予定地内の試掘調査対象遺跡

## 第2章 遺跡の位置と環境

### 第1節 地理的環境

江津市は島根県の西部の日本海沿岸部に位置する。中国山地より流れ下る江の川により分断されており、東側を江東地区、西側を江西地区と呼称している。江津市の沿岸部には険しい山地が少なく、準平原の前地斜面で形成されている。山間部は中国山地からなる急峻な山並みが横たわっている。高丸遺跡の位置する黒松町は江津市の北端であり、大田市温泉津町と接している。下和田遺跡の位置する後地町の「後地」は、海底が隆起した土地で起伏が多く、日本海の荒波と強風で砂の移動堆積が繰り返され海の後に形成された土地から地名が付いたと伝えられている。また、高丸遺跡の所在する黒松町の「黒松」の由来は、「石見八重葎」によると八束水臣命がこの地を船で通ったとき「松黒き所」といったことによると伝えられている。

江津市嘉久志町から大田市宅野町にかけて南西—北東方向に直線的にのびる海岸には中新世の火山岩や堆積岩、後期白亜紀火成岩、ジュラ紀及びそれ以前の変成岩が露出する海食崖が連なる。この海食崖はさまざまな程度に海食されており、海食が進んだ入り江には野浦浜、琴ヶ浜、波来浜、尾浜、高浜などの湾頭砂州と後背湿地が生じている。特に江津市黒松町から浅利町にかけてと、江の川河口からその西側、浜田市にかけては波来浜、尾浜、高浜など長大な砂州が断続的に分布し、その背後には砂丘が広がっている。砂丘が形成される主な要因は季節風による海浜からの飛砂であり、特に近世以降に砂丘が盛んになってから、かんな流しによる大量の土砂が江の川を通して日本海へ流出し海岸へ漂着したため、この地域では近世以降に発達した砂丘が多い。温泉津及び江津地域は、中国山地の北縁にあたり、江の川や小河川沿いの谷底平野を除けば平野はほとんどない。その中で黒松町の南に位置する都治町周辺は江東地区で最も平野が広がるところであり、交通の要衝として機能していたようで、海岸沿いよりも遺跡が多く見つかっている。

### 第2節 歴史的環境

旧石器時代の遺跡は見つかっていない。

#### 【縄文時代】

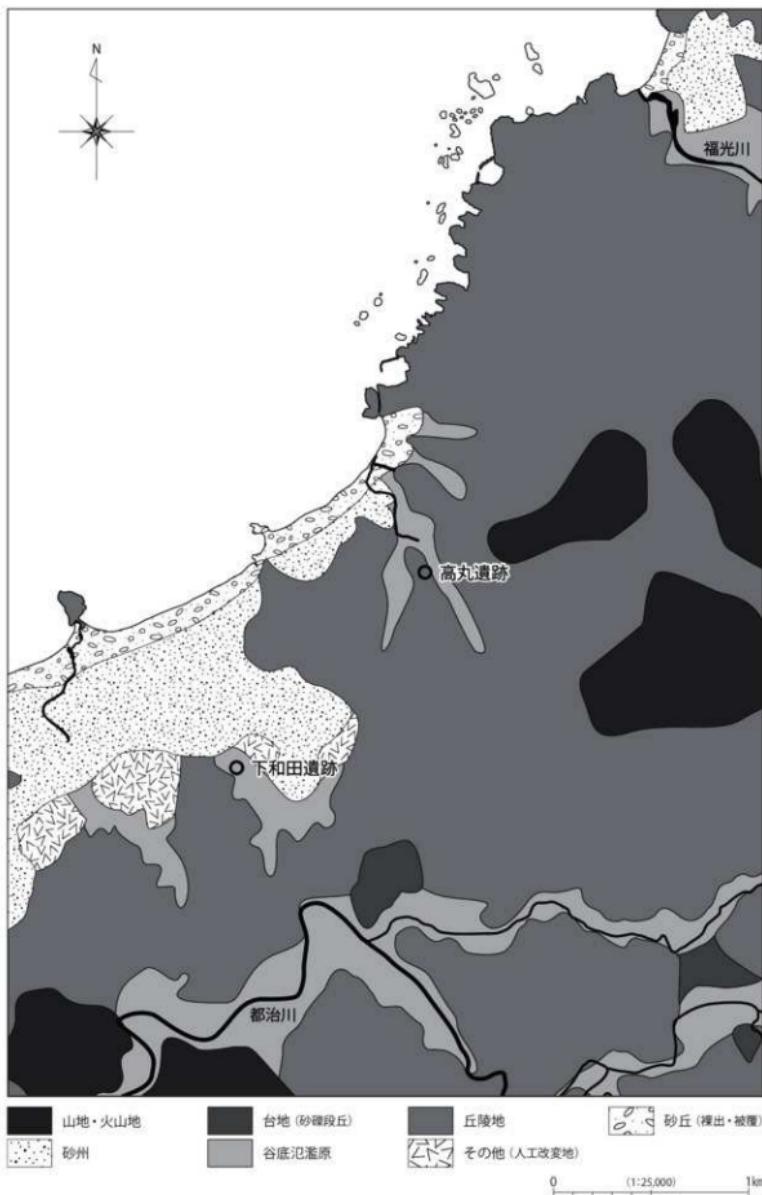
尾浜遺跡では縄文前期や後期の土器が採集されている。埋築遺跡では縄文晩期の土器が出土している。

#### 【弥生時代】

埋築遺跡では弥生前期の溝状遺構を確認した他、縄文晩期から弥生前期の土器が出土している。波来浜遺跡は砂丘上に位置する遺跡であり、弥生前期の壺棺の可能性のある大型の壺が出土している。さらに波来浜遺跡では弥生中期や後期の方形貼石墓を確認している。弥生時代以降も波来浜遺跡では砂丘の上に断続的にではあるが遺跡が形成されている。また、高津遺跡では弥生後期から古墳時代の竪穴建物11棟などの遺構が見つかっている。

#### 【古墳時代】

高津遺跡では古墳中期の竪穴建物を2棟確認しており、そのうちの1棟は竪穴建物である。この他木製品が出土した大溝、赤彩土師器などの祭祀遺物が出土した水場遺構、古墳後期の粘土採



第3図 遺跡周辺の地形分類図

掘用と考えられる土坑群が見つかり、古墳時代を通して遺跡が築かれている。また、波来浜遺跡でも古墳時代の土師器や須恵器が出土している。古墳では佐古ヶ丘横穴墓群があるが、出土土器の時期はむしろ奈良時代に属する。

#### 【奈良・平安時代】

中祖遺跡では屋根の棟のみに瓦を葺いた $2 \times 2$ 間の礎石建物を確認した。瓦葺きの礎石建物は古代の駅家を構成する施設に多く見られるものであることから、古代山陰道の「樟道駅」との関連が指摘されている。また、都治農協裏遺跡からは須恵器や布目瓦が出土している。波来浜遺跡では平安時代を中心とした土器の他、合計5点の石帶を伴う墳墓が見つかった。黒色の埋土と人骨片が出土したことから、火葬墓と考えられる。この他製塙土器、土製支脚や移動式竈、瓶、土錘、鉄鎌、鉄斧、鉄製紡錘車が出土した。高津遺跡からは遺構は明確ではないが、「郡」をヘラ書きした須恵器が出土している。尾浜遺跡では須恵器や土師器が出土している。波来浜遺跡と尾浜遺跡は砂丘の上に位置している点が注目できる。

#### 【鎌倉・室町時代】

高津遺跡では掘立柱建物を確認した他、埋築遺跡では掘立柱建物10棟、短刀を伴う土坑墓1基を確認した。波来浜遺跡では炉状遺構1基を確認した他、陶磁器や墨書きのある土師器、鉄鎌や鉄釘、銭貨が900枚以上見つかった。江東地区には多くの山城が存在しているが、詳細が分かったものはない。この地域は中世には都治本郷に属した。

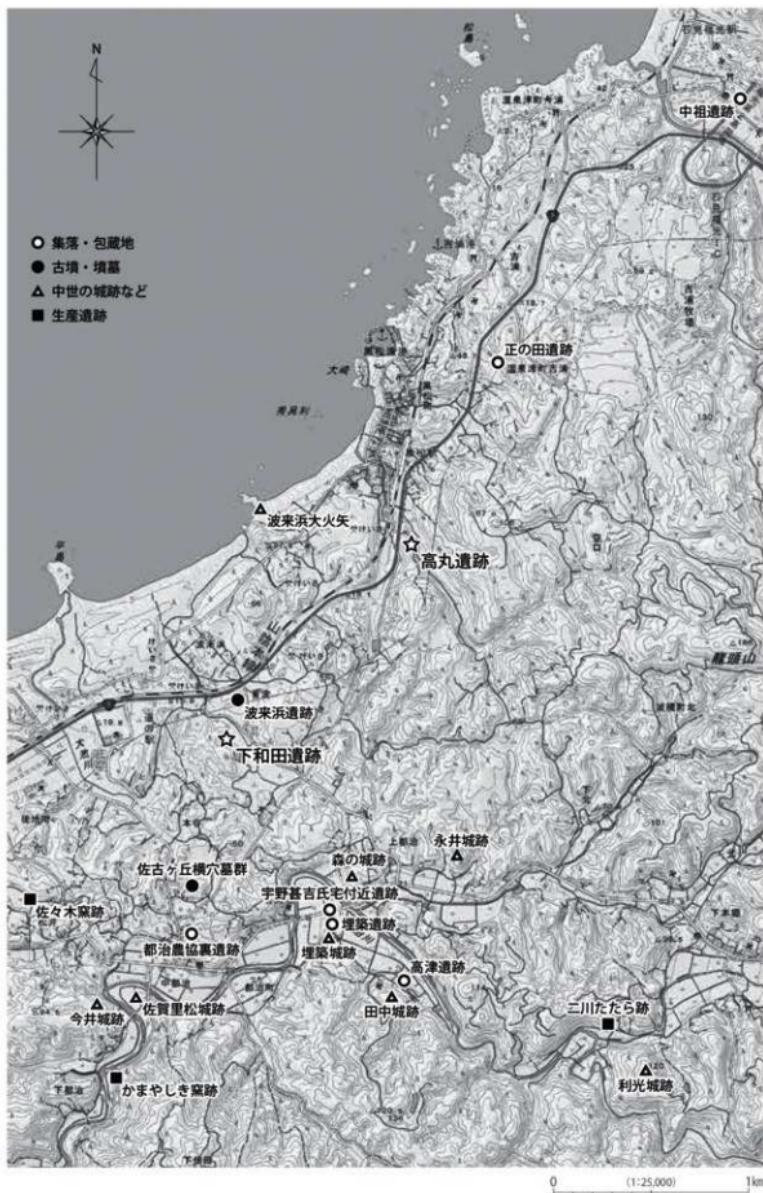
#### 【江戸時代以降】

佐々木窯跡などをはじめとする石見焼の窯跡やたら跡が見つかっている。

下和田遺跡が所在する後地町は、明治22(1889)年の町村制施行時には那賀郡都治村とされたところである。また、高丸遺跡が所在する黒松町は、明治22(1889)年の町村制施行時には那賀郡黒松村とされたところである。ともに昭和26(1951)年に江東村、昭和29(1954)年に江津市に編入された。

#### 【参考文献】

- 江津市 1973『波来浜遺跡発掘調査報告書 第1、2次緊急調査概報一』
- 江津市教育委員会 2002『埋築遺跡 都治地区黒宮は場整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書I』
- 江津市教育委員会 2005『高津遺跡 都治地区黒宮は場整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書II』
- 江津市教育委員会 2012『波来浜遺跡 一保存・活用のための確認調査報告書一』
- 鳥根県教育委員会 2007『中祖遺跡範囲確認調査報告書』平成18年度詳細分布調査に伴う遺跡範囲確認調査報告書
- 鳥根県教育委員会 2008『中祖遺跡 ナメラ追遺跡』一般国道9号仁摩温泉津道路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書I
- 鹿野和彦・宝田晋治・牧木 博・土谷信之・農 道秋 2002『温泉津及び江津地域の地質』地域地質研究報告 5万分の1 地質図幅 岡山(12) 第36-37号 地質研究所
- 鳥根県 1976『土地分類基本調査 温泉津 5万分の1 国土調査』



第4図 遺跡の位置と周辺の遺跡分布図

## 第3章 下和田遺跡

下和田遺跡は、日本海海岸線から約1km内陸部に位置し、波来浜川の氾濫原に向かって開く、標高約10mの小規模な谷間に立地する。調査地点は、以前は耕地として利用されていたものの、調査直前には耕作放棄状態となっており、孟宗竹や雑木が生い茂り荒地となっていた。

### 第1節 発掘調査の経過

#### 1 試掘調査

令和元年までに実施した分布調査で、福光・浅利道路用地の波来浜遺跡隣接地およびその西側を含めて試掘確認調査を必要とする要注意箇所11を設定した（第5図）。これについて令和2年6月1日～6月11日まで試掘確認調査を実施した（第5図・第6図）。

##### TR1（第5図）

標高約7mの平坦地に設定した。現状で駐車場として利用されており、北側には波来浜遺跡が存在する。この地点からは北側の波来浜遺跡に連絡する旧地形や遺構、遺物は確認できなかった。

##### TR2（第6図および第7図）

奥行30m、幅40mの小規模な谷間の平坦部南側に設定した。標高は約10mで、現状は休耕地である。表土下20～30cmで褐色土の地山面（3層）を確認した。地山面の中央付近で径1mの土坑状の落ち込みを検出し、内部から須恵器の甕片が出土した。また、土坑の周辺からピットも2基検出した。地山面に遺構が広がっている可能性が高い。

##### TR3（第6図および第7図）

TR2の北側に設定した。表土下に1.3mの厚さで造成土とみられる暗褐色土（2層）が堆積しており、その下層で3層にわたって古代の須恵器片や土師器片を多量に含む暗褐色土（3～5層）を確認した。その下層には無遺物層であるオリーブ黒色粘土（6層）が堆積し、その下層で黄褐色の地山面を検出した。

##### TR4（第6図）

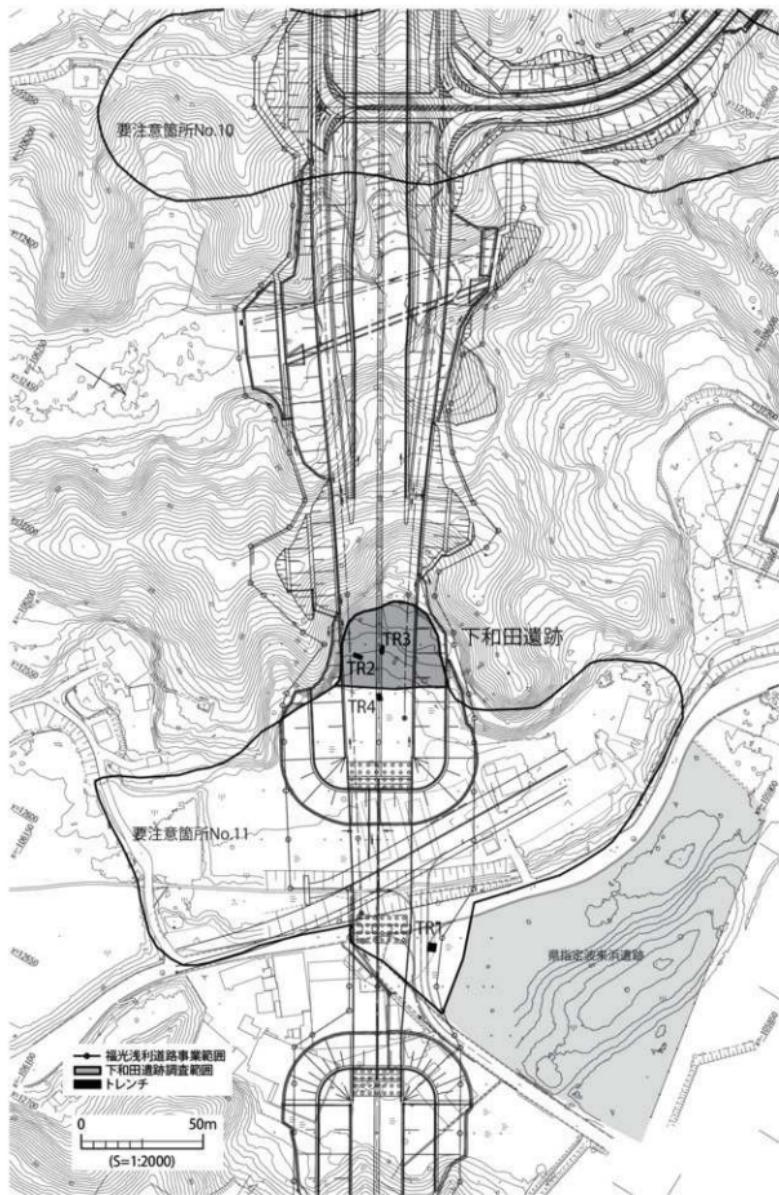
TR2、TR3の東側に広がる平坦部に設定した。標高は約8mで、現状は休耕田および造成地である。表土下80cmまでは造成土であり、その下層に水田の床土が堆積し、その下層には湿地堆積とみられる灰色粘土や暗緑灰色粘土が堆積する。遺構、遺物は確認できなかった。

調査の結果、要注意箇所11では、西側の谷間に設定したTR2で遺構面が、TR3で遺物包含層がそれぞれ確認され、「下和田遺跡」として、本調査の対象とした。トレンチ周辺にも遺構、遺物が広がる可能性があることからTR2およびTR3の周辺を含めた区域を下和田遺跡の範囲とした。遺跡の調査対象面積は1,300m<sup>2</sup>である。

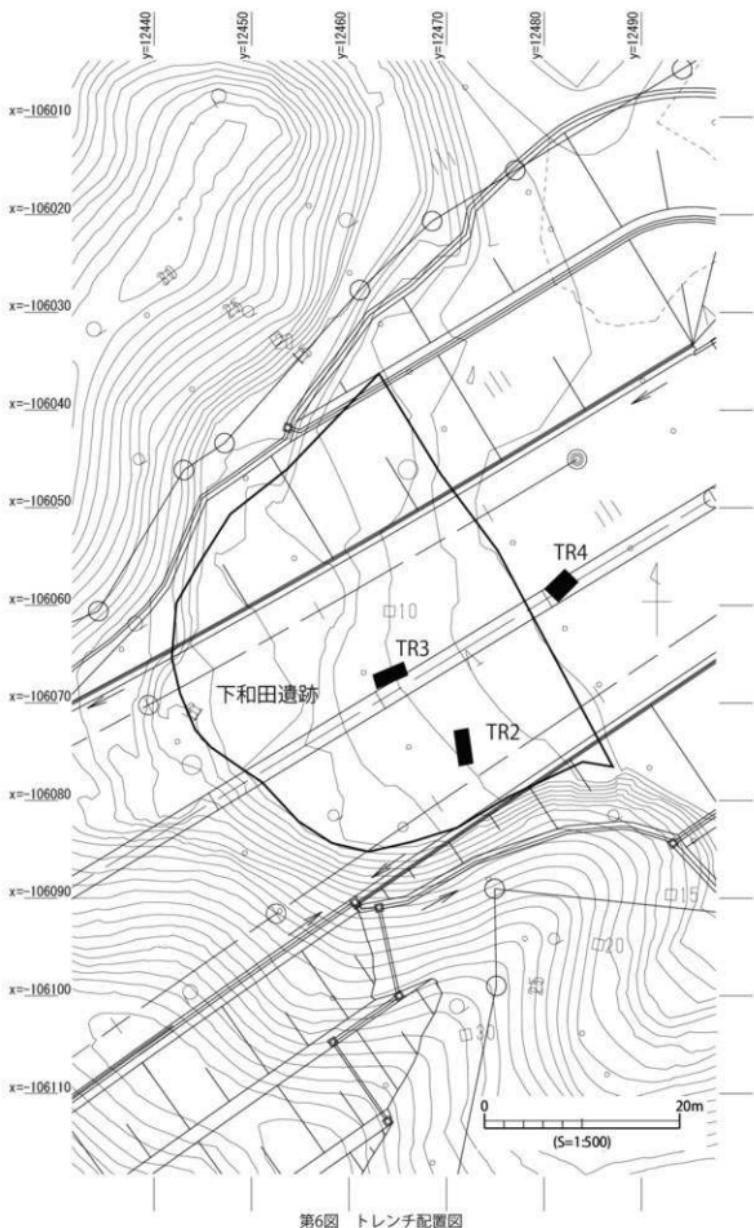
#### 2 発掘調査

発掘作業は令和3年7月6日～12月6日にかけて実施した。重機による表土掘削については、7月13日から8月5日まで、人力掘削と区域を分けながら順次実施した。

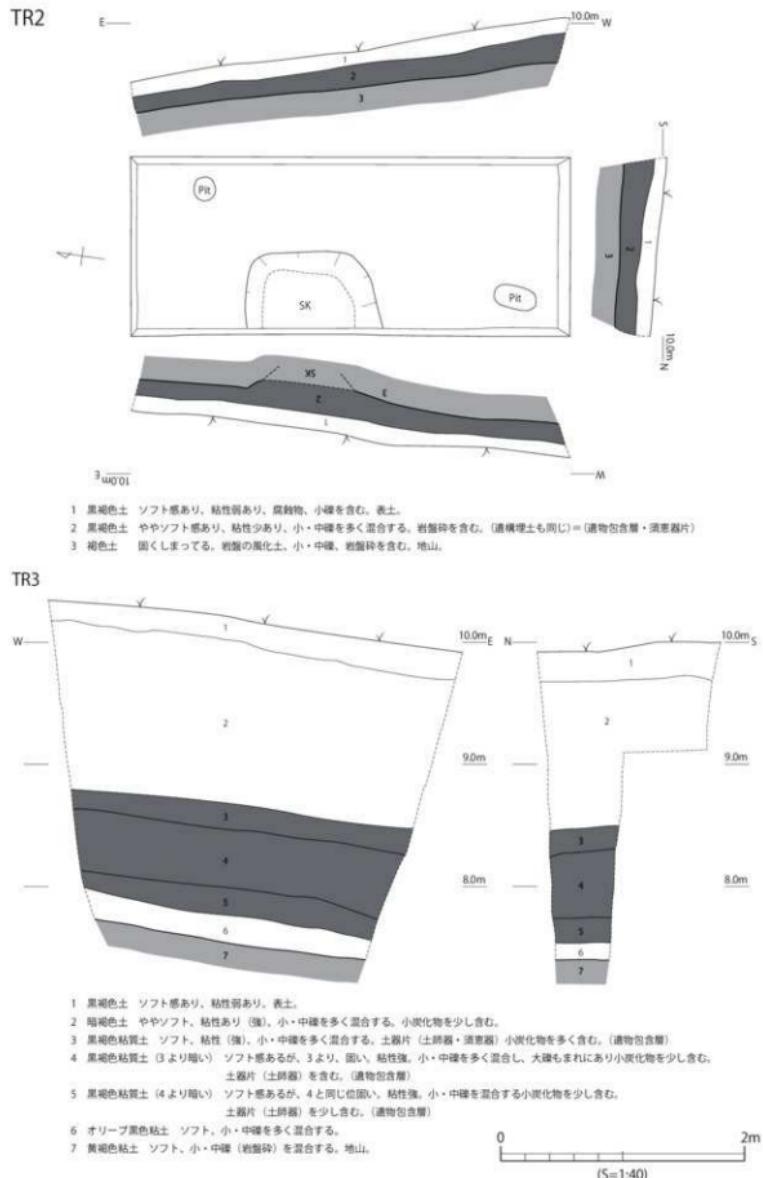
近年の度重なる重機による地形改变の影響を受けた北西側の斜面は、すでに地山が露出しており、遺構の痕跡はほとんど残っていないものとみられたため、包含層掘削は、もっぱらD3グリッドとD4グリッドを中心とする遺物包含層の堆積の厚い部分について順次掘り進め、10月28日までに包含層



第5図 試掘調査位置図



第6図 トレンチ配置図



第7図 トレンチ土層図

掘削を終了した。また、8月6日にはE3グリッド第4層中において土器溜の遺構を検出した。これについては、出土状況を上・下層に分けて実測した後、遺物を取り上げた。さらに、8月19日にはD2グリッドにおいて集石土坑を検出した。10月21日には、D4グリッド南東隅において第3層中から焼土溜を検出した。

10月29日には調査区全体の遺構検出により、調査区北西斜面において、掘立柱建物5棟を検出した。また、C3グリッドからB3グリッドにかけて加工段を検出した。さらに、その加工段上に集石土坑や溝、石列などの遺構があることを確認した。

11月4日からは、順次遺構掘削を開始し、11月25日には空中写真撮影を行い、11月29日までに完掘後地形測量を終了した。

12月6日には現地において完了検査を実施し、現地調査を終了した。

なお、この間8月23日および11月18日の両日に、大橋泰夫氏、花谷浩氏による調査指導を受けた。また、12月3日には、榎原博英氏による調査指導を受けた。

この後、12月12日に、地元向けの現地説明会を新型コロナウィルス感染防止対策を行ったうえで開催し、28名の参加があった。

### 3 整理作業

出土遺物の水洗、注記、接合作業は、発掘作業を並行して現地の事務所で実施した。現地調査終了後は、島根県埋蔵文化財調査センターにおいて作業を継続し、遺物の注記、分類、接合、復元、実測等の作業および、図面、写真類の整理作業を行った。遺物の注記作業については、専用の機械を導入して省力化、効率化を図った。

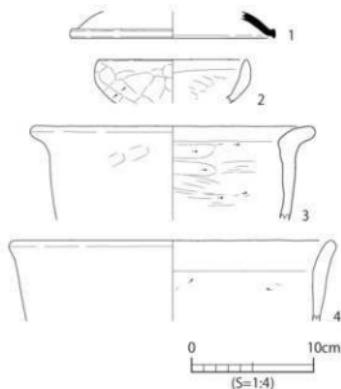
令和4年度も整理作業を継続して行った。大形甕の破片が多く、接合復元作業は7月まで続くこととなったが、接合作業の終了した資料から適宜選定して遺物実測作業を進めていった。9月16日と11月21日の両日には、榎原博英氏の調査指導を受け、遺物や遺跡の評価について検討した。現地で実測、撮影などした記録類については、出土遺物とあわせて総合的な整理検討を行ったうえ、遺構、遺物のトレース、遺物の写真撮影、原稿執筆を行った。写真画像処理や図版作成、編集等にはAdobe社のソフトを使用した。



TR2掘削状況



TR3掘削状況



第8図 TR3出土遺物実測図

## 第2節 調査の方法

### 1 調査区とグリッドの設定（第9図・第10図）

本発掘調査にあたっては、世界測地系の第III系座標に基づき座標軸を合わせた10m四方のグリッドを設定した。遺構等に伴わない遺物は、このグリッドの区割りに基づき取り上げを行った。

### 2 調査の方法

試掘確認調査で確認された遺物包含層までは耕作土等が厚く堆積するため、バックホーを導入してこれらの耕作土を取り除く必要があった。重機掘削はパケットに平爪を装着して少しづつ対象の土塊を梳き取るようにして面的に掘り下げ、あわせて土層観察を行いながら、遺物包含層上面まで余裕を持たせて掘削を停止した。

その後は、ベルトコンベアーを設置して、スコップやツルハシ、ジョレンを用いて人力による掘削を行った。遺物包含層については、スコップを用いて人力で掘り下げたが、出土する遺物の粗密に応じて適宜移植ゴテなどの細かい道具を併用した。遺物の取り上げに際しては、必要に応じてグリッドや地点と層位を記録した。遺構検出では、草削りを主に用いて地表面を削り、ジョレンを用いて排土処理を行った。遺物包含層の掘り下げにあたっては、グリッドとは別に十字の土層観察用畦畔を設定して掘り下げを進めた。土層断面については、写真撮影を行い断面図を作成した。遺構からの出土遺物については、出土状況を記録した後、必要に応じて取り上げナンバーを付与して取り上げた。

現地調査期間は令和3年7月6日から12月6日、調査対象面積は1,300m<sup>2</sup>である。

### 3 記録の作成

遺構の平面図は遺跡調査システム「遺構くん」を用いて測量し、出力後補正をおこなった。断面実測図についてはオートレベルを用いて測量をおこない、高低差のある壁面については平面図と同様に遺跡調査システムによる記録作成をおこなった。遺構等の写真撮影はデジタルカメラを使用し、必要に応じて6×7版フィルム（モノクロネガ・カラーポジフィルム）カメラによる撮影を行った。

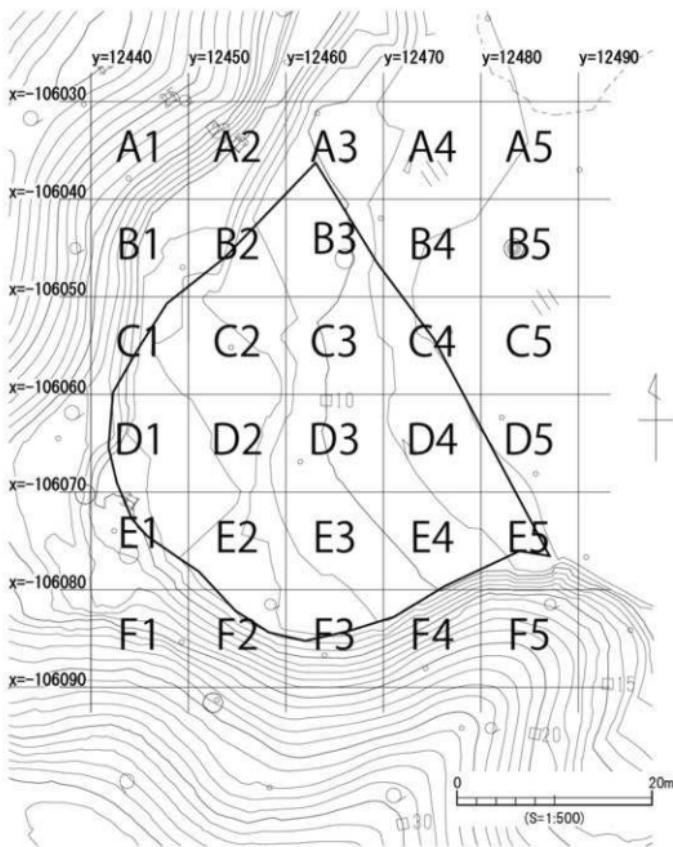
### 4 整理作業の方法

整理作業は、現地調査と並行して出土遺物の水洗、注記、接合を現地の事務所で実施したが現場事務所では遺物の水洗を優先して実施した。現地調査終了後から埋蔵文化財調査センターにおいて本格的な報告書作成作業を開始した。遺物の注記、接合、復元、分類、実測図作成・写真撮影、遺構図の編集を行った後、各図面のトレース、写真画質の調整、原稿執筆・編集作業を実施した。図面トレース以降の作業は、主に、Adobe社製のCreative Cloudを用いてDTP方式で行った。

## 第3節 基本層序

先述のとおり、調査地の近年の土地利用状況は造成された畑地であり、現在は耕作放棄地となり孟宗竹や雑木が繁茂している。基本層序に関しては、基本的には試掘確認調査で報告された層順を踏襲している。

第1層は表土及び耕土層である。第2層は、暗褐色を呈する粘土質の土壤で、田畑の床上あるいは不透水層と考えられる。極端に様相の異なる土壤が混入している様子は認められず、外部から搬入された土はないと思われる。

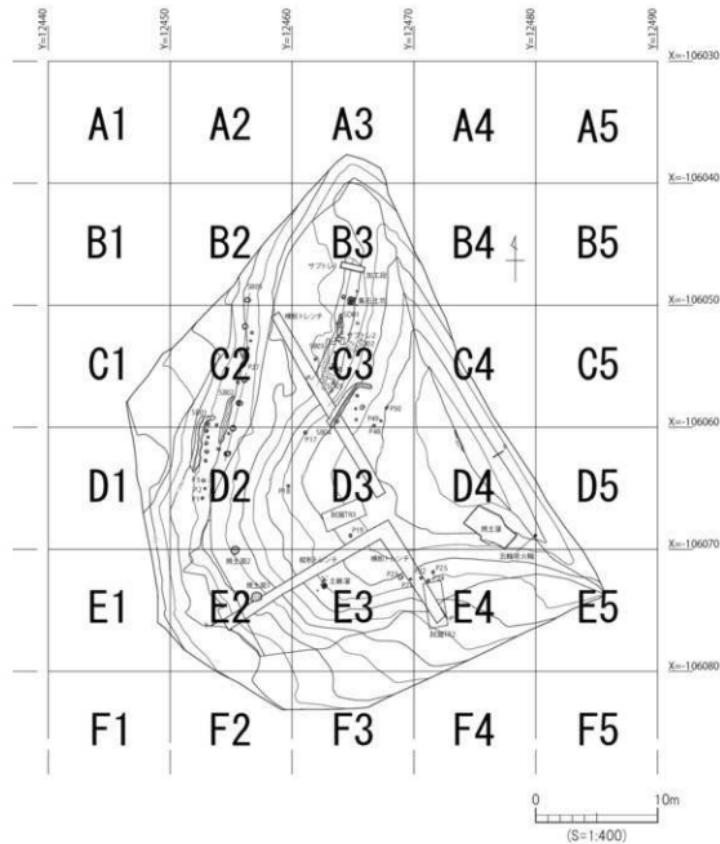


第9図 グリッド配置図(調査前地形図)

第3層は、一定のまとまりを持つとみられる3-1、3-2、3-3各層をあわせた遺物包含層である。3-1層は褐色、3-2層は灰オリーブ色、3-3層は黒褐色を呈し、いずれも礫、灰、炭を多く含む。各層には、古墳時代から中世までの遺物が含まれている。

第4層は、灰オリーブ色粘質土層で、古墳時代後期から中世までの遺物が含まれている。しかし、第4層については、E3グリッドからD3グリッド南東端にかけて古墳時代後期～終末期にかけての一括性の高い須恵器群がまとまって出土していて、古代の土器が全く含まれておらず、TR3以北の第4層とは明らかに異なっている。

第5層は、黒色を呈する粘質土層である。小中礫や炭を多く混合し、大きな転石も含まれ、古墳時代から中世までの遺物が含まれている。しかし、この傾向は、E3グリッドからD3グリッド南東端にかけての区域を除外したものの、第5層においても、この区域では、古墳時代後期～終末期にかけ



第10図 グリッド配置図(完掘状況平面図)

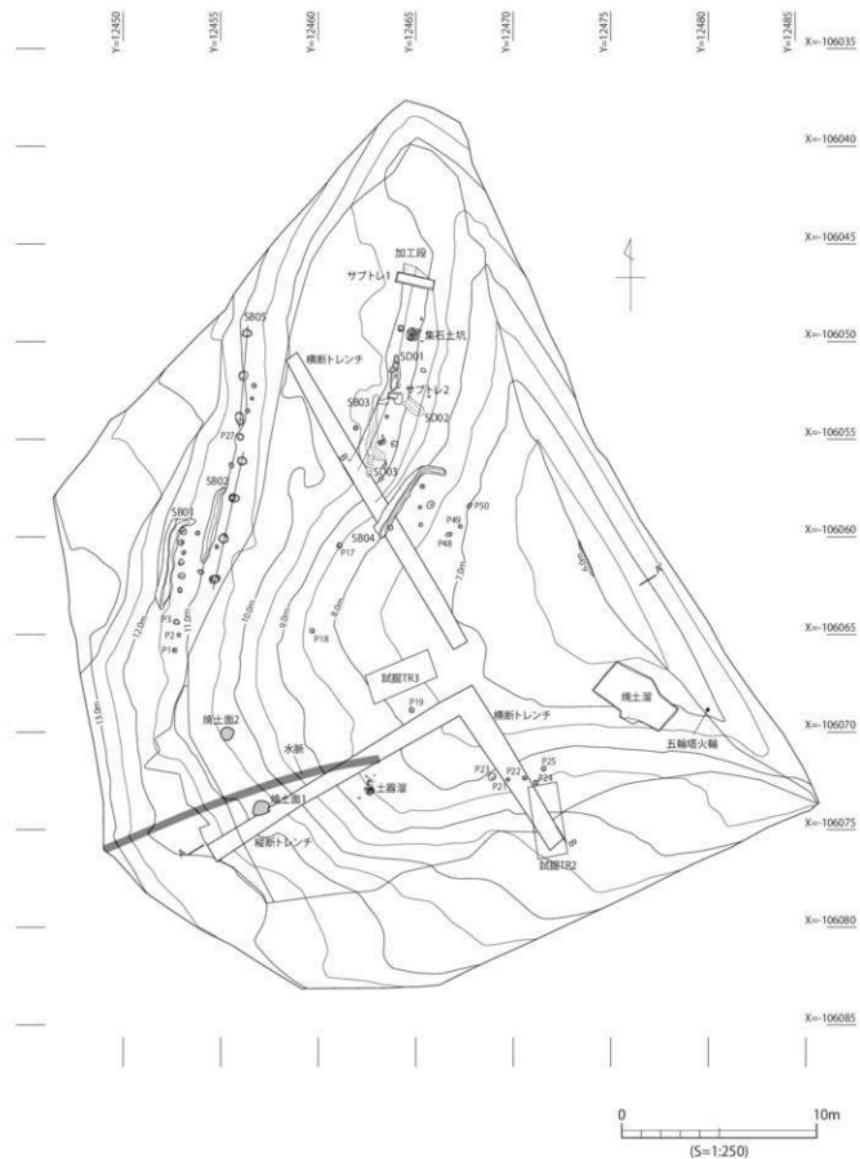
けての一括性の高い須恵器群が出土している。

第6層は、灰白色を呈する砂礫層で地山と考えられる。遺物は含まれていない。第6層よりも下層は、黄橙色を呈し、岩盤破碎屑の堆積である。

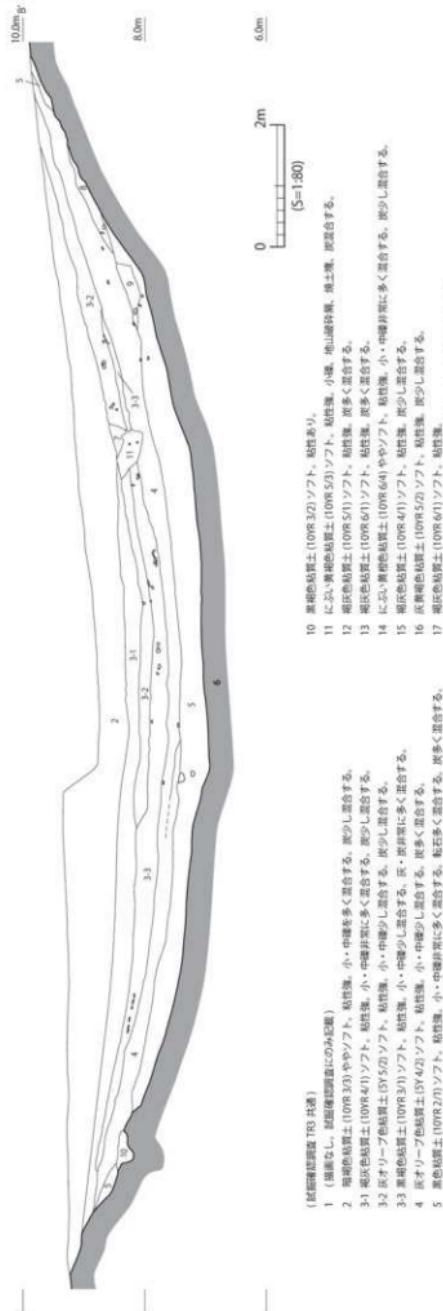
#### 第4節 検出遺構とその遺物

##### 1 土器溜(第14図～第19図)

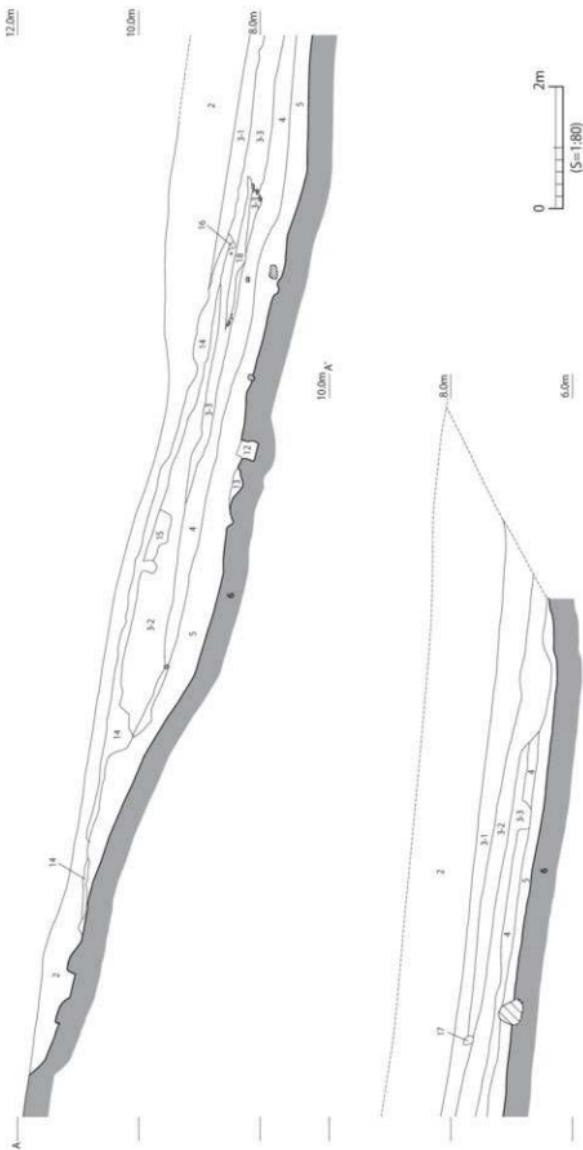
土器溜は、E3グリッドの顯著な地下水脈に沿う位置で、第4層中で検出した。石見4～5期(6世紀末から7世紀前半)の須恵器大型甕を中心として、すべて須恵器で甕、壺、高环から構成されている。また、土器溜の下方、E3グリッド第4層およびD3グリッド南東隅の第4層では、土器溜を構成する須恵器と接合するなど、強い関連を持つ土器群が出土している。この中に含まれる製塩土器



第11図 遺構平面図



第12図 調査区横断土層図



第13図 調査区縦断土層図

や手捏土器とともに湧水点祭祀が行われていたものと考える。

#### 位置・規模(第14図・第15図・第9表)

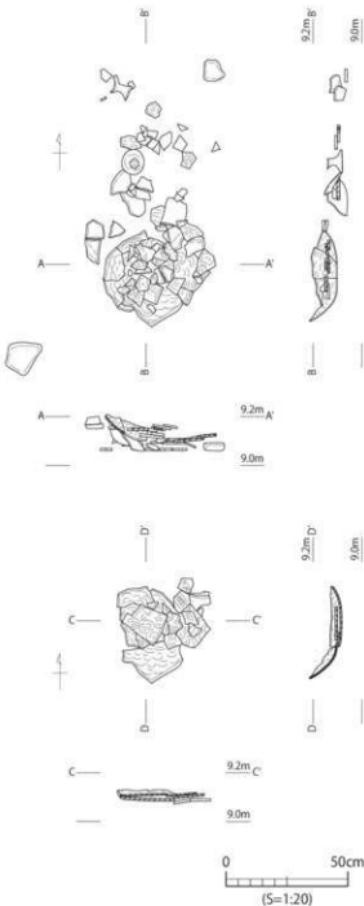
土器溜は、標高9.1m付近、E3グリッド北西で検出した。棚状の地形を呈しており、若干整地されていると推測される。土器溜の範囲は、須恵器大型甕から高环までの間が東西1.0m、南北は須恵器大型甕の幅分の0.55mの範囲にある。

#### 形態・構造・遺物出土状況(第14図)

土器溜を構成する遺物はすべて須恵器で、第16図11の須恵器大型甕を最南端にして、ほかに甕1点、脚付直口壺1点、高环4であった。配列は、最南端に11の大型甕、その北側に接して10の甕、次いで8、5の高环、9の脚付直口壺、7、6の高环となる。これらは、須恵器大型甕の底部の大部分がそのまま残っていることから、上半部は擾乱を受けているものの、本来廃棄された当初の状況をある程度反映しているものと推測される。

#### 出土遺物(第16図)

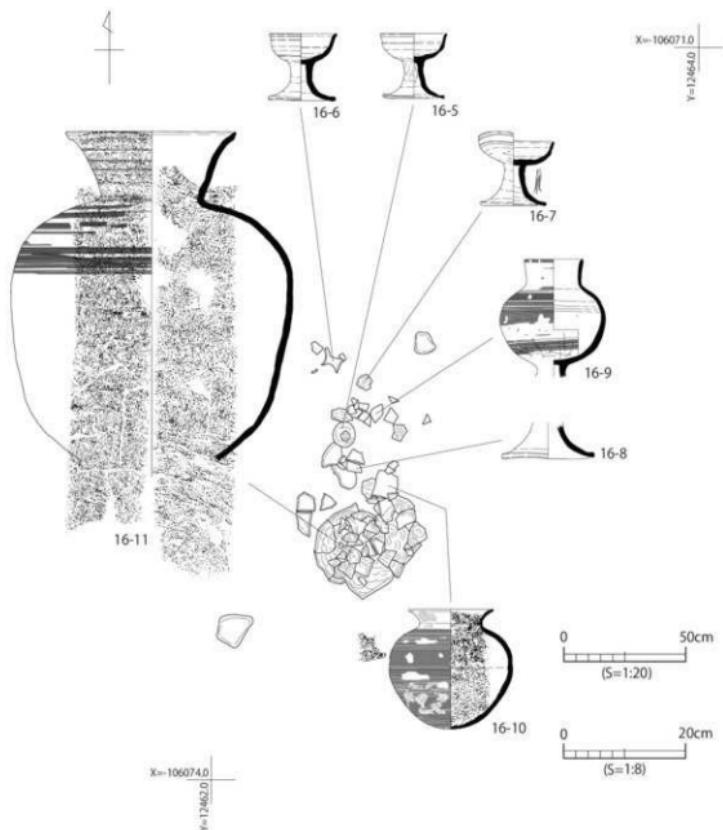
土器溜から出土した遺物はすべて須恵器である。5~8は長脚無蓋高环、9は脚付直口壺、10と11は甕である。5~8の高环は環底部が丸みを帯び、細身の脚上半部から脚裾部にかけて強く屈曲して開く。脚端部は、5は上方へやや拡張して端面を持ち、6、7は丸くおさめる。脚には沈線も透かしも認められない。これらはA4型(岩本2019)に属する。8はやや大型で焼成が悪く、灰白色を呈する。脚部の開きや端部の調整は5などと同じである。これらは石見4期に属する。9は



第14図 土器溜実測図

脚付直口壺である。口縁部はやや開き気味に長く立ち上がり、胴部最大径以下が丸みを帯び、肩で屈曲する形状よりも球体に近い様相を呈する。外面上半にはカキ目と沈線が巡る。脚部は下端が欠損している。益田市北長迫横穴墓群3号穴などに類例があり(島根県古代文化センター2015)、石見4期に属する。この脚付直口壺の胴部下半から底部にかけては、不定方向の交差する沈線の線刻11本が刻まれている。

10はやや小型の甕である。体部から屈曲して大きく開く単純な字口縁を持つ。体部は肩が強く張り、胴部最大径部分は少し下がり気味で、底部は丸底である。内面は同心円当具痕、外面はカキ目が巡る。胴部最大径やや上の位置に二重「×」のヘラ記号が刻まれる。11は大型甕で器高残存56.5cm、胴部最大径46.5cmを測る。口縁部は高く立ち上がり、外面に對向する2条の斜行刺突文が



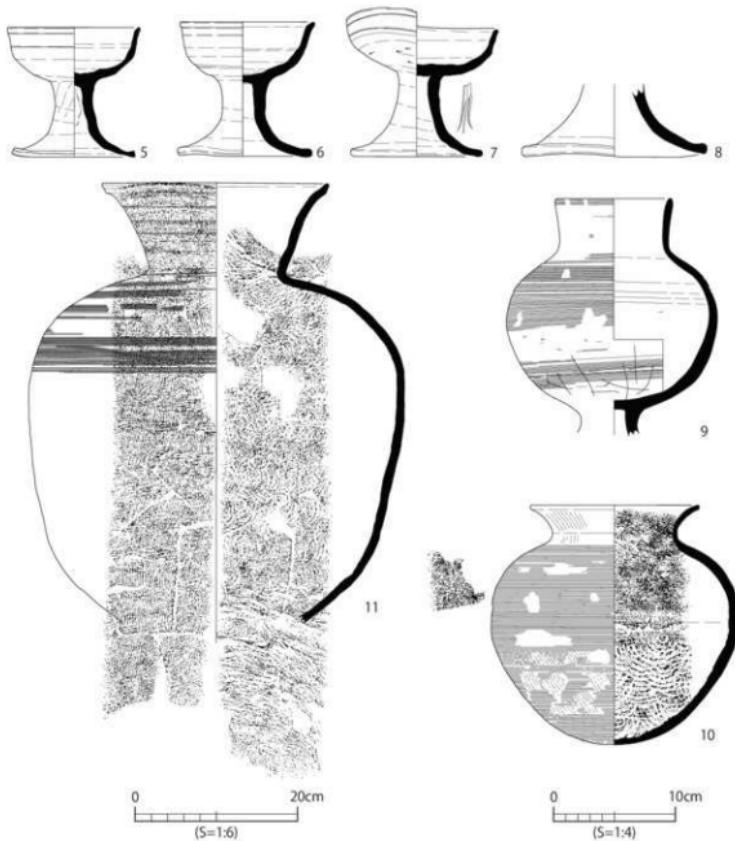
第15図 土器窯出土状況 (造構平面図S=1:20・遺物S=1:8)

巡る。口縁端部はさらに開き、端部外面は面取りしている。胴部外面の頸部以下は、外面平行タタキ目の後、上半部にはカキ目を巡らす。内面は、比較的径の小さい同心円タタキ目が頸部から底部までおよぶ。器形は胴部最大径から底部へのすぼまりが弱く、全体的な形状が四角形に近い。こうした甕の類例は、益田市北長迫横穴墓群(島根県古代文化センター 2015)や平ノ前遺跡(島根県2019)などにあり、石見4期以降の石見地方の傾向を示す。

#### 土器窯周辺出土の土器群(第18・19図)

土器窯周辺からは、須恵器を中心とした遺物が、土器窯の下方4m付近からまとまって出土している。

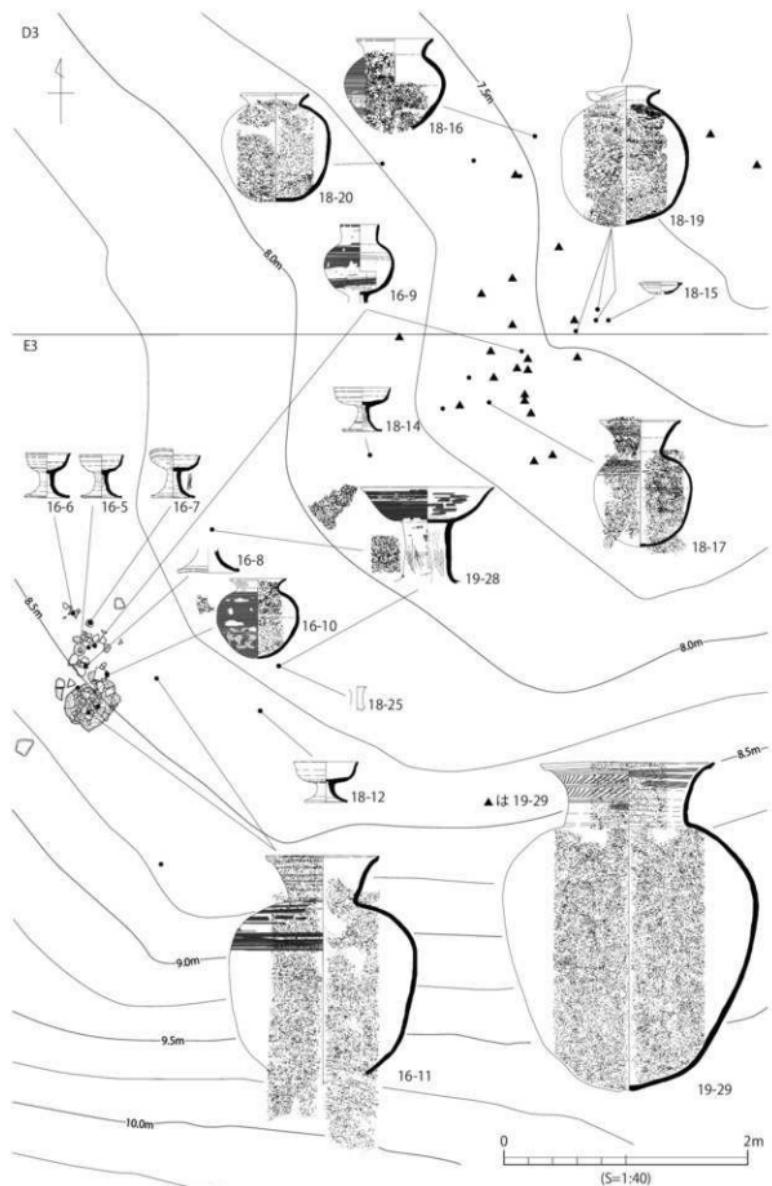
12と13は、低脚無蓋高坏、14は長脚無蓋高坏、15は蓋坏の身、16～20と29は甕である。28は器台である。以上は須恵器である。21～27は製塩土器の脚柱部である。



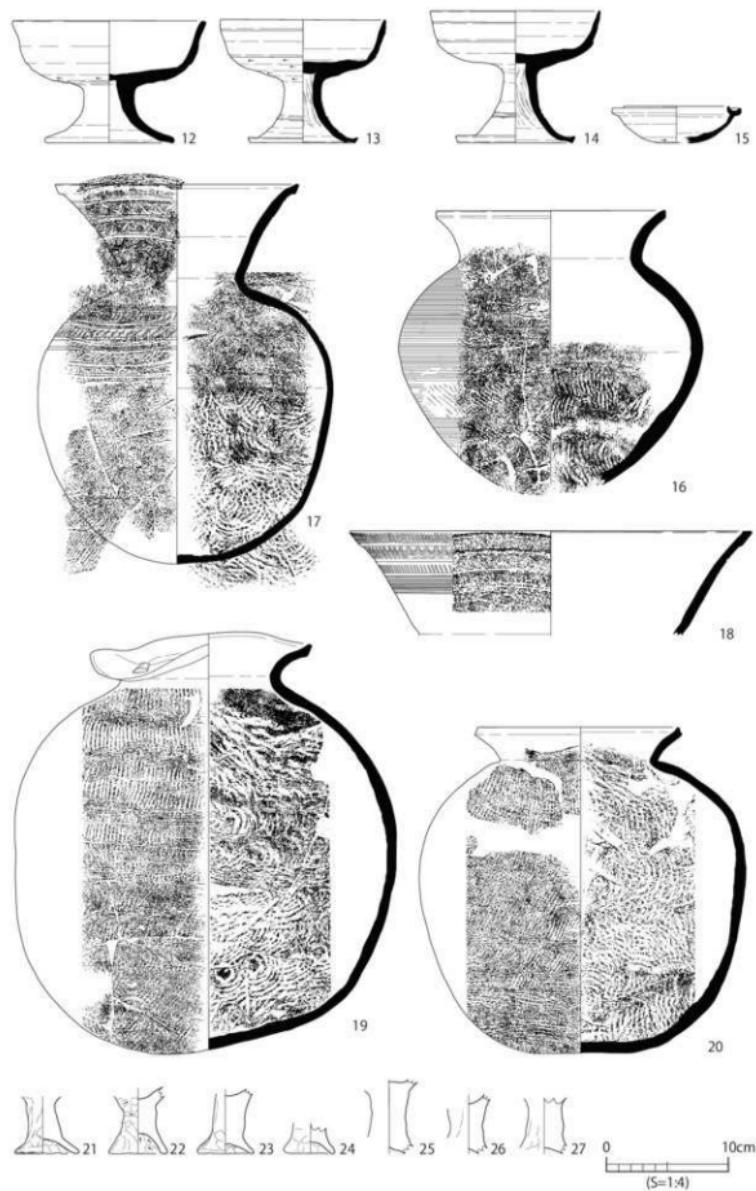
第16図 土器窯遺物実測図 (11はS=1:6そのほかはS=1:4)

12、13の低脚無蓋高環は、环部がごく深く、脚部は脚裾近くで屈曲して開く。脚端部は丸く收める(12)か、上方にはね上げる(13)タイプの両者が認められる。これらはA3型に属する。14は長脚無蓋高環で环部底部が丸みを帯び、脚部は細身の脚上半から脚裾部にかけて強く屈曲して開く。脚端部は、外面斜め上方に面取りしている。脚柱部に沈線二条を巡らす。スカシはない。これらはA4型に属する。低脚無蓋高環も長脚無蓋高環も石見4期に属する。15の环身は、受部から口縁の立ち上がりが低く口径の小さい环H(奈文研1991)で、石見6A期の資料である。16は、土器窯の10の甕の特徴と共通するが、胴部最大径が10の甕よりも下がる。内面は同心円当具痕、外面は平行タキの上にカキ目を巡らす。17は体部の容量に対して口頸部の立ち上がりが高く頸部外面に2段の波状文を、体部肩付近には2段の粗雑な斜行刺突文を巡らす。

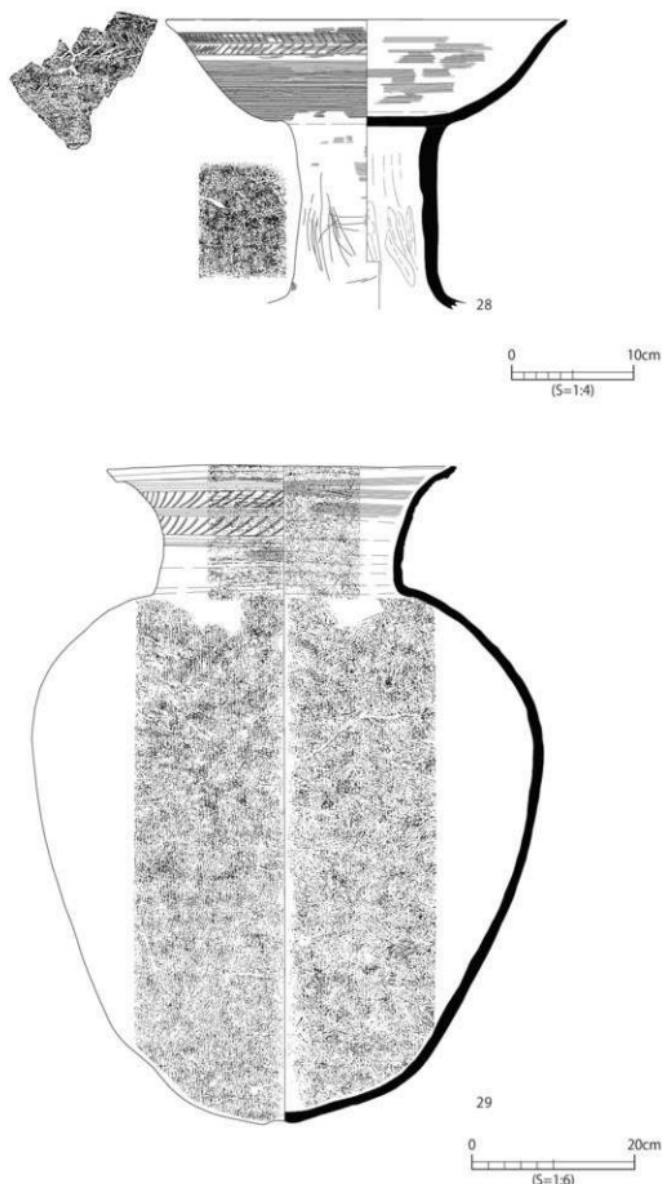
18は、大型甕の口頸部で、口径47cmを測る。口縁部は幅広の肥厚帯を持ち、外面に密な波状文を



第17図 土器窯周辺遺物出土状況(遺物縮尺任意)



第18図 土器窯周辺遺物実測図1



第19図 土器溜周辺遺物実測図 2

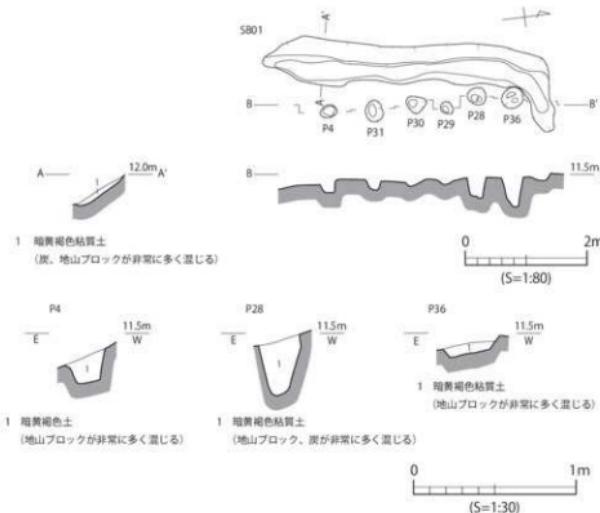
巡らす。頸部外面には上から波状文、刺突文を1段ずつ巡らす。その下にはカキ目を巡らす。19は全体に焼成時のひずみが認められる。特に口縁部のひずみが著しい。この壺も胴部下半が膨らみ、全体の形状が四角形に近い。内面に同心円当具痕、外面は平行タタキの上にカキ目を巡らす。20の甕も四角形に近い全体形状を成す。口縁部は強く屈曲し、端部は若干上方に拡張させる。内面は同心円当具痕、外面は平行タタキの上にカキ目を巡らす。28は須恵器の器台で、復元口径26.5cm、残存器高24cm以上を測る大型品である。坏部はやや浅く、口縁はわずかに外反して大きく開く。坏部外面上部に対向する綾杉文を2段巡らす。坏部下半にはカキ目を巡らす。脚部は筒部が14cm前後と太く、下半部には多くの沈線が縱横斜めに乱雜に線刻されている。この器台は、6世紀代の製塙土器(第18図25)と共に伴している。29は須恵器大型甕で、口径42cm、器高82.1cmを測り、下和田遺跡出土遺物中最大容量のものである。倒卵形の整美な体部に広い口を開け、その基部から口頸部が屈折して長く立ち上がる。口縁部は外反して肥厚させ、口縁帯を形成する。口頸部外面には同方向の斜行刺突文2段を巡らす。内面は同心円当具痕、外面は平行タタキの上にカキ目を巡らす。

## 2 掘立柱建物(第20図～第24図)

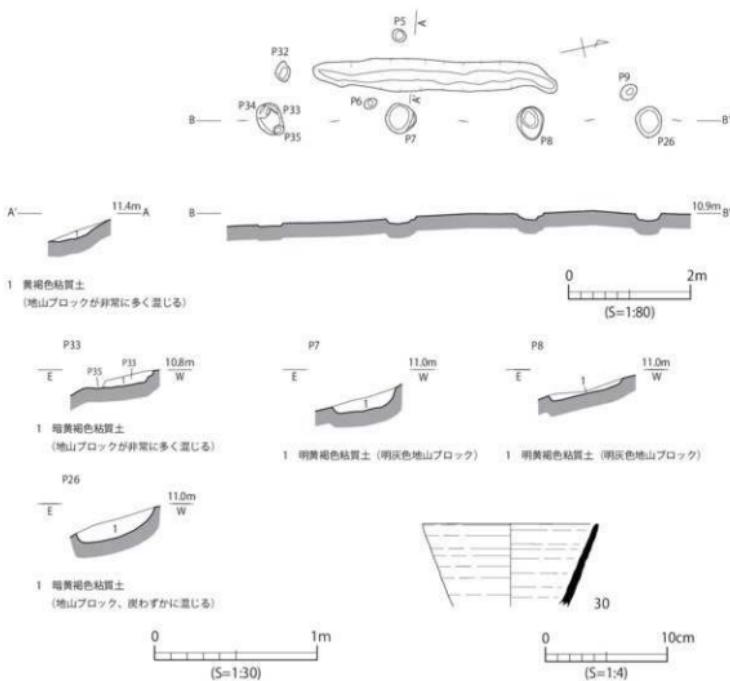
### 建物群の配置(第11図)

掘立柱建物は、SB01からSB05の5棟を検出した。これらの建物群は、奈良時代を中心として飛鳥時代から平安時代初期にかけての遺構である。

建物群は、B2グリッド、C2グリッドで検出した標高11～12m前後に展開するSB01、SB02、SB05の一群と、C3グリッドで検出した標高8～9m前後に展開するSB03およびSB04の一群にわけられる。しかし、これは近年の重機による攪乱がこの間に存在したためであり、必ずしも遺構群の実態を反映したものではない。



第20図 SB01実測図



第21図 SB02遺構実測図・出土遺物実測図

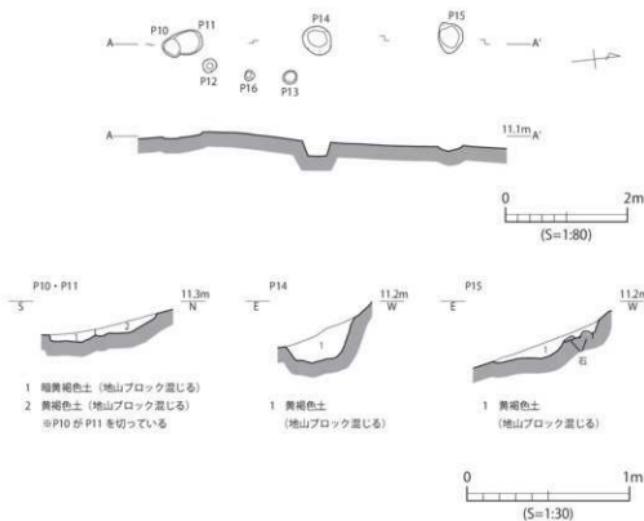
掘立柱建物の構造は、すべて、急傾斜の斜面を切盛りして加工段を造成し、梁行1間の掘立柱建物を建てたものと考えられる。SB05を除き、いずれも雨落溝を伴う構造である。

SB01、SB02、SB05の一群では、SB02がSB01とSB05の敷地を切ってやや下方に造成しており、SB02がこの一群の中で最も新しい。SB02柱穴P8から出土した須恵器環(第21図30)は石見9期Bの資料で、SB02の廃絶時期の上限を示す。SB01とSB05は建物の軸が同一で、建物間も離れていることから、同時併存していた可能性がある。

SB03およびSB04の一群は、明確な柱穴列を伴わない。両者の間には1.3m程度の高低差があり、敷地も切り合っていることから、同時併存はしない。切り合い関係は、SB04がSB03の敷地を切って造成している。

#### SB01(第20図・第4・9表)

SB01の位置は、標高11.5m、斜面の地形に沿って、やや東に傾いた南北方向に軸をとる。規模は、溝によって区画されている範囲が南北4.8m、東西約1.4mである。この中で、柱穴列はP4-P30-P28とP31-P29-P36の2列があることから、建替が行われたと考えられる。どちらの構造も桁行2間、梁行は1間で、小規模な建物である。SB01の時期はSB02に切られていることから、これに先行する。



第22図 SB05実測図

## SB02(第21図・第5・9表)

SB02を検出した位置は、SB01のすぐ下方、標高11m付近である。溝は桁行方向のみを検出した。延長4.0m、最大幅0.55mを測る。柱穴列は桁行3間で、柱間距離はP34～P8までが2.15m、P8-P26が2.0mであり、他に比べて規格的で長いことから、他の建物との規模や構造の違いが推測される。

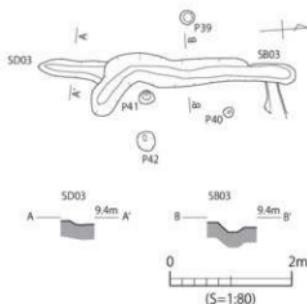
SB02のP8からは須恵器壺が出土した(第21図30)。体部は底部端から斜め上方に長く伸び、比較的大きい等の特徴を持つことから石見9B期に比定される。SB02は、隣接するSB01、SB05の群中においては最も後出する。このP8からは、ほかに図版29に示したaの土師器壺の小破片が出土した。また、図版29bは、SB02床面上から出土した土師器壺の小破片である。

## SB05(第22図・第6・9表)

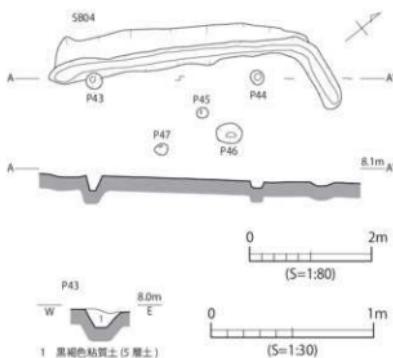
SB05は、SB02のすぐ北側に接して検出し、2間で並ぶ柱穴列を検出した。この柱穴列が最奥で、東側に段を造り出して造成していたものと考えられる。軸は地形に沿い、SB01と軸方向が一致することから、SB01と併存していた可能性を示す。

規模は桁行2間で、P11-P14が2.15m、P14-P15が2.18mである。SB02に近い。

出土遺物としては、図版29にあげるcおよびdがある。cは、P11から出土している。破片となってから火を受けている。dは、同じくP14から出土している。



第23図 SB03実測図



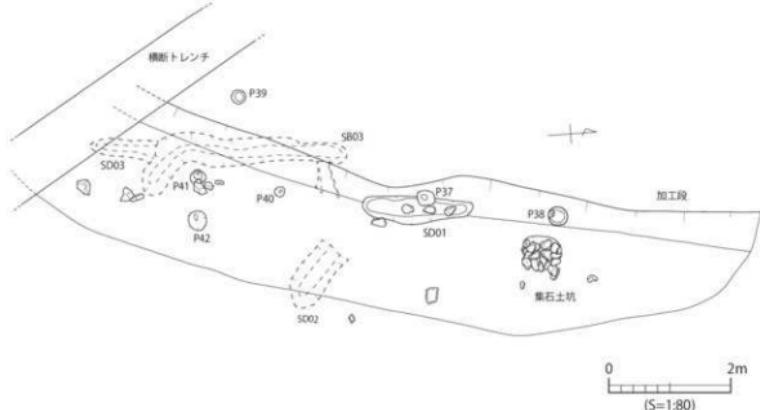
第24図 SB04実測図

も軸方向が合わない。P43とP44を検出した。P43はSB04の雨落溝を切っており、別遺構である可能性がある。SB04の規模は、桁行方向4.69m、梁行方向1.32mを測る。

すでに述べたように、SB03とSB04の2棟はその加工段どうしが1.2mしか離れておらず、併存できない。先後関係はSB04が後出する。遺構から直接ではないが、C3グリッド南端の第5層から出土した須恵器環第34図102、第35図115など石見10期の遺物がSB04の時期を反映している可能性が高く、廃絶に向かう集落の最終的な様相を示すものと考えられる。

### 3 加工段 (第25図)

加工段自体は、調査区北側の標高9m付近に造られている。地形に沿って切土しており、軸はやや東に傾いた南北に約12m、東西方向に最大2m分を検出した。加工段の下層からは掘立柱建物SB03を検出しており、この掘立柱建物の跡地を埋め立てて再構築されたのは確実である。再構築に際しては、第26図に示した土層断面図のとおり3層を重ねて強固に平面を構築していることがわかる。



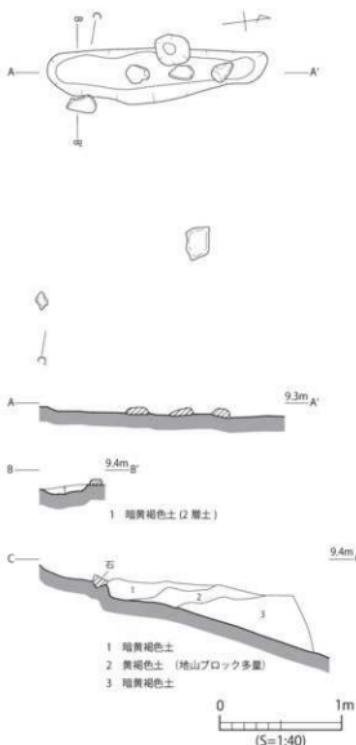
第25図 加工段及びその周辺で検出した遺構平面図

### SB03 (第23図・第7・9表)

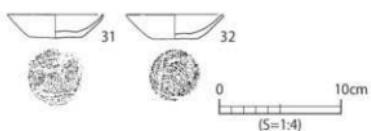
SB03は、加工段の下層から検出した。柱穴ではなく、溝のみ検出した。桁行の方向軸は地形に沿い、やや東に傾いた南北方向にあり、SB05と軸方向が一致する。規模は、桁行方向延長3.34m、梁行方向1.03m分を検出した。SB03はSD03を切っており、これは建替痕跡の可能性がある。

### SB04 (第24図・第8・9表)

標高8m付近で、SB04を検出した。建物群中で最も低い場所に位置する。敷地は地形に沿い、桁行方向の軸は北東から南西に取り、南東側に向いて開く。建物群中のどの建物とも軸方向が合わない。



第26図 SD01及び石列実測図



第27図 SD01出土土器実測図

を測る。検出した深さは5cmに満たない。このごく浅い溝の北寄りに、20cm幅の平たい石を40cm間隔で3個並べている。

SD01から、中世土器2点が出土した（第27図31・32）。いずれも底部外面に回転糸切りの痕跡を残し、橙色系の色調を呈する13世紀以降のものであり、加工段上の遺構の時期を反映していると考えられる。

#### 4 焼土溜（第29図）

D4グリッド南東隅の第3層上面、第2層との境界面において、焼土溜を検出した。平面形は、ほぼ長方形を呈し、表面積は8.1m<sup>2</sup>、焼土の堆積は概ね10cm前後、厚い部位でも15cm程度と一面に

加工段上では、集石土坑（墓）、溝SD01、石列などを検出した。SD01出土の中世土器2点（第27図31・32）の年代観から、いずれも鎌倉時代以降の遺構と考えられる。

#### 集石土坑（第28図）

集石土坑は、加工段上の最北に位置し、B3グリッドの南端にあたる。加工段は、集石土坑の位置から北は幅を狭めて収束し、他の遺構は存在しない。遺跡の中で最も波来浜川の氾濫原に近い位置にある遺構である。

遺構の規模は、東西0.74m、南北0.66mの範囲に石と土坑が重複しており、長径0.65m、短径0.54m、深さ0.51mの土坑の中に、32個の拳大の石が詰まった状態で検出された。

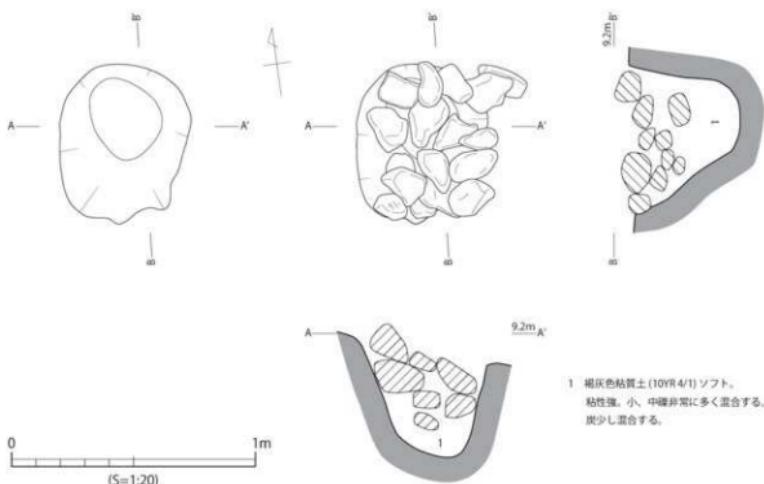
集石土坑の構造は、本来は、多量の石を積んで標石とした墓であったと推測される。時間が経つて墓坑内の木棺等が腐朽し、積石が落ち込んだものと考えられる。

遺物が出土していないため、直接土坑の時期を知ることはできないが、加工段上の遺構の中世土器（第27図31・32）が出土している点や、加工段を被覆するB3グリッド第2層から出土した第45図226の襷袖天目等の年代観から13世紀中頃以降の時期と考えられる。

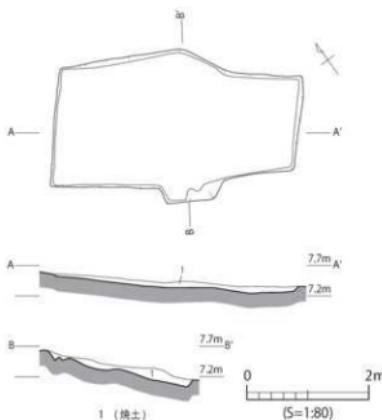
#### SD01（第26図）

SD01は、直線的で短い溝状遺構で、上部に石列を載せている。

SD01の検出位置は、加工段中央付近、C3グリッドの北端である。溝は、南北正位に軸を取り、加工段の下端に沿って、長さ1.78m、最大幅0.46m



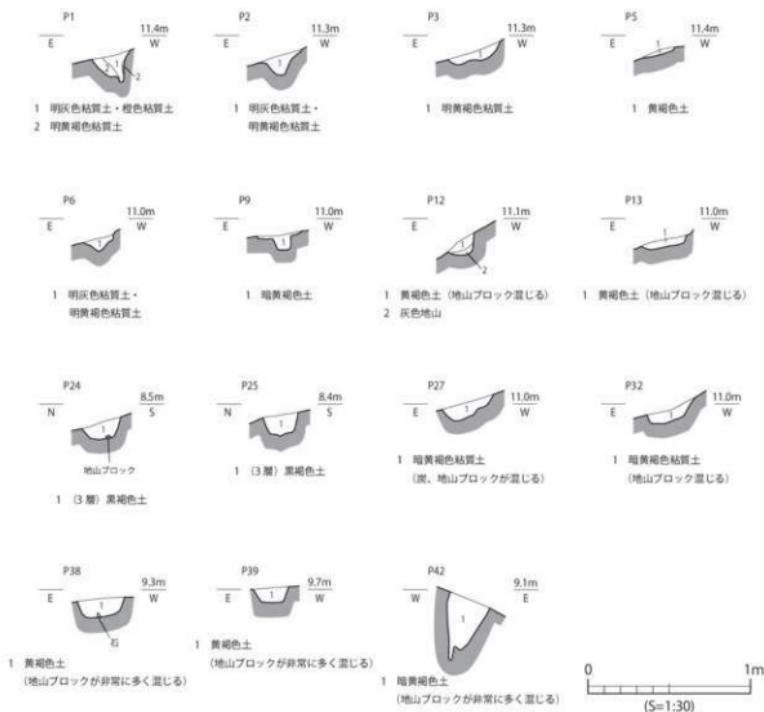
第28図 集石土坑実測図



第29図 焼土溜実測図

薄い堆積であった。土層の傾斜に沿い、最深部に向かって傾斜している。図版29のfおよびgのごく小さい土師器の破片が出土している。

焼土溜は検出した層位から中世以降のものと考えられる。



第30図 その他の遺構実測図

## 5 その他の遺構

E2グリッドで検出した焼土面では遺物は出土していない。遺構の時期については不明だが、水脈の両側に位置する点などから、土器溜と何かの関係があることも考えられる。そのほか、ピットなどの遺構については第10表にまとめた。

また、これらの遺構から出土した遺物については図版29にあげた。e1は、SB02とSB05の間で検出したP27のピットから出土したもので、中世土師器の破片である。hはE4グリッド北西隅のP22のピットから出土したもので、黒色土器の小破片である。

## 第5節 遺構外出土遺物

第31図から第47図は遺構外から出土した遺物である。このうち、古墳時代の須恵器供膳具について第31図にあげた。これらは、C3、C4、D2、D3、E3各グリッドから出土しているが、第2層から第5層までを一括して報告する。また、古代の須恵器のうち、供膳具類については、層位ごとに報告する(第32~35図)。次に、古代の須恵器を器種別に報告する。その他の遺物に関しては、層位とは関係なく、種別、器種ごとに報告する。

## 1 古墳時代の須恵器供膳具（第31図）

古墳時代の須恵器としては、石見3期（6世紀後葉）から石見5・6A期（7世紀前葉）までの資料が存在する。

35～40は蓋である。35、36は、天井部にヘラケズリが顯著に残り、口径が大きく、肩が張り、口唇端部の段がないタイプで、石見3期に属する。39は前出35と36に比べて丸みを帯び、器高が低く、口径もやや小さく、石見4期に位置づけられる。37はやや口径が小さく、全体に丸みを帯び、天井に工具の当具痕が残る。同様の38、40とあわせて石見5・6A期の資料と考えられる。35、38、39は、天井が平らに成形されていて、石見地方特有の蓋の特徴を示す。41、42は壺身である。立上がりの低い石見6A期の特徴を備える。33、34、43は高環である。33は長脚無蓋高環でA5型の石見4期に属する。34は低脚無蓋高環で、壺部が丸みを帯び、端部を丸く收めるB1型で石見4期に属する。43は口縁端部内側が面をなすB2型で、口縁端部外側に波状文を巡らす。石見5・6A期の資料である。

## 2 古代の須恵器供膳具

### 第2層出土土器（第32図）

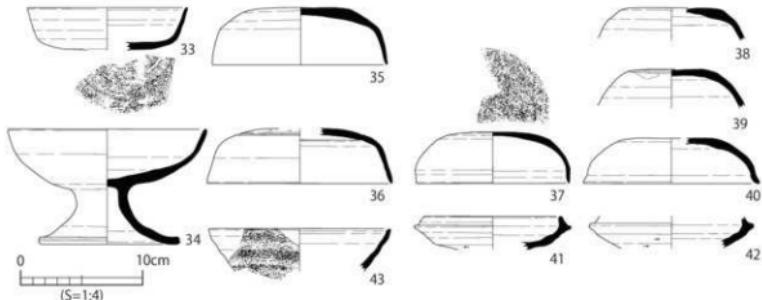
器種としては壺、蓋、皿がある。時期的には、石見8期（7世紀末～8世紀前葉）～石見9B期（8世紀後葉）まである。

44は蓋、45～46は高台の付く环II類である。44はボタン状のつまみを持つ蓋である。断面形状は、つまみから均等に湾曲して端部に至り、端部は屈折して垂下する。石見8期に属する。45と46は、高台が比較的内側に付き、「ハ」の字にふんばる。体部は、底部端から屈折して斜め上方に立上がり直線的に伸びる。石見9A期に属する。47は高台が底部端に寄り断面三角形で小さい。体部は深く口縁に向かって広く開く。容量が大きく、石見9B期の資料である。

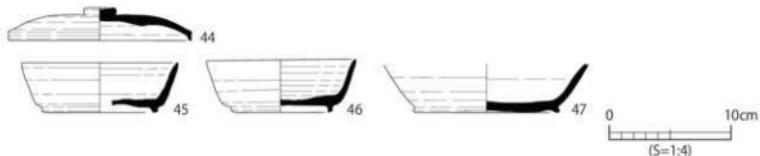
### 第3層出土土器（第33図）

第3層からは、石見8期（7世紀末～8世紀前葉）から石見10期（8世紀末～9世紀）、それ以後のものも含まれている。

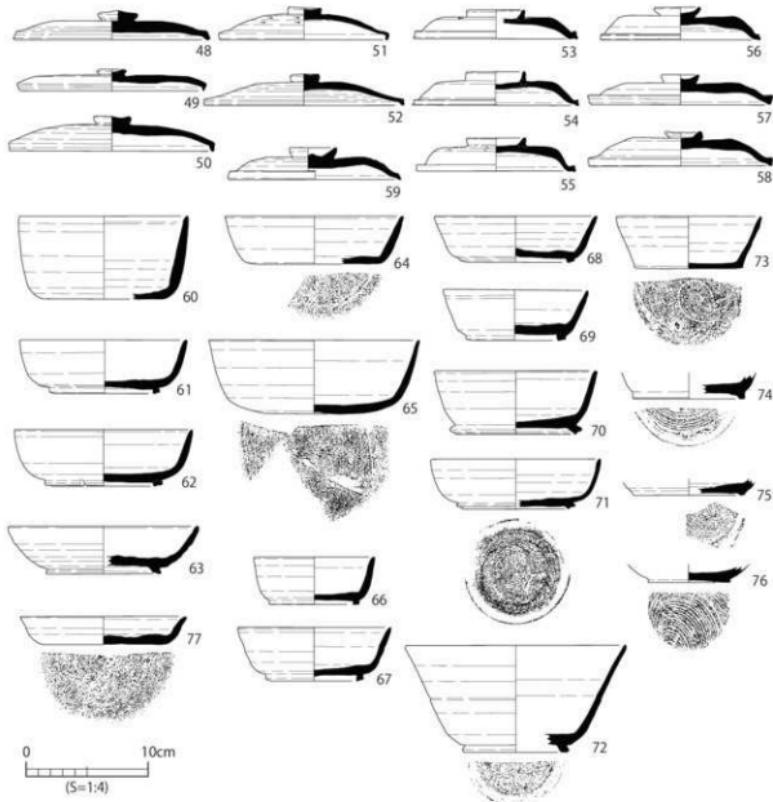
48～59は蓋である。つまみの形態は、48は擬宝珠、49～52まではボタン状、53～55は比較的小さな輪状、56～59は、その中間型ともいえるボタンを押しつぶして輪状にしたような形状である。擬宝珠やボタン状のつまみの蓋と、径の小さな輪状つまみの蓋が共存するのは、下和



第31図 包含層出土遺物実測図1（古墳時代）



第32図 包含層出土遺物実測図2(第2層)



第33図 包含層出土遺物実測図3(第3層)

田遺跡の属する邇摩郡や安濃郡の石見9A期～石見9B期の地域的特徴である。<sup>1)</sup>

50は、断面は緩やかな湾曲で口縁端部が屈折して垂下させる。49は、断面扁平につくり、口縁近くでやや丸みを帯びて端部は屈折して垂下させる。48は、器壁が厚く扁平につくるが、外形はやや丸みを帯びて、口縁端部は屈折して垂下させる、49と50の中間的な様相である。この3点は石見8期の資料である。51と52は、器壁が薄く、天井はやや丸みを帯びているが、口縁近くで水平

となり、端部は屈折して垂下させる。石見9A期の資料である。53～58は、器壁の厚いものが多く、極端に肩が張って寸詰まり、口縁端部近くが水平方向に屈折して端部を下につまみ出す。石見9B期に属する。同様のつくりでも、59は、端部をつまみ出すことなく収めており、石見10期まで降る。

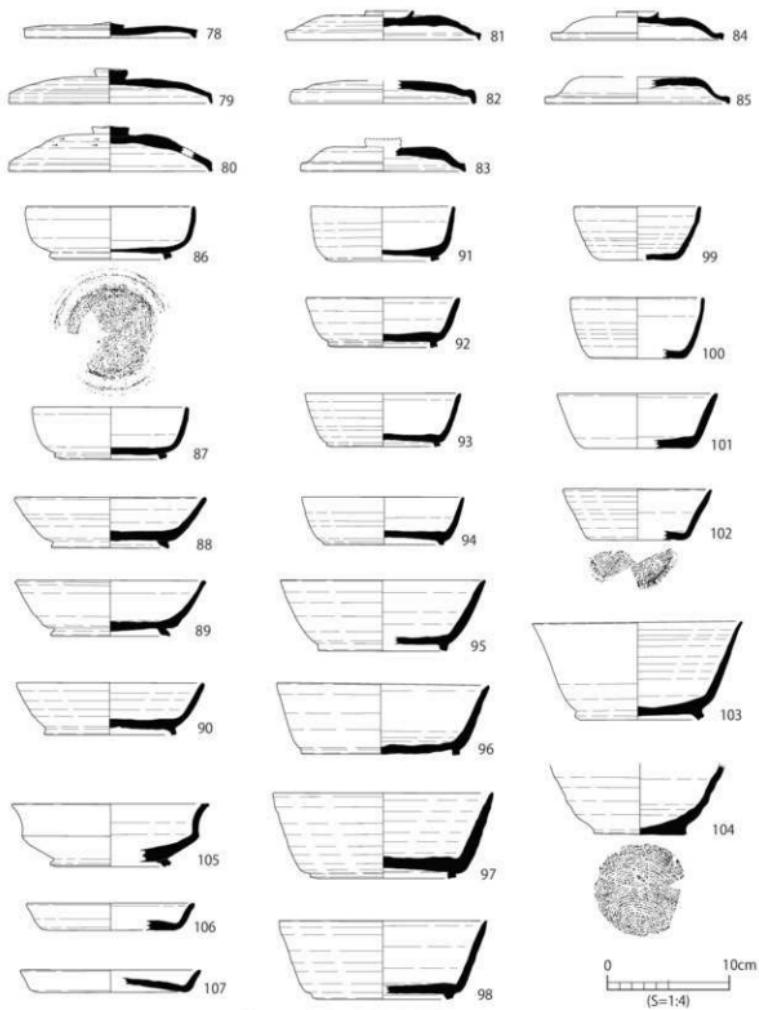
60～76は壺である。60、64、65、73は高台を持たない壺I類である。61～63、66～75までは高台を持つ壺II類である。61と62は、高台からやや間を置いて屈曲して立上がり斜め上方に伸びる。63は、高台からやや間を置いて屈折して立上がり、斜め上方に大きく開く。この3点は石見8期に属する。高台のない壺I類の64は、器壁が厚く体部が斜め上方に直線的に開く。底部外面に回転ヘラ切り後に板状の当具痕を残している。66と67は器壁が厚く、高台からやや間を置いて屈折して立ち上がり、あまり開かず斜め上方に伸びる。この3点は石見9A期に属する。高台を持たない壺I類の60と65は口径が大きいく深い。65は底部に静止糸切りの痕を残しており、この2点は石見9B期の資料である。高台を持つ壺II類の68～70は高台が底部端付近に付き、体部は直線的に斜め上方に伸びる。石見9B期の資料である。71は、高台が比較的内側に付くが、器壁が薄く、高台は踏張り、体部は丸みを帯びて立ち上がる。底部に静止糸切り痕を残す。石見9B期の特徴を示す。72は、口径18cmを測る大型品である。高台は底部端からやや内側に付き、「ハ」の字に踏張る。体部は長く斜め上方に伸びて若干外側に反り、石見9B期の資料である。73～76は底部外面に回転糸切りの痕跡を残す資料である。73、74は石見10期、75は9世紀代、76は平高台で10世紀初の資料とみられる。77は皿で、底部外面にヘラ切後の当具痕が残っており、石見9A期の特徴を示す。

#### 第4層出土土器（第34図）

第4層からは、石見8期（7世紀末～8世紀前葉）から石見10期（8世紀末～9世紀）の資料を中心で、それ以後のものも含まれている。

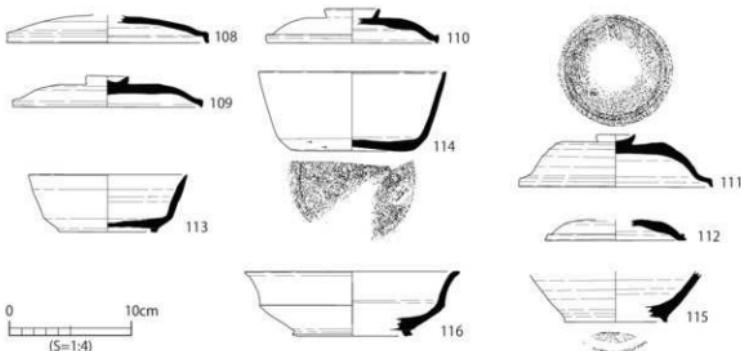
78～85は蓋である。78のつまみは擬宝珠、79、80、83のつまみはボタン状、81、82、84、85のつまみは径が比較的小さい輪状である。78はつまみ部分がへこむ印象で、全体を扁平に作り、端部は屈折して垂下させる。79と80は、断面が若干湾曲して膨らみ、端部は屈折して垂下せる。以上3点は石見8期に属する。82は器壁が厚く断面は若干の膨らみがあり、端部付近に水平な部分をつくり、屈折して垂下せる。石見9A期の資料である。81、84、85は肩が張り、端部手前で屈曲し、端部をつまみ出して垂下せる。以上3点は石見9B期の資料である。83は器壁が厚く、肩が張り、端部は寸詰まりで屈曲してつまみだす。邇摩郡・安濃郡の一部で特徴的にみられるタイプで石見9B期に属する（榎原2010）。

86～104は壺で、そのうち99～102は高台のない壺I類である。86、87、91は、低く踏張る高台が底部端から比較的内側に付き、体部は湾曲して立ち上がり、上方に伸びる。口径に対して器高が低く、石見8期に属する。86は高台内に横1本縦2本の交差する短い沈線のヘラ記号が認められる。88～90は菱形あるいは小さい高台が比較的内側に付き、体部は、底部端から屈折して斜め上方に伸びる。器高は低く見込みは浅い。この3点は石見8期に属する。92、94、95は、体部がやや内湾気味に立ち上がり、やや丸みを帯びる。92と94は、95よりも口径、容量ともに小さい。この3点は石見9A期の資料である。93、96～98は、高台が比較的底部端付近に付くもので、体部は器壁が厚く斜め上方に長く伸びる石見9B期の資料である。93は他の3点より口径、容量とも



第34図 包含層出土遺物実測図4(第4層)

に小さい。このように、石見9A期、石見9B期には壺に大小2つの規格、寸法が認められる。99～102は、体部がやや内湾気味で、底部に回転糸切痕を残すなど石見10期の特徴を備える。103も口径17cmを超える大型品で、器壁が薄く見込みが深い。石見10期の資料である。104は底部の回転糸切痕を残す平高台の壺で、体部は器壁が薄く、高く、見込みが深い。回転ナデ成形の痕跡が顕著である。9世紀以降の資料であろう。105は棱碗で、口縁は強く外反する。口縁端部の上面は面取



第35図 包含層出土遺物実測図5(第5層)

りしている。石見9B期の資料である。106と107は皿で、いずれも器壁がやや厚く、口縁がわずかに外反する石見9A期の特徴を備える。寸法に2種の資料がある。

#### 第5層出土土器(第35図)

石見8期から石見10期の杯、蓋がある。108と112はD3グリッド、他はすべてC3グリッド出土である。

108～111は蓋である。108は、擬宝珠かボタン状のつまみと推測され、口縁端部を垂下させる特徴から石見8期に属する。109は幅広のボタン状つまみを持ち、天井部の器壁が厚く、肩が張り、口縁付近で強く屈曲して端部を垂下させる。これは石見9A期に属する。110は輪状つまみで、器壁が厚く、やや寸詰まりで、口縁をつまみだして垂下させる。石見9B期の特徴を示す。111は幅の狭い輪状つまみの資料で、器高が高く、天井部に回転糸切痕を残し、器壁は厚く、肩が張り、口縁部付近で強く屈曲し、口縁部を垂下させる。石見9B期の資料である。112は小型の蓋で、輪状つまみと推測される。器壁は厚く、口縁は横につまみ出す。石見9B期の資料である。

113～115は杯である。113は、高台がやや内側に付き、体部は斜め上方に直線的に伸びる。口径は比較的小さく、石見9A期に属する。114は器高が高く、体部は直線的に立ち上がり、底部は静止糸切痕を残し、石見9B期に属する。115は、底部に回転糸切痕を残し、高台は底部端につく。体部は丸みを持って立ち上がり、やや湾曲する。石見10期以降の資料であろう。116は稜碗である。口縁の外反が顕著で石見9B期に属する。

#### 3 須恵器の甕(第36図・第11表)

第36図は古代の須恵器の甕である。内側の同心円当具痕の単位が比較的大きいなどの共通性がある。117と120は、くの字の単純な口縁部の資料で、118と119の口縁部は外面に狭い面を設ける。119は頸部がラッパ状に高く開く。

117は、肩が張り、砲弾状の尖底状の底部にむけてすぼまる。胴部中央やや下に蓮華の花や茎を題材とした線刻が認められる。上向き、横向き、下向きなどの描写が4か所確認できる。

120は把手を持つ甕(奈文研1991、以下土器の分類についてはこれによる)である。把手は扁平で胴部最大径直下に付き、上に向かって直角に屈曲する。石見9A～9B期の資料である。

#### 4 その他の須恵器 (第37～39図)

第37図には主に壺類を掲載した。122は甕の小型品である。130は小型平底の壺で、共伴須恵器から石見8期の資料と考えられる。123～126は壺蓋である。126は小型品で、ボタン状のつまみを持つ石見8期あるいは石見9A期の資料と考えられる。123と124は128、129など無頸壺や短頸壺の蓋である。125は天井部に回転糸切痕を残し、天井が水平である。石見9B期に属する。128、129は小型の無頸壺ないし短頸壺で、128は回転ヘラ切りで高台をつくり出し、肩が張り稜を持つ。口縁は非常に低い。対して、129は、底部外面に静止糸切痕を残す平高台で、胴部は丸く、口縁は短く直立する。石見9B期である。128から129へ系統的に変化したとみられる。127は、広口の小型壺で口縁は欠損しているが、直下の外面に粗雑な波状文を巡らす珍しい資料である。森原下ノ原遺跡等に類例があり（島根県2022・川原2010）、石見9A～9B期の資料である。132、133は壺底部である。133は底部破片で焼成ひずみがあり、壺内部に灰が溶着している。134の体部は平底から上方に立ち上がって肩が張る広口の短頸壺（壺E）で石見9A期の資料である。

135以下は長頸壺である。137は体部が丸みを帯び、平底のタイプで石見6C期、139は体部最大径部分が屈折して稜を持つ資料で、石見9A期に属する。138は139のようなタイプの長頸壺の口縁である。140は高台を持ち、体部は丸く倒卵形を呈し、底部外面に回転ヘラ切痕を残している。平城V期（奈文研1991以下同じ）に例があることから、石見9A期と考えられる。141と142は、平底の底部からやや斜め上方に直線的に立ち上がり、肩が丸く張る。141は短頸である。142は壺Lで底部外面にヘラ切痕を残す。この2点は石見9B期の資料である。143は、分厚い平底で体部は細身、頸部は体部に対して広い。壺Lで平安時代9世紀以降のものである。

第38図は鉢、瓶、平瓶、横瓶である。144は鉄鉢形、鉢Aである。口縁上端の内側を面取りしている。145は扁平な台が付くコップ形の鉢Eである。146は把手付鉢、147は蒸気孔6孔を持つ瓶である。以上4点は石見9B期までの資料である。

148～150は平瓶である。3点とも把手は付かない。148は丸底に近く、分厚い。体部も丸くカキ目調整が目立つ。石見6C期に属する。150は小型品である。平底で肩が張り稜を持つ特徴から、石見9A期の資料と考えられる。149は大型品で、底部が丸みを持ち、頸部が肩端部に偏っている。石見9B期の資料である。

151と152は横瓶である。151は横正面から見ると肩が張っている。152は口縁と円盤を欠損している。外面のカキ目が顕著である。2点とも石見9A期が下限と考えられる。

第39図には、ヘラ書き文字、ヘラ記号、転用硯の可能性のある資料を掲載した。

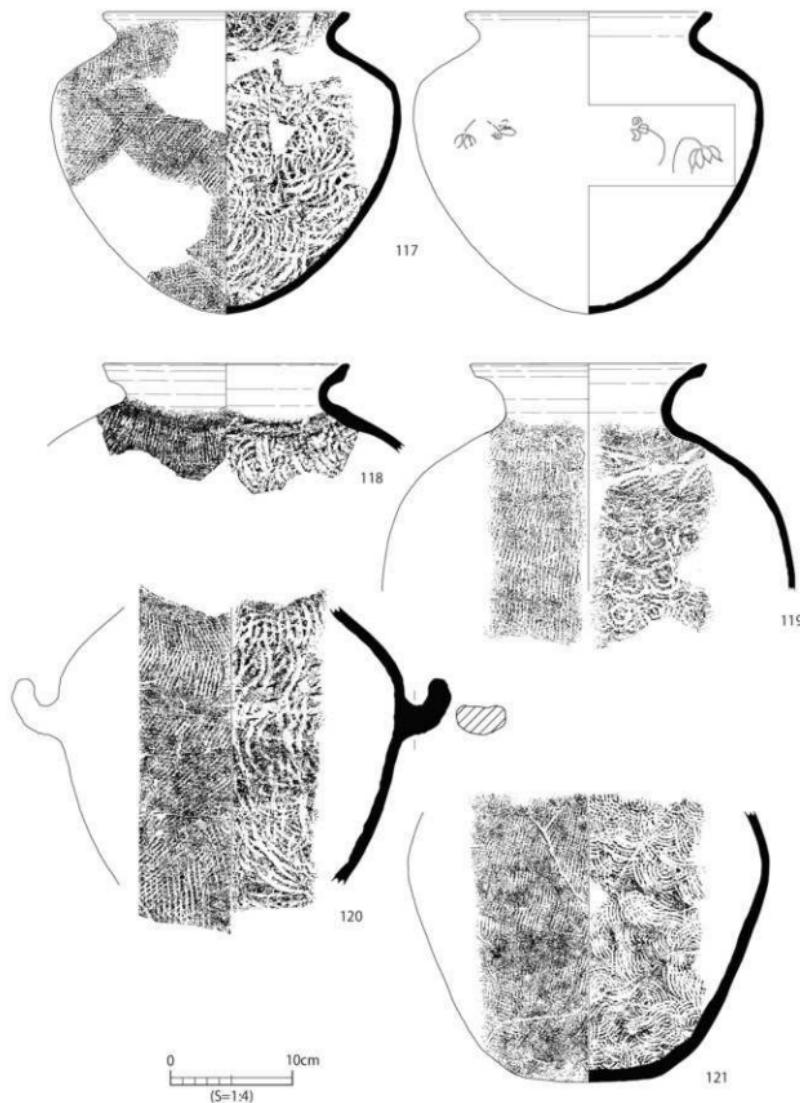
153は天井にヘラ書き文字「欠」が刻まれた壺蓋である。<sup>23</sup>以下、164までの詳細は別表（第11表）を参照されたい。

165～169は転用硯の可能性のある資料をあげた。165は石見9B期の壺蓋で内面に、166は石見10期の壺内面に、167、168は高壺で、内面にそれぞれ墨痕があるよう見える。

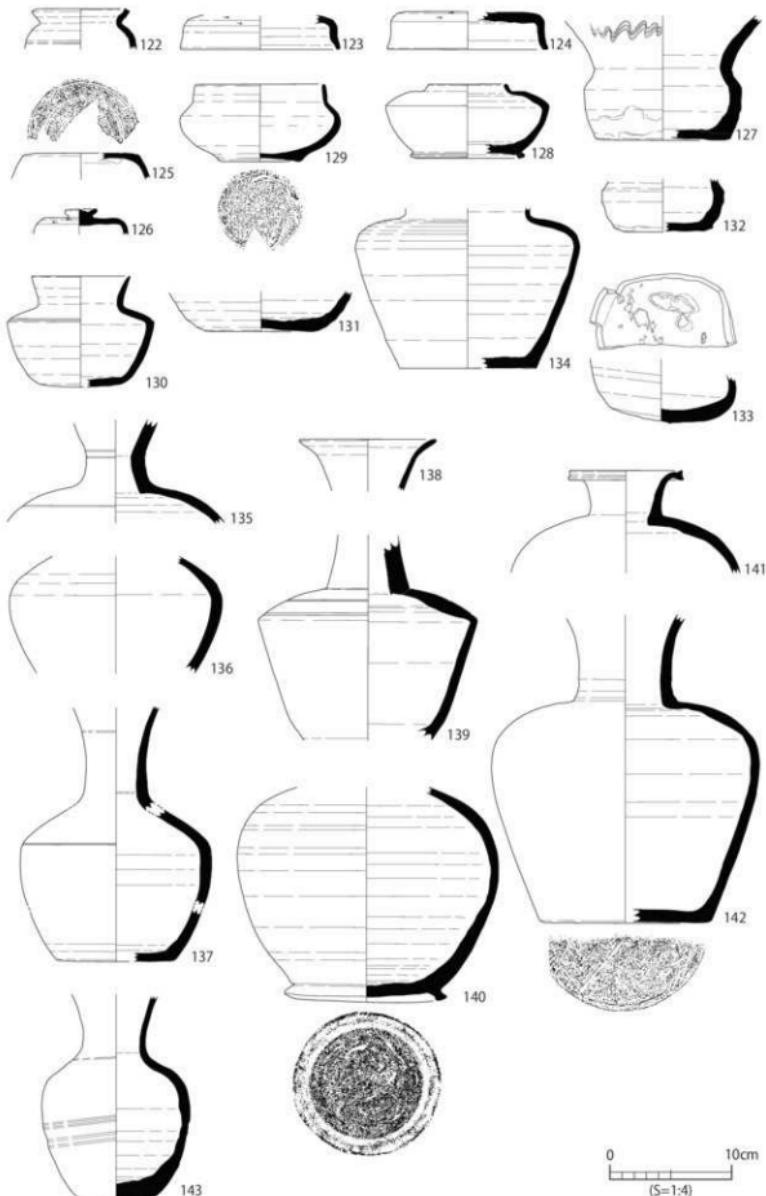
170と171は須恵器甕の破片である。内面の放射状タタキ目の特徴から、8世紀代の資料と考えられる。

#### 5 土師器 (第40図～第42図)

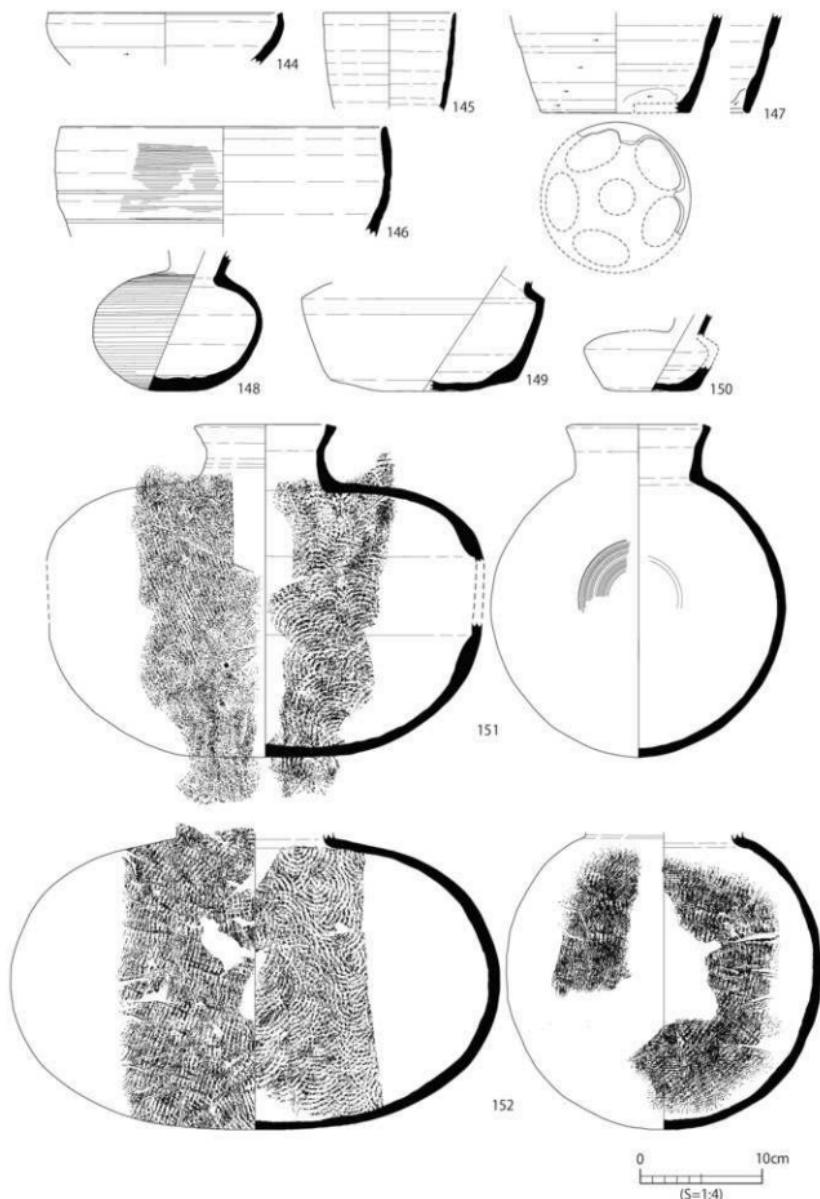
第40図は土師器甕である。172から175は口縁の屈折が強く外反するもので、口径よりも胴が張るタイプである。176～178は口縁の屈曲が弱く、あまり外傾しないもので、胴部最大径が口径よ



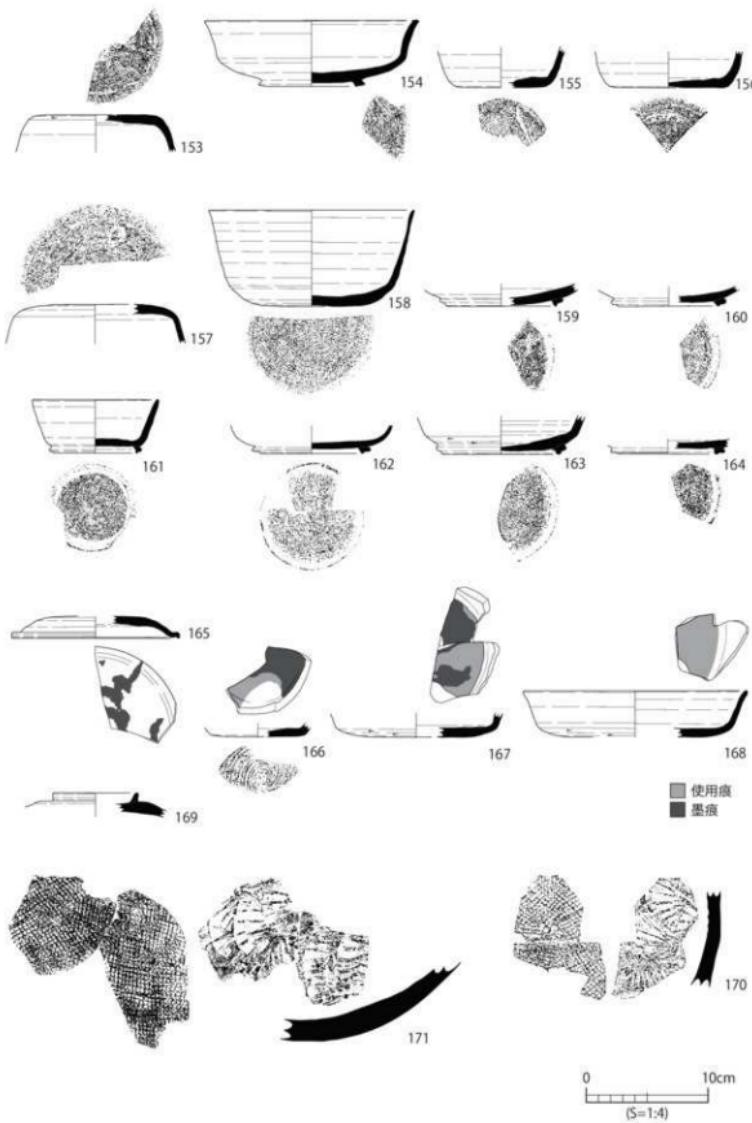
第36図 包含層出土遺物実測図6（須恵器裏）



第37図 包含層出土遺物実測図7 (須恵器壺)



第38図 包含層出土遺物実測図 8 (その他の須恵器)



第39図 包含層出土遺物実測図9（その他の須恵器）

りも大きいものである。179～185は、口縁部の屈曲が強く、胸部最大径が口径よりも小さいタイプのもので、いずれも8世紀代の集落の時期の資料である。

第41図は瓶である。大小に寸法が分かれ、形状も、体部が丸みを帯びるもの（186～189）と直線的なもの（190、193）、その中間で口径に対して器高の高いもの（191、192）がある。

186、187、191は把手を持つものである。186は、口縁が大きく開き、扁平で比較的厚い断面形の把手があまり屈曲せず横方向に突き出て、位置は口縁のやや下に付く。187の口縁は、開かず上端内側を面取りしている。やや薄く扁平な把手は口縁に接し、上に屈曲して付く。191は器壁が非常に薄く、186、187、188に比べると小型の資料である。口縁は大きく開く。把手の形状は不明だが、186、187に比べて胸部最大径部分の低い位置に取り付く。191～193の瓶については、底部の形状がわかる。3点とも棟渡孔があり、193は2対ある。192の底部はその端部が緩やかな波状を呈する。いずれも8世紀代以降の集落の時期の資料と考えられる。

194は甕胴部の破片で、人の爪痕が多数認められる。

第42図には鍋、赤彩土師器などを掲載した。195、196、199～201は鍋である。195は、片口を持つ。196は、扁平で強く鋭角に屈曲して立上がる把手が平城Ⅲ期に例があり、石見8期と考えられる。199～201は口縁がくの字状に開き、体部がほぼ均等に丸みを持つ鍋A類である。197と198は、盤である。平城Ⅱ期に例があり石見8期と考えられる。203は壺の口縁、204は壺の底部、207と208は环である。203、207は赤彩土師器である。205は色調灰白色を呈し、灯明皿形の皿Cである。206の环は、灰白色を呈していたものが火を受けてすすけている。

## 6 土製品（第43図）

### 土製支脚

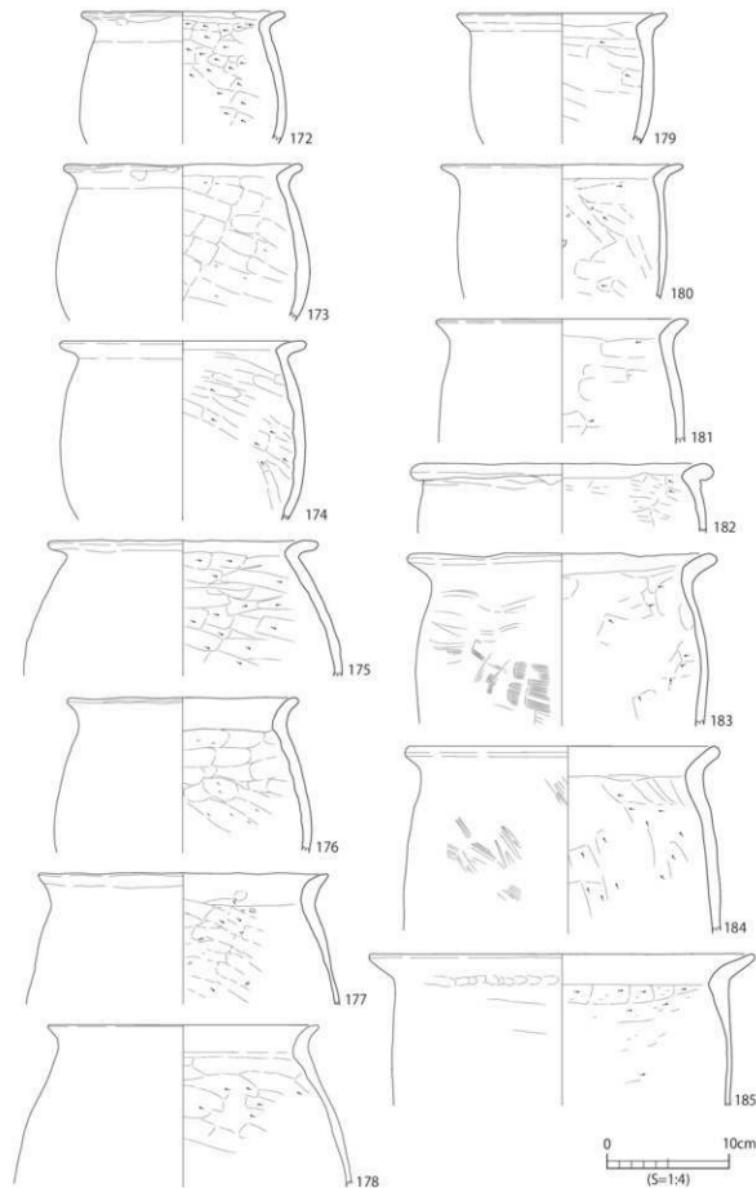
土製支脚は、型式の判明するものは13点確認した。このうち213～216の4点を掲載した。214は2方向突起で胸部に貫通孔を持つI B類（岩橋2019、以下同じ）、213は2方向突起で胸部に非貫通孔を持つI C類である。215は3方向突起で背面の突起がヒレ状を呈するII C類である。216は3方向突起で胸部背面に非貫通孔を持つIII B類である。下和田遺跡から出土した土製支脚はこの3分類4型式が認められる。出土状況に特定のかたよりがみられないことから、時期は集落の存続時期（7世紀末～9世紀初）におおむね対応していると考えられる。型式の確認できるこれら3分類4型式のうち、背面の突起がヒレ状を呈するII C類が圧倒的に多く、他の3型式は上記各1個体ずつである。当遺跡は、石見地方沿岸部の様相、すなわち移動式カマド+土製支脚方式の分布圏内にある（岩橋2019）が、II C類が多数を占めている点は特徴的である。

### 製塩土器（第18・43図）

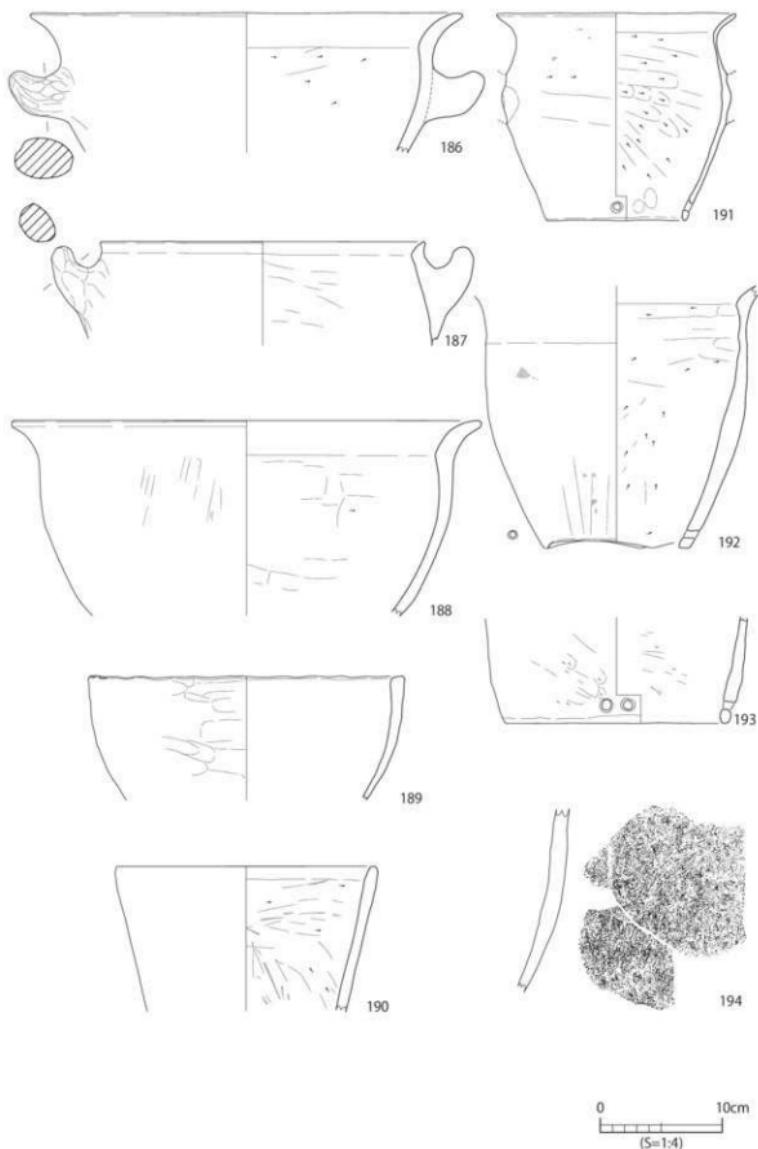
製塩土器については、古墳時代後期のものと平安時代のものがあり、いずれも焼塩壺である。

古墳時代の製塩土器は、第18図にあげた脚柱部の破片7点がある。7点ともほぼ同じサイズで、同一技法で製作されていることから、同じ産地とみられる。これらの中には、土器溜の下方、第4層中から第19図28の大型器台と共に伴する第18図25の資料もあり、手捏土器や須恵器とともに祭祀に用いられたと考えられる。脚柱部の形状からみて、美濃ヶ浜式4類（6世紀前半ごろ）、郷の坪7類（6世紀後半ごろ）相当の時期（飛田2002・内田1994）と考えられる。この時期の類例は、島根県益田市の浜寄・地方遺跡（島根県2006・2007）に資料がある。

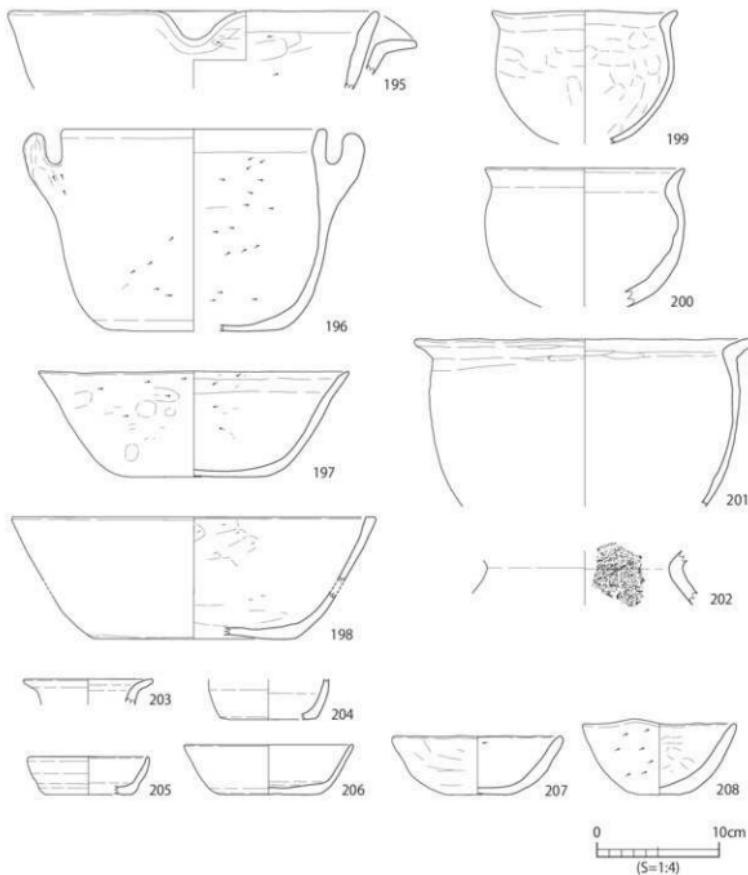
第43図209～212および図版28上右の製塩土器は、平安時代の焼塩壺である。第43図にあげた



第40図 包含層出土遺物実測図10(土師器裏)



第41図 包含層出土遺物実測図11(土師器瓶)



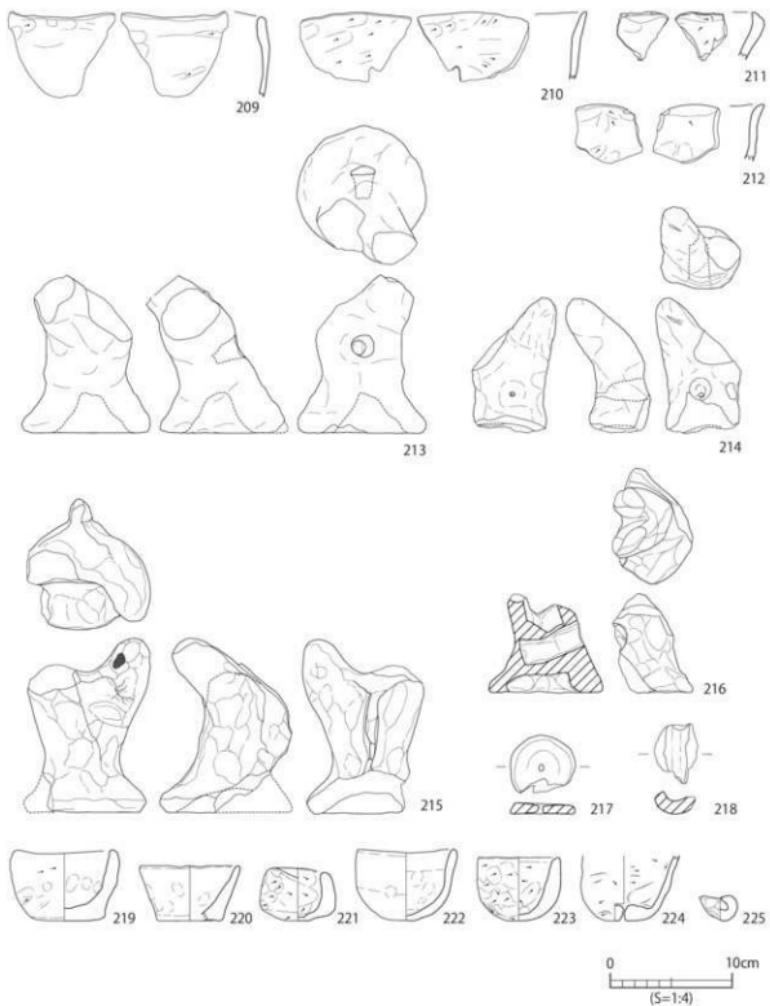
第42図 包含層出土遺物実測図12(その他の土師器)

ものは、器形が壺彈状を呈し、布目の痕跡がない大容量のものである。図版28にあげた2点の破片は、内面に布目を残す小容量のものである。

このように、当遺跡の製塩土器の出土傾向は、集落が盛んに営まれる以前に一度出現し、集落の営みが低調になってから再び現れるという興味深い様相を示す。当遺跡の果たした役割あるいは、主体となる集団自体の変質、交代などの変化を示唆しているのかもしれない。

#### 手捏土器その他

219～225は手捏土器である。219～221は厚手で平底。222～224は薄手で丸底。224は底部穿孔している。225は著しく小型品である。220は製塩土器の可能性がある。これらの手捏土器は製塩土器も含めて祭祀に用いられたと考えられる。<sup>11)</sup> 製塩土器の年代観から、これらの手捏土器も同



第43図 包含層出土遺物実測図13（土製品等）

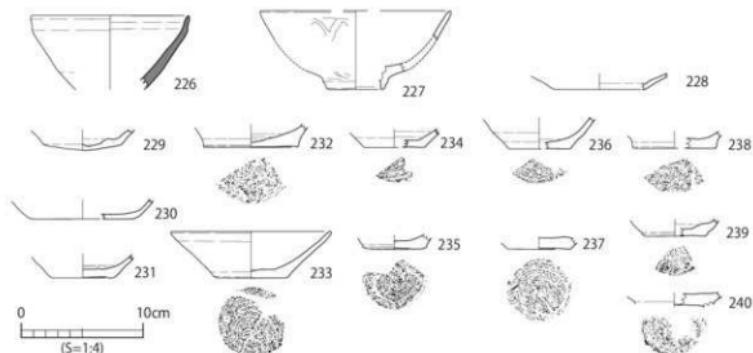
時期のものと考える。

217は二次加工の土製円盤。218は土錘である。

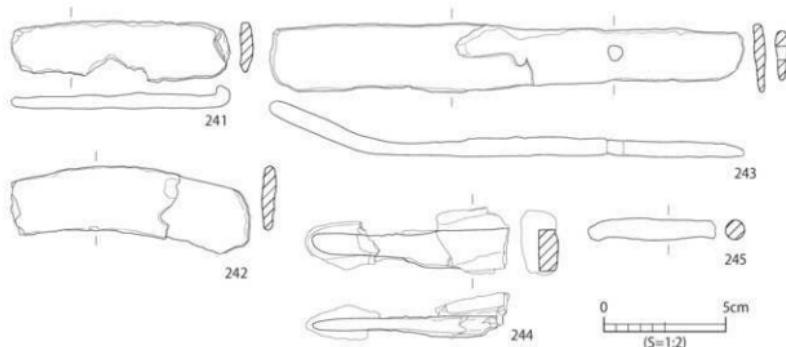
## 7 陶磁器及び中世土師器（第44図）

### 輸入陶磁器

226から228は輸入陶磁器である。226の褐釉碗（天目形）はB3グリッド第3層および第4層から出土している。中国福建省産で13世紀中頃とみられる。227は龍泉窯系片彫連弁文（鑄なし）碗（太



第44図 包含層出土遺物実測図14(陶磁器・中世土師器)



第45図 包含層出土遺物実測図15(鉄器・鉄製品)

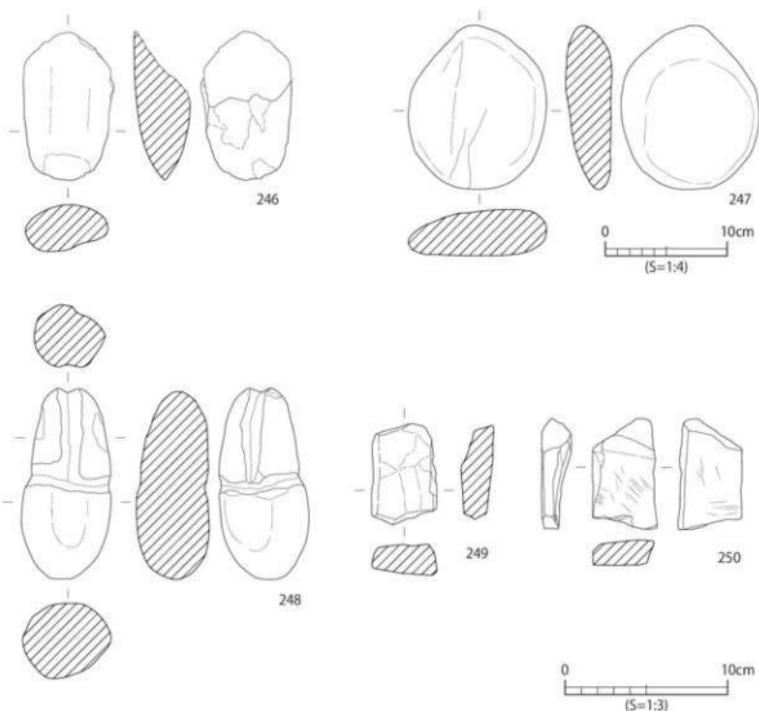
宰府E期、13世紀代)で、D3グリッド第2層から出土している。228は龍泉窯系青磁皿と思われる。このうち、226の褐釉碗は加工段の時期を反映している可能性がある。

### 中世土師器

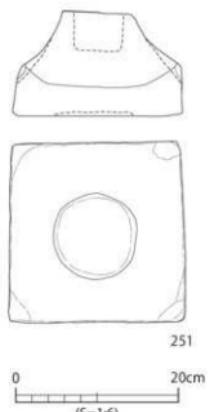
229～240は中世土師器である。229と231は第2層、230と232～237は第3層、238～240は第4層からの出土である。229と230は灰白色を呈しており、12世紀代の資料である。231～240は橙色系の色調を呈しており、13世紀以降の資料である。240は底部に回転ヘラ切痕跡を残し、それ以外は回転糸切痕を残す。233は集石土坑の近くから出土しており、当遺構の時期を反映している可能性がある。

### 8 鉄製品(第45図)

出土した5点の鉄製品は、いずれも遺構に伴うものではない。241と242は鎌、243は鉈、244は刀子、245は棒状の鉄製品である。241の鎌は、先端部を欠損しているが、柄との接合部分である折り曲げた基部が残っている。242の鎌も基部近くまでは残っているものの、先端に近い部分が欠損している。243の鉈は刃が折れ曲がっている。鉈としたが、元は大刀あるいは刀子で二次的に利



第46図 包含層出土遺物実測図16(石器・石製品)(247はS=1:4)



第47図 包含層出土遺物実測図17(石造物)

用されている可能性がある。244の刀子は、刃の中途で折り返され癒着している。245の棒状鉄製品は先端近くが曲がっており、釘の可能性がある。第2層から出土した刀子と棒状鉄製品は、比較的新しい資料の可能性があるが、第3層から出土した鎌、鉈などは、次項で述べる同じ第3層から出土した砥石とともに古代の集落の遺物と推測される。

## 9 石器・石製品および石造物(第46図・第47図)

### 石器・石製品(第46図)

石器は、磨製石斧と磨石が出土している。磨製石斧246は上半分が折れて欠損している。弥生時代前期のものと思われる。

248は石錐である。細長い涙滴形状の硬質の石材に、逆T字状に溝を彫り、そこに紐、釣針をつるした海釣り

用の石錐である。古代から中世にかけて、東北地方から島根県西部まで分布するタイプのもので(坂本2014・内田2016)、当遺跡の生業の一端を反映する資料と考えられる。

249、250は砥石である。249の研削使用面は3面で、使用面に丸みもしくは山形のあることから、手持ちで使用されたと考えられる。250の研削使用面は3面で、凹面が形成されていることから、置いて使用されたと考えられる。両者とも石材は凝灰岩である。

#### 石造物(第47図)

五輪塔の火輪が、調査区南東端のD5グリッド第2層から出土している。辺22cm四方で、高さ12.9cmと辺に対して屋根が高い。そして、空風輪を受ける軸受けが太く深い。また、水輪と接する位置にごく浅い径10cmの彫り込みがあり、水輪の上端部の形状に合わせて固定するための加工と思われる。石材は大江高山火山帯から産出するデイサイトで、現在の大田市温泉津町西田で産出されたものを使用してつくられた16世紀中頃の製品とみられる。この石材は、石見銀山遺跡およびその周辺で福光石や白色凝灰岩が石材として多用されるようになるまで利用されていたものである。<sup>51)</sup>なお、この五輪塔の火輪は焼土溜よりも後出であり、当遺跡出土遺物の中で最も新しい時期の資料である。

## 第6節まとめ

### 1 遺構の変遷

#### 1) 古墳時代後期～終末期の遺構

6世紀末～7世紀前半ごろ、遺跡西端高所からの水脈に沿う位置に土器溜が形成され、ここで湧水点祭祀がおこなわれたものと考える。土器溜の下方第4層中からは、土器溜よりも先行する時期の須恵器壺、壺、器台が出土していることから、6世紀中葉段階には、すでに、この場所で祭祀が開始されていたことがうかがわれる。後述するように、土器溜を構成する壺には、ヘラ記号や絵画的な線刻が施されたものがあり、注目される。

#### 2) 古代の遺構

石見8期の7世紀末になると、当遺跡内において集落が形成されるようになる。建物群は、調査区北西の急な斜面をL字状に造成したせまい敷地の中で、数回にわたって掘立柱建物の建替がおこなわれた。また、SB02やSB05など規格的な建物とそれ以外の小規模な建物とで構成されている。

掘立柱建物は、SB01、SB02、SB05の一群と、SB03とSB04の一群によって構成される。前者では、まず、SB01内で建替えが行われた。SB02はSB01およびSB05を切っているので、この一群中では最も新しい段階の掘立柱建物と考えられ、柱穴内からは奈良時代後半から平安時代初期の环が出土している。なお、SB02に切られたSB01とSB05は同時に存在していた可能性もある。

SB03とSB04の一群では、SB04がSB03の敷地を切っており、SB04がSB03より新しい。SB04の時期は、C3グリッド第5層から出土している第35図115の須恵器环などから判断して、10世紀初頭頃と推定される。SB04は標高8mに位置し、全体の掘立柱建物群中でも最も低い場所を占有しており、これが当集落全体の最終段階の様相を呈するものと考えられる。

#### 3) 中世の遺構

中世に属する遺構としては、B3グリッドからC3グリッドにかけて加工段内に形成された、溝、石列、集石土坑があげられる。SD01の溝からは、第27図に示した13世紀～14世紀頃の中世土器群が出土しており、加工段が形成された時期を示す。集石土坑は、本来土坑上に積んでいた礫や円礫

が坑内に落ち込んだ墓坑と考えられる。第44図233の中世土師器壺がごく近い位置から出土しており、集石土坑の時期を示すと考えられる。その年代観から、当遺構は、13世紀から14世紀代につくられたと考えられる。

## 2 遺物の様相

### 1) 土器溜および周辺の第4層から出土した須恵器群

遺構から出土した遺物としては、まず、土器溜を構成する遺物群(第16図)があげられる。土器溜の須恵器は、甕、脚付直口壺、高环から構成される。11の須恵器甕は、胴部下半が張り、倒卵形よりも四角形に近いプロポーションを呈する。このような器形の例としては、他に、17、19、20などがあり、いずれも土器溜下方の第4層から出土したものである。第4層中には、こうした体部が四角形をした甕とともに、29の倒卵形の須恵器大甕や18のラッパ状に大きく開く大型甕の口頭部など、体部の四角い甕よりも先行するとみられる須恵器甕の一群も出土している。これらと共に伴する須恵器高环は、石見4期に属するものである。このように、其伴関係は明瞭でないものの、ここでは、体部が四角形の須恵器甕の一群が石見4期に属し、29、18は石見4期もしくはそれに先行する時期のものと理解しておきたい。胴部形態が四角形に近い形状を呈する須恵器甕は、大田市平ノ前遺跡(島根県2019)、益田市北長迫横穴墓群(島根県古代文化センター2015)など石見地域にみられるもので、いずれも石見4期に位置づけられており、上記の想定と整合する。また、口縁外側や頭部、肩部に施文される文様が、波状文ではなく、刺突文が優勢となる傾向も石見地方の特徴である。<sup>9)</sup> 28の器台に関しては他に類例がないが、石見4期で脚部にスカシがない点などは、石見地方の石見4期の長脚無蓋高环の傾向と一致する点から、やはり、当該期に位置づけることができる。

### 2) ヘラ記号・線刻・刻書のある土器

ヘラ記号・線刻・刻書のある土器は、須恵器12点を確認した(第11表)。このうち、土器溜を構成する須恵器の中から2点が出土している。9の脚付直口壺は、丸底の底部近くに不定方向の交差する線を連続的に描いている。益田市北長迫横穴墓群3号穴出土遺物に類例がある(島根県古代文化センター2015)。10の甕は胴部最大径のやや下に「×」を二重に描いたヘラ書きが認められる。さらに、土器溜の関連資料としては、第19図28の須恵器器台があげられる。太く高い円筒状脚部に、縱、横、斜めの単線を粗雑に描いている。この3点は、いずれも古墳時代後期～終末期にかけてのもので、土器溜の性格を考慮すれば、何らかの祭祀的な意味合いで理解することができるのではないだろうか。なお、このほかには、遺構から出土したものはない。

39図153の壺蓋天井外面に刻書が認められる。一部欠損しているものの、全体的な形状から「欠」と推測され、当遺跡では唯一の文字資料となる。時期は石見8期に属する。

線刻資料の中には、具象的・絵画的な資料も存在する(第36図117)。この須恵器甕の最大径部分からやや下に、下向き、横向き、上向き、3様の蓮の花を線刻で描いている。この甕の時期は、其伴する第37図139長頸甕などから、石見9A期(奈良時代中葉)と考えられる。蓮の花のモチーフは仏教との関連が想定される。

このほかヘラ記号の資料は、「×」が157の壺蓋をはじめ、159、161～163の高台のある壺II4点があり、これらは石見8期に属する。158の壺Iには底部外面に「×」ヘラ記号があり、石見9A期に位置づけられる。以上「×」6点は、ヘラ記号と器種が共通し、時期も比較的近接することから、これらにヘラ記号を描くことによって区別する何かの同一の目的があったことが考えられる。

一般的に、線刻やヘラ書きは、土器の生産過程において、製作集団によって焼成前に施されるのが通例と考えられている。石見地方では「×」のヘラ記号は、下和田遺跡のほかに、益田市美都町酒屋原遺跡で石見9B期の坏蓋が1点確認されている（益田市2005）。下和田遺跡の場合、「×」や線刻など同種同一のものが、石見4期、石見8～9B期の隔たった二つの時期に多数出土している点が注目される。この点から、このヘラ記号は、時期を越えて当遺跡に供給する須恵器に対して、当遺跡特有の何かの事情により記されたとみるべきであろう。それは、おそらく発注元や使用者の意図が反映されたものか、または、生産者が消費者の事情を想定して記したものと推測される。なお、下和田遺跡からは墨書き土器は出土していない点から、寺院・官衙的様相は認められない。

### 3) 古代の須恵器

当遺跡で出土した古代の須恵器については、蓋のつまみと坏身の切り離し技法に当地の地域的特徴が現れている。すなわち、蓋について、擬宝珠、ボタン状、径の小さい輪状つまみが優勢であり、これは、下和田遺跡が属する江の川以東の邇摩郡、安濃郡における石見9A期～石見9B期の特徴である。また、坏底部外面の切り離し技法で、回転ヘラ切り、静止糸切り、回転糸切りの技法が混在するのは、邇摩郡の地域的特徴である。このように、当資料は、今後古代石見の須恵器研究における基準試料となるものと考えられる。

### 3 遺跡の各時代の様相

下和田遺跡では、まず、古墳時代後期（6世紀代）においてE3グリッド北西付近で湧水点祭祀がおこなわれた。祭祀の痕跡を示す土器溜は、遺跡西方から湧き出る水脈沿いに営まれている（第11図）。祭祀には、製塙土器や手捏土器、須恵器甕、壺、器台、高环などが用いられた。特に、須恵器の大形甕や脚付直口壺、器台など、線刻された器物の存在が目を引く。しかし、古墳時代から古代律令制の時代へと移り変わる7世紀後半、石見6C期から石見7期の遺物が極端に減少する。この時期に祭祀が途絶えた背景には、何かの社会的な変化が推測される。

7世紀末になると、この狭小な谷間にも集落が営まれるようになる。8世紀から9世紀にかけて、丘陵斜面を切土造成し、掘立柱建物を建て、数回建替を行っている。集落形成の契機としては、じとつには近隣にそのルートが推測される古代山陰道の建設・維持と何らかの関係があった可能性も考慮される。平安時代になり、10～11世紀には極端に遺物が減少し、集落が途絶えたと考えられるが、その背景にも古代道との関係も考慮に入れる必要があろう。

13世紀になると、加工段が造成され、集石土坑の墓が造られた。この場所は、谷間から波来浜川の氾濫原に開けた標高9mの比較的低いところに位置しており、この時期の集落の中心、あるいは生活の拠点は別の場所にあって、当遺跡はその縁辺に位置し、墓域として利用されたものと推測される。

以上述べてきたように、下和田遺跡においては、まず、古墳時代後期～終末期にかけての水辺あるいは水源に対する湧水点祭祀が営まれ、続く奈良時代から平安時代初期には集落が営まれた。ややヒアタスを置いて、鎌倉時代になると、前代に廃絶した集落跡の一部を利用して加工段を再構築した墓域が形成されるといった、土地利用の変遷を明らかにし得た。このように、下和田遺跡の立地するこの小さな谷は、時代によって祭祀の場から、日常生活の空間へ、そして墓域へと変遷し、そこに暮らした人々の生活を一側面を跡づけることができたことは、今後江東地域の歴史を解明していくうえで貴重な成果となったものと評価できる。

## 【註】

- 1) 柳原博英氏のご教示による。
- 2) 乾文:「矢」は島根県古代文化センター平石充氏による。また、同氏には、ヘラ書きの遺物全般について指導を得た。
- 3) 製塙土器については、全体的に内田律雄氏にご教示による。
- 4) 島根県古代文化センター松尾充晶氏のご教示による。
- 5) 島根県文化財課間野大丞氏のご教示による。
- 6) 島根県古代文化センター岩本真実氏のご教示による。
- 7) 大橋泰夫氏のご教示による。
- 8) 4) と同じ。

## 【引用・参考文献】

- 岩橋孝典 2019「古墳時代後期の炊爨文化からみた地域相」—出雲西部地域と石見東部地域を事例として—『国家形成期の首長権と地域社会構造』島根県古代文化センター研究論集 第22集
- 岩本真実 2019「石見地域における須恵器の編年と地域性—「石見型須恵器費」再考—」『国家形成期の首長権と地域社会構造』島根県古代文化センター研究論集 第22集
- 内田律雄 1994「鳥取県・島根県」『日本土器製塙研究』青木書店
- 内田律雄 2016「九州型石錘についての覚書一下條分類A I型=涙滴形石錘の成立と展開—」『海と山と里の考古学』—山崎純男博士古希記念論集— 山崎純男博士古希記念論集編集委員会
- 川原和人 2010「出雲地方における律令時代の須恵器の特色とその背景」『出雲国の形成と国府成立の研究』—古代山陰地域の土器様相と領域性—島根県古代文化センター
- 江津市教育委員会1973『波来浜遺跡発掘調査報告書』
- 坂本豊治 2014「島根県上長浜貝塚の逆T字状溝をもつ石錘」『出雲古代史研究』(第24号)
- 島根県教育委員会 2006『浜寄・地方遺跡』一般国道9号(益田道路)建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書2
- 島根県教育委員会2007『浜寄・地方遺跡』一般国道9号(益田道路)建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書4
- 島根県教育委員会2019『平ノ前遺跡』一般国道9号(大田静岡道路)改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書2
- 島根県教育委員会2022『森原下ノ原遺跡1~3区1. 古代~近世編』一級河川江の川直轄河川改修事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書4
- 島根県古代文化センター 2015『益田市内における古墳の調査』金山古墳・鶴ノ鼻古墳群・北長迫横穴墓群 島根県古代文化センター調査研究報告書49
- 飛田恵美子 2012「山陰地方における製塙土器について」『出雲古代史研究』第12号 出雲古代史研究会
- 奈良国立文化財研究所1991『平城京土器の大別』『平城宮発掘調査報告 X III』
- 益田市教育委員会2005『酒屋原遺跡』益美地区中山間地域総合整備事業に伴う発掘調査報告書

第4表 SB01計測表

		梁行	桁行	梁行	桁行
		1間	2間 (2.56 m)	1間	2間 (2.35 m)
主軸		N4° - E			
柱 六	番号	P4	P30	P28	P31
	上面径 (m)	0.23 × 0.25	0.27 × 0.34	0.29 × 0.31	0.36 × 0.3
	深さ (m)	0.21	0.12	0.34	0.16
柱脚距離 (m)		P4 → P30	P30 → P28	P31 → P29	P29 → P36
		1.37	1.08	1.22	1.14
溝 (m)		梁行方向 延長	桁行方向 延長	梁行 最大0.47	桁行 最大0.75
		4.8			

第5表 SB02計測表

規格		梁行			桁行	
		1間			3間 (6.28 m)	
主軸		N-14°-E				
柱穴	番号	P34	P7	P8	P26	
	上面径 (m)	0.2 × 0.23	0.51 × 0.5	0.54 × 0.46	0.51 × 0.43	
	深さ (m)	0.05	0.12	0.11	0.14	
柱間距離 (m)		P34→P7	P7→P8	P8→P26		
		2.15	2.15	2.0		
溝 (m)		梁行方向		桁行方向		
		延長	幅	延長	幅	
				4.0	最大0.55	

第6表 SB05計測表

規格		梁行			桁行	
		1間			2間 (4.31 m)	
主軸		N-6°-E				
柱穴	番号	P11	P14	P15		
	上面径 (m)	0.41 × 0.5	0.46 × 0.48	0.52 × 0.42		
	深さ (m)	0.07	0.26	0.08		
柱間距離 (m)		P11→P14	P14→P15			
		2.15	2.18			
溝 (m)		梁行方向		桁行方向		
		なし		なし		

第7表 SB03計測表

規格		梁行	桁行
		1間	1間
主軸		N-6°-E	
溝 (m)	梁行方向	延長1.03	幅最大0.42
	桁行方向	延長3.34	幅最大0.47

第8表 SB04計測表

規格		梁行	桁行
		1間	1間 (2.73 m)
主軸		N-39°-E	
柱穴	番号	P43	P44
	上面径 (m)	0.26 × 0.27	0.24 × 0.21
	深さ (m)	0.25	0.11
柱間距離 (m)		P43→P44 2.73	
溝 (m)		梁行方向 延長1.32	
		幅最大0.37	幅最大0.68
溝 (m)		桁行方向 延長4.69	

第9表 下和田遺跡遺構一覧表

排列番号	遺構名	グリッド	種類	軸	規模 (m)				切合	出土遺物	備考
					柱行×梁間		柱間距離	大きさ			
11,14,15,17	土器窓	E3	土器窓	南北	2 × 1		P4→P30 P30→P28	1.37 1.08	0.55	須恵器	
11,20	SB01	D2	掘立柱建物	南北	2 × 1		P31→P29 P29→P36	1.22 1.14	4.8 × 1.4	S802	
11,21	SB02	C2,D2	掘立柱建物	南北	3 × 1		P34→P7 P7→P8 P8→P26	2.15 2.15 2.00	6.63 × 1.3	S801 S805	土師器須恵器と もにP8から出土
11,23	SB03	C3	掘立柱建物	南北	1 × 1				3.34 × 1.03	S802 S803	
11,24	SB04	C3	掘立柱建物	北東	1 × 1		P43→P44	2.73	4.69 × 1.32	S803	
11,22	SB05	C2,B2	掘立柱建物	南北	2 × 1		P11→P14 P14→P15	2.15 2.18	4.94 × 0.52	S802	土師器
11,25	加工段	B3,C3	段状遺構	南北					12 × 2	24.99	
11,28	集石土机	B3	土坑(墓)	南北			通常視認 0.74 × 0.66		0.49		ほぼ均等な拳丈 の墓12個
11,29	焼土窓	D4	焼土窓	北西～南東			4 × 2 × 0.10m	8.07		土師器	第3層上面横出
11,26	S801	C3	窓	南北			1.78 × 0.46	0.82		P37	
11,25	S802	C3	窓	北西～南東			1.12 × 0.53	0.59			掘立柱建物痕跡
11,25	S803	C3	窓	東西			1.09 × 0.27	0.29		S803	
11	焼土面1	E2	焼土面	東西					1 × 0.6	0.448	
11	焼土面2	E2	焼土面	東西					0.8 × 0.6	0.307	

第10表 下和田遺跡ピット等遺構一覧表

辨認番号	遺構名	グリッド	規模			切合	出土遺物	辨認番号	遺構名	グリッド	規模			切合	出土遺物	
			大きさ (m)	深さ (m)	面積 (m <sup>2</sup> )						大きさ (m)	深さ (m)	面積 (m <sup>2</sup> )			
11,30	P1	D2	0.28 × 0.23	0.2	0.064			11,30	P24	E4	0.25 × 0.22	0.28	0.055			
11,30	P2	D2	0.19 × 0.21	0.15	0.044			11,30	P25	E4	0.27 × 0.23	0.14	0.062			
11,30	P3	D2	0.31 × 0.26	0.15	0.081			11,30	P27	C2	0.4 × 0.3		0.12	S805	土師器	
11,30	P5	C2	0.19 × 0.23	0.06	0.044			11,21,30	P32	D2	0.34 × 0.25		0.085			
11,21,30	P6	D2	0.23 × 0.16	0.1	0.037			11,21	P35	D2	0.16 × 0.17		0.027	P34		
11,21,30	P9	C2	0.3 × 0.23	0.12	0.069			11,25	P37	C3	0.3 × 0.3		0.09	SD01		
11,22	P10	C2	0.29 × 0.35	0.08	0.102			11,25,30	P38	B3	0.3 × 0.3		0.09			
11,22,30	P12	C2	0.14 × 0.23	0.14	0.032			11,23,	P39	C3	0.23 × 0.23		0.053			
11,22,30	P13	C2	0.23 × 0.24	0.09	0.055			25,30								
11,22	P16	C2	0.3 × 0.3		0.09			11,23,25	P40	C3	0.17 × 0.16		0.027			
11	P17	D3	0.29 × 0.25		0.073			11,23,	P41	C3	0.26 × 0.24		0.062			
11	P18	D2	0.3 × 0.3		0.09			25,30	P42	C3	0.32 × 0.34		0.109			
11	P19	D3	0.3 × 0.3		0.09			11,24	P45	C3	0.17 × 0.19		0.032			
11	P21	E3	0.2 × 0.19		0.038			11,24	P46	C3	0.43 × 0.33		0.142			
11	P22	E4	0.24 × 0.19		0.046			11,24	P47	C3	0.23 × 0.18		0.041			
11	P23	E3	0.38 × 0.43		0.163			土師器	11	P48	C3	0.3 × 0.2		0.06		
								11	P49	C3	0.2 × 0.2		0.04			
								11	P50	C3	0.3 × 0.2		0.06			

第11表 ヘラ記号・線刻・刻書等土器一覧表

辨認番号	遺物番号	遺構	グリッド	層位	種別	器種	時期	施位置 施部位	内容・意匠・備考			
16	9	土器罐	D3 E3 E4 E5	3 4 5	須恵器	縁付直口壺	石見4期	丸底底部附近外側	不定方向の交差する11本の沈線			
16	10	土器罐	D3 E3	3 4	須恵器	要	石見4期	外腹側部最大径位置や下	ヘラ記号二重「×」			
19	28		D3 E3	3 4	須恵器	器台	石見4期	円筒状脚部下方	乱雑な縦、横、斜めの沈線が多数描かれている、絵画的な意匠あるか?			
39	153		D2 D3	3	須恵器	壺蓋	石見8期	天井外側	鉢書「久」			
34	86		D3	4	須恵器	坪II	石見8期	高台内	ヘラ記号、2本の平行沈線と1本沈線の交差			
36	117		C3 D3 D4 D5	2 3 4 5	須恵器	要	石見9A期	外腹側部最大径位置や下	蓮の花と茎を題材にした絵画			
39	157		D2 D3	3 4	須恵器	壺蓋	石見8期	天井外側	ヘラ記号「×」			
39	159		D3	4	須恵器	坪II	石見8期	高台内	ヘラ記号「×」			
39	161		D2	3	須恵器	坪II	石見8期	高台内	ヘラ記号「×」			
39	162		D3	4	須恵器	坪II	石見8期	高台内	ヘラ記号「×」			
39	163		D2	3	須恵器	坪II	石見8期	高台内	ヘラ記号「×」			
39	158		D3	3 4	須恵器	坪I	石見9A期	底部外側	ヘラ記号「×」			
16	7	土器罐	E3	4	須恵器	高坪	石見4期	脚内側	3本線、制作時の工具痕跡			
31	33		D3	4	須恵器	高坪	石見4期	底部外側	2本の平行線、制作時の工具痕跡			
39	160		E3	3	須恵器	坪II	石見8期	高台内	1本線、制作時の工具痕跡			
39	164		D3	4	須恵器	坪II	石見8期	高台内	1本線、制作時の工具痕跡			
39	154		C3 D3 D4 D5	3 4 5	須恵器	横碗	石見8期	底部に近い外腹高台外	折れ線、制作時の工具痕跡			
39	155		D3	5	須恵器	坪I	石見10期	底部外側から立ち上がりにかけて	屈曲線、制作時の工具痕跡			
39	156		C3	2	須恵器	坪I	石見10期	底部外側	曲線、制作時の工具痕跡			
42	206		D3	3	土器罐	(坪I)	(石見10期)	底部外側	1本線、制作時の工具痕跡			
42	202		C4	5	土器罐	要		くびれ部内面	「×」成形時の砂粒、石英粒の移動痕跡			

第12表 下和田遺跡遺物観察表

土器・陶器・土製品

出土地番号	遺物名	文書記述	グリッド・通過	層位	種類	器種	寸法(φ×H)・内側充填	残存率	出土	色調	焼成	文様・調整・その他の特徴	備考
8 1 20	試掘TR3	4	須恵器	底	(16.6)			5%	2m以下の中空柱 多く含む	外：青灰 SB5/1 内：田舎ナデ	良好	内：田舎ナデ 内：田舎ナデ	
8 2 20	試掘TR3	4	土師器	坪	(12.0)			3%	1m以下の砂粒を含む 縫合付	外：浅黄褐 10YR8/3 内：浅黄褐 10YR8/3	良好	内：ナチュラル 内：ナデ	
8 3 20	試掘TR3	4	土師器	底	(22.6)			5%	1m以下の砂粒を含む 縫合付	外：浅黄褐 7.5YR8/6 内：浅黄褐 7.5YR8/6	良好	内：ナチュラル 内：ナチュラル・ヘラケズリ	
8 4 20	試掘TR3	4	土師器	底	(26.0)			8%	1m以下の砂粒を含む 縫合付	外：白 N7 内：白 N7	良好	内：ナチュラル 内：ナチュラル・ヘラケズリ	
16 5 17	E3 土器皿	4	須恵器	高輪無縫 底付	10.9	10.6	10.0	70%	0.5m以下の中空柱 多く含む	外：暗灰 N3 内：暗灰 N3	良好	内：田舎ナデ 内：田舎ナデ	
16 6 17	E3 土器皿	4	須恵器	高輪無縫 底付	11.0	11.0	10.8	80%	0.5m以下の中空柱 少	外：灰 NA/ 内：灰 NA/	良好	内：田舎ナデ 内：田舎ナデ	
16 7 17	E3 土器皿	4	須恵器	高輪無縫 底付	13.4	10.5 ~	11.9	10.8	90% 0.5m以下の中空柱 少	外：灰 NA/ 内：灰 NA/	良好	内：田舎ナデ 内：田舎ナデ 内：ナチュラル 内：ナチュラル・ヘラケズリ	内面に3本筋、制作時の工具痕跡
16 8 17	E3 土器皿	4	土師器	高輪無縫 底付			14.9	40%	0.5m以下の中空柱を少 量含む	外：浅黄褐 10YR8/3 内：浅黄褐 7.5YR8/4	良好	内：ナチュラル 内：ナデ	
16 9 17	E3 土器皿	3 24 E4	須恵器	柳叶口直	(10.0)			70%	1m以下の砂粒を少 量含む	外：白 25Y8/1 内：灰 23Y8/1	良好	内：ナチュラル 内：ナデ	
16 10 17	D3 E3 土器皿	3 4	須恵器	底	13.8	19.6		70%	1m以下の砂粒を含 む	外：灰 NB/ 内：灰 NB/	良好	内：田舎ナデ 内：田舎ナデ 内：田舎ナデ 内：田舎ナデ 内：田舎ナデ 内：田舎ナデ	外表面距離大往復位置や下に 「X」が記されているよ り見えます。
16 11 17	D3 E3 土器皿	3 4 5	須恵器	底	27.6	56.5		90%	2m以下の中空柱を少 量含む	外：灰 NB/ 内：灰 NB/	良好	内：ナチュラル 内：ナチュラル 内：ナチュラル 内：ナチュラル 内：ナチュラル 内：ナチュラル	外表面距離大往復位置や下に 「X」が記されています。 「X」が記された通 じて6個並んでいます。
18 12 17	D3+E3	4	須恵器	高輪無縫 底付	15.6	10.0	10.6	70%	0.5m以下の中空柱 少	外：灰 25Y8/3 内：赤褐 10YR8/3	不詳	内：ナチュラル・ヘラケズリ 内：ナチュラル	
18 13 17	E3	4	須恵器	高輪無縫 底付	13.4	10.2	8.8	80%	1m以下の砂粒を含 む	外：黑 N2/ 内：黑 N2/	良好	内：田舎ナデ 内：田舎ナデ 内：田舎ナデ 内：田舎ナデ 内：田舎ナデ 内：田舎ナデ	
18 14 17	D3 E3	3 4	須恵器	高輪無縫 底付	14.0	10.8	9.4	80%	0.5m以下の中空柱 多く含む	外：暗灰 N3/ 内：灰 NA/	良好	内：田舎ナデ 内：田舎ナデ 内：田舎ナデ 内：田舎ナデ 内：田舎ナデ 内：田舎ナデ	
18 15 17	D3	4	須恵器	蓋舟身	(8.6)			30%	1m以下の砂粒 少	外：灰白 9Y7/1 内：黄灰 23Y5/1	良好	内：田舎ナデ 内：田舎ナデ 内：田舎ナデ	
18 16 17	D3 D4 E3	3 4 5	須恵器	底	18.6			70%	1m以下の砂粒を含 む	外：灰 NA/ 内：灰 NA/	良好	内：ナチュラル 内：ナチュラル 内：ナチュラル 内：ナチュラル 内：ナチュラル 内：ナチュラル	標印サブトレ
18 17 18	D3 E3	3 4	須恵器	底	19.8	31.1		90%	1m以下の砂粒を含 む	外：灰 NB/ 内：灰 NB/	良好	内：ナチュラル 内：ナチュラル 内：ナチュラル 内：ナチュラル 内：ナチュラル 内：ナチュラル	内：ナチュラル・波状文 内：波状文・ナチュラル 内：ナチュラル 内：ナチュラル 内：ナチュラル 内：ナチュラル
18 18 17	C3-D3-E3-D4	3 4	須恵器	底	(47.0)			5%	2m以下の中空柱 少	外：白 Y3/5 内：灰 NB/	良好	内：波状文・波状文・ナチュラル 内：ナチュラル 内：ナチュラル 内：ナチュラル 内：ナチュラル 内：ナチュラル	標印サブトレ 標印サブトレ
18 19 18	D3-D4-E3	3 4 5	須恵器	底	20.1	34.5		90%	1m以下の砂粒を含 む	外：深灰 NS/ 内：灰 NA/	良好	内：ナチュラル・タキシ・カキ目 内：ナチュラル 内：ナチュラル 内：ナチュラル 内：ナチュラル 内：ナチュラル	
18 20 18	D3 E3	3 4	須恵器	底	16.4	26.8	7.8	80%	2m以下の砂粒を含 む	外：白 NB/ 内：白 NB/	良好	内：ナチュラル 内：ナチュラル 内：ナチュラル 内：ナチュラル 内：ナチュラル 内：ナチュラル	
18 21 18	E3	3	製陶土器	燒成窓		(5.3)			2.5m以下の中空柱 多く含む	外：深 7.5YR8/8 内：浅黄褐 10YR8/6	良好	内：ナチュラル 内：田舎ナデ	柱柱部のみ残る
18 22 18	D3	4	製陶土器	燒成窓		(4.6)			2m以下の中空柱を少 量含む	外：深 7.5YR8/6 内：深 7.5YR8/6	良好	内：ナチュラル 内：ナチュラル	柱柱部のみ残る
18 23 18	E3	3	製陶土器	燒成窓		(4.4)			1m以下の砂粒を少 量含む	外：灰黄褐 10YR8/1 内：浅黄褐 10YR8/1	良好	内：ナチュラル 内：ナチュラル 内：ナチュラル 内：ナチュラル 内：ナチュラル 内：ナチュラル	柱柱部のみ残る
18 24 18	E3	4	製陶土器	燒成窓		3.7			1m以下の砂粒を多 く含む	外：灰黄褐 10YR8/1 内：灰黄褐 10YR8/1	良好	内：ナチュラル 内：ナチュラル 内：ナチュラル 内：ナチュラル 内：ナチュラル 内：ナチュラル	柱柱部のみ残る
18 25 18	E3	4	製陶土器	燒成窓				5%	1m以下の砂粒を多 く含む	外：深 7.5YR8/1 内：灰黄褐 10YR8/1	良好	内：ナチュラル 内：ナチュラル 内：ナチュラル 内：ナチュラル 内：ナチュラル 内：ナチュラル	柱柱部のみ残る
18 26 18	E3	3	製陶土器	燒成窓				70%	1m以下の砂粒を多 く含む	外：深 7.5YR8/6 内：灰黄褐 10YR8/6	良好	内：ナチュラル 内：ナチュラル 内：ナチュラル 内：ナチュラル 内：ナチュラル 内：ナチュラル	柱柱部のみ残る
18 27 18	E3	4	製陶土器	燒成窓				70%	1m以下の砂粒を多 く含む	外：深 7.5YR8/1 内：オリーブ墨 SYR8/1 内：深 7.5YR8/1	良好	内：ナチュラル 内：ナチュラル 内：ナチュラル 内：ナチュラル 内：ナチュラル 内：ナチュラル	柱柱部のみ残る
19 28 19	D3 E3	3 4	須恵器	器台	(32.6)			70%	1m以下の砂粒を少 量含む	外：灰白 NB/ 内：灰白 NB/	良好	内：ナチュラル 内：ナチュラル 内：ナチュラル 内：ナチュラル 内：ナチュラル 内：ナチュラル	
19 29 19	D3 D4 E3	3 4 5	須恵器	底	(42.0)	82.1		95%	1m以下の砂粒を少 量含む	外：青灰 SPBS/1 内：青灰 SPBS/1	良好	内：ナチュラル・タキシ・カキ目 内：ナチュラル 内：ナチュラル 内：ナチュラル 内：ナチュラル 内：ナチュラル	
21 30 18	PtB	須恵器	坪	(14.4)				5%	1m以下の砂粒 少	外：灰白 NB/ 内：灰白 NB/	良好	内：田舎ナデ 内：田舎ナデ	
27 31 18	C3	2	土師器	坪	7.8	1.9	4.2	80%	1m以下の砂粒を少 量含む	外：深 7.5YR8/6 内：明赤 7.5YR8/6	良好	内：田舎ナデ 内：田舎ナデ	
27 32 18	C3	2	土師器	坪	(7.8)	2.0	(3.8)	70%	2m以下の中空柱 少	外：深 7.5YR8/6 内：明赤 7.5YR8/6	良好	内：田舎ナデ 内：田舎ナデ	
31 33 18	D3	4	須恵器	高輪無縫 底付	(15.4)			30%	1m以下の砂粒を少 量含む	外：灰白 NB/ 内：灰白 NB/	良好	内：田舎ナデ 内：田舎ナデ	内面に2本の平行線、制作時の工具痕跡
31 34 18	D3	3	須恵器	高輪無縫 底付	(15.4)	(10.3)	11.4	40%	0.5m以下の砂粒を少 量含む	外：灰 N5/、灰 NA/ 内：灰 SYR7/1	不詳	内：田舎ナデ 内：田舎ナデ	
31 35 19	C4+D3-D3-E3	3 4	須恵器	底	(14.3)	4.7		50%	1m以下の砂粒を少 量含む	外：灰 N6/ 内：灰 N6/	良好	内：ナチュラル 内：ナチュラル 内：ナチュラル 内：ナチュラル 内：ナチュラル 内：ナチュラル	
31 36 19	D2 D3	3 4	須恵器	底	(15.4)	(4.5)		45%	1m以下の砂粒を少 量含む	外：灰 SYR7/1/ 内：浅黄褐 10YR8/4	良好	内：ナチュラル 内：ナチュラル 内：ナチュラル 内：ナチュラル 内：ナチュラル 内：ナチュラル	構造的ナカ

井戸番号	地物番号	写真番号	グリッド・通過	層位	種類	空気 (m) × 内液面 (m)	測定率	地質	色調	地塊	文様・調整・その他	備考		
31	37	19	D3	4	須恵器	蓋	(12.5) 4.2	40%	1m以下の中粒を少 量含む	外：灰白/NF/ 内：灰白/N?	良好	外：田舎ナ・ヘラモヘ カズリ等の板張		
31	38	19	D2 E3	2	須恵器	蓋		60%	1mm以下の砂粒を少 量含む	外：灰白/NF/ 内：明褐色(3.7.5YR0/1)	良好	外：田舎ナ・ヘラモヘ カズリ等の板張		
31	39	19	D2	2	須恵器	蓋		40%	1mm以下の砂粒を少 量含む	外：灰白/NF/ 内：灰白(3.5YR0/1)	良好	外：田舎ナ・ヘラモヘ カズリ等の板張		
31	40	19	C3	5	須恵器	蓋	(14.3) (3.7) (8.1)	20%	1mm以下の砂粒 を少量含む	外：灰白(2.5YR0/1) 内：灰白(2.5YR0/1)	不良	外：田舎ナ・ヘラモヘ カズリ等の板張		
31	41	18	D2	3	須恵器	环身	(11.2)	10%	1mm以下の砂粒 を少量含む	外：灰/NF/ 内：灰/N?	良好	外：田舎ナ・ 内：田舎ナ・ヘラモヘ カズリ等の板張		
31	42	18	E3	2	須恵器	环身		20%	1mm以下の砂粒 を少量含む	外：灰/NF/ 内：灰/N?	良好	外：田舎ナ・ 内：田舎ナ・ヘラモヘ カズリ等の板張		
31	43	19	D2	2	須恵器	粗面無蓋 蓋	(14.9)	5%	0.5mmの粒状物 を少量含む	外：灰(3.5YR0/1) 内：灰白(2.5YR0/1)	良好	外：田舎ナ・ 内：田舎ナ		
32	44	19	D2	3	須恵器	蓋	14.9 2.7 ワキガ付 3.0	45%	1mm以下の砂粒 を含む	外：灰/NF/ 内：灰/N?	良好	外：田舎ナ・ 内：田舎ナ・ナダ		
32	45	19	D2	2	須恵器	环身	(12.7) 4.1 (8.3)	20%	1mm以下の砂粒 を多く含む	外：暗灰/NM/ 内：灰/NM?	良好	外：田舎ナ・ 内：田舎ナ・ナダ		
32	46	19	E2	2	須恵器	环身	12.2 4.3 7.5	80%	3mm以下の砂粒 を含む	外：灰/NF/ 内：オーリーブ灰 5GY6/1	やや良 外：田舎ナ・ 内：田舎ナ			
32	47	19	D3	2	須恵器	环身	(11.6)	25%	1mm以下の砂粒 を含む	外：灰白(2.5YR0/1) 内：灰白(2.5YR0/1)	やや良 外：田舎ナ・ 内：田舎ナ			
33	48	20	C3	3	須恵器	蓋	(15.8)	2.4 ワキガ付 3.3	25%	1mm以下の砂粒 を含む	外：灰白/NF/ 内：灰白/N?	良好	外：田舎ナ・ 内：田舎ナ・ナダ	
33	49	20	D2	3	須恵器	蓋	15.8 2.4 ワキガ付	25%	1mm以下の砂粒 を含む	外：灰(3.5YR0/1) 内：灰白(10W0/1)	良好	外：田舎ナ・ 内：田舎ナ・ナダ		
33	50	20	C3	3	須恵器	蓋	16.7 2.9 ワキガ付 3.2	75%	2mm以下の砂粒 を多く含む	外：灰/NF/ 内：灰/N?	良好	外：田舎ナ・ 内：田舎ナ・ナダ		
33	51	20	D3	3	須恵器	蓋	13.6 2.6 ワキガ付 2.6	30%	0.5mm以下の微細物 を少量含む	外：灰白/NF/ 内：灰白/N?	やや良 外：田舎ナ・ 内：田舎ナ・ 不規則			
33	52	20	D2	3	須恵器	蓋	(16.3)	26	ワキガ付 6.0	60%	1mm以下の砂粒 を含む	外：灰/NF/ 内：オーリーブ灰 2.5GY6/1	良好	外：田舎ナ・ 内：田舎ナ・ナダ
33	53	20	D2	3	須恵器	蓋	(13.4) 2.4 4.8	50%	2mm以下の砂粒 を多くに含む	外：灰白(2.5YR0/1) 内：灰白(2.5YR0/1)	良好	外：田舎ナ・ 内：田舎ナ		
33	54	20	D3	3	須恵器	蓋	13.6 2.8 ワキガ付 5.0	30%	1mm以下の砂粒を多 く含む	外：灰/NF/ 内：灰/N?	良好	外：田舎ナ・ 内：田舎ナ・ナダ 不明方ナナ		
33	55	20	D3	3	須恵器	蓋	13.0 2.7 ワキガ付 4.8	90%	1mm以下の白色砂粒 を多く含む	外：灰/NF/ 内：灰/N?	良好	外：田舎ナ・ 内：田舎ナ		
33	56	20	D3	3	須恵器	蓋	13.0 2.7 ワキガ付 3.6	100%	1mm以下の砂粒を含 む	外：灰/NF/ 内：灰/N?	良好	外：田舎ナ・ 内：田舎ナ		
33	57	20	D3	3	須恵器	蓋	(14.6) 2.5 ワキガ付 3.6	40%	1mm以下の砂粒 を含む	外：灰白/NF/ 内：灰白/N?	良好	外：田舎ナ・ 内：田舎ナ・ナダ ヘラモヘ		
33	58	20	D3	3	須恵器	蓋	15.0 2.9 ワキガ付 3.3	80%	1mm以下の砂粒を多 く含む	外：灰/NF/ 内：灰/N?	良好	外：田舎ナ・ 内：田舎ナ		
33	59	20	D3	3	須恵器	蓋	14.0 2.6 ワキガ付 4.0	95%	0.5mm以下の微細物 を含む	外：灰/NF/ 内：灰/N?	良好	外：田舎ナ・ 内：田舎ナ・ナダ		
33	60	20	D3	4	須恵器	环身	(13.8) 6.8 (9.9)	10%	0.5mm以下の微細物 を含む	外：灰(2.5YR0/1) 内：灰白(2.5YR0/1)	不良	外：田舎ナ・ 内：田舎ナ		
33	61	20	D2	3	須恵器	环身	13.6 4.4 (8.7)	80%	3mm以下の砂粒 を含む	外：オーリーブ灰 2.5GY6/1 内：オーリーブ灰 2.5GY6/1	良好	外：田舎ナ・ 内：田舎ナ		
33	62	20	D2	3	須恵器	环身	(14.4) 4.4~ 4.7	45%	1mm以下の砂粒 を少量含む	外：灰(2.5YR0/1) 内：灰白(2.5YR0/1)	良好	外：田舎ナ・ 内：田舎ナ・ナダ ヘラモヘ		
33	63	20	D3	3	須恵器	环身	(15.4)	3.9 (9.2)	20%	0.5mm以下の砂粒 を含む	外：灰/NF/ 内：灰/N?	良好	外：田舎ナ・ 内：田舎ナ・ナダ 見込みナナ	
33	64	20	C3	3	須恵器	环身	(14.4) 3.9 (11.0)	10%	2mm以下の砂粒 を含む	外：灰(2.5YR0/1) 内：灰(2.5YR0/1)	良好	外：田舎ナ・ 内：田舎ナ・ナダ ヘラモヘ		
33	65	20	D2	2	須恵器	环身	(17.2) 6.0 (10.8)	40%	3mm以下の砂粒 を含む	外：灰/NF/ 内：灰白/N?	良好	外：田舎ナ・ 内：田舎ナ・ナダ ヘラモヘ		
33	66	20	D3	3	須恵器	环身	(9.8) 3.9 (7.2)	45%	0.5mm以下の微細物 を多く含む	外：灰/NF/ 内：灰/N?	良好	外：田舎ナ・ 内：田舎ナ		
33	67	20	D3	3	須恵器	环身	(12.5) 4.4 (7.2)	40%	0.5mm以下の砂粒 を含む	外：灰/NF/ 内：灰白/N?	良好	外：田舎ナ・ 内：田舎ナ		
33	68	20	D3	3	須恵器	环身	(13.3) 3.8 (8.4)	70%	4mm以下の砂粒 を含む	外：灰/NF/ 内：灰/N?	良好	外：田舎ナ・ 内：田舎ナ		
33	69	20	D3	3	須恵器	环身	11.9 4.2 (8.2)	60%	0.5mm以下の微細物 を含む	外：灰/NF/ 内：灰/N?	良好	外：田舎ナ・ 内：田舎ナ		
33	70	20	C3	3	須恵器	环身	(13.2) 5.2 (9.9)	40%	0.5mm以下の砂粒 を含む	外：灰(3.5YR0/1) 内：灰(3.5YR0/1)	良好	外：田舎ナ・ 内：田舎ナ		
33	71	20	D2	3	須恵器	环身	(13.8) 4.1 (8.6)	50%	3mm以下の砂粒 を含む	外：暗灰(2.5YR4/1) 内：暗灰(2.5YR4/1)	良好	外：田舎ナ・ 内：田舎ナ		
33	72	20	D2	4	須恵器	环身	(18.0) 8.8 (8.4)	15%	0.5mm以下の砂粒 を含む	外：灰/NM/ 内：灰/N?	良好	外：田舎ナ・ 内：田舎ナ		

図版 遺跡番号	写真 番号	グリッド 座標	層位	種別	標高	寸法(単・J)・内地元標 口幅 高さ 厚さ	堆積物	出土	色調	測定	文様・調整・その他	備考
33	73	20 C3	3	遺壙層	坪 I	(11.8) 4.3 (8.9)	40%	1m以下の中砂を少 量含む	外：灰白 NB/ 内：灰白 NB/	やや 内：田舎ナダ・田舎系切り 不均一	田舎ナダ・ナダ	
33	74	20 D3	3	遺壙層	坪 II		(9.0)	20%	1m以下の中砂を少 量含む	外：灰白 ND/ 内：灰白 ND/	内：田舎ナダ・ 田舎系切り	
33	75	20 D3	3	遺壙層	坪 II		(9.2)	20%	1m以下の中砂を少 量含む	外：灰白 NB/ 内：灰白 NB/	内：田舎ナダ・ 田舎系切り	
33	76	20 D3	3	遺壙層	坪 II		(6.6)	20%	1m以下の中砂を少 量含む	外：灰白 NB/ 内：灰白 NB/	内：田舎ナダ・ 田舎系切り	
33	77	20 D3	3	遺壙層	Ⅲ	(13.5) 2.3 (9.8)	60%	3m以下の中砂を多 く含む	外：灰白 NB/ 内：灰白 NB/	内：田舎ナダ・ ヘラ切削ナ ダーリングツ	不均一	
34	78	21 C3	4	遺壙層	Ⅲ	14.0 1.8 2.5	90%	0.5m以下の砂を少 量含む	外：暗青灰 SP84/1 内：暗青灰 SP84/1	内：田舎ナダ・ 田舎系切り	良好	
34	79	21 D3	4	遺壙層	Ⅲ	16.6 2.9 2.8	80%	0.5m以下の砂を少 量含む	外：灰白 NS/ 内：灰白 NS/	内：田舎ナダ・ 田舎系切り	良好	
34	80	21 D3	4	遺壙層	Ⅲ	16.5 3.7 3.0	40%	0.5m以下の砂を少 量含む	外：オリーブグリーン 内：暗青灰 SP84/1	内：田舎ナダ・ 田舎系切り	良好	
34	81	21 D3	4	遺壙層	Ⅲ	15.8 2.4 4.0	90%	0.5m以下の砂を少 量含む	外：暗青灰 SP84/1 内：暗青灰 SP84/1	内：田舎ナダ・ 田舎系切り	良好	
34	82	21 D3	4	遺壙層	Ⅲ	(15.0)	40%	1m以下の中砂を少 量含む	外：灰白 239W/1 内：灰白 239W/1	内：田舎ナダ・ 田舎系切り	良好	
34	83	21 D3	4	遺壙層	Ⅲ	13.4		0.5m以下の砂を少 量含む	外：灰白 NB/ 内：灰白 NB/	内：田舎ナダ・ 田舎系切り	良好	
34	84	21 C3 D3	3 4	遺壙層	Ⅲ	(14.0) 2.3 3.4	40%	2m以下の砂を多 く含む	外：灰白 NS/ 内：灰白 NS/	内：田舎ナダ・ 田舎系切り	良好	
34	85	21 D3	4	遺壙層	Ⅲ	(14.8)		3m以下の砂を多 く含む	外：灰白 NB/ 内：灰白 NB/	内：田舎ナダ・ 田舎系切り	良好	
34	86	21 D3 24	4	遺壙層	坪 II	(13.6) 4.3 9.0	70%	1m以下の砂を少 量含む	外：灰白 237W/1 内：灰白 237W/1	内：田舎ナダ・ 田舎系切り	良好	
34	87	21 D3	4	遺壙層	坪 II	(12.5) 4.3 (8.2)	40%	1m以下の中砂を多 く含む	外：灰 10YR6/1 内：灰 10YR6/1	内：田舎ナダ・ 田舎系切り	良好	
34	88	21 D3	4	遺壙層	坪 II	(15.6) 4.1 9.6	50%	1m以下の中砂を少 量含む	外：暗青灰 SP84/1 内：暗青灰 SP84/1	内：田舎ナダ・ 田舎系切り	良好	
34	89	21 D3	4	遺壙層	坪 II	15.8 4.6 9.6	60%	1m以下の中砂を少 量含む	外：暗青灰 SP84/1 内：暗青灰 SP84/1	内：田舎ナダ・ 田舎系切り	良好	
34	90	21 D3	4	遺壙層	坪 II	(15.2) 4.3 (10.3)	40%	1m以下の砂を少 量含む	外：灰 NB/ 内：灰 NB/	内：田舎ナダ・ ヘラ切削ナ ダ	良好	
34	91	21 D3 E3	3 4	遺壙層	坪 II	11.7 4.5 8.4	70%	1m以下の砂を少 量含む	外：灰 NB/ 内：灰 NB/	内：田舎ナダ・ 田舎系切り	良好	
34	92	21 D3	4	遺壙層	坪 II	(12.5) 5.1 (8.2)	25%	1m以下の砂を多 く含む	外：暗青灰 SP84/1 内：暗青灰 SP84/1	内：田舎ナダ・ 田舎系切り	良好	
34	93	21 D3	4	遺壙層	坪 II	12.6 4.4 8.6	80%	1m以下の中砂を少 量含む	外：灰 75Y4/1 内：灰 NS/	内：田舎ナダ・ 田舎系切り	良好	
34	94	21 D3	4	遺壙層	坪 II	13.1 3.9 9.8	70%	1m以下の砂を少 量含む	外：灰 NB/ 内：灰 NS/	内：田舎ナダ・ ヘラ切削ナ ダ	良好	
34	95	21 D3	4	遺壙層	坪 II	(16.7) 5.8 (10.4)	50%	やや多く含む 砂を多く含む	外：灰 NB/ 内：灰 NS/	内：田舎ナダ・ 田舎系切り	良好	
34	96	21 D3	4	遺壙層	坪 II	17.4 5.9 13.0	90%	0.5m以下の砂を少 量含む	外：灰 NB/ 内：灰 NB/	内：田舎ナダ・ 田舎系切り	良好	
34	97	21 D3	3	遺壙層	坪 II	18.0 7.0 12.0	50%	0.5m以下の砂を多 く含む	外：灰 NS/ 内：灰 NS/	内：田舎ナダ・ 田舎系切り	良好	
34	98	21 D3	4	遺壙層	坪 II	(17.0) 6.45 (10.8)	20%	1m以下の砂を少 量含む	外：灰 NB/ 内：灰 NS/	内：田舎ナダ・ 田舎系切り	良好	
34	99	21 D3	3	遺壙層	坪 I	(10.2) 4.4 (5.8)	40%	1m以下の砂を多 く含む	外：暗青灰 SP84/1 内：青灰 SP85/1	内：田舎ナダ・ ヘラ切削ナ ダ	良好	
34	100	21 D3	4	遺壙層	坪 I	(10.7) 5.0 (7.2)	20%	1m以下の砂を少 量含む	外：灰 NS/ 内：灰 NS/	内：田舎ナダ・ ヘラ切削ナ ダ	良好	
34	101	21 D3	4	遺壙層	坪 I	(13.0) 4.5 (8.6)	20%	1m以下の砂を少 量含む	外：灰 NB/ 内：灰 NB/	内：田舎ナダ・ 田舎系切り	良好	
34	102	21 C3 C4	5 4	遺壙層	坪 I	(12.0) 4.2 (7.6)	40%	1m以下の砂を少 量含む	外：灰 NB/ 内：灰 NB/	内：田舎ナダ・ 田舎系切り	良好	
34	103	21 C3 D3	2 4	遺壙層	坪 II	(17.3) 8.1 9.3	60%	1m以下の砂を少 量含む	外：灰 NS/ 内：灰 NS/	内：田舎ナダ・ 田舎系切り	良好	
34	104	21 D3	4	遺壙層	坪 I		7.5	50%	1m以下の砂を少 量含む	外：灰 NB/ 内：灰 NB/	内：田舎ナダ・ 田舎系切り	良好
34	105	21 D3	4	遺壙層	標高	(16.2) (5.2) (8.8)	30%	1m以下の砂を少 量含む	外：灰 NB/ 内：灰 NB/	内：田舎ナダ・ ヘラ切削ナ ダ	良好	
34	106	21 D3	4	遺壙層	Ⅲ	(13.6) 2.2 (10.2)	30%	1m以下の砂を少 量含む	外：灰 NS/ 内：灰 NS/	内：田舎ナダ・ ヘラ切削ナ ダ	良好	
34	107	21 D3	4	遺壙層	Ⅲ	(14.8) 1.8 12.0	40%	0.5m以下の砂を少 量含む	外：灰 NB/ 内：灰 NB/	内：田舎ナダ・ 田舎系切り	良好	
35	108	20 D3	3 5	遺壙層	Ⅲ	(16.4)		25% 1m以下の砂を少 量含む	外：暗青灰 SP84/1 内：暗青灰 SP84/1	内：田舎ナダ・ 田舎系切り	良好	
35	109	20 C3	5	遺壙層	Ⅲ	(15.4)	2.55 3.5	70%	1m以下の砂を少 量含む	外：灰 NS/ 内：灰 NS/	内：田舎ナダ・ 田舎系切り	良好 外側に隙隙あり

種類 番号	植物 番号	英名 固有 名	グリッド・ 通過	層位	種類	寸法 100cm × 100cm	内側外側 口幅 高さ 底幅	比率	地土	色調	地塊	文様・調査・その他	備考		
35	110	20	C3 D3	4	須恵器	蓋	13.8 2.8	2.8 4.6	95%	2m以下の中粒を多 く含む	外：灰 NS/ 内：灰 NS/ 底：灰白 NS/	良好	外：田園ナデ・自然地 内：田舎ナデ・ナデ		
35	111	20	C3	5	須恵器	蓋	(15.6)	4.3	95%	2m以下の中粒を含 む	外：灰 NS/ 内：灰 NS/	良好	外：田園ナデ・ 内：田舎ナデ・自然地ナデ 内：田舎ナデ		
35	112	20	C3 D3	4	須恵器	蓋	(11.5)		20%	0.5m以下の細砂を 多く含む	外：灰 NS/ 内：灰 NS/	良好	外：田舎ヘタケズリ・ 田舎ナデ・多方向ナデ		
35	113	20	C3	4	須恵器	坪Ⅱ	(12.0)	4.7	83.0	40%	3m以下の砂粒 を多く含む	外：灰 NS/ 内：灰 NS/	良好	外：田舎ヘタケズリ・ 田舎ナデ・多方向ナデ 内：田舎ナデ	
35	114	20	C3 D3	4	須恵器	坪Ⅰ	(14.0)	6.5	10.0	30%	2m以下の中粒を少 く含む	外：灰 NS/ 内：灰 NS/ 底：灰ドリーブ 7.5YS/2	良好	外：田舎ナデ・ラバズリ・ 野原地帯・後ラケズリ 内：田舎ナデ	開品从脈、底部に 縫隙あり
35	115	20	C3	5	須恵器	坪Ⅱ		8.3	10%	1mmの砂粒を含む	外：灰 7.5YV/6	良好	外：田舎ナデ・田舎切り		
35	116	20	C3 D4	4	須恵器	縦網	(17.6)		30%	2m以下の中粒を多 く含む	外：オーリーパー 5Y3/1 内：灰褐色 5P8/4	良好	外：田舎ナデ・自然地 内：田舎ナデ		
36	117	21	C3 D4	2 3 4 5	須恵器	蓋	19.0	24.8	50%	2m以下の中粒を少 く含む	外：灰白 NS/ 内：灰白 NS/	良好	外：ナデ・タカキ・カキ目 内：ナデ・当て具麻	外山頂部に溝の付と茎を 斜面にした複合地盤	
36	118	22	D3	3	須恵器	蓋	(19.0)		20%	2m以下の中粒を少 く含む	外：灰 2.5YB/1 内：灰 2.5YB/1	不善	外：ナデ・タラキ・カキ目 内：ナデ・当て具麻		
36	119	22	D3 E3	3 4 5	須恵器	蓋	19.0		45%	2m以下の中粒を含 む	外：赤褐色 5YR6/8 内：明褐色 5YR6/8	良好	外：田舎ナデ・タラキ・カキ目 内：ナデ・当て具麻	標記サートレ 開削サートレ	
36	120	22	D3 E2	2 3 4 5	須恵器	蓋	(22.0)	28.5	30%	2m以下の中粒を少 く含む	外：灰白 NS/ 内：灰白 NS/	良好	外：ナデ・タラキ・カキ目 内：ナデ・当て具麻	手手形 標記サートレ	
36	121	22	D3	2 3 4	須恵器	蓋	(22.8)	29.3	20%	2m以下の中粒を少 く含む	外：灰白 NS/1 内：灰白 SYB/1	良好	外：タカキ・カキ目 内：ナデ・当て具麻		
37	122	23	D3 E4	3 4	須恵器	小型壺	(7.4)		10%	1mmの砂粒を含む	外：灰白 SYT/1 内：灰白 SYT/1	良好	外：田舎ナデ・次葉穴・ 自然地 内：田舎ナデ・自然地		
37	123	23	E3	3	須恵器	蓋	(13.0)		30%	1mmの砂粒を多 く含む	外：黄 2.5YW/1 内：黄 2.5YW/1	良好	外：田舎ナデ・ 田舎ヘタケズリ		
37	124	23	C3	4	須恵器	蓋	(13.1)		20%	1mmの砂粒を含む	外：灰白 SY/1 内：灰 NS/	良好	外：田舎ナデ・ 田舎ヘタケズリ		
37	125	23	D3	4	須恵器	蓋		19.0	40%	1mmの砂粒を少 く含む	外：灰 NS/ 内：灰 NS/	良好	外：田舎ナデ・ 田舎ヘタケズリ		
37	126	23	E2	2	須恵器	蓋		2.6	40%	2m以下の中粒を 少く含む	外：灰白 NS/ 内：灰 NS/	良好	外：田舎ナデ・ 田舎ヘタケズリ		
37	127	23	D3	4	須恵器	蓋		11.0	40%	1mm以下の砂粒を含 む	外：灰白 NS/1 内：灰 NS/	不善	外：田舎ナデ・ 度状穴		
37	128	23	D2	3	須恵器	短縦壺	(6.2)	6.1	8.5	50%	1mmの砂粒を少 く含む	外：黄褐色 2.5Y5/2 内：黄褐色 2.5Y5/2	良好	外：田舎ナデ・ 田舎ヘタケズリナデ	
37	129	23	D3	3 4	須恵器	短縦壺	10.4	6.3	62	50%	1m以下の砂粒を含 む	外：オーリーパー 2.5GY6/1 内：灰 NA/	良好	外：田舎ナデ・低鉛ナデ 内：ナデ	標記サートレ
37	130	23	D2 D4	3 4	須恵器	蓋	(8.0)	9.3	6.0	30%	0.5mm以下の砂 粒を含む	外：灰 10Y9/1 内：灰 NS/	良好	外：田舎ナデ・ ヘタケズリ後ナデ	
37	131	23	D3	4	須恵器	蓋		8.6	20%	1mm以下の砂粒を含 む	外：青褐 5S5/1 内：青褐 5S5/1	良好	外：田舎ナデ 内：田舎ナデ		
37	132	23	D3	4	須恵器	蓋		65.0	20%	1mm以下の砂粒を含 む	外：灰白 NS/ 内：灰白 NS/	不善	外：田舎ナデ 内：田舎ナデ		
37	133	23	D2	3	須恵器	蓋		8.4	20%	1mm以下の砂粒を含 む	外：灰 NS/ 内：灰 NS/	良好	外：田舎ナデ・ ヘタケズリのち 自然地		
37	134	23	C4 + D2 + D3 + D4	3 4 5	須恵器	短縦壺		(11.1)	60%	2m以下の中粒を含 む	外：灰 NS/ 内：灰 NS/	良好	外：田舎ナデ・ ヘタケズリナデ		
37	135	23	D3 E3	3 4	須恵器	長縦壺		(8.0)	20%	2m以下の中粒を含 む	外：灰 NS/ 内：灰 NS/	良好	外：田舎ナデ・ 度状穴		
37	136	23	D3	4	須恵器	長縦壺		(17.6)	25%	2m以下の中粒を含 む	外：青褐 5S6/1 内：青褐 5S6/1	良好	外：田舎ナデ・ ヘタケズリ・ナデ 内：田舎ナデ		
37	137	23	D2	3	須恵器	長縦壺		9.7	40%	2m以下の中粒を含 む	外：灰 NA/ 内：灰 NA/	良好	外：田舎ナデ・ ヘタケズリナデ		
37	138	23	D3	4	須恵器	長縦壺		(11.0)	10%	0.5mm以下の砂 粒を含む	外：灰 NS/・難 内：灰白 M7/	良好	外：田舎ナデ 内：田舎ナデ		
37	139	23	C4 + D2 + D3 + D4 + E3	3 4 5	須恵器	長縦壺		(16.0)	18.0	40%	0.5mm以下の砂 粒を含む	外：灰白 10W7/1 内：オーリーパー 10YH4/2	良好	外：田舎ナデ・ 度状穴	標記サートレ
37	140	23	C4 + D3 + D4	3 4 5	須恵器	長縦壺		11.2 ~ 11.7	80%	2m以下の中粒を少 く含む	外：青褐 5P9/6/1 内：青褐 5P9/6/1	良好	外：ナデカズリ・ナデ 内：田舎ナデ・ 不善ナデナデ		
37	141	23	D3	4	須恵器	長縦壺		(9.1)	20%	2m以下の中粒を含 む	外：灰白 NS/ 内：灰白 NS/	良好	外：田舎ナデ 内：田舎ナデ・ナデ	標記サートレ	
37	142	23	B3 + C4 + D2 + D3 + E2 + E3	2 3 4 5	須恵器	長縦壺		(13.4)	40%	2m以下の中粒を少 く含む	外：灰 NS/ 内：灰白 NS/ 底：オーリーパー 10Y5/2	良好	外：田舎ナデ・ ヘタケズリ 内：ナデナデ		
37	143	23	D3	3	須恵器	長縦壺		6.0	80%	3mm以下の砂粒を少 く含む	外：灰白 NS/ 内：灰白 NS/	良好	外：田舎ナデ・ ヘタケズリ 内：ナデナデ		
38	144	24	C3	4	須恵器	錐体	(19.2)		20%	0.5mm以下の砂 粒を多く含む	外：灰 NS/ 内：灰白 NS/	不善	外：田舎ナデ・ ヘタケズリ		

測量番号	測量面番号	写真番号	グリッド・連続	緯度	緯度	寸法(単1)・寸法(単2)			残存率	地土	色調	測成	文様・調整・その他	備考
						北緯	東経	高さ						
38	145	24	D3	4	須恵器	鉢	(10.8)		20%	Tenjū以下の砂粒を含む	外：須田NS/内：須田NS/	良好	外：田園ナデ・カキツ 内：田園ナデ	平台付コップ型
38	146	24	D3	4	須恵器	手付付き鉢	(26.6)		10%	底：5mm以下の砂粒 多く含む	外：底：N6/内：底：N6/	良好	外：田園ナデ・カキツ 内：土塁文	内：田園ナデ
38	147	22	C2	3	須恵器	鉢		(12.1)	20%	底：3mm以下の砂粒 を少量含む	外：底：NS/内：底：NS/	良好	外：田園ナデ・ 内：ハケツイ/後づテ 内：土塁文	直角丸丸
38	148	24	D3	3	須恵器	平鉢		(11.0)	50%	Tenjū以下の白色砂粒 を少量含む	外：須田SP6/1 内：須田SP6/1	良好	外：田園ナデ・ 内：ハケツイ/のカキツ 内：ナデ・砂粒ナデ	直角丸丸
38	149	24	D3	2	須恵器	平鉢	直径 20.0	6.4	40%	Tenjū以下の砂粒を含む	外：底自 SP6/1 内：底自 SP6/1	やや不良	外：田園ナデ・ 内：ナデ・カキツナデ・指圧 内：ナデ	指圧丸丸
38	150	24	D3	4	須恵器	平鉢		6.0	50%	Tenjū以下の砂粒を含む	外：底：10W/3 内：底：N6/	良好	外：田園ナデ・ 内：ハカツイ/ナデ	内：田園ナデ・ナデ
38	151	22	C4 + D3 + D3 + D4 + E3	2	須恵器	鉢	10.6	27.1	60%	Tenjū以下の砂粒を含む	外：底：NA/内：底：N6/	良好	外：ナデ・タキキ・カキツ 内：ナデ・当て具足	
38	152	22	D2	3	須恵器	鉢	長径 45.0 幅径 25.8		30%	Tenjū以下の砂粒を含む	外：底：N6/内：底：N6/	良好	外：ナデ・タキキ・カキツ 内：ナデ・当て具足	
39	153	24	D2	3	須恵器	蓋			30%	0.5mm以下の砂粒を含む 多く含む	外：底：N6/内：底：N6/	良好	外：田園ナデ・へカチ 内：ナデ・ハケツイ/ナデ 内：不規方ナデ	外表面部に削痕「欠」
39	154	24	D3	3	須恵器	縦縫	(16.6)	5.4	8.7	40% Tenjū以下の砂粒を含む	外：底：2.5W/1 内：底：2.5T/1	良好	外：田園ナデ・田園ヘラ カキツ・自然	外表面に折れ目・制作時の 工具痕跡
39	155	24	D3	5	須恵器	坪 I		(7.2)	10%	Tenjū以下の砂粒を含む	外：底：2.5T/1 内：底：2.5W/1	良好	外：田園ナデ・ 内：田園ナデ・ナデ	外表面部付近に直線彫 削作時の工具痕跡
39	156	24	C3	2	須恵器	坪 I		(8.8)	10%	Tenjū以下の砂粒を含む	外：底：5W/1 内：底：N6/	良好	外：田園ナデ・ 内：ナデ・カキツ 内：不規方ナデ	外表面部に直線彫 削作時の工具痕跡
39	157	24	D3	3	須恵器	蓋			30%	Tenjū以下の砂粒を含む	外：底：2.5W/1 内：底：10W/2	良好	外：田園ナデ・ 内：田園ヘラ/カキツナデ 内：ナデ	外表面部にへら記号「X」 側面サブレ
39	158	24	D3	3	須恵器	坪 I	(16.8)	7.9	8.6	40% Tenjū以下の砂粒を含む	外：底：2.5W/1 内：底：10W/2	良好	外：田園ナデ・ 内：ナデ・ナデ	外表面部にへら記号「X」 内：不規方ナデ
39	159	24	D3	4	須恵器	坪 II		(9.0)	20%	底：1mm以下の砂粒を含む 多く含む	外：底：2.5W/2 内：底：2.5W/1	良好	外：田園ナデ・ 内：田園ヘラ/カキツナデ 内：ナデ・ナデ 内：不規方ナデ	高台内にへら記号「X」
39	160	24	E3	3	須恵器	坪 II		(9.2)	10%	底：0.5mm以下の砂 粒を少量含む	外：底：5T/1 内：底：5W/1	良好	外：田園ナデ・ 内：田園ヘラ/カキツナデ 内：ナデ	高台内に1本縫・制作時 の工具痕跡
39	161	24	D2	3	須恵器	坪 II	(10.3)	4.4	6.8	60% 底：0.5mm以下の砂 粒を少しある	外：底：2.5T/1 内：底：N6/	良好	外：田園ナデ・ 内：ナデ・カキツ 内：不規方ナデ	高台内にへら記号「X」
39	162	24	D3	4	須恵器	坪 II		(8.4)	40%	底：0.5mm以下の砂 粒を少量含む	外：底：2.5T/1 内：底：2.5W/1	良好	外：田園ナデ・ 内：田園ヘラ/カキツ 内：ナデ	高台内にへら記号「X」
39	163	24	D2	3	須恵器	坪 II		(9.5)	40% Tenjū以下の砂粒 を少しある	外：底：2.5W/1 内：底：2.5T/2	良好	外：田園ナデ・ 内：田園ヘラ/カキツナデ 内：ナデ	高台内にへら記号「X」	
39	164	24	D3	4	須恵器	坪 II		(8.2)	10%	底：1mm以下の砂粒を含む	外：底：2.5W/1 内：底：N6/	良好	外：田園ナデ・ 内：ナデ・カキツ 内：不規方ナデ	高台内に1本縫・制作時 の工具痕跡
39	165	24	D3	4	須恵器	蓋	(13.8)		30%	底：1mm以下の砂粒を含む	外：底：2.5W/1 内：底：2.5W/1	良好	外：田園ナデ・ 内：ナデ・カキツ 内：不規方ナデ	内面に直線彫 削作時の工具痕跡
39	166	24	C4	3	須恵器	坪 I (軸付根)		(7.6)	20%	底：1mm以下の砂粒を含む	外：底：2.5W/1 内：底：2.5T/1	良好	外：田園ナデ・田園希 内：ナデ	内面に直線彫 削・使用痕
39	167	24	D4	3	須恵器	坪 I (軸付根)		(9.6)	30%	底：0.5mmの砂粒を 少しある	外：底：N6/ 内：底：N6/	良好	外：田園ナデ・ 内：田園ヘラ/カキツナデ 内：ナデ	内面に直線彫 削・使用痕
39	168	24	D2	3	須恵器	長方形 (軸付根)	(18.4)		5%	底：1mmの砂粒を含む	外：底：2.5T/1 内：底：2.5W/1	良好	外：田園ナデ・ 内：田園ヘラ/カキツ 内：ナデ	内面に直線彫 削・使用痕
39	169	24	D3	4	須恵器	蓋		6.7	30%	底：0.5mm以下の砂 粒を含む	外：底：N7/ 内：底：N8/	良好	外：田園ナデ・ 内：ナデ	外表面に直線彫 削
39	170	24	D3	4	須恵器	蓋			3%	底：Tenjū以下の砂粒を含む	外：底：N7/ 内：底：N8/	良好	外：ナデ・ 内：ナデ・直線彫・一部ナデ	直角丸丸
39	171	24	D3	4	須恵器	蓋			5%	Tenjū以下の砂粒を含む	外：底：N6/ 内：底：N6/	良好	外：ナデ・ 内：ナデ・当て具足	
40	172	25	D1	3	土師器	蓋	(16.6)		20%	底：1mm以下の砂粒 を多く含む	外：底：7.5W/5/2 内：明治和 2.5W/5.6	良好	外：横ナデ・ナデ・スス底 内：横ナデ・指圧・ 内：ハラカツリ・スス底	
40	173	25	D3	3	土師器	蓋	(19.6)		25%	2.5mm以下の砂粒を 多く含む	外：底：5W/2 内：底：5W/3	良好	外：横ナデ・指圧底 内：横ナデ・指圧・ 内：ハラカツリ	横サブレ
40	174	25	D1	4	土師器	蓋	(19.6)		10%	5mm以下の砂粒を含む	外：底：5W/6 内：底：5W/6	良好	外：ナデ・スス底 内：ナデ・ハラカツリ	
40	175	25	D3	4	土師器	蓋	(22.2)		20%	底：1mm以下の砂粒 を多く含む	外：底：5W/5-8 内：底：5W/5-8	良好	外：横ナデ・ 内：横ナデ・ハラカツリ	
40	176	25	D3	3	土師器	蓋	(19.0)		15%	底：1mm以下の白砂 粒を多く含む	外：底：5W/6 内：底：5W/6	良好	外：横ナデ・ 内：横ナデ・ハラカツリ	
40	177	25	D2	3	土師器	蓋	(23.8)		20%	底：2mm以下の砂粒を含む	外：底：5W/2 内：底：5W/2	良好	外：横ナデ・ 内：横ナデ・ハラカツリ	
40	178	25	D3	3	土師器	蓋	(22.0)		25%	5mm以下の砂粒を含む	外：底：5W/3 内：底：5W/3	良好	外：ナデ・ 内：ナデ・ハラカツリ	

番号	遺物名	真面目	グリッド・位置	層位	種類	寸法	測定	0.内側・外側	測定率	出土	色調	地塊	文様・調整・その他	備考
40	179	25 D3	4	土耕器	黒	(17.0)			25%	Im02下の砂粒を含む 内: 深黄褐色 7.5YR8/3	良好 内: ナチュラル	良好 内: ナチュラル	ヘラケズリ	
40	180	25 D3	4	土耕器	黒	(19.0)			12%	Im02下の砂粒を含む 内: 深黄褐色 7.5YR8/3	良好 内: ナチュラル	良好 内: ナチュラル	ヘラケズリ	
40	181	25 D2	4	土耕器	黒	(19.0)			10%	Im02下の砂粒を少 量含む 内: 深黄褐色 7.5YR8/3	良好 内: ナチュラル	良好 内: ナチュラル	ヘラケズリ	
40	182	25 D3	4	土耕器	黒	(23.0)			25%	Im02下の砂粒を含 む 内: 深黄褐色 10YR6/2	良好 内: ナチュラル	良好 内: ナチュラル	ヘラケズリ	
40	183	25 D3	3	土耕器	黒	(24.0)			25%	Im02下の砂粒を少 量含む 内: 深黄褐色 7.5YR8/3	良好 内: ナチュラル	良好 内: ナチュラル	ヘラケズリ	
40	184	25 D3	3	土耕器	黒	(24.0)			25%	Im02下の砂粒を少 量含む 内: 深黄褐色 7.5YR8/3	良好 内: ナチュラル	良好 内: ナチュラル	ヘラケズリ	
40	185	25 D2	3	土耕器	黒	(31.0)			20%	Im02下の砂粒を少 量含む 内: 深黄褐色 7.5YR8/4	良好 内: ナチュラル	良好 内: ナチュラル	ヘラケズリ	
41	186	26 D3	4	土耕器	黒	(34.4)			25%	Im02下の砂粒を少 量含む 内: 深黄褐色 7.5YR8/6	良好 内: ナチュラル	良好 内: ナチュラル	ヘラケズリ	把手付
41	187	26 D3	4	土耕器	黒	(26.4)			5%	Im02下の砂粒を含 む 内: 深黄褐色 7.5YR8/3	良好 内: ナチュラル	良好 内: ナチュラル	ヘラケズリ	把手付
41	188	26 D3	4	土耕器	黒	(38.0)			5%	Im02下の砂粒を含む 内: 深黄褐色 7.5YR8/6	良好 内: ナチュラル	良好 内: ナチュラル	ヘラケズリ	
41	189	26 D3	4	土耕器	黒	(26.0)			10%	Im02下の砂粒を少 量含む 内: 深黄褐色 7.5YR8/6	良好 内: ナチュラル	良好 内: ナチュラル	ヘラケズリ	
41	190	26 D3	4	土耕器	黒	(20.0)			20%	Im02下の砂粒を多 く含む 内: 深黄褐色 7.5YR8/4	良好 内: 深黄褐色 10YR8/2	良好 内: 深黄褐色 10YR8/2	ヘラケズリ	
41	191	26 D2	2	土耕器	黒	(19.0) (11.3)	50%	Im02下の砂粒を多 く含む 内: 深黄褐色 7.5YR8/6	良好 内: 深黄褐色 7.5YR8/6	良好 内: 深黄褐色 7.5YR8/6	良好 内: ナチュラル	把手付		
41	192	26 D2	2	土耕器	黒	(12.0)	30%	Im02下の砂粒を多 く含む 内: 深黄褐色 7.5YR8/4	良好 内: 深黄褐色 7.5YR8/4	良好 内: 深黄褐色 7.5YR8/4	良好 内: ナチュラル	把手付		
41	193	26 D3	4	土耕器	黒	(17.4)	10%	Im02下の砂粒を少 量含む 内: 深黄褐色 7.5YR8/4	良好 内: 深黄褐色 7.5YR8/4	良好 内: ナチュラル	良好 内: ナチュラル	把手付		
41	194	25 D3	3 4	土耕器	黒				30%	Im02下の砂粒を多 く含む 内: 深黄褐色 10YR8/3	良好 内: 深黄褐色 10YR8/3	良好 内: ナチュラル	良好 内: ナチュラル	
42	195	27 D2	2	土耕器	黒	(29.8)			20%	Im02下の砂粒を多 く含む 内: 深黄褐色 7.5YR8/4	良好 内: 深黄褐色 7.5YR8/4	良好 内: ナチュラル	良好 内: ナチュラル	把手付
42	196	27 D2	3	土耕器	黒	(20.4)	16.55	13.0	35%	Im02下の砂粒を多 く含む 内: 深黄褐色 7.5YR8/3	良好 内: 深黄褐色 7.5YR8/3	良好 内: ナチュラル	良好 内: ナチュラル	把手付
42	197	27 D2	2	土耕器	黒	(25.3)	8.65	10.8	33%	Im02下の砂粒を少 量含む 内: 深黄褐色 7.5YR8/4	良好 内: 深黄褐色 7.5YR8/4	良好 内: ナチュラル	良好 内: ナチュラル	把手付
43	198	27 D3	3	土耕器	黒	(29.6) (10.0)	16.0	12.0	25%	Im02下の砂粒を多 く含む 内: 深黄褐色 7.5YR8/2	良好 内: 深黄褐色 7.5YR8/2	良好 内: 深黄褐色 7.5YR8/2	良好 内: ナチュラル	把手付
43	199	27 D3	3	土耕器	黒	(15.0) (10.9)			50%	Im02下の砂粒を多 く含む 内: 深黄褐色 7.5YR8/1	良好 内: 深黄褐色 7.5YR8/1	良好 内: ナチュラル	良好 内: ナチュラル	把手付
43	200	27 D3	4	土耕器	黒	(36.1)			50%	Im02下の砂粒を多 く含む 内: 深黄褐色 7.5YR8/1	良好 内: 深黄褐色 7.5YR8/1	良好 内: ナチュラル	良好 内: ナチュラル	把手付
42	201	27 D3	4	土耕器	黒	(28.0)			12%	深 2.5mm以下の 砂粒を多く含む 内: 深黄褐色 7.5YR8/1	良好 内: 深黄褐色 7.5YR8/1	良好 内: ナチュラル	良好 内: ナチュラル	把手付
42	202	27 C4	5	土耕器	黒				20%	Im02下の砂粒を多 く含む 内: 深黄褐色 7.5YR8/2	良好 内: 深黄褐色 7.5YR8/2	良好 内: ナチュラル	良好 内: ナチュラル	内凹(×)、成形時の 跡跡、石耕器の軌跡
42	203	27 D3	4	土耕器	黒	10.3			20%	Im02下の砂粒を多 く含む 内: 深黄褐色 7.5YR8/2	良好 内: 深黄褐色 7.5YR8/2	良好 内: ナチュラル	良好 内: ナチュラル	
42	204	27 D3	3	土耕器	黒		7.5	20.2	100%	Im02下の砂粒を多 く含む 内: 深黄褐色 7.5YR8/2	良好 内: 深黄褐色 7.5YR8/2	良好 内: ナチュラル	良好 内: ナチュラル	
42	205	28 D2	3	土耕器	黒	9.7 3.1	16.0	20%	Im02下の砂粒を多 く含む 内: 深黄褐色 7.5YR8/2	良好 内: 深黄褐色 7.5YR8/2	良好 内: ナチュラル	良好 内: ナチュラル	把手付	
42	206	27 D3	3	土耕器	黒	(13.7) (4.1)	17.0	30%	Im02下の砂粒を多 く含む 内: 深黄褐色 7.5YR8/2	良好 内: 深黄褐色 7.5YR8/2	良好 内: ナチュラル	良好 内: ナチュラル	把手付	
42	207	26 D2	3	土耕器	黒	(13.6)	4.8	14.0	25%	Im02下の砂粒を少 量含む 内: 深黄褐色 7.5YR8/1	良好 内: 深黄褐色 7.5YR8/1	良好 内: ナチュラル	良好 内: ナチュラル	把手付
42	208	26 D2	2	土耕器	黒	(12.4)	6.2	13.4	25%	Im02下の砂粒を少 量含む 内: 深黄褐色 7.5YR8/1	良好 内: 深黄褐色 7.5YR8/1	良好 内: ナチュラル	良好 内: ナチュラル	把手付
43	209	26 D3	3	製塙器	焼瓦				10%	Im02下の砂粒を少 量含む 内: 深黄褐色 7.5YR8/1	良好 内: 深黄褐色 7.5YR8/1	良好 内: ナチュラル	良好 内: ナチュラル	把手付
43	210	26	3	製塙器	焼瓦				10%	Im02下の砂粒を少 量含む 内: 深黄褐色 7.5YR8/1	良好 内: 深黄褐色 7.5YR8/1	良好 内: ナチュラル	良好 内: ナチュラル	把手付
43	211	26 D2	3	製塙器	焼瓦				5%	Im02下の砂粒を少 量含む 内: 深黄褐色 7.5YR8/1	良好 内: 深黄褐色 7.5YR8/1	良好 内: ナチュラル	良好 内: ナチュラル	把手付
43	212	26 D2	3	製塙器	焼瓦				5%	Im02下の砂粒を少 量含む 内: 深黄褐色 7.5YR8/1	良好 内: 深黄褐色 7.5YR8/1	良好 内: ナチュラル	良好 内: ナチュラル	把手付
43	213	26 D2	3	土製品	土製支撐	(12.9)			80%	Im02下の砂粒を含 む 内: 深黄褐色 7.5YR8/2	良好 内: 深黄褐色 7.5YR8/2	良好 内: ナチュラル	良好 内: ナチュラル	I C 領
43	214	26 D3	4	土製品	土製支撐	(11.1)			75%	Im02下の砂粒を含 む 内: 深黄褐色 7.5YR8/2	良好 内: 深黄褐色 7.5YR8/2	良好 内: ナチュラル	良好 内: ナチュラル	I B 領
43	215	26 D3	4	土製品	土製支撐	14.3			80%	0.5mm以下の砂粒を多 く含む 内: 深黄褐色 7.5YR8/1 - 7.5YR8/2	良好 内: 深黄褐色 7.5YR8/1 - 7.5YR8/2	良好 内: ナチュラル	良好 内: ナチュラル	I C 領
43	216	26 D2	2	土製品	土製支撐	(8.1)			55%	深 2.5mm以下の砂粒 を多く含む 内: 深黄褐色 7.5YR8/2	良好 内: 深黄褐色 7.5YR8/2	良好 内: ナチュラル	良好 内: ナチュラル	I B 領
43	217	26 D4	3	土製品	円筒形	0.9	最大径 5.3		70%	Im02下の砂粒を含 む 内: 深黄褐色 7.5YR8/4	良好 内: 深黄褐色 7.5YR8/4	良好 内: ナチュラル	良好 内: ナチュラル	把手あり 土製材庫
43	218	26 D3	3	土製品	土罐				40%	0.5mm以下の砂粒を多 く含む 内: 深黄褐色 7.5YR8/2	良好 内: 深黄褐色 7.5YR8/2	良好 内: ナチュラル	良好 内: ナチュラル	把手無し 土製材庫
43	219	26 D3	4	土製品	手捏土罐	(7.4)	5.8	6.0	70%	深 2.5mm以下の砂粒 を多く含む 内: 深黄褐色 7.5YR8/2	良好 内: 深黄褐色 7.5YR8/2	良好 内: ナチュラル	良好 内: ナチュラル	把手無し 土製材庫
43	220	18 D3	4	土製品	手捏土罐	(8.0)	(4.5)	5.0	30%	0.5mm以下の砂粒を多 く含む 内: 深黄褐色 7.5YR8/4	良好 内: 深黄褐色 7.5YR8/4	良好 内: ナチュラル	良好 内: ナチュラル	把手無し 土製材庫

探査番号	遺物番号	写真番号	グリッド・遺構	部位	種別	面積	寸法(cm)・(△)内側元標			測定者	地土	色調	文様・調整・その他の特徴	備考
							口幅	高さ	底径					
43	221	28	D3	4	土製品	手捏土器	4.0	4.35	5.5	97%	2m以以下の砂粒を少 平含む	外：浅黄褐 10R8/3 内：浅黄褐 10YR8/3 黒褐色 10YR7/1	良好 内：ナチュラル 黒褐色・成層	
43	222	28	D2	2	土製品	手捏土器	(7.6)	6.9		90%	3m以以下の砂粒を含 む	外：深 YR8/2 内：褐 5YR8/2	良好 内：ナチュラル 黒褐色	
43	223	28	D3	3	土製品	手捏土器	(6.4)	5.2		50%	2m以以下の砂粒を少 量含む	外：にじ・黒褐 10YR7/2 内：にじ・黒褐 10YR7/2	良好 内：ナチュラル	下和田遺跡
43	224	28	D3	3	土製品	手捏土器		(4.0)		70%	3m以以下の砂粒を少 量含む	外：にじ・黒褐 7SYR8/4 内：にじ・黒褐 7SYR8/4	良好 内：ナチュラル 黒褐色	
43	225	28	D3	3	土製品	手捏土器	3.6	2.1		90%	2m以以下の砂粒を多 く含む	外：明赤褐 7SYR8/6 内：褐 2.5YR8/6	良好 内：ナチュラル	
44	226	28	B3	2	陶器 (埴輪)	埴輪頭 (えんじゆう)	(12.8)			10%	難良	外：にじ・赤褐 7SYR8/4 内：にじ・赤褐 7SYR8/4	良好 黒褐色	森本V-1 13C中層 堆積層(石室東・後壁)
44	227	28	D3	2	陶器 (埴輪)	埴輪				10%	難良	外：オーリーパーク 2.5GY6/1 内：オーリーパーク 2.5GY6/1	良好 黒褐色	太宰府のE期(13C)後壁 堆積層(石室東・後壁) B-p
44	228	28	質土中				(7.6)	10%	難良		外：難良 10G7/1 内：難良 10G7/1	良好 黒褐色		
44	229	28	D3	2	中世土師器	坪		6.2		20%	3m以以下の砂粒を多 く含む	外：灰白 10YR8/1 内：灰白 10YR8/1	良好 内：ナチュラル	
44	230	28	C3	3	中世土師器	坪		(8.0)	30%	3m以以下の砂粒を多 く含む	外：灰白 10YR8/1 内：灰白 10YR8/1	やや外：難良 内：難良		
44	231	28	D3	2	中世土師器	坪		(5.0)	40%	3m以以下の砂粒を多 く含む	外：褐 5YR7/6 内：砂灰 5YR7/6	良好 内：田舎ナチュラル		
44	232	28	C3	3	中世土師器	坪		2.7		20%	3m以以下の砂粒を少 量含む	外：褐 7SYR8/6 内：褐 7SYR8/6	やや外：田舎ナチュラル・田舎系切り 内：ナチュラル	
44	233	28	C3	3	中世土師器	坪	(13.0)	(5.4)		40%	3m以以下の砂粒を含 む	外：褐 5YR6/6 内：褐 5YR6/6	良好 内：ナチュラル 田舎系	
44	234	28	D4	3	中世土師器	坪		(5.0)		20%	3m以以下の砂粒を多 く含む	外：褐 7SYR8/6 内：褐 7SYR8/6	良好 内：ナチュラル・田舎系切り 内：ナチュラル	
44	235	28	D4	3	中世土師器	坪		4.8		30%	3m以以下の砂粒を含 む	外：灰灰 2.5GY6/1 内：にじ・赤褐 10YR7/3	やや外：田舎系切り 内：難良	
44	236	28	E2	2	中世土師器	坪		(5.0)		20%	3m以以下の砂粒を多 く含む	外：灰白 10YR8/1 内：灰白 10YR8/1	良好 内：田舎ナチュラル	
44	237	28	E2	2	中世土師器	坪		5.1		45%	3m以以下の砂粒を多 く含む	外：褐 7SYR8/4 内：にじ・褐 7SYR8/4	良好 内：田舎ナチュラル・田舎系切り	
44	238	28	D3	4	中世土師器	坪		(6.5)		20%	3m以以下の砂粒を多 く含む	外：灰黄褐 10YR8/2 内：灰黄褐 10YR8/2	やや外：田舎ナチュラル 内：ナチュラル	
44	239	28	D3	4	中世土師器	坪		(4.9)		15%	3m以以下の砂粒を多 く含む	外：明褐色 7SYR7/2 内：明褐色 7SYR7/2	良好 内：田舎ナチュラル	
44	240	28	D3	4	中世土師器	素泊坪				40%	3m以以下の砂粒を多 く含む	外：灰白 10YR8/1 内：灰白 10YR8/1	やや外：田舎ナチュラル 内：田舎ナチュラル	

## 石製品

探査番号	遺物番号	写真番号	グリッド・遺構	部位	種別	面積	寸法(cm)・(△)内側元標			重量(g)	材質	備考
							長さ	幅	厚さ			
46	246	29	D2	3	石器	石斧	残存(9.1)	5.6	3.4	199.0	磨製石斧、野生時代初期	
46	247	29	D2	2	石器	磨石	13.5	11.4	3.8	861.0	ディサイト	
46	248	29	D3	4	石製品	石錐	11.7	5.5	4.4	386.0	ディサイト	海野周辺丁字状施設裏石壁 古代から中期にかけて東北 方面から島根県西端部まで 供給する。
46	249	29	D3	3	石製品	砥石	残存(6.2)	4.0	1.9	61.0	湖底岩	
46	250	29	C3	5	石製品	研石	残存(6.8)	3.9	1.55	51.0	湖底岩	
47	251	29	D5	3	石造物	五輪塔	火輪	21.8 × 22.0	高さ 12.9	7760	ディサイト	美しい表面と深い輪郭 裏面はくずれや剥離が見 られる。 16世紀中期

## 鉄製品

探査番号	遺物番号	写真番号	グリッド・遺構	部位	種別	面積	寸法(cm)・(△)内側元標			重量(g)	備考	
							長さ	幅	厚さ			
45	241	29	D3	3	鉄製品	鏨	残存(9.95)	2.5	0.6	22.93		
45	242	29	D2	3	鉄製品	鏨	残存(9.8)	2.8	0.5	27.21		
45	243	29	B3	3	鉄製品	鏨	残存(9.45)	2.8	0.1 ~ 0.8	53.31	2次利用している	
45	244	29	D3	2	鉄製品	刀子	残存(8.4)	残存(2.7)	残存(1.5)	4.39		
45	245	29	D2	2	鉄製品	鏨	5.25	0.9	0.8	5.79		

第13表 下和田遺跡遺物数量表

種別	器種	部位	B3			C2			C3			C4			D2			D3		
			点	重量(g)	点	重量(g)	点	重量(g)	点	重量(g)	点	重量(g)	点	重量(g)	点	重量(g)	点	重量(g)		
弥生・古墳																		8	316.2	
古墳後期								2	733.6	2	311.5	1	61.3	11	35398.4					
須恵器	蓋	2層			2	34.1	5	133.9	1	22.1	36	393.8	24	209.4						
須恵器	坪	2層	1	13.0			21	317.3	2	15.2	106	1259.3	24	713.2						
須恵器	高坪	2層									1	56.1								
須恵器	蓋	2層									14	244.7	3	42.1						
須恵器	坪	2層					4	57.1	2	50.8	88	1664.4	40	1000.7						
須恵器	蓋	3層					33	901.7	1	63.8	52	1127.5	135	3560.2						
須恵器	坪	3層					94	1514.3			112	1805.4	223	3916.0						
須恵器	高坪	3層					1	129.1			2	139.8	1	90.2						
須恵器	蓋	3層					5	127.8			9	464.4	19	984.2						
須恵器	坪	3層	1	21.3			33	726.8			55	1540.0	101	5286.9						
須恵器	蓋	4層	2	22.0			78	1141.7	40	488.6	7	87.8	126	3945.2						
須恵器	坪	4層	8	89.8			182	2855.9	94	769.8	33	961.8	418	9216.0						
須恵器	高坪	4層									1	32.4	12	1000.0						
須恵器	西	4層					22	573.6	17	453.7	6	250.2	66	5815.7						
須恵器	坪	4層	3	288.8			32	1432.9	57	1331.0	5.2	245.9	142	5219.0						
須恵器	蓋	5層					24	937.0					34	890.9						
須恵器	坪	5層					63	1393.4	1	95.8			62	1382.0						
須恵器	高坪	5層					1	112.9												
須恵器	西	5層					1	44.2	7	1121.9			8	4091.7						
須恵器	蓋	5層					15	1305.3	6	172.0			27	2385.0						
須恵器	蓋	その他					3	71.3					8	133.2						
須恵器	坪	その他					7	136.8					30	392.8						
須恵器	西	その他											5	96.1						
須恵器	坪	その他					7	265.6					5	128.2						
土師器	蓋	2層			9	133.2	247	3645.3	3	29.1	880	9209.0	238	3471.0						
土師器	その他	2層									10	680.0								
土師器	蓋	3層	3	45.6			856	13273.7	2	13.6	1458	27619.7	2740	46625.1						
土師器	その他	3層					4	149.5			11	788.7	19	637.3						
土師器	蓋	4層	41	416.2			1,288	18583.0	301	3567.0	467	9121.6	4458	76139.0						
土師器	その他	4層					4	188.0	1	5.5	3	27.7	26	1122.5						
土師器	蓋	5層					437	7554.2	220	3223.1			419	8286.5						
土師器	その他	5層											1	47.2						
土師器	蓋	その他					129	1817.9						266	4620.7					
土師器	その他	その他					2	180.1	2	34.8										
土師器	赤塗						2	14.1			1	6.0	14	99.4						
土製品	土製支脚	2層			1	58.8	1	94.2			16	2668.5	5	329.0						
土製品	蓋	2層			1	119.9	3	183.0			35	3567.7	5	271.8						
土製品	移動式轆	2層									1	232.3								
土製品	土製支脚	3層					6	835.8			25	4341.1	36	4344.8						
土製品	蓋	3層					31	1275.3			74	5042.6	57	2892.7						
土製品	土製支脚	4層					26	2807.1	7	436.3	4	601.5	60	9807.9						
土製品	蓋	4層	2	136.2			41	2078.9	9	362.7	24	1495.5	135	8515.9						
土製品	移動式轆	4層											2	149.8						
土製品	土製支脚	5層					11	1408.2	3	147.4			4	1067.0						
土製品	蓋	5層					21	653.8	10	453.1			11	1168.6						
土製品	土製支脚	その他					1	27.8					5	322.8						
土製品	蓋	その他					6	246.8					4	174.1						
製造土器							2	20.4			8	778.3	11	164.2						
手づくね											1	124.7	6	570.6						
中世土師器	2層						2	47.7	1	13.5	1	10.0	6	74.0						
中世土師器	3層	1	9.5				6	151.6			5	149.2	5	49.1						
中世土師器	4層						2	36.5	10	102.3			11	177.7						
中世土師器	その他																			
青磁				1	5.8									1	14.0					
輪入陶磁器				1	11.8															
			1	13.0	63	1047.2	13	346.0	3759	69651.3	796	12972.9	3551	76738.2	10057	221635.0				

※土器は記号ができるものを選択した

※複数のグリッドで接合した土器は、点数と重量をグリッドの数で除した

※重量には復元材の部分を含む

種別	器種	層位	D4		E2		E3		E4		遺構		その他		合計	
			点	重量(g)	点	重量(g)	点	重量(g)	点	重量(g)	点	重量(g)	点	重量(g)	点	重量(g)
弥生・古墳															8	316.2
古墳後期			1	76.2			12	23675.7							29	60256.6
須恵器	蓋	2層			26	312.4	3	26.6							96	1132.1
須恵器	坪	2層	1	14.3	59	615.1	8	48.6							222	2995.8
須恵器	高坪	2層												1	56.1	
須恵器	蓋	2層			7	137.7									24	424.4
須恵器	裏	2層			38	660.1	1	11.8						173	3444.9	
須恵器	蓋	3層			14	252.3	45	878.5						280	6783.9	
須恵器	坪	3層	23	276.0	27	388.7	102	1423.1	3	35.4				584	9359.0	
須恵器	高坪	3層					1	29.8						5	388.9	
須恵器	蓋	3層	2	32.6	3	26.8	4	196.1	1	43.5				43	1875.4	
須恵器	裏	3層	6	307.7	9.2	406.7	30	1139.2	1	5.7				237	9434.3	
須恵器	蓋	4層	17	220.5			3	43.1						273	5948.8	
須恵器	坪	4層	95	1172.1			6	35.7						836	15101.1	
須恵器	高坪	4層					1	189.6						13	1221.9	
須恵器	蓋	4層	27	1307.3			5	84.8						143	8485.3	
須恵器	便	4層	51	1765.3			1	11.2						291	10285.9	
須恵器	蓋	5層	7	126.9	2	82.0								67	2036.7	
須恵器	坪	5層	8	386.2	1	39.5	1	32.1						136	3329.1	
須恵器	高坪	5層												1	112.9	
須恵器	蓋	5層	5	3419.9			2	19.7						23	8697.3	
須恵器	裏	5層	3	1699.0			1	1358.3						52	6919.6	
須恵器	蓋	その他												23	176.5	
須恵器	坪	その他												33	476.1	
須恵器	蓋	その他												8	91.8	
須恵器	便	その他												5	223.1	
														17	616.9	
土師器	甕	2層			276	3549.3	32	374.6						1,685	20411.5	
土師器	その他	2層			1	4.8								11	684.8	
土師器	甕	3層	104	1822.2	259	3021.7	720	11878.6	44	809.2				6,186	10519.3	
土師器	その他	3層			2	57.1	6	135.0						42	1767.6	
土師器	甕	4層	211	3296.0	1	3.4	37	566.9						6,804	111693.2	
土師器	その他	4層												34	1343.7	
土師器	便	5層	83	1124.7	4	80.4	1	7.2	2	36.5				1,166	20314.5	
土師器	その他	5層												1	47.2	
土師器	甕	その他												10	103.9	
土師器	その他	その他												3	165.9	
土師器	甕	その他												17	119.5	
土製品	土製支脚	2層			2	140.5	1	33.9						26	3324.9	
土製品	瓶	2層												44	4142.4	
土製品	移動式輪	2層												1	233.2	
土製品	土製支脚	3層			4	291.1	20	3268.4						91	13081.3	
土製品	甕	3層	3	108.4	7	374.5	29	1433.4	2	236.9				203	11363.7	
土製品	土製支脚	4層			6	1452.0								103	15104.9	
土製品	甕	4層	10	326.5			1	84.7						222	13000.3	
土製品	移動式輪	4層												2	149.8	
土製品	土製支脚	5層	3	558.6										22	3181.2	
土製品	甕	5層	2	87.0										44	2562.5	
土製品	土製支脚	その他												6	562.0	
土製品	甕	その他												5	461.0	
製塙土器			1	7.9			6	288.1						1	38.5	
手づくね														7	695.3	
中世土師器		2層	3	22.7	5	82.7								18	250.7	
中世土師器		3層	5	62.7	2	14.1	4	24.8						28	461.0	
中世土師器		4層	4	95.7										27	412.0	
中世土師器		その他												5	78.7	
青磁														1	5.6	
輸入陶器														1	11.8	
			681	19692.2	749	10540.8	1070	23623.8	53	1167.1	10	103.9	384	6258.7	21,222	504362.7

※土器は注記ができるものを選択した

※複数のグリッドで接合した土器は、点数と重量をグリッドの数で除した

※重量には復元材の部分を含む

## 第4章 高丸遺跡

たかまる

高丸遺跡は江津市黒松町に所在する。遺跡は海岸線から600mほど内陸にある標高7～33mの丘陵斜面に位置する。調査前は山林であった。市道波積黒松線より下方は倉谷川へ向けて緩やかに傾斜していた。市道より上方は丘陵中ほどに平坦なところがあり、そこからやや急な傾斜で市道に向かい、市道付近では崖に近いような傾斜であった。

### 第1節 発掘調査の経過

#### 1 試掘調査

この地点は谷から尾根の上へ平坦面が続き、一部が切り通しとなっている。平坦面の幅は場所により異なるが最大で12～13mあり、帯状に続く。試掘トレーンチは標高の低い部分にTr3～Tr5の3ヵ所、高い部分にTr7、Tr8の2ヵ所設定した。

Tr3は切り通しの上の平坦面に位置する。表土下約10cmで花崗岩の岩盤を確認した。

Tr4は切り通しの下の斜面に位置する。表土下約20～60cmで花崗岩の岩盤を確認した。岩盤に南北方向で溝2条が掘り込まれている。

Tr5は平坦面に位置する。表土下約20cmで硬く締まった面を確認した。さらにその下の硬化した面には東西方向で黒褐色土が縞状に入っている。上層で江戸時代の陶磁器が出土した。

Tr7は斜面上方に位置する。表土下約20～30cmで岩盤を確認した。岩盤に掘り込まれた溝2条を確認した。2条の溝は埋土の状況から時期が異なると判断した。

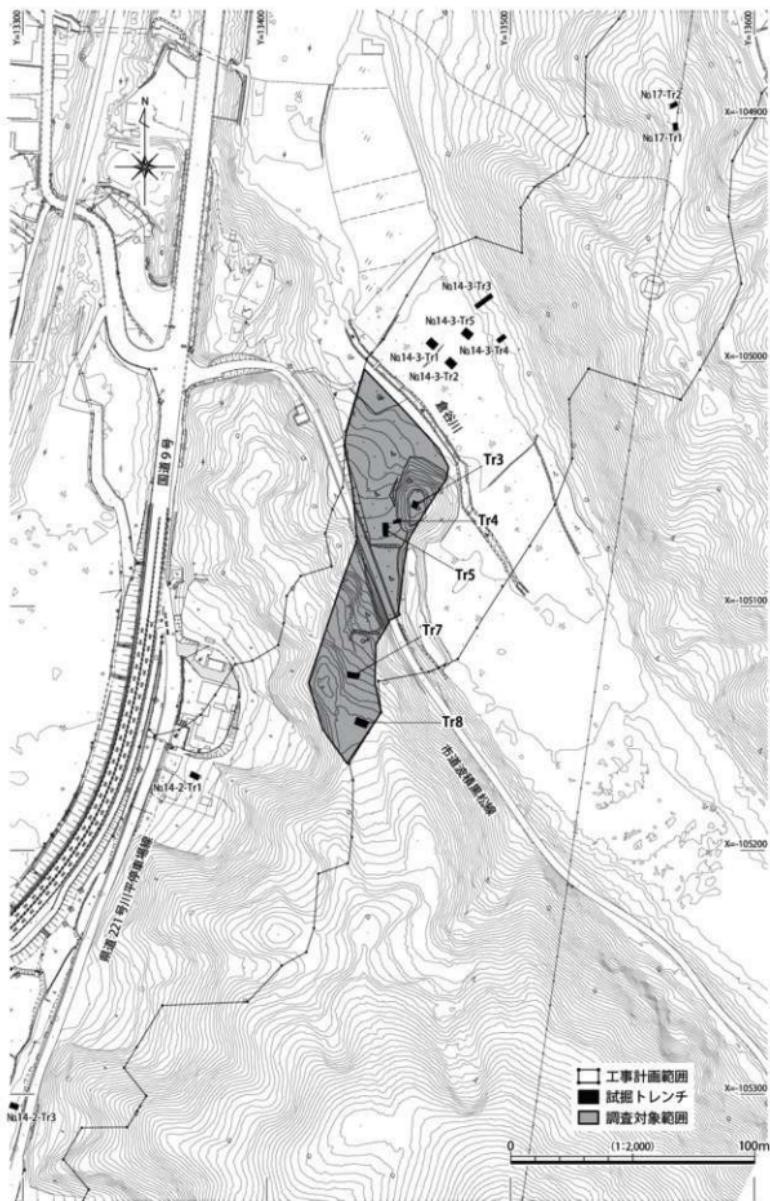
Tr8は最も高い場所に位置する。表土下約40～60cmで硬く締まった面を確認した。東西方向に黒褐色土の落ち込みがある。

Tr4、Tr7の溝、Tr5、Tr8の硬く締まった面や縞状および黒褐色土の落ち込みを「側溝」、「波板状遺構」と評価し、平坦面の幅から「古代道路」の可能性があると判断して本発掘調査の対象とした。遺跡名はこの周囲の複数の字の範囲を示す名称から「高丸遺跡」とした。

#### 2 発掘調査

高丸遺跡の現地調査は令和2年6月22日から開始した。調査対象面積は2,200m<sup>2</sup>である。6月24日に調査前の状況をラジコンで撮影し、6月25日から掘削を開始した。調査を進めると硬く締まった層を面的に確認することができ、その範囲は南北約50m、東西約10mの範囲となった。この部分の調査指導会を8月4日に大橋泰夫氏、9月3日に花谷浩氏を迎えて開催した。その後も10月16日に大橋、花谷両氏の指導を受け、10月20日には近江俊秀氏を現地に迎えて指導を受けた。また、調査区の北側にある砂層の由来について、9月30日に中村唯史氏に指導を受け、砂の由来は砂丘であることがわかった。10月23日には「高丸遺跡において古代山陰道に関係する遺構を確認した」という趣旨の報道発表を行い、10月25日に現地説明会を開催したところ、コロナ禍の中約90名の参加を得た。

現地説明会の後に硬く締まった層を掘り下げていくと、鎌倉時代から江戸時代の遺物が出土したことから、この層が古代以降であることが判明し、当初想定していた「古代山陰道に関係する遺構」という解釈が誤りであったことが明らかになった。その結果を受け、改めて11月12日に大橋氏、11月17日に花谷氏の指導を受けた。その際に土層断面で確認した焼土や炭が伏せ焼き式の炭窯であ

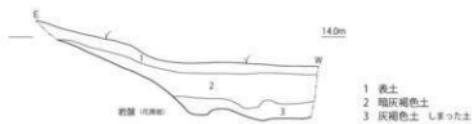


第48図 調査区位置図

## Tr3 東壁



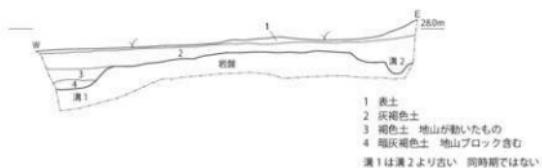
## Tr4 南壁



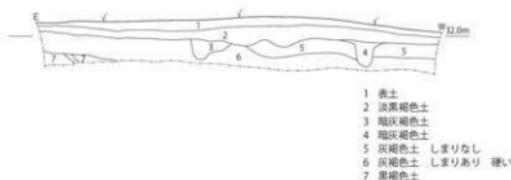
## Tr5 東壁



## Tr7 北壁



## Tr8 南壁



0 (1:60) 2m

第49図 試掘トレントン土層図

り、時期は平安時代末より遡らないとの指摘をうけた。その後は炭窯やその下位の遺物包含層の掘削を行った。遺物包含層が予想よりも厚く、調査は年を越した。令和3年1月13日に大橋・花谷両氏の調査指導を受け、1月19日に現地の調査を終了した。実調査面積は1,600m<sup>2</sup>である。

令和3年度の発掘調査は遺跡の丘陵中ほどの平坦部と斜面を対象にして行った。調査対象面積は1,800m<sup>2</sup>である。令和3年6月10日から掘削を開始した。想定していたよりも表土が厚く、排土の処理をモノレールで行ったため進捗管理に苦慮した。丘陵中ほどから斜面にかけて落ち込みを確認した。この落ち込みは底の部分に暗褐色土が、その上には褐色土や明黄褐色土などが細かい単位で堆積していることがわかり、この部分を8月23日に大橋氏と花谷氏の指導を受けた。その後、この落ち込みの褐色土や明黄褐色土などは古代の道路に関する遺構ではなく、畑など耕作に伴う土層である可能性が高いことを確認し、10月4日に大橋氏の、同7日に花谷氏の調査指導を受けた。その後11月17日にラジコンによる空撮を実施し、11月26日に調査を終了した。実調査面積は1,100m<sup>2</sup>である。

令和4年度の発掘調査は7月15日から開始した。調査対象面積は400m<sup>2</sup>である。北へ開いた谷部を調査し、8月19日に大橋氏、花谷氏の調査指導を受け、8月29日にラジコンによる空撮を実施し、9月5日に調査を終了した。現地作業終了後は遺構・遺物の整理を行った。実調査面積は350m<sup>2</sup>である。

## 第2節 調査の方法

### 1 調査区とグリッドの設定

発掘調査の範囲は、試掘調査のTr3からTr8の間の市道波積黒松線の南北、倉谷川から丘陵中ほどの平坦部までとし、その部分に10mのグリッドを調査区の北東端であるX=105000、Y=13480を原点として、東西へはAからGまで、南北へは1から16までを第50図のように設定した。遺物の取り上げは、出土位置がわかるものは位置と層位を記録し、遺構に伴わないものはグリッドと層位を確認して取り上げた。

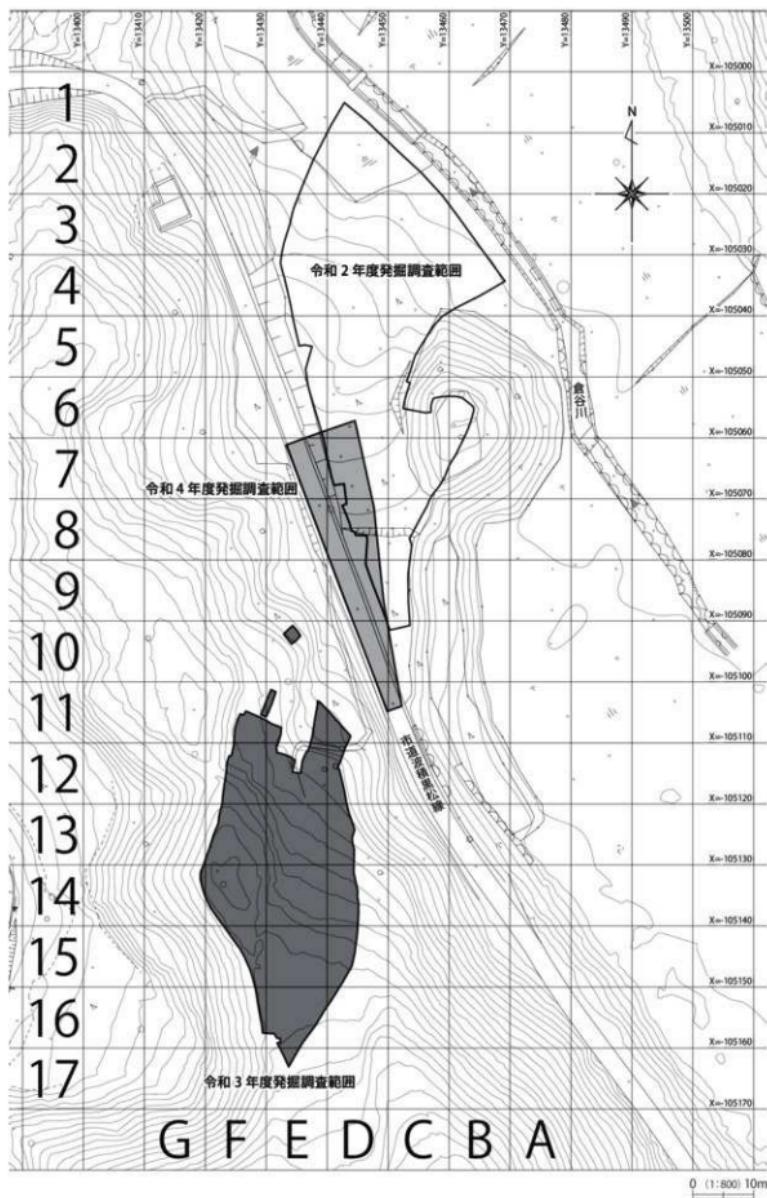
### 2 表土・包含層掘削と遺構検出

表土の掘削は、重機を調査範囲に入れると遺跡を痛める可能性が強いこと、また令和3年度調査区は丘陵斜面に位置しており重機を搬入することが難しいことから、表土から人力で掘り下げた。令和4年度調査区は、市道の下を調査するため、令和2年度の調査で把握した江戸時代以降の層まで重機で掘削した。排土は令和2・4年度ではベルトコンベアを用いて調査範囲外へ排出した。調査の終盤では、近世以降に堆積した層を部分的に重機で掘削した。令和3年度ではモノレールを使って丘陵の下へ移動させたが、発生する排土にモノレールの運搬が追い付かないことも多々あった。また、令和3年度の調査では傾斜地での安全確保と排土運搬の通路とするため、幅1.5mの作業用仮設足場を5段設置した。仮設足場は各段までの包含層掘削・遺構検出に目途がつき次第順次撤去した。

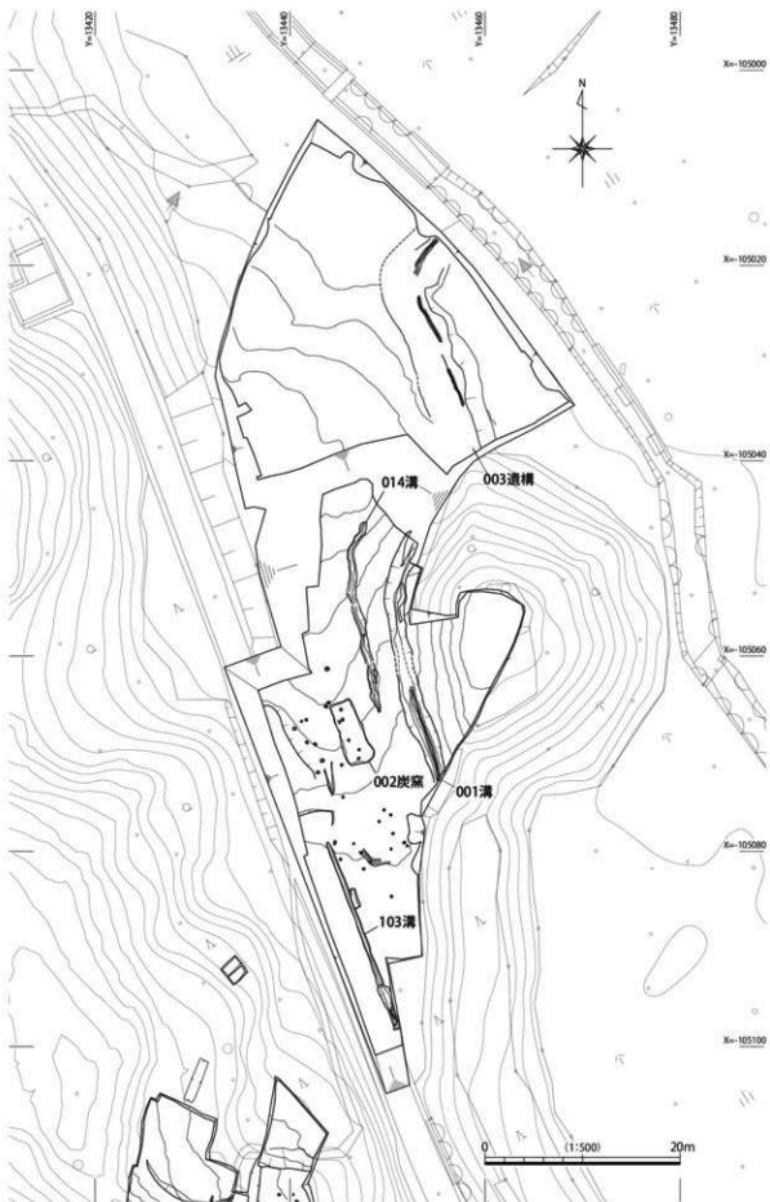
表土・包含層の掘削は主に鍬やスコップ、ジョレンを使用し、適宜草削りを使用した。伐根にはチェーンソー・ツルハシも使用した。遺構検出は草削りや移植ごて等を使用した。

### 3 遺構掘削

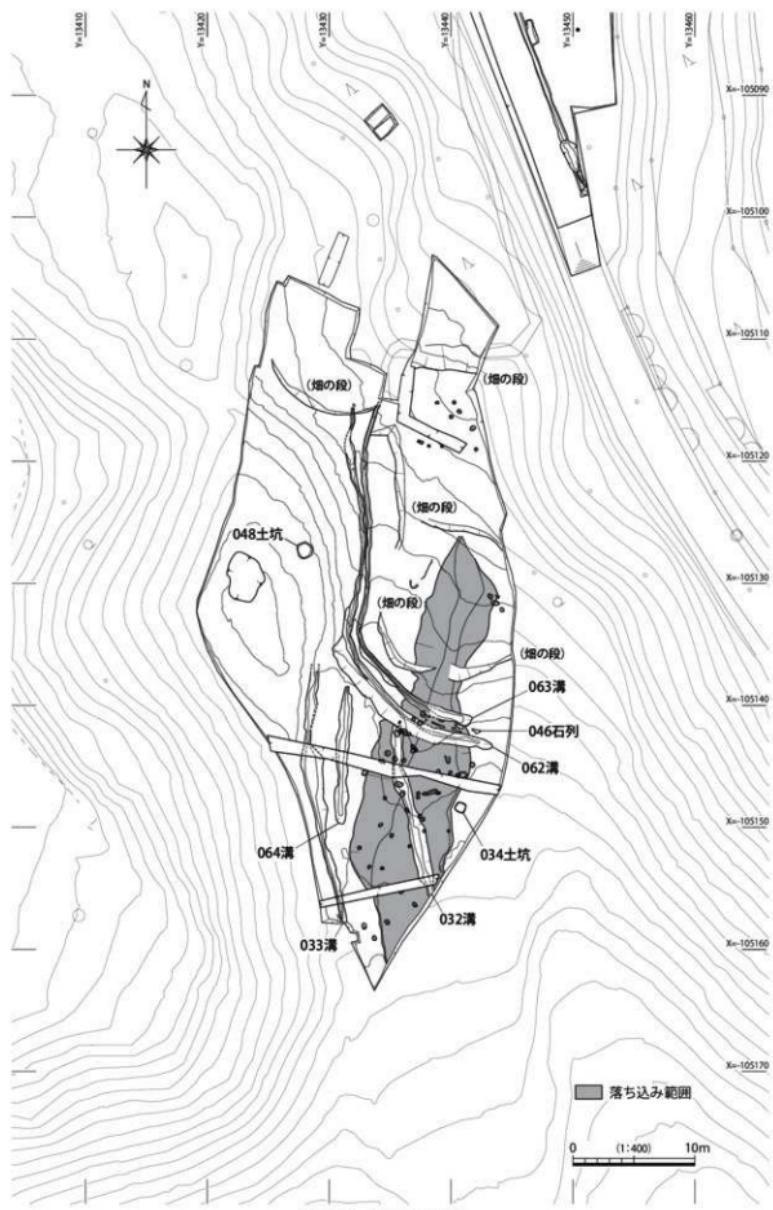
遺構の埋土掘削は、土層観察用の畦を設定するか半截し、土層の観察を行いつつ掘り下げた。土層の断面は必要に応じて写真を撮影し土層図を作成した。



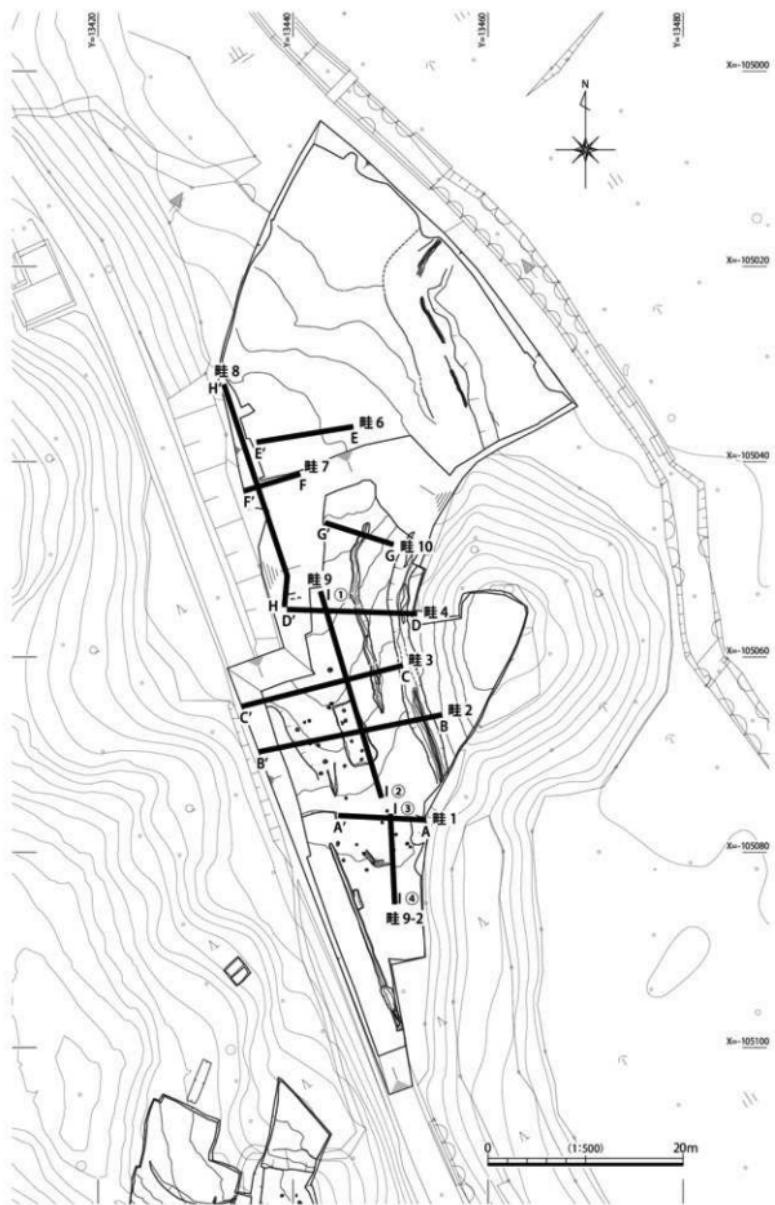
第50図 調査範囲・グリッド配置図



第51図 遺構配置図1



第52図 遺構配置図2



第53図 土層図作成位置図1

#### 4 記録の作成

遺構の平面図は遺跡調査システム（「遺構くん」）を用いて測量し、出力後補正を行った。土層図も同様に遺跡調査システムにより行った。写真撮影はデジタルカメラを使用し、必要に応じて6×7版フィルム（モノクロネガ・カラーポジフィルム）カメラやドローン（DJI Mavic Mini）による撮影を行った。

#### 5 整理作業

出土遺物のうち土器は弥生土器・土師器・須恵器・輸入陶磁器・国産陶器に大別し、代表的な遺物を選んだ。土製品や石器、鉄器、鉄滓は特徴的なものを選んだ。選択した遺物は実測・撮影した。「開発事業に伴う埋蔵文化財の取り扱いに係る判断基準」（平成13年6月29日 島根県教育委員会策定）に基づき、江戸時代以降の遺構は遺構図のみを掲載し、遺物は中世までに限って扱った。報告書作成は、遺物図面は実測図を、遺構図面や土層図は平面図・断面図等をレイアウトして行い、主にAdobe社のCreative Cloudを用いてDTP方式で行った。

### 第3節 層序

高丸遺跡の調査では土層観察用の畦を23ヶ所設定した。調査区の北側から述べる。

#### 1 調査区北側：谷部

##### 【土層の概要】

調査区北側の土層は、上から表土・硬く締まった層（当初は「整地層」と判断：江戸時代）・砂丘の砂（室町時代？）・暗褐色土（平安時代）・にぶい黄褐色土（奈良・平安時代）・黒褐色土（暗褐色土と表記する部分あり：古墳時代後期）・地山の順に大別することができる。なお、調査区の北側は砂丘の砂が厚く堆積していたため、砂丘の下の調査は行わなかった。畦2と畦3は延長部分を令和4年度に測った。

##### 畦1（AA'：第54図）

畦1は令和2年度調査区の南側に位置する。表土である1層の下には明黄褐色土2層やにぶい黄褐色土3層が堆積する。2層と3層は締りが良いことから「整地層」と判断した。5層は特に硬く締まった層で粘土を含み、3層と5層の間に不整合があると判断した。5層はやや西が高く傾斜している。灰黄褐色土7層は灰褐色土8層を大きく削っている。地山の上にある灰褐色土8層は西側ほど厚く堆積している。

##### 畦2（BB'：第55図）

畦2から畦4は表土の傾斜に直交して、グリッドとは無関係に約6～8mの間隔で並行するよう設定した。畦2の明黄褐色土2層は畦3と同じであり、土質は軟質であった。にぶい黄褐色土3層の上面は硬く締まっており、褐色土4層と灰褐色土5層も硬く締まっており、4層と5層は「整地層」と判断した。畦2を設定した際に行った立ち割りで焼土と炭を確認したが、のちにこの遺構は002炭窯であることがわかった。炭窯の西側（図では右側）には炭窯に先行してレンズ状ににぶい褐色土6層や暗褐色土7層が堆積しているが、7層は炭や焼土を含んでおり、炭窯に近い部分ほど炭や焼土が多いことから、炭窯の上部を削平した段階に窪地であった部分に堆積したと考えられる。炭窯の下位の層は谷部にレンズ状に堆積した層で締りが良く、赤褐色の鉱物を含む層が多く認められた。暗褐色土18層は地山の上に傾斜の上方の標高13mの部分から続いて谷部の底まで堆積していた。暗褐色土を完掘した地山の上面から測ると、約1.8mの深さであった。

## 畦3 (CC: 第56図)

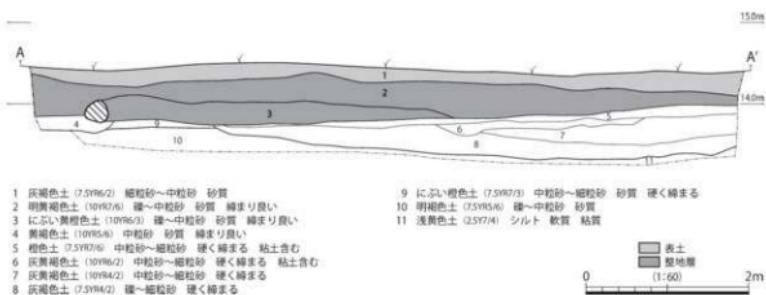
畦3の表土とその下の1、2層は畦2と同じである。にぶい黄橙色土3a層と黄橙色土3b層は東側の地山部分からほぼ水平に堆積している。3a層から灰褐色土5層までは硬く締まった層で「整地層」と判断した。R4の調査では5層を土色や土質の違いから4つに細分することができ、このうちにぶい黄褐色土5d層には水の流れたようなラミナを確認した。暗オリーブ褐色土6層は002炭窯からの炭や焼土を含む。その下の黒褐色土7層は地山の上の暗褐色土とは異なり軟質である。7層も炭窯に由来する炭や焼土を含む。明黄褐色土9層/9a層とその下の黒褐色土11層はレンズ状の堆積である。畦3では東側に014溝の埋土である15～18層が堆積している。特に16～18層はこの部分の地山である橙色土20層との分層が難しく、図上では11層に先行する形であるが、後述する畦4では黒褐色土に後出する。矛盾する形ではあるが、現地での判断をそのままの形で示す。7層と9b層、11層という暗色系の層が3つあることは、有機質が堆積しやすいような湿った環境が複数回あったことを示すと考えられる。

## 畦4 (DD': 第57図)

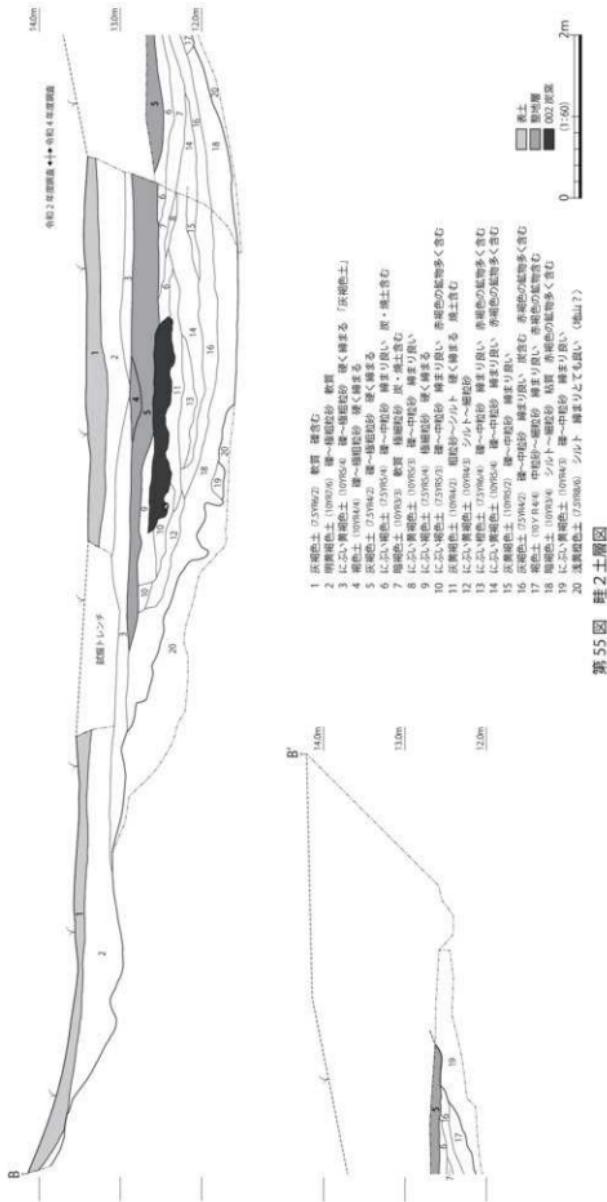
畦4は調査区の北側に位置する。この部分は調査前から崖状になっている部分であり、その部分を生かす形で畦を設定した。そのため層位を良好に把握することができたが、表土から地山まで約2.4mの深さがあり、数度に分けて土層図を作成することになった。にぶい黄褐色土2層と灰褐色土4層は畦3の同名の土層に対応する。その下のにぶい黄橙色土8層は締りが特に良い層であった。2～5層と8層は「整地層」と判断した。8層の上と下では土質が大きく異なる。その下の明黄褐色砂11層は中粒砂～細粒砂の砂層である。砂粒が丸くなっている、砂丘起源の砂である。30～40cmの厚さで堆積していた。砂層より下の13～20層は大きな角礫を含むものがあり、堆積環境が異なる可能性がある。18～20層は014溝の埋土と判断した。暗褐色土21層の西側では、この層からピットが掘り込まれていた。暗褐色土21層と黒褐色土24層は畦3の9b層と11層にそれぞれ対応する。24層は地山の上面にあるが、西側では地山の上に褐色土22層が堆積している。

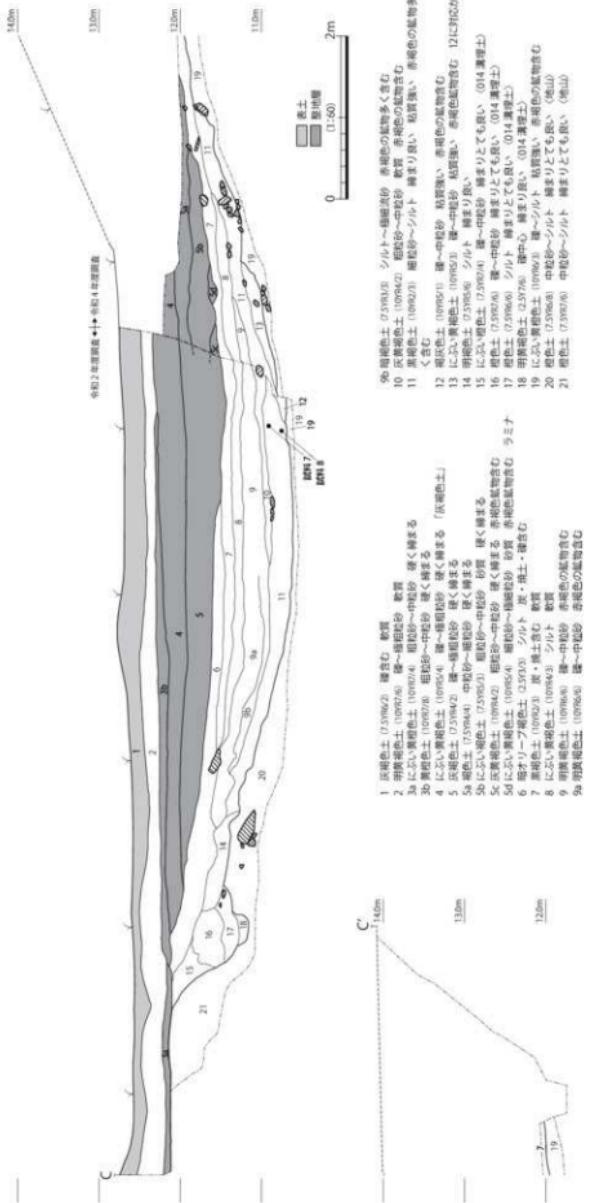
## 畦6 (EE': 第58図上)

畦6は調査区の北側、砂丘の砂の中に設定した。表土である黄褐色土1層も砂質であり、明黄褐色砂5層の間の2a～2c層も礫の混じった砂層であった。5層の砂は砂浜のように軟らかく、ゆるい傾斜をつけて掘る必要があった。

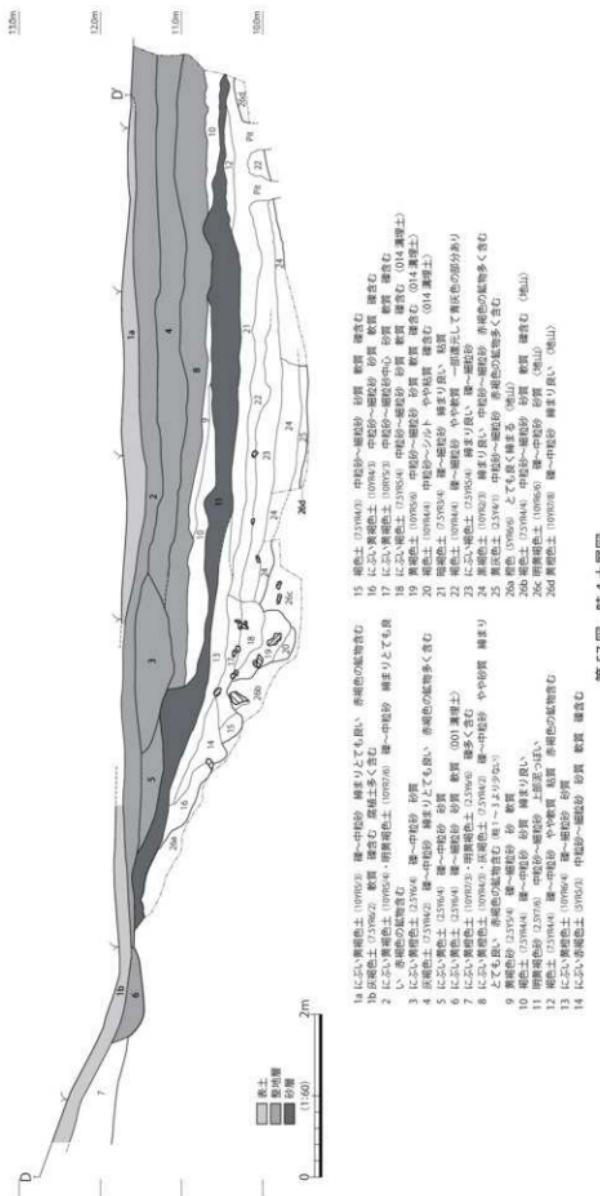


第54図 畦1土層図





第56回 看3土屋



第57図 付4土層図

**畦7 (FF : 第58図中)**

畦7は砂層と「整地層」を把握するために、調査区の北西端に畦8に直交して設定した。この部分では表土から8層までが締りの良い土層である。上位の層から下位になるにしたがって砂質が強くなる。灰褐色土3層は締りがとても良く「整地層」と誤認したほどであった。にぶい黄褐色土4層は畦4の8層に対応する。砂丘の砂である明黄褐色砂9層が東から西へ向かって傾斜しており、他の層も東から西へ傾斜し西側ほど厚い。砂層の上に締りの良い黄褐色砂8層やにぶい黄褐色砂7層が堆積した。4層との間には褐色土5層と灰黄褐色土6層が堆積した。

**畦8 (HH' : 第59図)、畦9 (I①-I②-I③-I④ : 第60・61図)**

畦8、畦9は南北方向に設定した畦である。畦8は調査区の市道側、西壁に設定した。畦9は畦1～4にほぼ直交する形で設定した。畦8は約20m、畦9は約30mの長さがあり、調査区北側の基準となる層位である。共に上から硬く締まった「整地層」-間層-砂層-間層-粘質の層(畦8) / 黒褐色土(畦9)-地山、に大別できる。

第59～61図のトーンで示した畦8の2～4層、畦9の1～5、8、13層は硬く締まりがとても良く、ツルハシでなければ掘れないような硬い層で、調査時は「整地層」と判断した。なお、花粉分析では畦8の3層からソバ属、ワタ属が検出され、畑の可能性がある(第5章8)。畦8の6層、畦9の4層はにぶい黄褐色を基調にしており、礫～中粒砂で構成され、赤褐色の鉱物を多く含む。江戸時代の遺物を含む。さらにその下の層畦8の褐色土7層や畦9のにぶい黄褐色土9層は締まりが良いが上位の層より劣る。礫～中粒砂で構成される。赤褐色の鉱物を含むが、上位の層よりは少ない。江戸時代の遺物を含む。

畦8、畦9の14層は明黄褐色の砂層。ほぼ均一の中粒砂～細粒砂で構成される。畦4で述べた砂丘起源の砂である。調査区の北側、C6、D6グリッドの北側に分布する。砂層は畦9の北側でなくなっており、この部分が砂丘の先端である。なお、砂丘の厚さは北側が厚く、機械で深く掘っても砂丘の下の層が出ないくらいであった。

畦8の位置するD6グリッドの北側では砂層の下に粘質の強い軟質の層が堆積していた(15～19層)。この層は礫～細粒砂で構成される。この層は酸素が少ないので青灰色を基調としていた。平安時代～鎌倉時代の遺物をわずかに含む。D6グリッドより北の砂層の下を機械で深く掘り下がったところ、青灰色の層が谷状に厚く堆積していることがわかった。

畦9の砂層の下は締りの良いにぶい黄褐色土15、18、30層がある。礫～中粒砂で構成される。赤褐色の鉱物を含む。遺物は少ない。この他軟質の暗褐色土29層がある。

畦9の34、36層は暗褐色から黒褐色の層。締まりは良い。上位では礫～中粒砂で構成され、角礫を含み、下位では中粒砂や細粒砂～シルトで構成される。

畦9の南側は、表土を撤去した後ににぶい黄褐色土2、3層が堆積する。締りがとても良く、ツルハシが必要であった。これらの層はその下のにぶい褐色土19層やにぶい黄褐色土20層を削平しており、畦9の南端では地山の上まで2、3層の削平が及んでいた。

**畦10 (GG' : 第58図下)**

畦10は調査区の北側、砂層を除去した後に設定した。この部分では暗褐色土や黒褐色土は存在せず、礫混じりの層が堆積していた。暗青灰色土3b層は褐色土3a層との間に鉄分が付着しており、還元した環境にあったことを示唆する。014溝の埋土ににぶい黄褐色土6層は明黄褐色土7層や橙色土

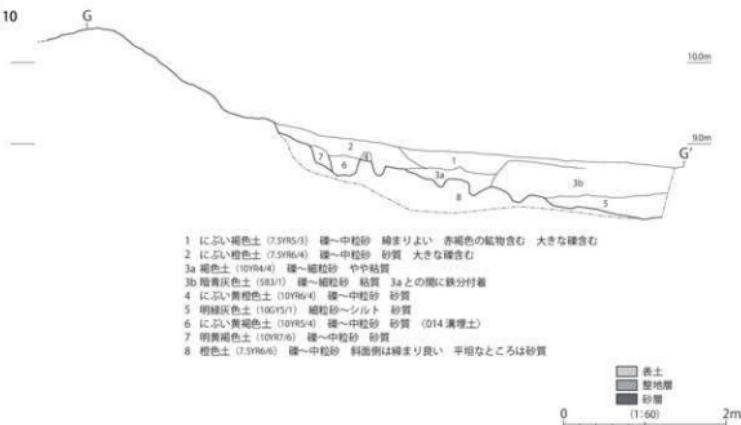
## 畦 6



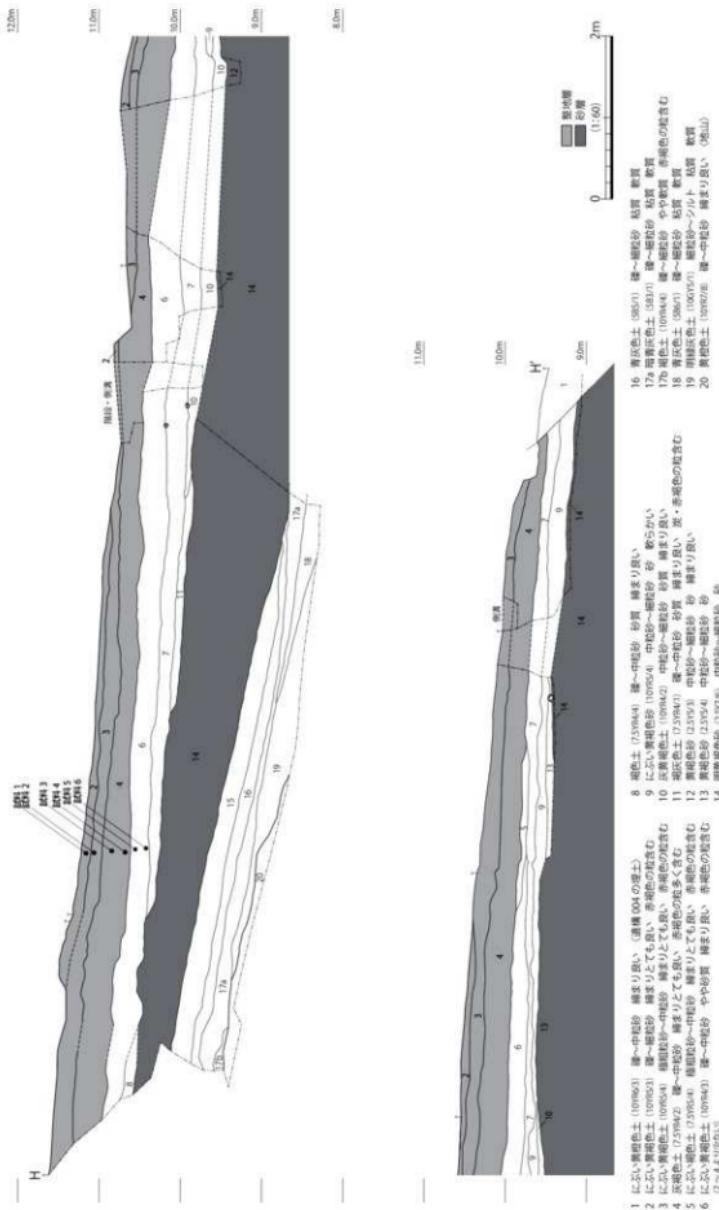
## 畦 7



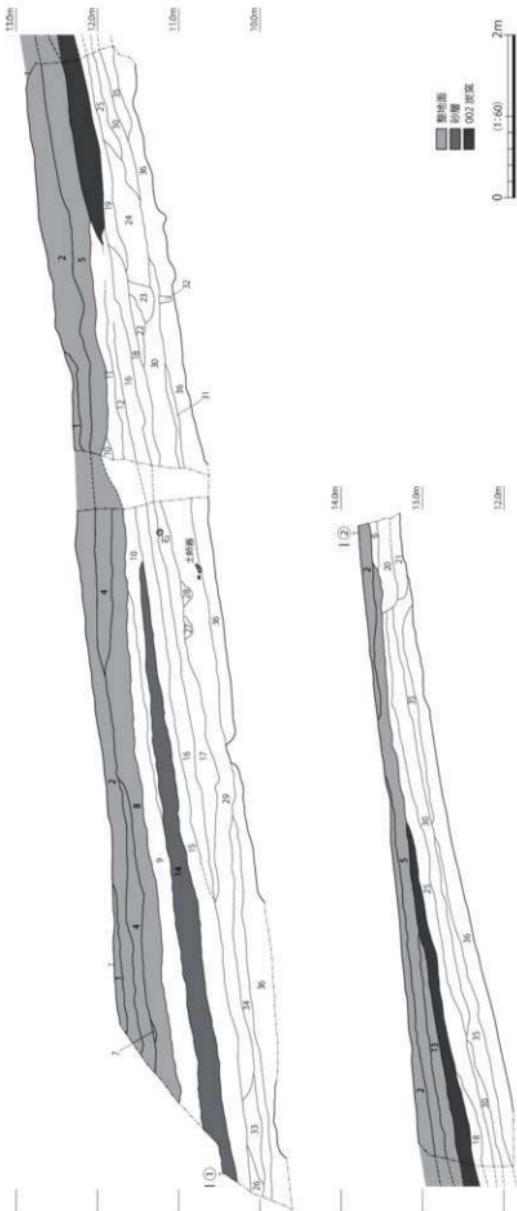
## 畦 10



第58図 畦6・畦7・畦10土層図



第59図 高丸土層図



1. 黄褐色土 (10YR5/6) 墓一中段部 墓よりとも良い、表面の粘土を含む  
2. にじる黄褐色土 (10YR5/2) 墓一中段部 粘土よりも多く含む  
3. にじる黄褐色土 (10YR4/2) 墓一中段部 粘土よりも多く含む  
4. にじる黄褐色土 (10YR4/2) 墓一中段部 粘土よりも多く含む  
5. 黄褐色土 (10YR5/2) 墓一中段部 墓よりとも良い、表面の粘土を含む  
6. 黄褐色土 (10YR5/2) 墓一中段部 墓よりとも良い、表面の粘土を含む  
7. 黄褐色土 (10YR5/2) 墓一中段部 墓よりとも良い、表面の粘土を含む  
8. 黄褐色土 (10YR5/2) 墓一中段部 墓よりとも良い、表面の粘土を含む  
9. にじる黄褐色土 (10YR4/2) 墓一中段部 墓よりとも良い、やや砂質  
10. 黄褐色土 (10YR5/2) 墓一中段部 墓よりとも良い、表面の粘土を含む  
11. にじる黄褐色土 (10YR4/2) 墓一中段部 粘土より良い、表面の粘土を含む  
12. 黄褐色土 (10YR5/2) 墓一中段部 墓より良い、褐色の粘土物多く含む  
13. 黄褐色土 (10YR5/2) 墓一中段部 粘土よりも良い、褐色の粘土物多く含む  
14. 黄褐色土 (10YR5/2) 墓一中段部 粘土よりも良い、褐色の粘土物多く含む  
15. にじる黄褐色土 (10YR4/2) 墓一中段部 墓より良い、表面の粘土を含む  
16. 黄褐色土 (10YR5/2) 墓一中段部 墓より良い、表面の粘土を含む  
17. 黄褐色土 (10YR5/2) 墓一中段部 墓より良い、表面の粘土を含む  
18. にじる黄褐色土 (10YR5/2) 墓一中段部 墓より良い、表面の粘土を含む  
19. にじる黄褐色土 (10YR5/2) 墓一中段部 墓より良い、表面の粘土を含む  
20. にじる黄褐色土 (10YR4/2) 墓一中段部 墓より良い、表面の粘土を含む  
21. 黄褐色土 (10YR5/2) 墓一中段部 墓より良い、表面の粘土を含む  
22. 黄褐色土 (10YR5/2) 墓一中段部 墓より良い、表面の粘土を含む  
23. 黄褐色土 (10YR5/2) 墓一中段部 墓より良い、表面の粘土を含む  
24. にじる黄褐色土 (10YR4/2) 墓一中段部 墓より良い、表面の粘土を含む  
25. 黄褐色土 (10YR5/2) 墓一中段部 墓より良い、表面の粘土を含む  
26. 黄褐色土 (10YR5/2) 墓一中段部 墓より良い、表面の粘土を含む  
27. 黄褐色土 (10YR5/2) 墓一中段部 墓より良い、表面の粘土を含む  
28. 黄褐色土 (10YR5/2) 墓一中段部 墓より良い、表面の粘土を含む  
29. 黄褐色土 (10YR5/2) 墓一中段部 墓より良い、表面の粘土を含む  
30. 黄褐色土 (10YR5/2) 墓一中段部 墓より良い、表面の粘土を含む  
31. 黄褐色土 (10YR5/2) 墓一中段部 墓より良い、表面の粘土を含む  
32. 黄褐色土 (10YR5/2) 墓一中段部 墓より良い、表面の粘土を含む  
33. 黄褐色土 (10YR5/2) 墓一中段部 墓より良い、表面の粘土を含む  
34. 黄褐色土 (10YR5/2) 墓一中段部 墓より良い、表面の粘土を含む  
35. 黄褐色土 (10YR5/2) 墓一中段部 墓より良い、表面の粘土を含む  
36. 黄褐色土 (10YR5/2) 中位分シルト 粘質壤土 壤土より良い、表面の粘土を含む

第50回 畳9土壤図 1

8層とよく似た土質で、わずかな色の違いで分層した。

#### 【調査期北側の土層まとめ】

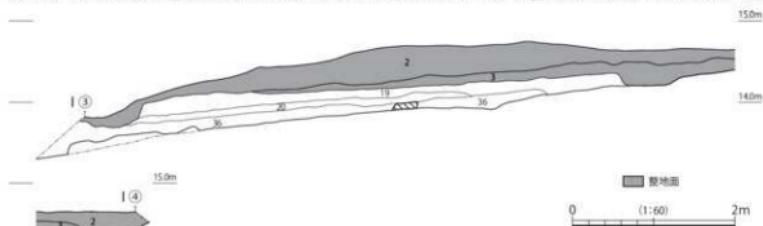
砂丘の砂を畦4、6、7、8、9でそれぞれ確認した。また、暗褐色土や地山の上で確認した黒褐色土、上位で確認した硬く締まる層を確認し、土色を比較して対応する第14表を作成した。なお、畦8と畦9は南北方向に位置しているが、特に畦8の14層の砂の下位は還元が著しいことに加えて軟質で、畦9との比較を行うことは難しかった。

#### 2 調査区南側：丘陵部の斜面

##### 畦11 (JJ' : 第64図)

畦11は調査区の南側、落ち込みの傾斜に沿って約30mの長さで設定した。

斜面部の表土である1層は暗褐色で未分解の有機質を多く含む。その下にぶい黄褐色土2層は砂質である。標高29.5m付近、畦13との交点周辺では粘質の灰黃褐色土4層が段状に大きく削り込むような形になっている。これは段状に加工した畑の跡と考えられる。次に062溝(6~8層)、063溝(9、10層)が掘り込まれる。062溝の7層や8層はその下の層や地山由来の土を含み、周囲の土



第61図 畦9土層図2

第14表 土層対応表

畦2	畦3	畦4	畦9	畦8	畦6	畦7	備考
2層	2層			1層		2層	
3層	3a層	2層	2層	2層	3層		軟質
	4層	4層	4層	4層		3層	硬く締まる
5層			5層				硬く締まる
	5層	8層	8層	6層		4層	硬く締まる
				7層		5層	硬く締まる
	10層		9層	8層			硬く締まる
				10層		6層	硬く締まる
				12層		8層	
6層			10層				砂層
		11層	14層	14層	5層	9層	砂層
		21層	15層				
7層			17層				
9b層			29層				暗褐色土
14層			30層				
		22層	34層				
16層			35層				
18層	11層	24層	36層				黒褐色土
		26d層		20層			

とは大きく土質が異なる。地山由来の土を含むことから、遺構を埋め戻した可能性がある。

次に褐色土16、17層やオリーブ褐色土20層が堆積する。これは下位の暗褐色土の堆積した環境とは異なり、乾燥して土の流出しやすいような環境の可能性がある。この他明黄褐色土12、13層やにぶい黄橙色土15層、にぶい黄褐色土18、19層が薄く堆積しており、互層状のようになっている。断面では土層を細分できるが平面では土色や土質の違いは分からなかった。29層と21、24、26層は暗褐色土を呈してはいるが、29層が比較的均質なのに対して、24層は暗褐色の濃淡がある。暗褐色土29層は締りが良く砂質である。粘質の地山とは土質が異なるため、堆積環境が大きく異なると考えられる。

地山の上には灰黄褐色土31層が堆積する。これは他の層とは異なり、粘質である。炭を含むことから、地山上で何かの活動が行われたと考えられる。丘陵中部の平坦部にはピットが複数確認できることと関連がある。なお、自然科学分析では、周間に草原が広がっていることや土層の黒色の由来が微粒炭であることから焼き烟の可能性が示唆された(第5章8)。

#### 畦16 (NN' : 第66図上から2番目)

畦16は平坦部と斜面の境に位置する。畦11のにぶい黄褐色土と褐色土の互層状のような堆積の広がりを把握するために掘削中に設定したが、結果として互層状の堆積を確認することはできなかつた。畦11と似た堆積をしており、上からにぶい黄褐色土、褐色土、暗褐色土が堆積していた。地山と暗褐色土の間には灰黄褐色土が堆積していた。この点も畦11の斜面上方と同様である。なお、調査区の東側の地山は粘質の土ではなく、岩盤の崩れた礫を多く含むにぶい褐色土であった。

#### 畦13 (OO' : 第65図)

畦13、15は畦11に直交して設定した。

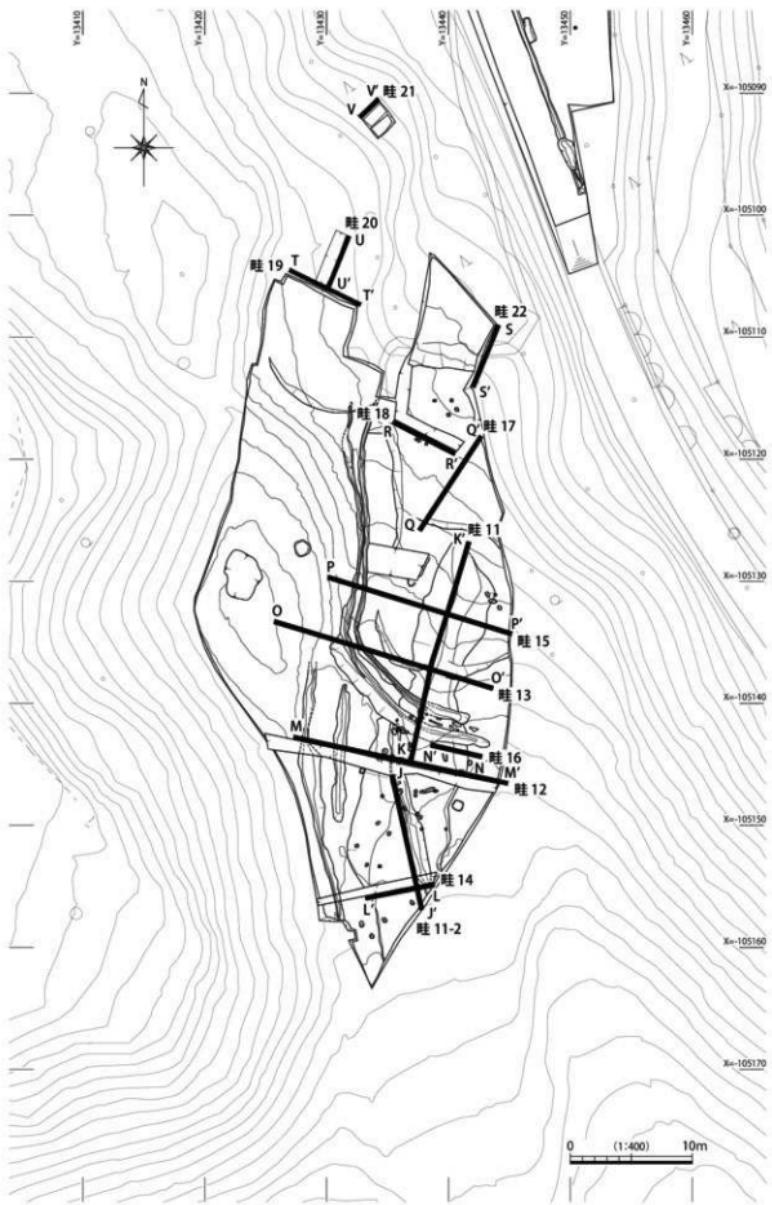
畦13は調査区の南側、丘陵部から東へのびる土層である。丘陵部では表土であるにぶい黄褐色土1a層の下は地山の崩落した土である明黄褐色土2層が、特に傾斜の急な部分で堆積していた。丘陵部下方のにぶい黄褐色土4層、にぶい黄橙色土5層も地山由来と考えられる。斜面では表土である暗褐色土1c層の下には灰黄褐色土7層が堆積しており、丘陵部とは様相が異なる。その下の褐色土8層の上位からは中世の土器R8-37が出土した。平安時代末～鎌倉時代に属すると考えられる。その下には暗褐色土10、11層が堆積する。10層に比べて11層は粘質で、他の暗褐色土とは様相が異なる。この部分では落ち込みを掘り上げるとレンズ状というよりは幅の広いV字に近い形をしていた。

#### 畦15 (PP' : 第67図)

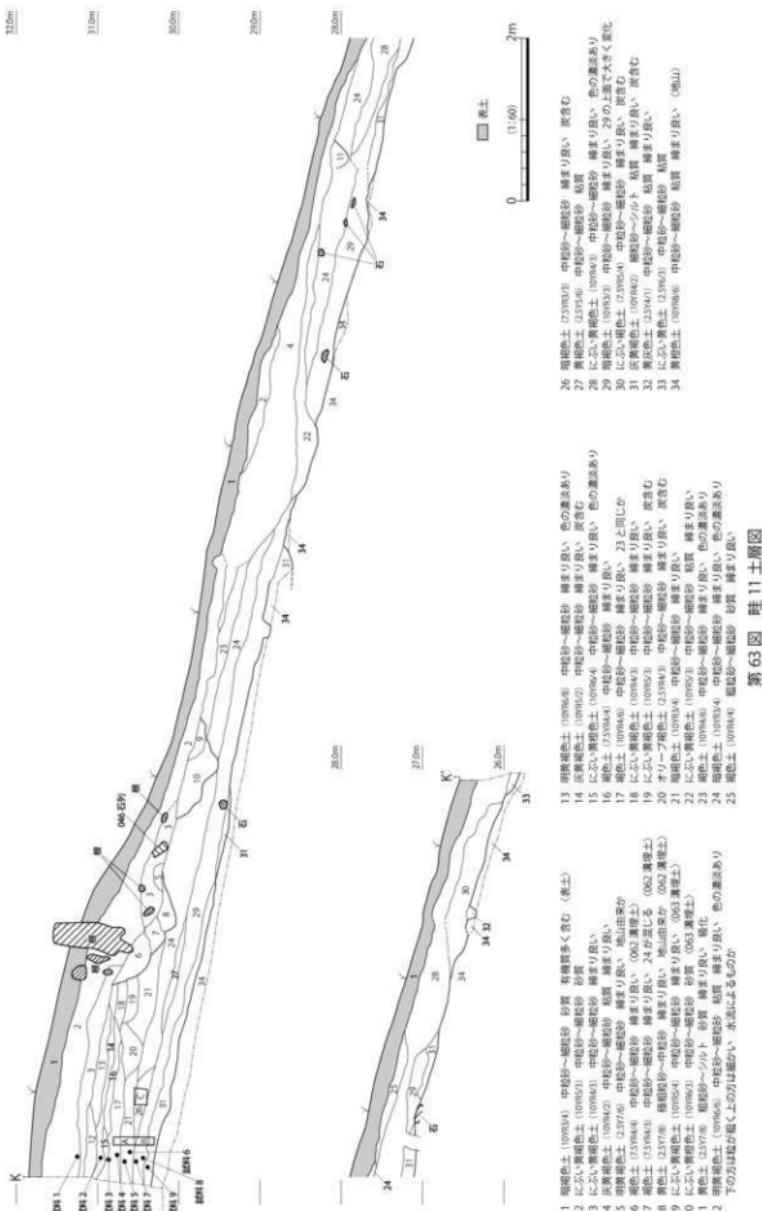
畦15は調査区の南側、畦13の北側に設定した。表土として東側には灰黄褐色土3層があつたが、丘陵部のある西側では地山の真砂を多く含んだにぶい黄橙色土2層が堆積し、その下は地山であつた。丘陵部下方の062溝、063溝の周りでは軟質の土が堆積していた。落ち込みの部分には暗褐色土16、17層が堆積しており、畦12や畦13と同様であった。

#### 畦17 (QQ' : 第66図下から2番目)、畦18 (RR' : 第66図下)

畦17、18は斜面下方の土層である。にぶい黄橙色土(畦17の6層、畦18の1層)やにぶい橙色土(畦18の7層)は締りの良い土層で、地山由来の土を含むため赤みの強い土色である。これらから上位の層は盛土と考えられる。地山の上の暗褐色土畦18の11層は斜面のさらに下方へ続き、畦22の6層の部分まで続く。範囲は畦17よりも西側に分布するため、畦17には見られない。また、この暗褐色土はその上のにぶい黄褐色土(畦17の8、9層、畦18の9層)に削られていることも、暗褐色土の範囲



第62図 土層図作成位置2



第63図 計11 土壌図

と関連する。その下の地山である黄橙色土や橙色土は赤みの強い土色である。粘質で、特に雨の後はよく滑る。なお、調査区の北側は崖状に傾斜が急になる。

#### 畦19 (TT : 第68図上)、畦20 (UU' : 第68図上から2番目)、畦21 (VV' : 第68図下から2番目)

畦19、20の部分は先行して表土を掘削したため、表土は土層図に記入できていない。土層図は表土下の灰黄褐色土から記している。この灰黄褐色土やその下のにぶい黄橙色土は砂質である。砂質の橙色土が30~40cmの厚さで堆積していた。なお、畦19の下方では粘質の灰黄褐色土やにぶい橙色土が堆積していた。これらは谷状の部分に堆積した層である。畦21は畦20の下方に設定した。表土は有機質を多く含む暗灰黄色土である他は畦19、20とよく似ていた。畦19~21の周辺から遺物はほとんど出土しなかった。

なお、畦20の観察から畦20と市道の間には遺構がない可能性が高いと想定し、畦22を設定して遺構がないことを確認した。

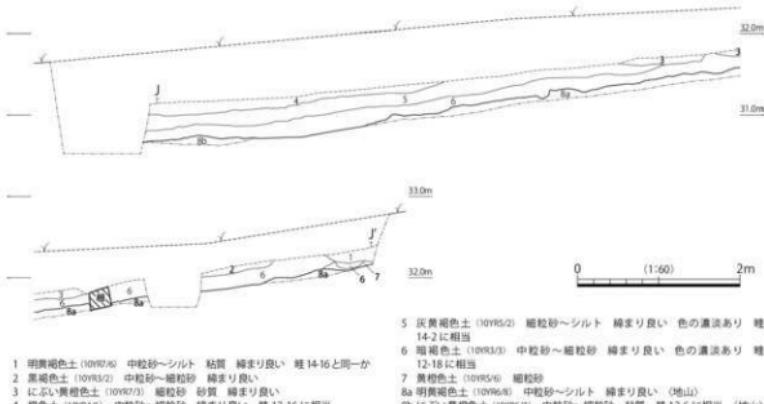
#### 畦22 (SS' : 第68図下)

畦22は調査区の南側、市道に向かう傾斜の部分に設定した。この部分は調査前から傾斜が急な崖から傾斜が緩く平坦になっており、この部分の堆積を把握するために設定した。傾斜の下方表土1a層は有機質が未分解であるため黒褐色である。傾斜の上方表土1b層の下には盛土と考えられる2、3層が堆積していた。傾斜の下方は一部ににぶい黄橙色土5層が堆積している部分があったが、表土の下にすぐ地山が確認できた部分があった。傾斜の部分にはにぶい黄褐色土4層が堆積していた。これは崩落した土であると考えられる。傾斜の上方では暗褐色土6層が堆積していた。これは畦18の11層に対応し、表土や盛土に削られている。

### 3 調査区南側：平坦部

#### 畦11-2 (JJ' : 第64図)

丘陵中部の平坦部は当初南北から北東-南西に振った形で畦を設定したが、落ち込みが調査区の南端で東へ屈曲していることから、調査が進んだ段階でこの部分に畦を北西-南東方向に畦11-2を



第64図 畦11-2 土層図



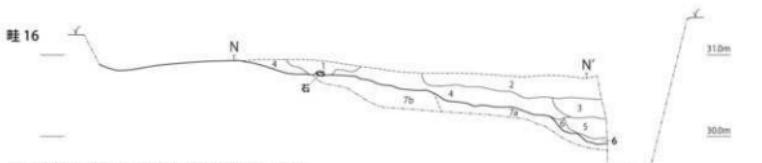
第13土壤図

## 畦 14



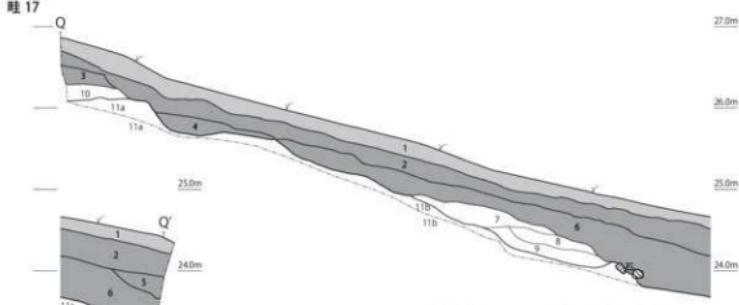
- 1a 黄褐色土 (10YR8/8) 中粒砂～細粒砂 粘質 水平方向の堆積 (032溝)  
 1b 明黄褐色土 (10YR7/6) 中粒砂～シルト 粘質 水平方向の堆積 (032溝)  
 2 灰黄褐色土 (10YR5/2) 細粒砂～シルト 締まり良い  
 3 細褐色土 (10YR3/3) 細粒砂～シルト 締まり良い
- 4 にぶい黄褐色土 (10YR4/4) 細粒砂～シルト 粘質  
 5 褐色土 (10YR4/4) 細粒砂～シルト 粘質 (042ビット埋土)  
 6 にぶい黄褐色土 (10YR5/3) 細粒砂～シルト 粘質  
 7 灰黄褐色土 (10YR4/2) 細粒砂～シルト 締まり良い  
 8 にぶい黄褐色土 (10YR7/4) 細粒砂～シルト 粘質  
 9 黄褐色土 (10YR7/8) 細粒砂～シルト 粘質 (地山)

## 畦 16



- 1 黄褐色土 (2.5Y5/4) 細粒砂～細粒砂 締まりよい 締含む  
 2 にぶい黄褐色土 (10YR4/3) 粗粒砂～細粒砂 砂質 締まりよい 带 11-18層  
 3 細褐色土 (10YR3/4) 中粒砂～細粒砂 砂質 締まりよい 带 11-21層  
 4 褐色土 (10YR4/4) 中粒砂～細粒砂 砂質 締まりよい 締、底含む  
 5 細褐色土 (10YR3/3) 中粒砂～細粒砂 砂質 締まりよい 带 11-29層
- 6 灰黄褐色土 (10YR4/2) 細粒砂～シルト 粘質 締まりよい 带 11-31層  
 7a 明黄褐色土 (10YR6/6) 中粒砂～細粒砂 粘質 (地山)  
 7b にぶい黄褐色土 (2.5Y5/4) 中粒砂～細粒砂 粘質 岩盤の崩れた隙多く含む (地山)

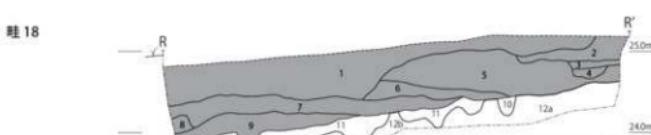
## 畦 17



- 1 にぶい黄色土 (2.5Y6/3) 中粒砂～細粒砂 砂質 有機質多く含む  
 2 にぶい黄色土 (10Y6/6) 中粒砂～細粒砂 締まり良い  
 3 棕色土 (7.5Y6/6) 細粒砂～シルト 粘質 締まりよい 地山由来 成土土?  
 4 にぶい黄色土 (10Y6/4) 中粒砂～細粒砂 締まり良い 粘質 (埋土)  
 5 明黄褐色土 (2.5Y6/6) 中粒砂～細粒砂 粘質 粘質

- 6 にぶい黄褐色土 (10Y7/4) 中粒砂～細粒砂 締まり良い  
 7 にぶい褐色土 (7.5Y5/4) 中粒砂～細粒砂 締まり良い  
 8 にぶい黄褐色土 (10Y9/4) 中粒砂～細粒砂 締まり良い 締含む  
 9 にぶい黄褐色土 (10Y9/3) 中粒砂～細粒砂 締まり良い 締含む  
 10 明黄褐色土 (10Y7/7) 細粒砂～シルト 粘質 粘質  
 11a 黄褐色土 (7.5Y7/8) 締まり良い (地山)  
 11b 黄褐色土 (10Y8/6) 締まり良い 粘質 (地山)

## 畦 18



- 1 にぶい黄褐色土 (10Y6/3) 中粒砂～細粒砂 締まり良い  
 2 棕色土 (7.5Y6/6) 中粒砂～細粒砂 締まり良い  
 3 明黄褐色土 (10Y7/6) 細粒砂～シルト  
 4 明黄褐色土 (10Y7/6) 粗粒砂～細粒砂 下から細粒砂～粗粒砂～中粒砂  
 5 棕色土 (7.5Y6/6) 中粒砂～細粒砂 締まり良い 地山由来か

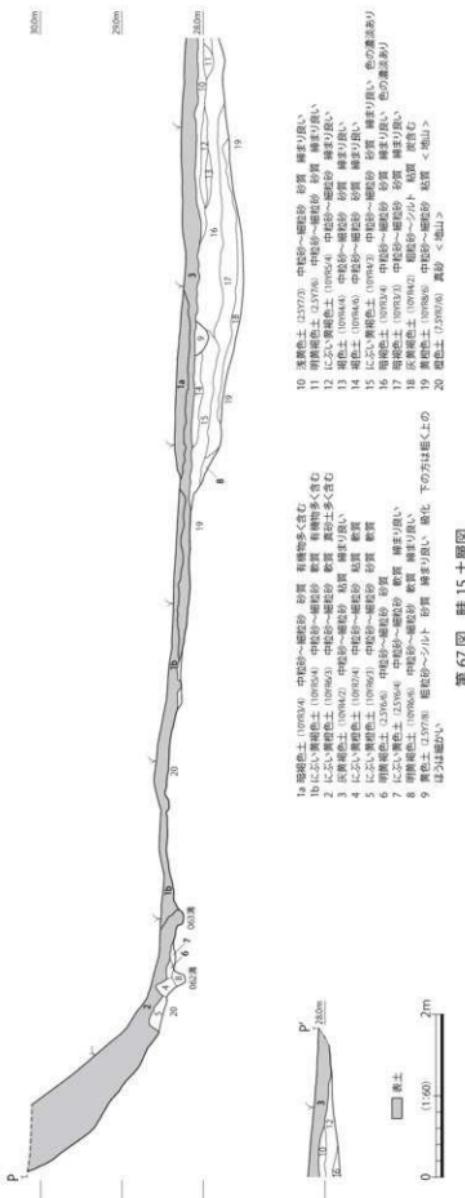
- 6 にぶい褐色土 (7.5Y6/4) 中粒砂～細粒砂 締まり良い  
 7 にぶい褐色土 (7.5Y5/4) 中粒砂～細粒砂 締まり良い  
 8 黄褐色土 (10Y7/6) 中粒砂～細粒砂 締まり良い  
 9 にぶい黄褐色土 (10Y8/4) 中粒砂～細粒砂 締まり良い  
 10 明黄褐色土 (10Y7/6) 中粒砂～細粒砂 締まり良い  
 11 黄褐色土 (7.5Y7/8) 中粒砂～細粒砂 締まり良い  
 12a 棕色土 (7.5Y7/8) 締まり良い 粘質 (地山)  
 12b 黄褐色土 (10Y8/6) 締まり良い 粘質 (地山)

表土  
潜土

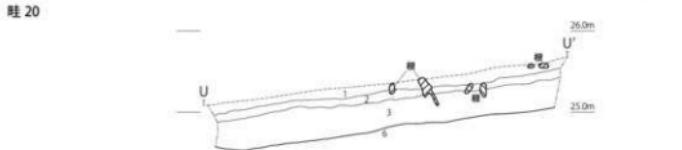
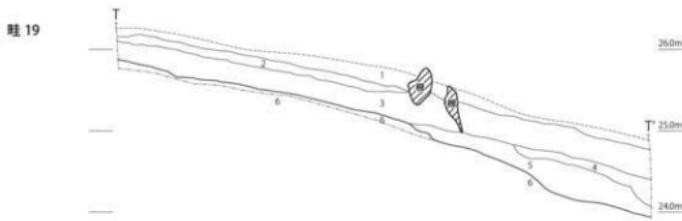
(1:60)

0 2m

第66図 畦14・畦16・畦17・畦18土層図



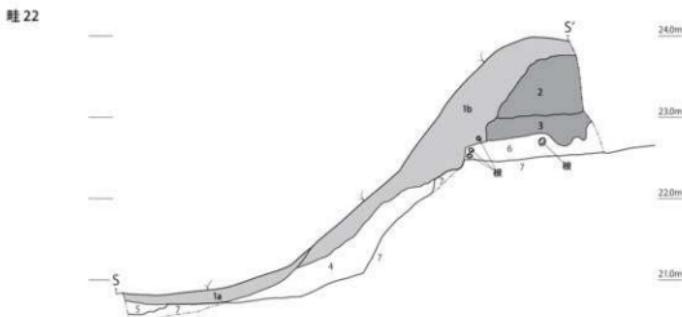
第67図 薙15土壤図



- 1 底黄褐色土 (10YR5/2) 中粒砂～細粒砂 砂質  
 2 にふい黄褐色土 (10YR7/4) 中粒砂～細粒砂 地山混じり  
 3 橙色土 (7.5YR6/6) 中粒砂～細粒砂 砂質
- 4 底黄褐色土 (10YR4/2) 細粒砂～シルト 粘質  
 5 にふい黄褐色土 (7.5YR6/4) 細粒砂～シルト 粘質  
 6 黄褐色土 (10YR8/6) 硬い 岩盤 (地山)



- 1 褐暗褐色土 (2.5Y5/2) 有機物多く含む 砂質 (表土)  
 2 橙色土 (7.5YR6/6) 細粒砂～シルト 粘質  
 3 明黃褐色土 (10YR7/6) 中粒砂～細粒砂 硬く締まる  
 4 にふい黄褐色土 (10YR7/4) 中粒砂～細粒砂 砂質 硬む (地山)  
 5 黄褐色土 (10YR8/6) 中粒砂～細粒砂 硬く締まる 硬む (地山)

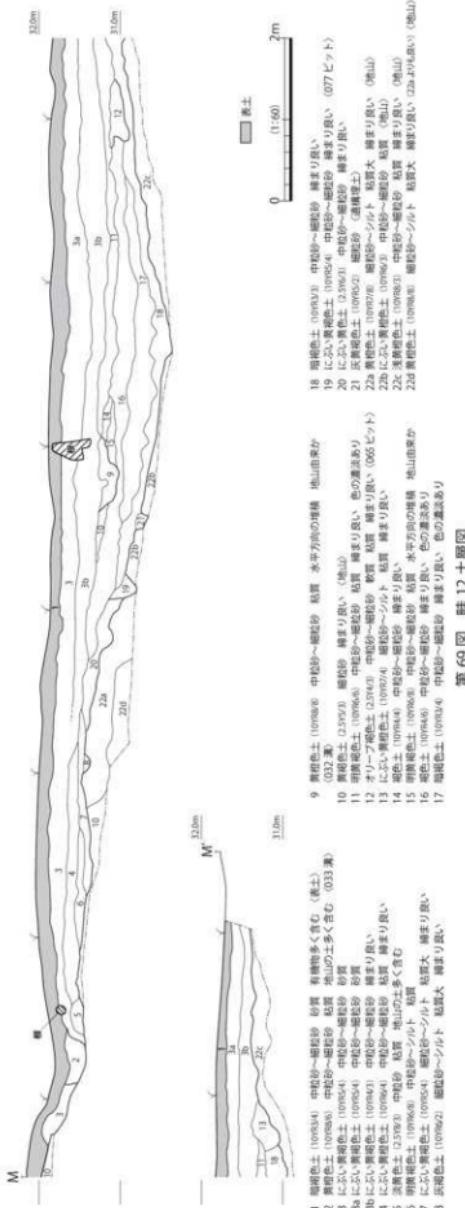


- 1a 黒褐色土 (2.5Y3/1) 根などの有機質が未分解のまま多い (表土)  
 1b 黃褐色土 (2.5Y5/4) 中粒砂～細粒砂 やや粘質 (表土)  
 2 にふい黄褐色土 (10YR6/4) 中粒砂～細粒砂 締まり良い (盛土)  
 3 明黃褐色土 (10YR6/6) 中粒砂～細粒砂 やや粘質 底含む (盛土)
- 4 にふい黄褐色土 (10YR5/4) 中粒砂～細粒砂 やや粘質 締合む  
 5 にふい黄褐色土 (7.5YR6/4) 中粒砂～シルト 粘質  
 6 黑褐色土 (10YR3/4) 中粒砂 やや粘質 底含む  
 7 橙色土 (7.5YR6/6) 締まり良い (地山)

■ 表土  
■ 盛土

0 (1:60) 2m

第68図 看19・看20・看21・看22土層図



第69図 肘12土壤図

設定した。現状では北側の層が古く南側が新しいことになるが、畦11-2を設定した段階では北側で調査が進んでいたこと、地山が北へ向かって傾斜していることによる可能性がある。地山の上の暗褐色土6層は落ち込みに堆積した層である。平坦部での層の厚さは約20cmでほぼ均一である。

#### 畦12 (MM': 第69図)

畦12は畦11に直交して設定した。平坦部と斜面の傾斜変換点に位置する。表土は枝などの未分解の有機質を多く含んでおり、砂質で暗褐色であった。表土下の2層は033溝の埋土で、地山の土を多く含むことから粘質であり、確認しやすかった。3層は、西側では分けることができなかったが、東側では砂質(3a)か繊りが良い(3b)かで分けることにした。黄橙色土9層は畦14の部分で述べた032溝の埋土で、水平方向の堆積を確認した。明黄褐色土15層も粘質で水平方向の堆積を示す。褐色土16層と暗褐色土17層では土層中に色の濃淡がある部分を確認した。層を掘削する際に注意して掘り下げたが、色の濃淡の面的な広がりを確認することはできなかった。暗褐色土18層は落ち込みの底の部分に堆積した層であり、弥生時代後期～古墳時代前期の土器がわずかに出土した。19層と21層は地山の上から掘り込んだビットの埋土である。にぶい黄色土20層は落ち込み西側の斜面に位置するが、色調から地山が崩落した土と考えられる。落ち込みの埋土を掘り上げるとゆるいレンズ状を示し、表土から地山までは最大で1.4mの深さがあった。

#### 畦14 (LL': 第66図上)

畦14は調査区の南端、平坦部に位置する。表土を約40cm掘り下げたところで畦を設定したため、表土部分を欠く。1a, 1b層は後述する032溝の埋土である。暗褐色土3層は落ち込みに堆積した層である。地山の上のにぶい黄褐色土4、6層、8層は粘質である。地山である黄橙色土は粘性が強い。

## 第4節 遺構

調査区の北側は砂丘の砂により遺構は少なく、後述する江戸時代以降の道路の他は遺構を確認することはできなかった。南側では炭窯やビットを確認した。

斜面では平坦部に比べ後世の変が大きく、斜面に円弧を描くような形で段状に掘削している部分が見られた。これは烟によるものと考えられる。

調査区の南西側の丘陵の部分は、表土の下がすぐに地山の部分が多く、048土坑がある他に遺構を確認することはできなかった。

遺構の名称はまず番号を001から検出した順に記し、次に遺構の性格を記し、「001溝」「032土坑」などと表記する。

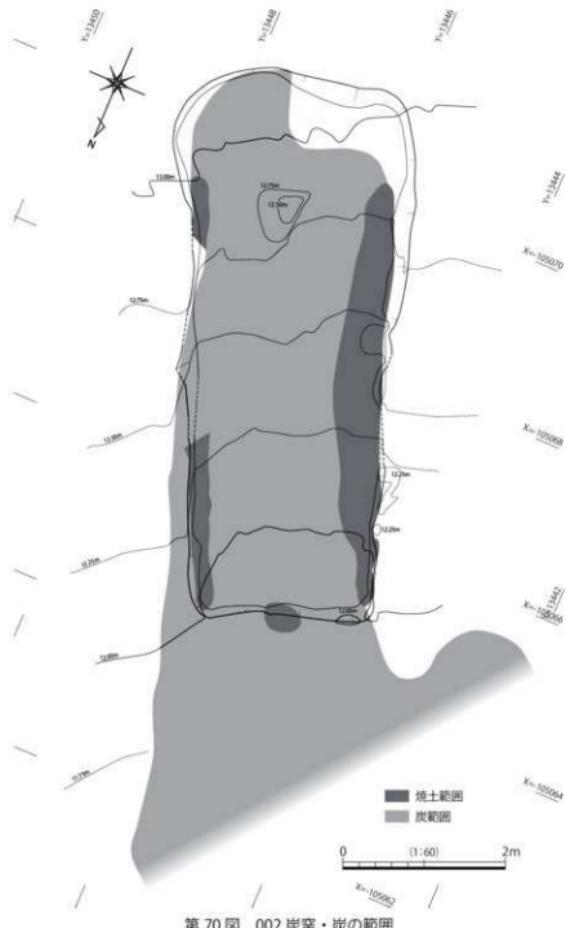
#### 002炭窯 (第70～72図)

畦2の部分を深く掘り下げたところ、硬く締まった整地層の下から焼土と炭を確認した。当初は遺構の性格が不明であったが、調査指導の参加者から伏せ焼き式の炭窯であるとの指摘を受けた(松尾2020)。R2年度調査区の南側、D7からD8グリッドに位置する。平面形は長楕円形である。標高12～13m、谷部の中ほどに位置する。等高線に直交する。締まりの良いにぶい黄褐色土(畦9の18層)やにぶい橙色土(畦9の25層)の上に築かれている。規模は、長さ約6.6m、幅約2.7m、検出面からの深さは最大で深さ約0.3mである。勾配は15～16%、約10度の傾斜である。南側では灰褐色土(畦9の5層)や褐色土(畦9の13層)に削平され浅くなっている。標高の低い側である北側が焚口と想定されるが、楕円形の焼土の存在や炭の広がりがあるにとどまる。側壁は床面から斜めに立ち上

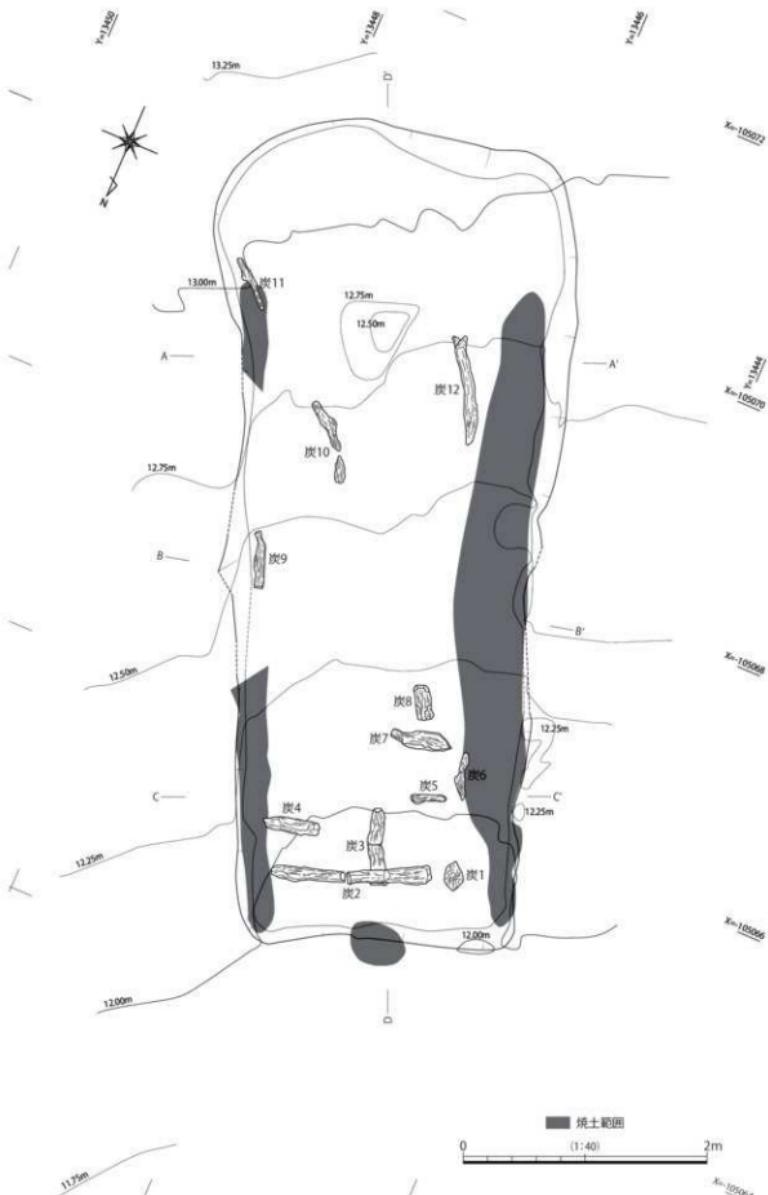
がり、顯著ではない。

埋土は炭層(4a、4b層)、焼土(7a、7b層)、堆積土(その他の層)に大別できる。炭層は遺構の全体に、焼土は遺構の長軸に沿って分布していた。西側の焼土が厚く、東側は小さい。焼土は焼けて硬く締まっていた。

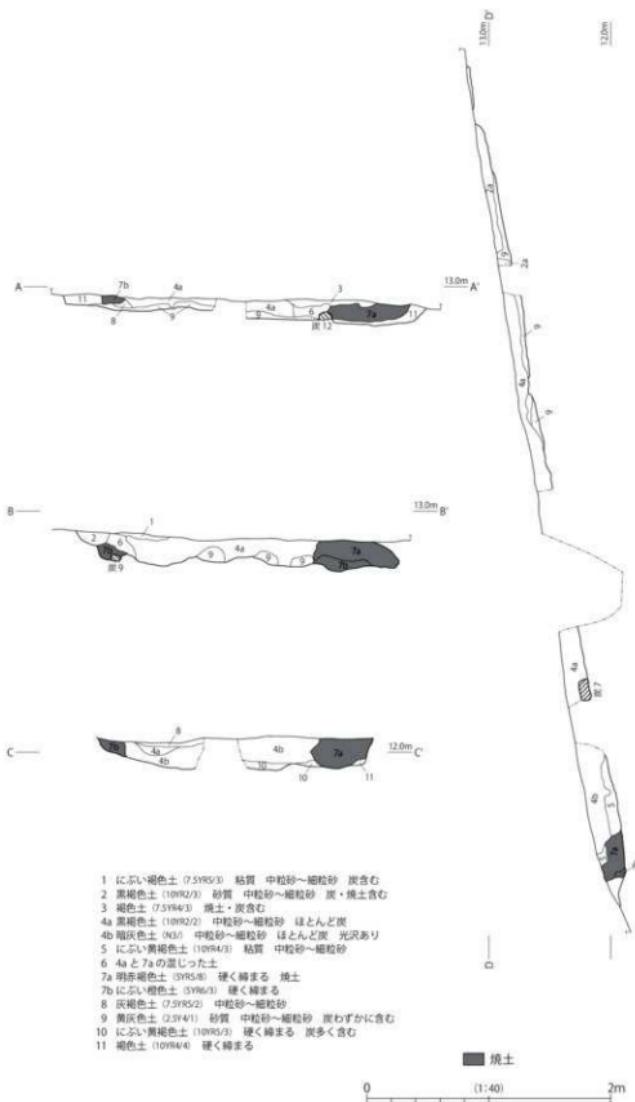
床面には取り残された炭が残っており、特に大きなものを第71図に示した。長軸に直交するものと並行するものがある。肉眼観察ではすべて環孔材であった。また、6点の炭化材の樹種を同定したところ、クヌギ節3点、コナラ節2点、エノキ属類似1点であった(第5章2(4))。遺構の下方には炭が分布しており、炭窯から掘り出した炭が分布していた。暗褐色土(畦9の16層)や黒褐色土(畦9の17層)である。遺構のすぐ下ではほとんどが炭であり、低い側ほど徐々に炭が少なくなっている。



第70図 002炭窯・炭の範囲



第71図 002炭窯・炭化材出土状況



第72図 002炭窪土層図

いた。この他に周囲に遺構を確認することはできなかった。

遺物は出土しなかった。遺構の下層は奈良・平安時代を下限とする遺物包含層であり、上層は直接の切り合いはないが砂丘の砂層よりも下で、江戸時代の整地層に削平されていることから、調査時は平安時代末～室町時代に属すると想定した。なお、AMS年代測定では、11世紀中頃～12世紀中頃という年代を得た(第5章3(5))。これらのことから、遺構の時期は平安時代後期(11～12世紀)と考えられる。

#### 014溝(第73図)

R2年度調査区の南側、D5からD7グリッドにかけて位置する。谷部の東側斜面に蛇行しながら南北方向へのびる。当初は一続きの溝と考えていたが、畦3では遺物包含層の下層に位置するのに対して畦4では包含層を切っていることから、切り合いのある溝と判断した。埋土は地山の土と区別が難しく、手ごたえの有無で埋土を判断する部分があった。先行する溝を014溝a、後出する溝を014溝bとして記述する。

014溝aは、現状で長さ約8m、最大幅0.8m、最大の深さ0.2mである。断面は半円形をしており、一部2段になっている。南北方向からやや西に向く。埋土は黄褐色土である。第73図のBB'の部分には拳大の礫が散乱していたが、礫があるのはこの部分だけであった。

014溝bは長さ約9m、最大幅約0.9m、最大の深さ約0.4mである。断面は逆台形に近い。南北方向からやや西に向かって弧を描く。第73図AA'より北の部分は遺構の検出が特に難しかった。畦4の周囲には埋土に拳大の角礫が多く見られた。埋土は黄褐色土である。

どちらの溝からも遺物は出土しなかった。

#### 034土坑(第74図左)

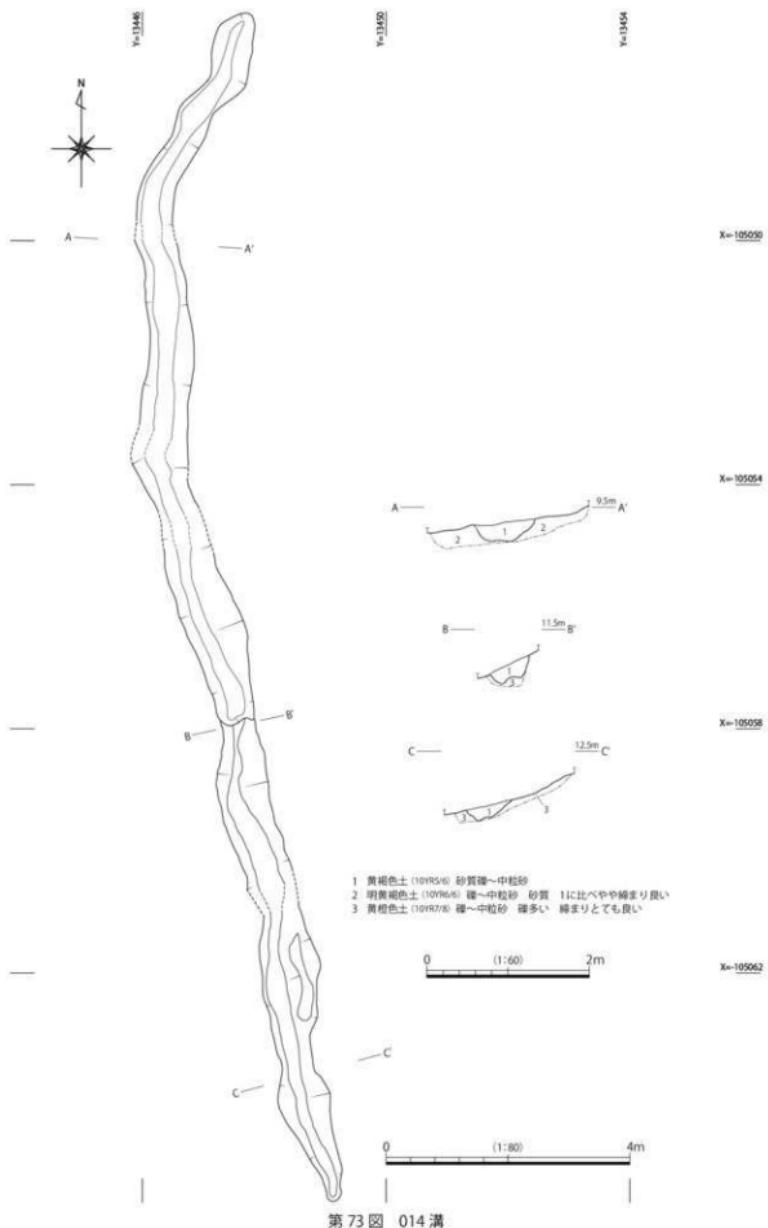
調査区の南側、D15グリッドに位置する。落ち込みのすぐ東側に位置し、落ち込みとは切り合わない。規模は長軸短軸ともに約1m弱、平面形は隅丸方形、断面は箱状である。埋土は3層で、特に遺構の底部に堆積する2層はほぼ炭の層である。また、薄い板状の炭が遺構の底部にあることや遺構の底や壁の一部に火を受けた跡があることから、炭窯に関連する遺構であると考えられる。なお、この上面から須恵器の蓋87-24が出土していることから、遺構の時期は奈良・平安時代(7世紀末～8世紀前半：石見8～9a期)と考えられる。

#### 048土坑(第74図右)

調査区の南西側、F13グリッドに位置する。他の遺構とやや離れた丘陵の斜面に位置する。規模は長軸短軸約1.3m、平面形は円形、断面はほぼ平坦な底部から台形状に急角度で立ち上がる。埋土は1層で、地山由来の礫を多く含んでいた。遺物は出土しなかった。周囲に他の遺構がないこととあわせて、時期は不明である。

#### 001溝(第75図)

調査区の中央東側、C5からC8グリッドに位置する。東側の小丘陵に沿い、平面形は西側へ凸の弧状である。長さ約25m、上面の幅は最大で約2.5mである。南側と北側の断面は二つの溝があるような「W」状であり、第75図の土層では埋土に違いは見られなかったが、北側では別々の細い溝に分かれるようであるが、斜面に位置しており残りが悪く、不明である。北側の部分は地山との境が徐々になくなる形であった。後述する003遺構と同一の性格と考えられる。平面図で見ると一見014溝と並ぶように見えるが、検出した高さが違うため、014溝とは伴わない。



- 1 黄褐色土 (10YR5/6) 砂質壤～中粒砂
- 2 明黄褐色土 (10YR6/6) 硫～中粒砂 砂質 1に比べやや締まり良い
- 3 黄褐色土 (10YR7/6) 硫～中粒砂 締まり多い 締まりとても良い

## 003遺構(第76図)

調査区の北東側、C2、C3グリッドに位置する。砂層の掘削中に平坦でやや硬い面や東側の歓状の隆起を確認し、面的に広げた結果第76図の形になった。図中のトーンで示した部分は斜面が平坦になってやや硬い範囲であり、「路盤」の可能性があると判断した。幅は約3mである。歓状の部分は南東から北西方向にのびたのち北東方向へ屈曲する。北側の部分にも硬く締まった面があったと考えられるが、検出することはできなかった。3層の部分が硬く締まっていた。

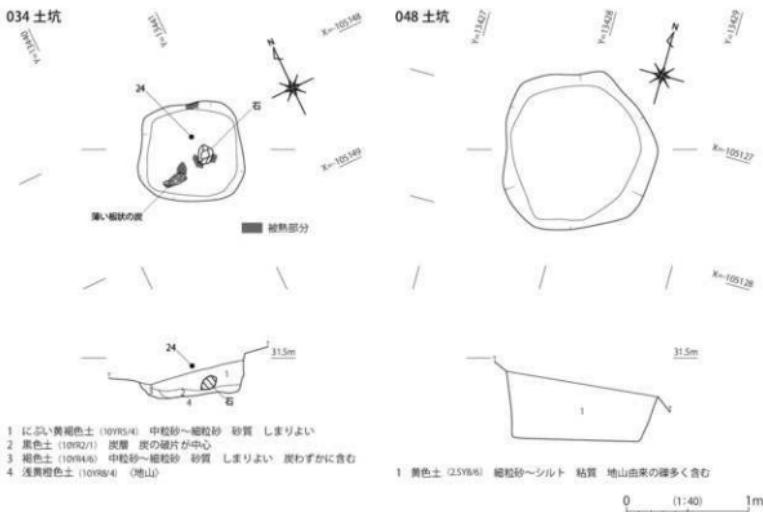
江戸時代の遺物が周辺から出土した。明治時代の地籍図にはこの付近に「里道」が通っていることから、江戸時代以降の道路跡と考えられる。

## 032溝(第77図)

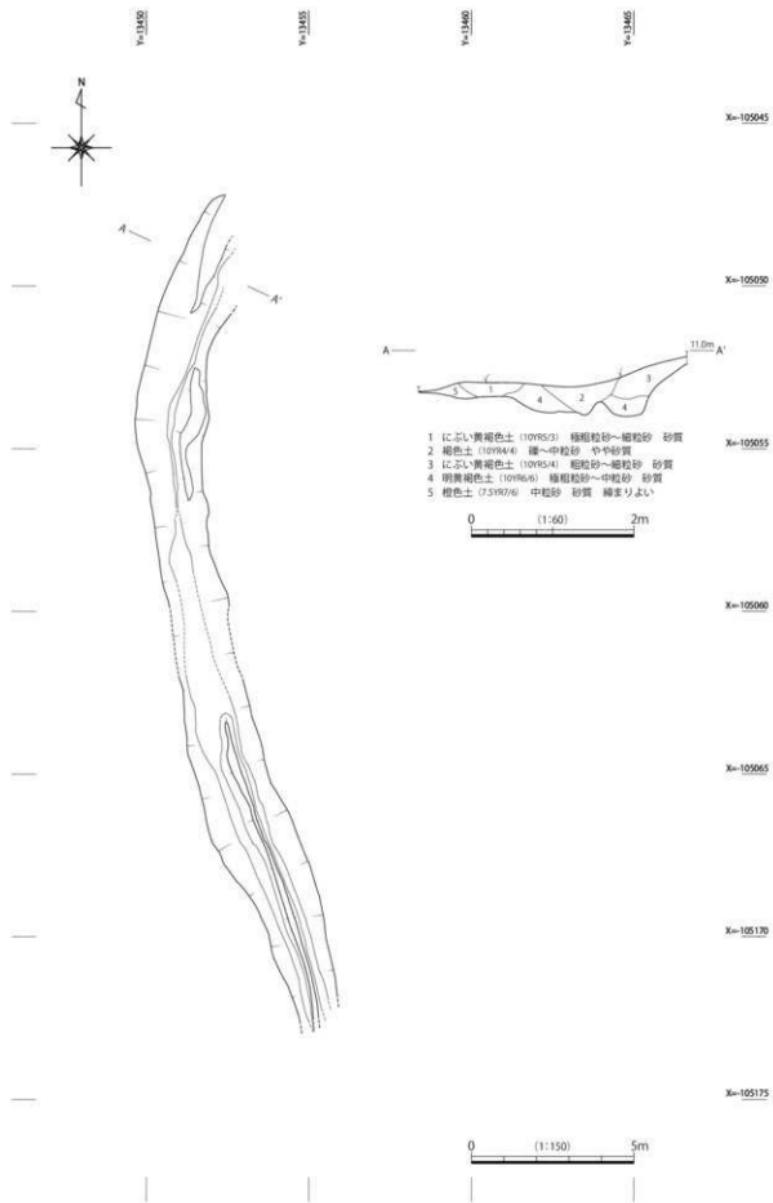
調査区の南端、E15からE16にかけて位置する。調査区の壁からほぼ直線的にのび、北側は溝063に切られる。現状での長さ約15m、幅約1m、深さ0.2mである。断面はレンズ状である。埋土は南側の畦14の部分では2層に分かれ、南側では粘質の明黄褐色土が堆積し、次いで粘質の黄橙色土が堆積する。畦12の部分では埋土は黄橙色土のみになる。埋土はともに良く締まっており水性堆積を示す水平方向の葉理が発達する。なお、埋土は周囲の土色とは異なり、地山に由来すると考えられる。当初は「盛土」と考えたが、掘り込みがあることから溝として報告する。

## 062溝・063溝(第78図)

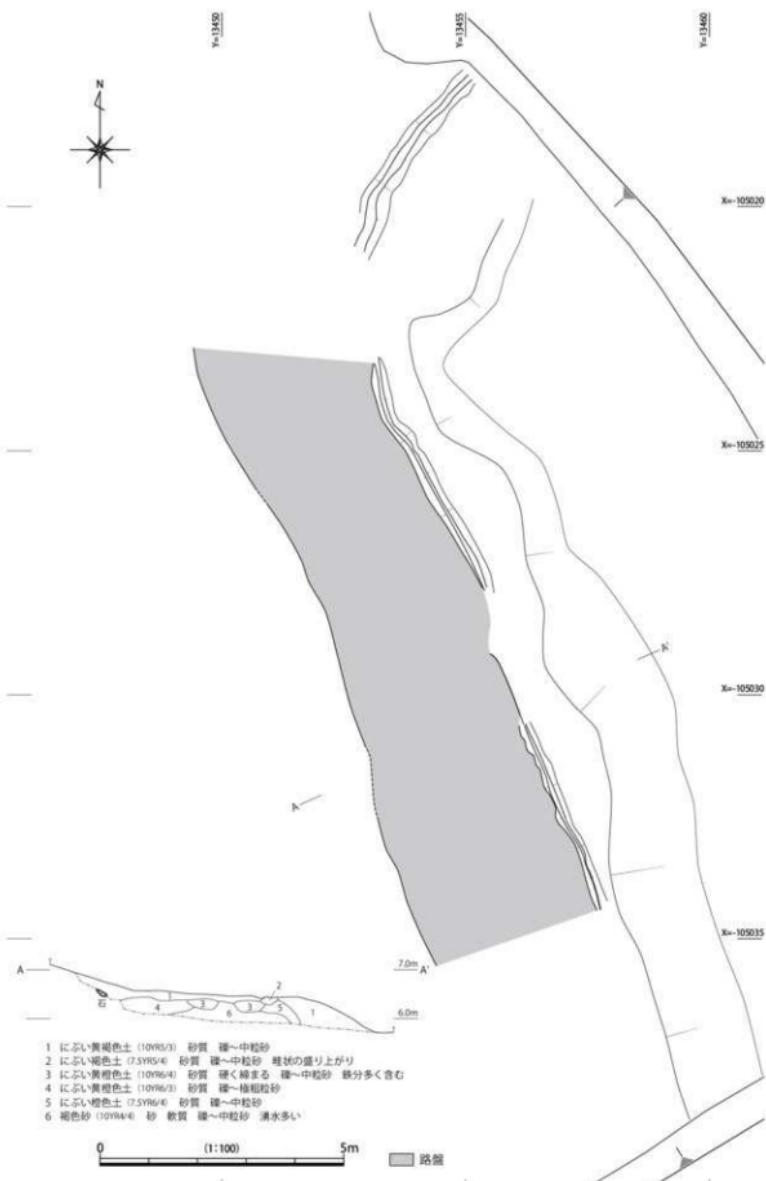
調査区南側の斜面上方から下方にかけて、E12～E15、D15グリッドに位置する溝である。二つの溝はほぼ平行する。南西側を062、北東側を063と呼称する。長さは062が約35m、063が約30m、幅は0.3～0.4mで南端がやや広がる。北側はE12の段状の部分で削平を受けており端ははつきりしなかった。断面は角のきつい逆台形である。南側、斜面上方の溝の間には046石列があり、こ



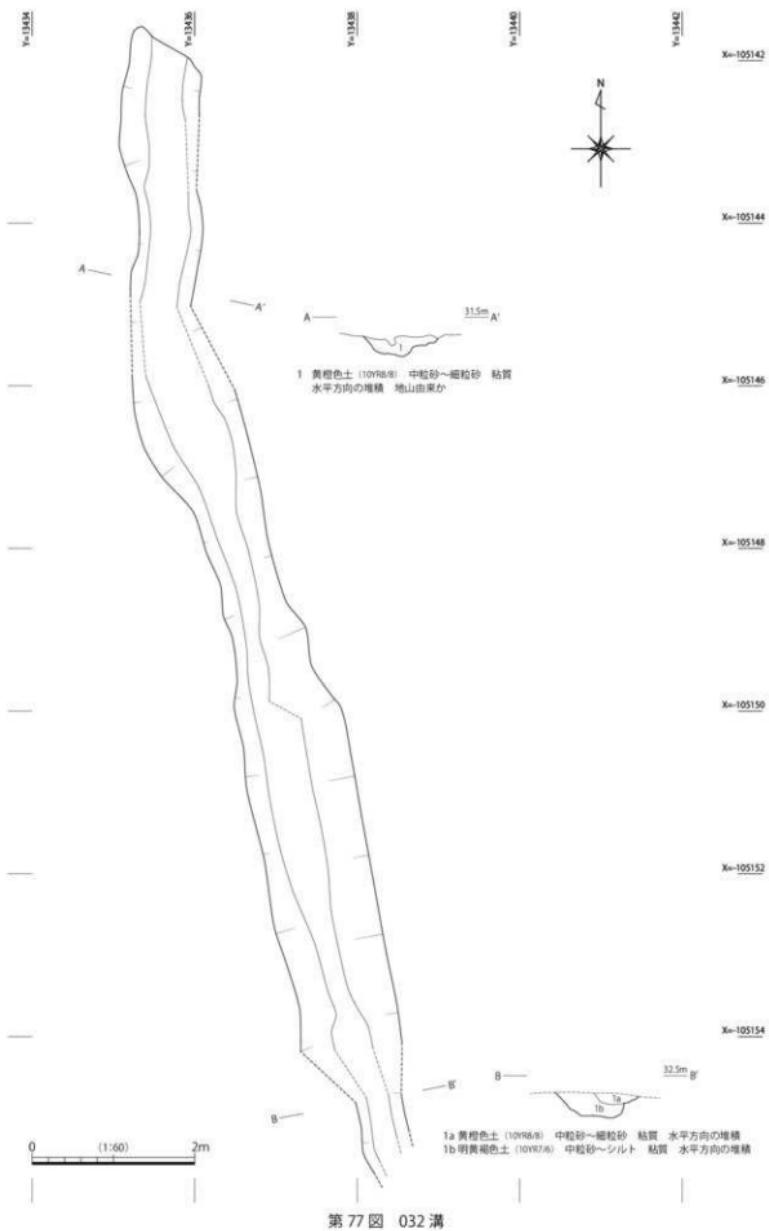
第74図 034土坑・048土坑



第75図 001溝



第76図 003遺構



第77図 032溝

れらの溝に伴うと考えられる。埋土は黄褐色や黄橙色の土である。第78図では離れているが、062が063に先行する。埋土から江戸時代以降の陶器や磁器が出土したことや土層の関係から、江戸時代以降と考えられる。

#### 033溝・064溝（第79図）

033溝は調査区南側の平坦部の南西端、F14～F16、E16グリッドに位置する。現状で長さ約20m、幅は最大で約2m、深さは約0.4m、断面は浅いレンズ状である。南側は調査区外の南へのび、北側はF14グリッドの段状の部分でなくなっている。埋土は締りの良い黄橙色を基調とした土で、地山の土とよく似る。遺物は出土しなかったが、調査区の南側では江戸時代以降の瓦が溝の端に立っていたこと、および埋土の特徴や畦12の土層図から、江戸時代以降と考えられる。

033溝の東側に064溝が位置する。長さ約11m、幅約1～1.2mである。

#### ピット（第82～84図）

約100基のピットを確認した。ピットの分布には粗密があり、平坦部から平坦部と斜面の境にかけて直径0.3～0.4m程度のピットを確認した。しかし斜面ではほとんど確認できなかった。規則的に並ぶものではなく、掘立柱建物や竪穴建物に復元することはできなかった。ピットから遺物が出土しなかったため時期は不明ではあるが、落ち込みから出土した遺物と関連する時期、つまり弥生時代後期～古墳時代前期と奈良・平安時代に属する可能性がある。また、D12からE12にかけての斜面下方のやや傾斜の緩い部分にもピットを確認した。暗褐色土を掘削後に確認したことに加え、この部分では弥生土器や土師器が出土していないことから、奈良・平安時代の可能性がある。

なお、D14のピットには落ち込みの上で検出したものがあったが、その他のピットの殆どは暗褐色土など地山の上に堆積した土を掘り上げた後で検出した。

次に特徴のある土層や自然地形について述べる。

#### 黒褐色土の範囲（第80図）

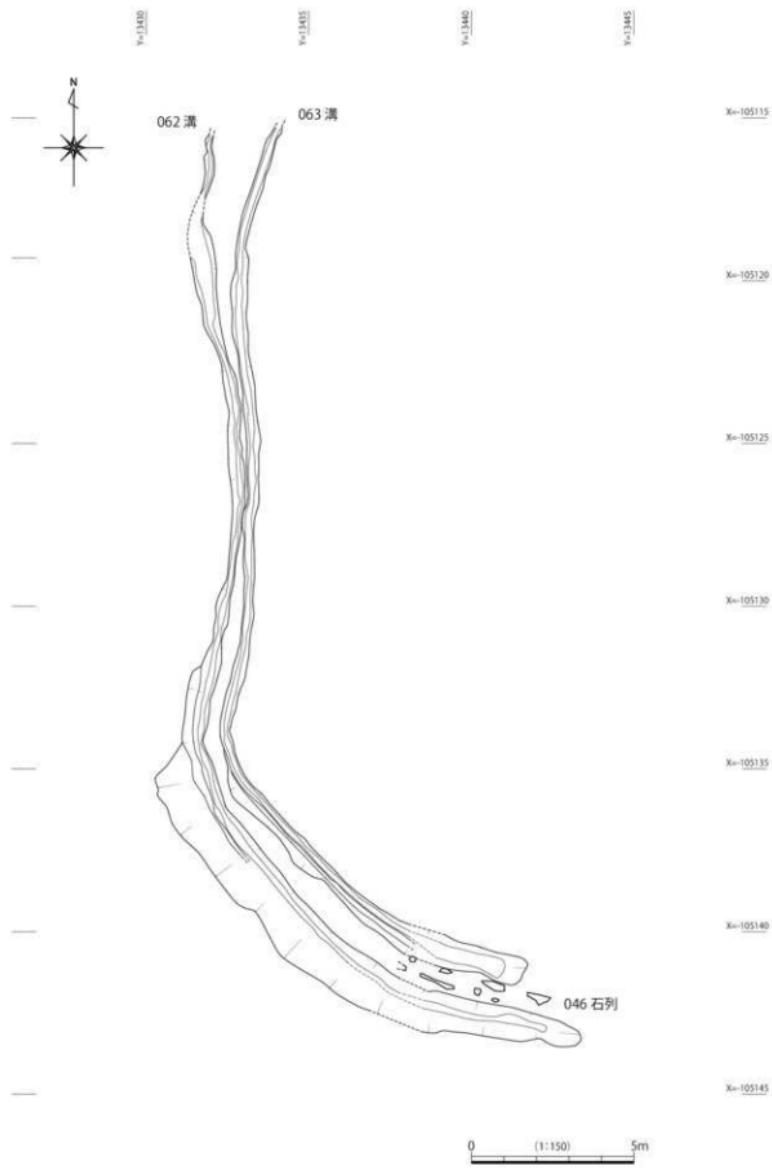
第80図に黒褐色土の範囲を示した。調査区の北側、標高9.75mから14.0mの長さ約30m、幅約8mの範囲、C9、D9グリッドの北側から畦4のあるD6グリッドの範囲である。古墳時代後期の遺物を含む（第87図12、14、18、22）。

#### 落ち込み（第86図）

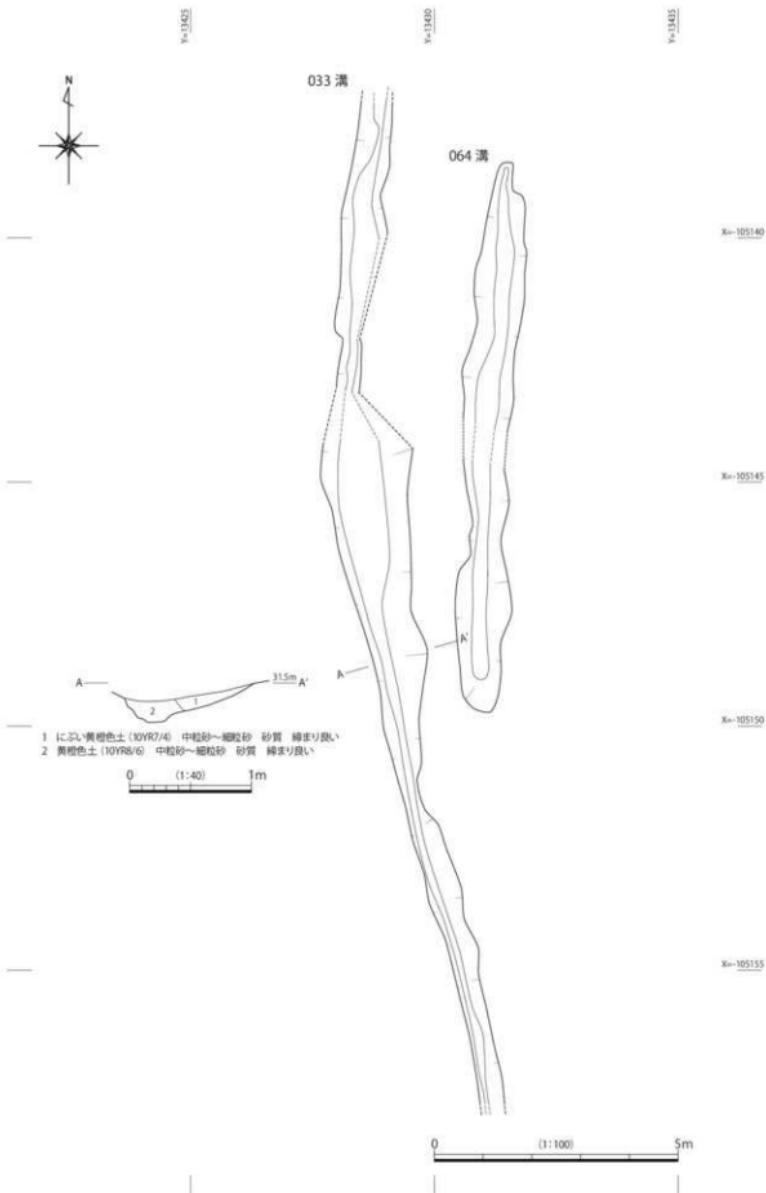
丘陵中部の平坦部から斜面にかけて、斜面と平行にレンズ状の落ち込みを確認した。確認した長さは約36m、幅約8mである。地山の上に締りの良い暗褐色土（畦11の29層）が最大で約30cmの厚さで堆積している。標高の高い平坦部に近いほど遺存がよく、斜面下方の、標高27m以下のところでは、にぶい黄褐色土（畦11の28層）やにぶい褐色土（畦11の30層）が上位にあり、暗褐色土の遺存状態は悪かった。暗褐色土は、落ち葉や炭が水が溜りやすいような湿润な環境下にあり暗褐色を呈したと考えられる。暗褐色土からは弥生時代後期から古墳時代前期の土器が出土した。

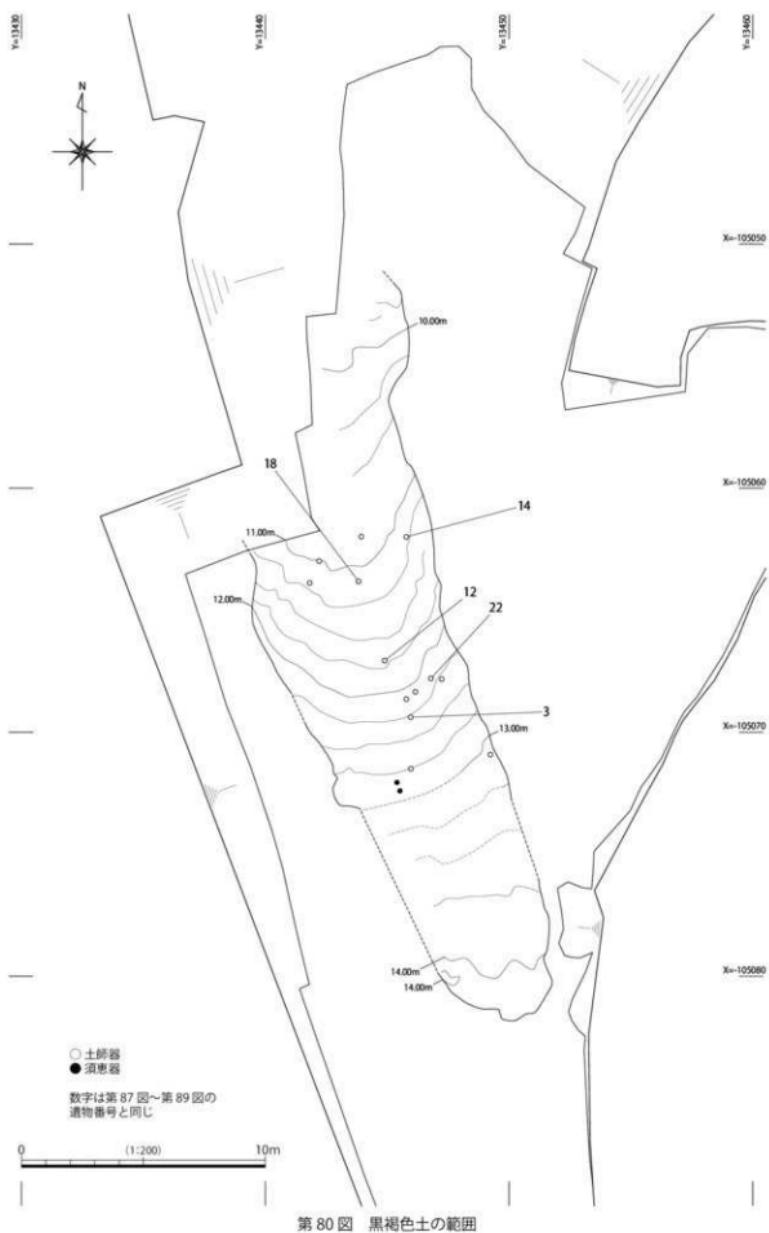
#### 砂丘の範囲（第81図）

畦4から北の部分で確認した。波来浜遺跡の報告書によると、高丸遺跡周辺の砂層が堆積している範囲は国道9号より北の部分と考えられていたが（江津市2012、28頁第1図）、今回の調査によって南へのびていることが分かった。倉谷川沿いを遡る形で広がったと考えられる。



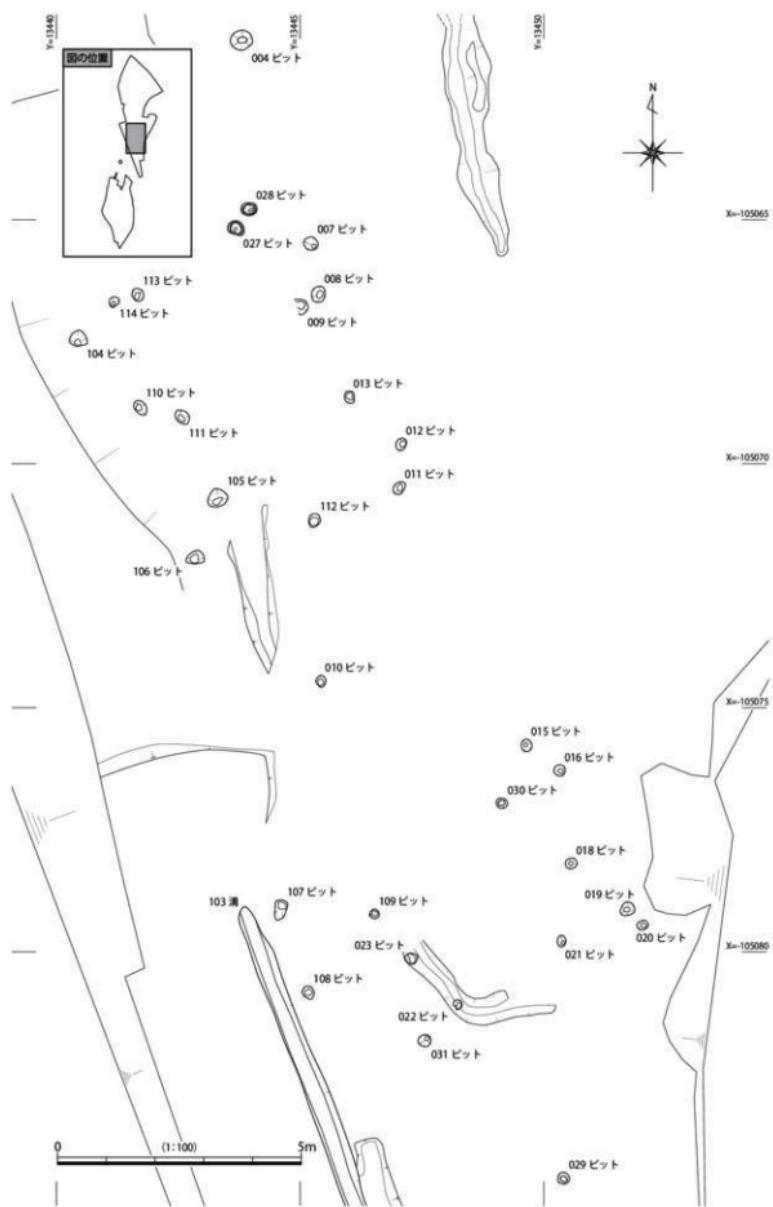
第 78 図 046 石列・062 溝・063 溝

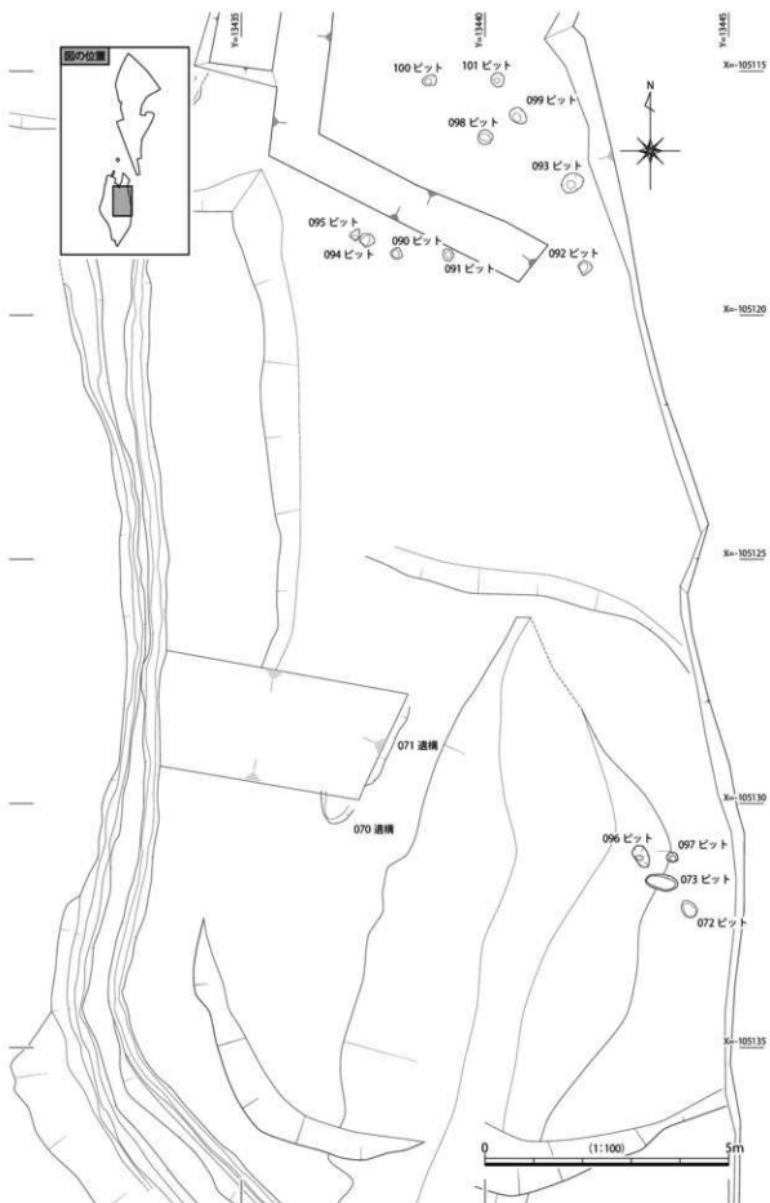




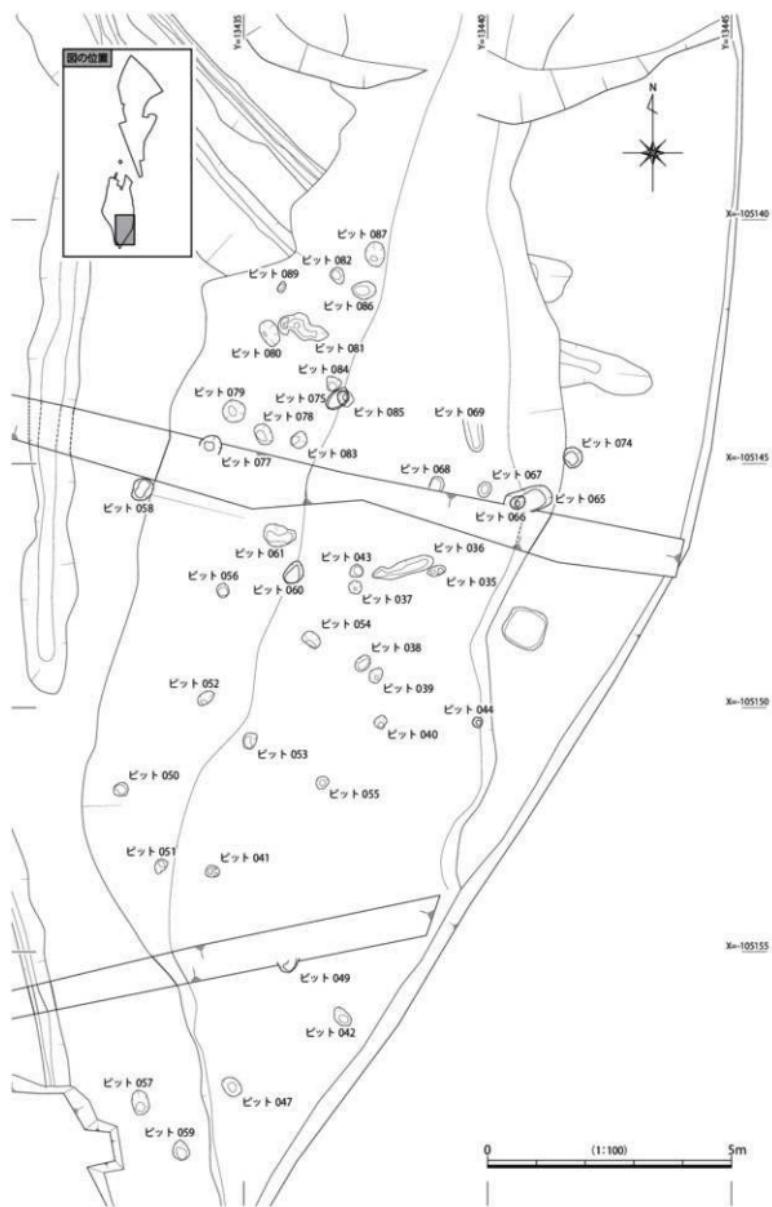


第81図 砂丘の砂層の範囲

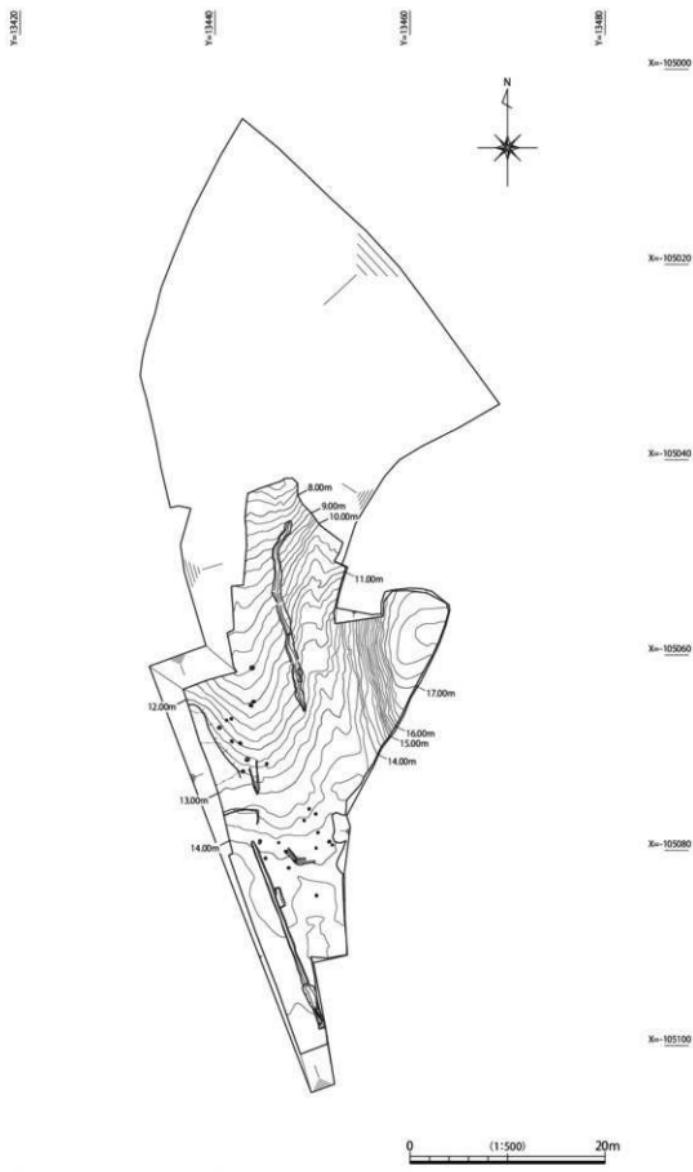




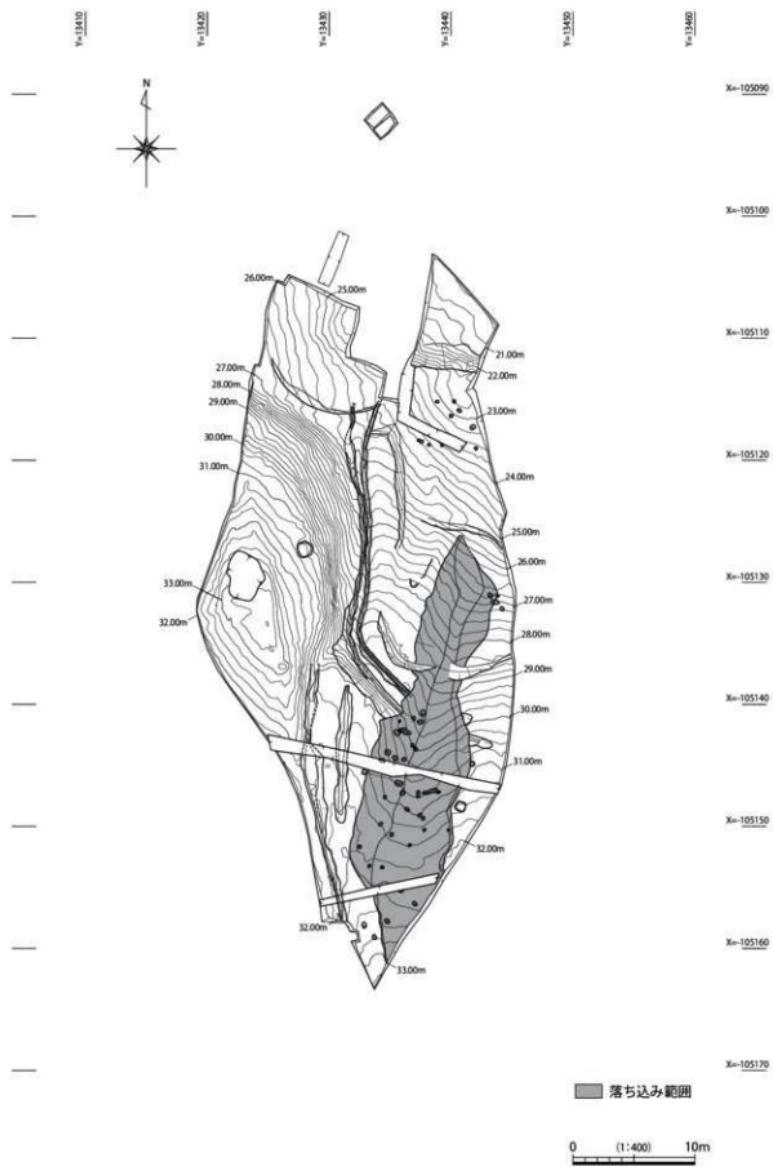
第83図 ピット平面図2



第84図 ピット平面図3



第85図 完掘状況1



第86図 完掘状況2

## 第5節 遺物

高丸遺跡から出土した土器について、注記が可能なものの数量と重量を計測し、その結果を第17表に示した。掲載した遺物は時代や時期の特徴を示すものを抽出した。

1、2、3、43、44は弥生土器である。1は甕である。口縁部がわずかに内傾し、頸部内面のやや下位からヘラケズリを行う。外面は摩滅しており、調整や口縁部の凹線文の条数は不明である。石見V-1様式と考えられる。2は壺の底部、3は甕の底部と考えられる。内面がヘラケズリであることから弥生後期と考えられる。43は口縁部、44は胴部の破片である。摩滅しているが、石見V-3様式と考えられる。

4は甕である。口縁部はやや厚く、先端は丸く收め、口縁部の中ほどは凹む。口縁部下の稜の突出は鈍い。内面のヘラケズリの単位は摩滅により不明である。5は口縁部が開き、口縁部下の稜の突出が鈍い。ともに古墳前期の土師器と考えられる。

6～11は古墳時代の須恵器である。6、7は蓋である。6の端部内面は段の下が丸い。7の外面の稜の間は2条の沈線のように凹む。端部内面は段状になる。8は环身である。9～11は甕である。9と10は焼成が軟質で、特に9は手に粉が付く。10は胴部の沈線の間に波状文がある。12、13、45は須恵器模倣土師器の坏である。12、13は口縁部がやや内傾するが、45の口縁部はやや短い。

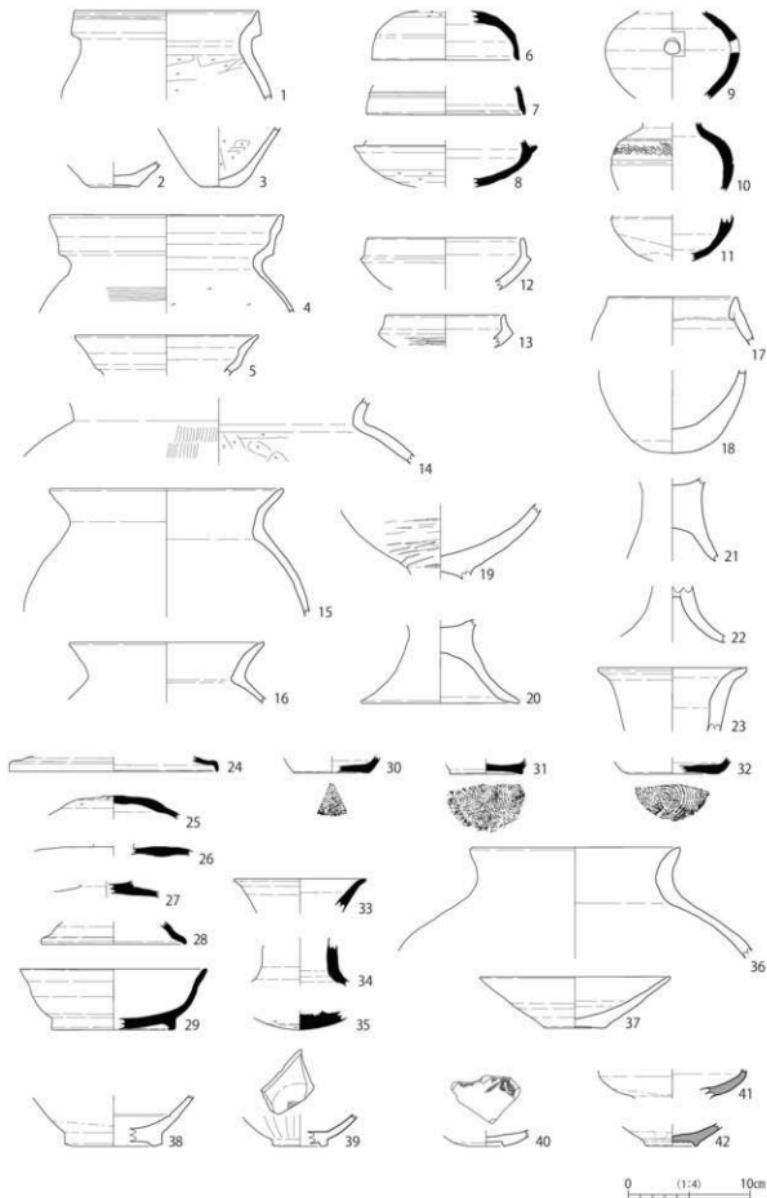
14～23は古墳時代の土師器と考えられる土器を示した。摩滅が著しく調整は不明なものが多い。14は大型の甕に復元できる。15は口縁部が屈曲して開く。16は口縁部が直線的である。17、18は鉢と考えられる。17は内傾する器形で、口縁部の内面に粘土を貼り付けている。18は厚手の土器である。丸底ではあるが自立する。19～22は高坏である。19は内外面を赤く塗る。外面は粗いヘラミガキがある。20～22は高坏の脚部である。脚端部へ向けて緩やかに開く。23は壺に復元した。

24～35、46は奈良・平安時代の須恵器である。24は034土坑の上面から出土した須恵器の蓋である。端部は折り曲げるよう屈曲する。25はわずかにボタン状の突起がある。26は扁平な天井部で、ボタン状のつまみが付く。27はボタン状のつまみが付く。28は口縁部が下へわずかに突出する。29は器形のわかる高台付坏である。胴部から外反して口縁部へ至る。高台の断面は台形状で、内側に面を持つ。底部はヘラ切り後ナデである。30～32は底部が回転糸切りの坏である。33、34は壺である。35は壺の底部である。丸底で外面は回転ヘラケズリである。内面はボタン状に突出する。46は甕の口縁部である。外面に2条の沈線がある。

36は土師器の甕である。大きく張る胴部から頸部へ屈曲し、曲線的に厚手の口縁部へ至る。奈良・平安時代の土師器と考えた。

37は中世の土師器の坏である。体部は直線的である。底部は回転糸切りである。38は白磁碗である。底部は無釉である。内面に沈線が1条ある。白磁碗IX-2類と考えられる。39は青磁碗である。龍泉窯青磁碗I-5c類と考えられる。これらは14世紀代に相当する。40は磁器皿で、豈付けの釉はかかりとりである。染付C群と考えられる。47は青磁碗である。外面に細描蓮弁文がある。龍泉窯青磁碗B4類と考えられる。これらは15世紀後半～16世紀前半に相当する。41は陶器の碗である。42は肥前系陶器の皿である。九陶I-2期(1594-1610年)に相当すると考えられる(九州近世陶磁学会編2000)。

48～52は擂鉢である。このうち48、49は備前焼である。50は須恵質であるが、内面は酸化し



第87図 出土遺物1

て土師器のような色である。口縁部は上方へのびる。51は土師質である。52は瓦質である。外面に段がある。54は外面に粘土を貼り付ける。

第89図55～66は石器や土製品を掲載した。

55は黒曜石製の石鏃である。基部はわずかに凹むことから凹基式と考えた。縄文時代の可能性がある。56は磨製石斧である。断面の厚みから、縄文時代の石斧と考えられる。57は縄文時代の石斧未製品と考えた。58は全面研磨されており、磨石と判断した。

59～61は土錘である。59と60、61では太さが異なる。62、63は鉄滓である。62は楕形滓、63は流動滓である。64は移動式竈、65は土製支脚である。共に破片である。66は石塔の基礎の破片である。返り花の連弁が大きい。石材は軟質の凝灰岩であり、剥離する。江戸時代以降の062溝から出土したが、返り花の文様が古い要素を持つこと、石材が福光石ではないことから中世に遡る可能性がある。

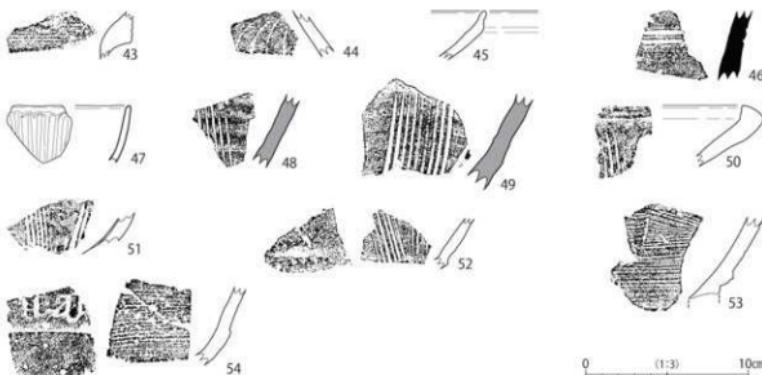
第17表にはグリッドごとの出土遺物の点数と重量を記した。弥生土器や古式土師器はD11以降の丘陵部、土師器や須恵器、土製品はC3からD9までの谷部で出土している。特にD7、D8グリッドが多い。中世土師器や輸入陶磁器、国産陶器は点数が少ない。

## 第6節 まとめ

### 【遺構について】

高丸遺跡では縄文時代から古墳時代の遺構は確認できなかった。丘陵部の平坦部に位置するピットは規則的な配置を取らず、遺構として認識することはできなかったが、遺物のところで述べるように弥生土器や古式土師器が出土していることから、弥生時代や古墳時代の可能性がある。

奈良・平安時代の遺構は、炭窯を2基確認した。1基は丘陵部に位置し、奈良時代後半と考えられる。1基は伏せ焼き式の炭窯で、11～12世紀のものである。丘陵部の平坦な位置に炭窯、斜面下方の標高10～13mのところに遺物包含層があったことがうかがえる。周囲の環境として、炭窯が築かれるということは、調査地周辺が当時の集落から離れた山林の中に位置していたことを示す。002炭窯の樹種はクヌギ節、コナラ節、エノキ属類似であり、燃料材に適したものであった。

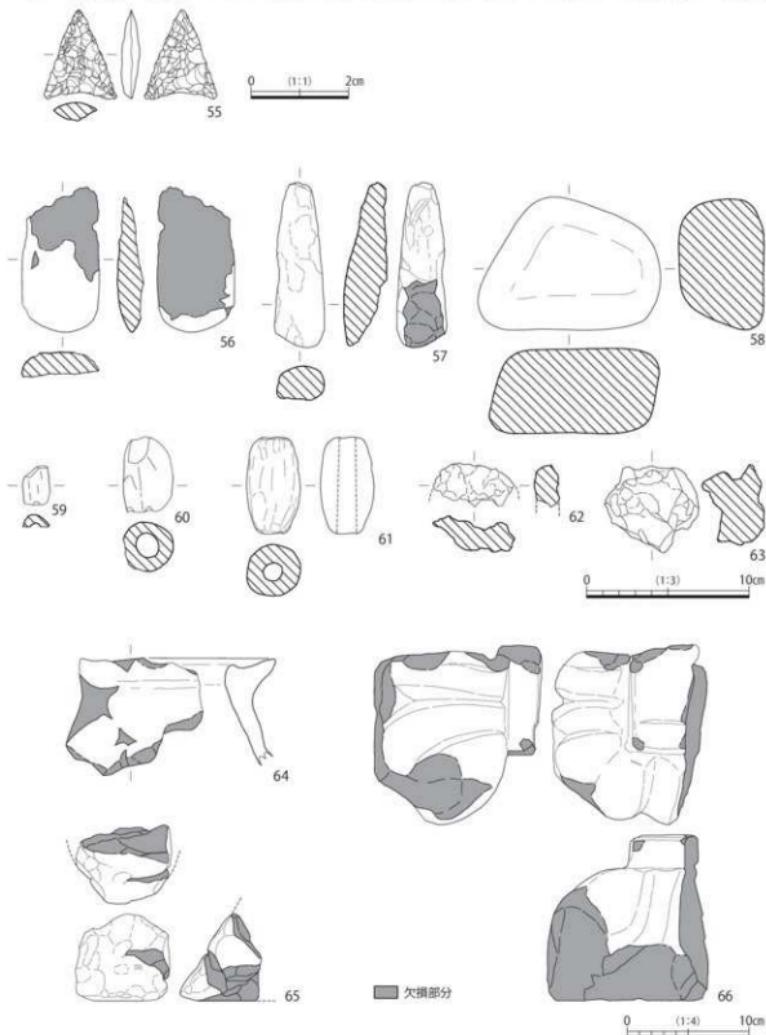


第88図 出土遺物2

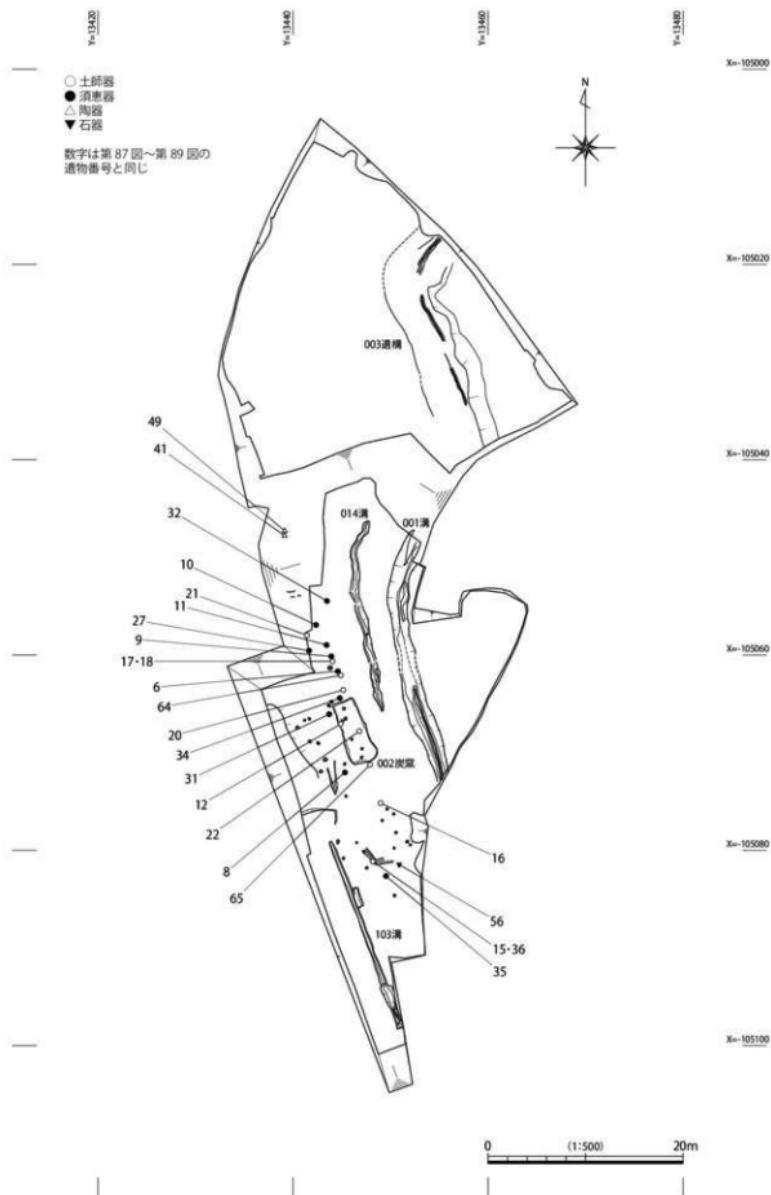
なお、遺跡の近隣を「古代山陰道」の可能性を考えて調査を行ったが、調査区内において古代の道路に関する遺構を確認することはできなかった。

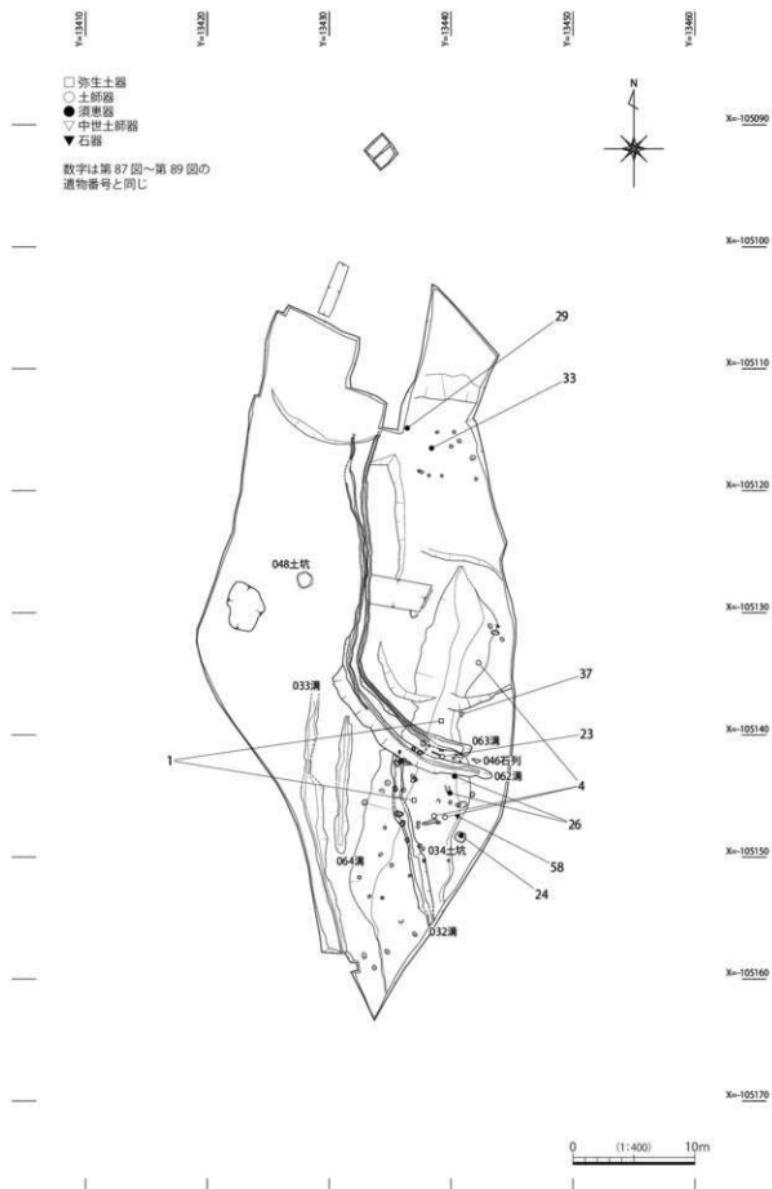
鎌倉時代・室町時代の遺構は確認できなかった。砂丘の砂を確認したが、砂丘は002炭窯の上位に位置することや後述する003遺構の下位に位置することから、室町時代に堆積した可能性がある。

江戸時代以降の遺構としては丘陵部や谷部で確認した溝である。001溝や003遺構は江戸時代以



第89図 出土遺物3





第91図 遺物出土位置図2

降の道路跡に伴う側溝と考えられる。

#### 【遺物について】

出土遺物は谷部から多く出土している。また、丘陵部の標高25～32mの落ち込みに堆積した暗褐色土から弥生後期中葉～古墳前期前葉の土器が出土した。弥生土器や古式土師器はほとんどが丘陵部から出土したもので、谷部で出土する弥生土器は磨滅したものが多い。

古墳時代後期から奈良・平安時代の土器はR2年度調査区の谷部から出土した。特に標高10～14mの黒褐色土から古墳時代後期の土器が出土した。調査区の南側は市道があるなど遺構が存在したとは考えにくく、調査区内で検出したピット（第82図）の存在から、この時期の遺構が存在した可能性がある。

鎌倉時代・室町時代の土器は、土層の上位に堆積した硬く締まった層から出土した。

江戸時代以降の土器は谷部から出土した。丘陵部では近世以降の土器が散発的に出土しており、溝などの烟による改変に伴うと考えられる。

大田市から江津市、浜田市の海岸部では、弥生時代中期後葉から後期初頭にかけて丘陵上に集落遺跡が位置することが多いのに対し、高丸遺跡では量は少ないものの弥生後期中葉～古墳前期前葉の土器が標高25～32mのところで出土しており、やや時期が後出する。近隣では波来浜遺跡（後町）や高津遺跡（都治町）があり、波来浜遺跡は墳墓、高津遺跡は集落遺跡と考えられる。高丸遺跡は遺物の出土量が少ないと加え、第5章の花粉分析の結果からみると、草原環境から二次林へ遷移する環境であったことが判明している。このことから、当時は土地利用の頻度が低かったと考えられる。

須恵器模倣土師器は、谷部のD7からD9グリッドで出土した。層位は黒褐色土（第80図）を中心に出土しており、須恵器6～8に伴う古墳後期前葉に属する可能性が強い。近隣では森原下ノ原遺跡や森原神田川遺跡、高津遺跡、大田市平ノ前遺跡といった江津市東部から大田市西部で出土している（島根県2022、189、190頁）。このうち高津遺跡では大量の須恵器模倣土師器が出土しており、高丸遺跡とは直線距離で約2.2kmの位置関係からみて、高丸遺跡は高津遺跡との強いつながりをうかがうことができる。

#### 【「古代山陰道」について】

令和2年度の調査では調査区の北側で硬く締まった整地層を南北約50m以上、東西約10mの範囲で確認した。当初はこれを「古代山陰道」と判断したが、結果からいうとこれは誤認で、土層から江戸時代（17～19世紀）の陶磁器が出土し、土層の時期は江戸時代までくだけることがわかった。

令和3年度の調査では、丘陵頂部の平坦部から斜面にかけて落ち込みを確認した。落ち込みには水平に堆積する層があり、「盛土」と考えられる部分があったことから、道路構造の可能性を考えて調査を行った。しかし、

- ・「盛土」と考えていた土層は烟の可能性が強い。
  - ・硬化面や「連続ピット」、道路側溝と考えられる溝を確認することはできなかった（確認した溝は江戸時代以降の新しいもので、古代の溝は見つからなかった）。
  - ・「道路跡」の可能性がある切り通しが調査範囲の南へ続くが、途中で途切れている。当該地の周辺は地すべり地帯であり、人工的な切り通しか自然の崩落による地形かの判断が難しい。
- 以上のことから、今回の高丸遺跡の調査で「古代山陰道」に関わる遺構を確認できなかった。

高丸遺跡の西側に県道221号川平停車場線があるが、この道は「古代山陰道」の可能性が指摘されている（神2010、29頁、閔2015、185頁）。この地域周辺で「古代山陰道」を探るうえでは、地滑りや山林の荒廃により困難な要素が多いが、①赤色立体図や航空写真などによる直線的な痕跡や大規模な切り通しの確認、②近世・近代の絵図との比較検討、③小字名や字界の検討、④既研究の尊重と先入観や「確証バイアス」の排除、が重要であると考える。

#### 【参考文献】

- 江津市教育委員会 2012『波来浜遺跡－保存・活用のための確認調査報告書－』  
島根県教育委員会 2022『森原下ノ原遺跡1～3区 1. 古代～近世編』一級河川川江の川直轄河川改修事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書4  
神 英雄 2010『柿本人麻呂の石見』自照社出版  
閔 和彦 2015『古代石見の誘い道 人麻呂と神々と道』今井出版  
松尾充品 2020『製炭用木炭窯の地域性』島根県古代文化センター『たらら製鉄の成立過程』島根県古代文化センター研究論集第24集 133-151

第15表 高丸遺跡土器観察表

標印	遺物 番号	写真 版面	出土位置 / 通構	層位	種別	器種	口径(cm)	その他の 寸法(cm)	既存率 (%)	色調	形態・文様の特徴
87	1	61	E14 E15 E11*	褐褐色土	弥生土器	甕	(15.0)		25	外: 淡黄褐色 10YR8/4 内: 褐褐色 10YR5/1 内: 淡黄褐色 10YR8/4	石見 V-1 様式、口縁部に凹線、摩滅により調整不明
87	2	64	E15	褐褐色土	弥生土器	甕?		底径 4.0	50	外: 褐褐色 10YR5/1 内: 淡黄褐色 10YR8/4	弥生後期、内面ヘラケズリ、摩滅により調整不明
87	3	64	D7	黑褐色土	弥生土器	甕?		底径 (3.0)	25	外: 淡黄褐色 10YR8/4 内: 淡黄色 2.5Y8/4	内面ヘラケズリ
87	4	61	D14 E15	褐褐色土	土師器	甕	(19.0)		20	外: 淡黄褐色 10YR8/3 内: 褐	東田 4 期まで遡る可能性、肩部にコマッケ、内面ヘラケズリは摩滅により単位不明
87	5	64	D14 E14, E15	褐褐色土	土師器	甕	(14.8)		15	外: 淡黄褐色 7.5Y7/6 内: 褐	梯の突起は薄い
87	6	64	D7	褐褐色土	須恵器	甕	(12.0)		20	外: 黄褐色 7.5Y7/1 内: 淡白色 N7/1	石見 3 期、やや軟質
87	7	64	D7,D8	褐褐色土、黑褐色 土	須恵器	甕	(12.9)		20	外: 黄褐色 10B6/2 内: 青褐色 5B6/1	内外回転ナデ
87	8	64	D8	褐褐色土	須恵器	坏身			25	外: 淡色 N6/ 内: 褐	石見 3 期
87	9	61	D6	褐褐色土	須恵器	甕		胸径 11.0	75	外: 淡白色 5Y7/2 内: 褐	軟質で粉が付く。
87	10	64	D7	褐褐色土	須恵器	甕		胸径 (10.0)	25	外: 淡褐色 5Y7/1 内: 淡色 N6/1	やや軟質、沈線の間に波状文
87	11	64	D6	褐褐色土	須恵器	甕		胸径 (10.0)	20	外: 淡褐色 5Y7/6 内: 褐	縫の可能性、外縁ヘラケズリ 後不整方舟のナデ
87	12	64	D7	黑褐色土	土師器	甕	(12.8)		10	外: 淡褐色 5Y7/6 内: 褐	須恵器を模した土師器、摩滅
87	13	64	D9	灰黃褐色土	土師器	甕	(9.6)		10	外: にぶい褐色 7.5YR5/3 内: 淡褐色 10YR5/3	須恵器模倣土師器、外縁ヘラ ミガキ
87	14	64	D7	黑褐色土	土師器	甕		脚径 (23.8)	10	外: 淡褐色 7.5YR6/6 内: にぶい黄褐色 10YR5/4	外縁粗いタテハケ
87	15	61	D9	灰褐色土	土師器	甕	(18.9)		30	外: 淡褐色 7.5YR6/6 内: 淡褐色 10YR7/8	脚部に底面付着、摩滅によ り調整不明
87	16	61	D8	灰褐色土	土師器	甕	(15.8)		30	外: にぶい褐色 7.5YR6/6 内: 淡褐色 7.5YR8/4	摩滅により調整不明
87	17	64	D7	褐褐色土	土師器	甕	(10.2)		20	外: 淡褐色 7.5YR6/6 内: 淡褐色 7.5YR6/6	口縁内面に粘土を貼り付け る、摩滅により調整不明
87	18	61	D7	褐褐色土	土師器	甕			80	外: 青褐色 10YR7/8 内: 黄褐色 7.5YR7/8	厚手、丸底だが自立する、摩 滅により調整不明
87	19	61	D7	黑褐色土	土師器	高坏			80	外: 淡褐色 SYR6/8 内: 淡褐色 10YR8/4	内外面赤系、外縁コハラミ ガキ、内面摩滅により不明
87	20	61	D7	灰灰褐色土	土師器	高坏		脚径 (12.8)	25	外: 淡褐色 SYR6/8 内: 褐	摩滅により調整不明
87	21	61	D7	褐褐色土	土師器	高坏			60	外: 淡褐色 SYR6/8 内: 褐	摩滅により調整不明
87	22	61	D7	黑褐色土	土師器	高坏			70	外: にぶい黄褐色 10YR7/4 内: にぶい黄褐色 10YR6/4	外面は丁寧なナデやヘラミ ガキ、内面は摩滅により調整不明
87	23	61	E15	褐色土	土師器	甕?	(12.0)			外: 淡褐色 7.5YR6/6 内: 淡褐色 10YR7/6	外面は粗熱
87	24	63	034 土坑上 面/015	道構上面	須恵器	甕	(17.0)		10	外: 明顯灰褐色 7.5G5/1 内: 明顯リーフ色 5G7/1	石見 8 期、喉部は折り曲げる ように捻曲
87	25	67	D7	褐褐色土	須恵器	甕			20	外: にぶい黄色 2.5Y6/4 内: にぶい褐色 7.5YR7/4	未成やら不整、頂部はわずか にボタツ状の突起
87	26	62	D15	褐色土	須恵器	甕			60	外: 淡色 7.5Y6/1 内: 明オリーフ色 2.5GY7/1	扁平、ボタン状のつまみが付 く、外縁回転ヘラスギ、内 面脚部に凹
87	27	63	D7	褐褐色土	須恵器	甕			40	外: 淡オリーフ色 7.5Y4/2 内: 淡褐色 7.5Y7/1	石見 9A-9B 期、外縁に自然輪、 ボタン状のつまみ
87	28	63	D8	雙地層	須恵器	甕	(11.8)		15	外: 明顯灰褐色 7.5G3/1 内: 淡褐色 10Y8/2	石見 9A-9B 期、回転ナデ
87	29	63	E12	にぶい褐色土	須恵器	高台付坏	(14.8)	底径 (10.0) 高さ 5.0	20	外: 淡褐色 2.5Y7/1 内: 淡褐色 10Y7/2	石見 9B 期、内面に自然輪、頂 部はへたり後ナデ
87	30	63	D7	雙地層 / 灰褐色 土	須恵器	甕		底径 (6.2)	10	外: 明オリーフ褐色 2.5GY7/1 内: 褐	底部回転糸切り
87	31	63	D7	褐褐色土	須恵器	甕		底径 (6.0)	60	外: 淡褐色 7.5YR6/1 内: 褐	底部回転糸切り
87	32	63	D6	にぶい黄褐色土	須恵器	甕		底径 (7.0)	30	外: 淡色 10Y6/1 内: 淡褐色 5Y6/1	底部回転糸切り
87	33	63	E12	にぶい黄褐色土	須恵器	甕	(10.7)		40	外: 淡褐色 7.5YR3/1 内: 褐	底部回転糸切り
87	34	63	D7	灰褐色土	須恵器	甕		脚径 (6.2)	30	外: 淡色 10Y6/1 内: 褐	丸底、回転ヘラケズリを下か ら見て脚部回転に施す
87	35	63	D9	雙地層	須恵器	甕			60	外: 明オリーフ淡色 5G7/1 内: 褐褐色 7.5G3/1	口縁は均しく、屈曲、摩滅によ り調整不明
87	36	62	D9	灰黃褐色土	土師器	甕	17.0		60	外: 褐褐色 7.5YR7/8 内: 褐	口縁は均しく、屈曲、摩滅によ り調整不明
87	37	62	D14	褐色土	中世の土師器	甕	(15.4)	底径 4.2 高さ 5.0	70	外: 淡褐色 7.5YR8/6 内: 褐	底部回転糸切り
87	38	62	D5	にぶい褐色土	白磁	甕		底径 (6.9)	25	外: 淡褐色 2.5Y8/2 内: 波瀬葉 7.5YR8/1	白磁碗 IX-2 期
87	39	63	D6	にぶい黄褐色土	青磁	甕		底径 (4.0)	25	外: にぶい褐色 7.5YR6/3 内: 明黄色 10G7/1	龍泉窑青磁碗 IX-5 期
87	40	63	C7	明褐色土	染付	甕		底径 (3.0)	25	外: 明黄色 2.5Y7/2 内: 明顯灰褐色 10G8/1	染付 C 番
87	41	63	E5	雙地層上層	陶器	甕			20	外: 淡褐色 7.5YR8/2 内: 波瀬葉 7.5YR8/1	九陶 I-2 期
87	42	62	D7	褐黃褐色土	陶器	甕		底径 4.0	60	外: 淡褐色 2.5Y8/2 内: 明オリーフ褐色 10Y6/2 内: にぶい黄褐色 10YR7/4 内: 明褐色 10YR7/6	石見 V-3 様式、5 条以上の櫛縞 模様、摩滅

種別	遺物名	写真	出土位置 / 遺構	層位	種別	器種	口径 (cm)	その他の寸法 (cm)	残存率 (%)	色調	形態・文様の特徴
88 44 64 D14	暗褐色土		弥生土器	甕						外: 淡黄褐色 10YR8/3 内: 黑	石見 V-3 様式。肩部に貝殻による刺突文、内面ヨコラケズリ、摩滅
88 45 64 D8	暗褐色土		土師器	壺						外: 黄褐色 2.5YS/1 内: 黑	須恵器横置土師器、口縁外面丁寧なナデ。その他は摩滅
88 46 63 D6	整地層		須恵器	甕						外: 黄褐色 5PR2/1 内: 黄褐色 5R6/1	2 条の沈線
88 47 63 D7	整地層上位		青磁	碗						外: 青一ノア淡色 10Y6/2 内: 青白色 10Y8/1	龍泉窯青磁碗 B4 種
88 48 63 D7	整地層		備前焼	罐						外: 雜赤灰褐色 10R4/1 内: 黑	内面に横目、よく使いこまれている
88 49 63 E5	灰褐色土		備前焼	罐						外: にい赤褐色 2.5YRS/3 内: にい赤褐色 5YRS/3	重ね分類 IVB-V、内面に横目
88 50 63 D6	整地層		陶器	罐						外: 灰色 5V6/1 内: 原褐色 7.5YRS/6	外側は蓮元、内面は隆化して土師器のような色
88 51 63 D8	整地層		土師器	罐						外: 灰色 2.5YR6/8 内: 黑	内面に横目
88 52 63 E4	整地層		瓦質	罐						外: 灰色 N6/ 内: 灰色 N5/	内面に横目
88 53 63 E5	表土		土師器	鉢						外: 淡黄褐色 7.5YR8/3 内: にい赤褐色 7.5YR7/4	内面ハケ
88 54 63 C4	明黄褐色土		瓦質	鉢						外: 黄白色 2.5YB/1 内: 黑	

第16表 高丸遺跡その他の遺物観察表

種別	遺物名	写真	出土位置 / 遺構	層位	種別	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	形態・文様の特徴
89 55 62 D6	暗褐色土		石器	石器			1.8	1.4	0.4	0.57	凹基式、黒褐色土、繩文時代の可能性
89 56 64 C9	整地層		石器	磨製石斧	(9.0)		4.8	1.6		93.81	繩文時代の可能性
89 57 64 E16	暗褐色土		石器	石斧			13.5	4.1	3.5	243.00	繩文時代の可能性
89 58 64 E15	暗褐色土		石器	磨石			10.9	15.0	7.0	1951.00	全面研磨されている
89 59 64 D7	明黄褐色土		土製品	土種							2.38
89 60 64 D6	整地層		土製品	土種			長さ 4.5 径 3.1				27.66
89 61 64 D3	地山面上		土製品	土種			長さ 6.0 径 3.2				57.10
89 62 64 E5	整地層		鐵滓	桶形滓			2.7	5.0	1.6	24.30	
89 63 64 C4	明黄褐色土		鐵滓	流動滓			5.3	5.8	3.8	160.07	
89 64 62 D7	にい黄褐色土		土師器	移動式窓							内面に炭化物付着、橙色 7.5YR7/6
89 65 64 D8	にい黄褐色土		土師器	土製支脚			直径約 9.0				橙色 2.5YR6/8
89 66 62 E14/062溝	埋土		石製品	石塔			12.7	14.8	(13.7)	2597.00	返り花の連井の部分が残る。石材は基岩岩の可能性

第17表 高丸遺跡出土遺物数量表

	C3	C4	D4	E4	C5	D5	E5	C6	D6	C7	D7	C8	D8	C9	D9											
	点 ■■■ (g)																									
勞士器																										
古土師器	1	5.58	1	7.89		1	2.61	19	293.62																	
土師器	1	3.74	1	5.58																						
赤土師器	5	84.97	1	3.70	1	16.34		15	219.49																	
須恵器	1	27.77		1	38.59			1	15.18																	
中出土師器																										
土器																										
輪・筒田器																										
屋根瓦	6	58.98	4	118.32	2	115.59	2	54.93	1	2.61	35	576.20	3	122.86	1											
	点 ■■■ (g)																									
	D11	D12	E12	D13	E13	D14	E14	D15	E15	D16	E16	通算	その他	合計	割合											
	点 ■■■ (g)																									
勞士器	1	3.84	1	11.16		1	12.52	2	14.68	6.5	138.66	4.5	139.44	13	332.69	1										
古土師器																										
土師器																										
赤土師器																										
須恵器																										
屋根瓦	2	102.33																								
	点 ■■■ (g)																									
中出土師器																										
土製品																										
輪・筒田器																										
屋根瓦	1	1.84	1	11.16	2	107.43	1	12.12	3	26.95	35.3	647.60	18.6	307.34	6	211.22	46.6	975.34	1	113.91	4	33.34	1	8.21	1365	18.67.09

※上記は注記でできるものと想定した。

※各数のクリアで接合した土器は、点数と重量をクリアの値で算出した。

※重量には復元時の部分を含む

第18表 高丸遺跡遺構計測表

遺構名	グリッド	平面形	長さ(m)	幅(m)	検出面から の深さ(m)	検出番号	備考
001 溝 C5,C6,C7,C8		やや屈曲	25.0	2.5	0.5	75	
002 地窓 D7,D8		長楕円	6.6	2.7	0.3	70	伏せ焼き式
003 遺構 C2,C3,D3,B4,C4		やや屈曲	(18.0)	3.0	0.5	76	
014a 溝 D5,D6,D7		やや屈曲	8.0	0.8	0.2	73	
014b 溝 D5,D6,D7		やや屈曲	9.0	0.9	0.4	73	
032 溝 E15,E16		直線	(15.0)	1.0	0.2	77	
033 溝 E16,F14,F15,F16		直線	(20.0)	2.0	0.4	79	
034 土坑 D15		圓丸方形	1.0	0.9	0.2	74	
048 土坑 F13		円	1.3	1.3	0.4	74	
062 溝 D15,E12,E13,E14,E15		曲線	(35.0)	0.3-0.4	0.2	78	046石列を伴う、063に先行
063 溝 D15,E12,E13,E14,E15		曲線	(30.0)	0.3-0.4	0.2	78	046石列を伴う、062に後出
064 溝 E16,F14,F15,F16		直線	11.0	1.0-1.2	0.1	79	
103 溝 D8,D9,D10		直線	(20.0)	0.4	0.2	82	市道に先行する道の可能性

第19表 高丸遺跡ピット計測表

遺構名	グリッド	平面形	上面の長径 (m)	上面の短径 (m)	検出面から の深さ(m)	床面の標高 (m)	埋土の色	検出 番号	備考
004 ピット D7		円	0.46	0.41	0.13	11.05	—	—	82
007 ピット D7		円	0.30	0.27	0.37	10.88	褐色	7.5YR4/1	82 粘質
008 ピット D7		楕円	0.36	0.26	0.32	11.18	灰褐色	7.5YR4/2	82
009 ピット D7		楕円	0.31	0.26	0.22	11.28	灰黃褐色	10YR4/2	82 完形でない
010 ピット D8		楕円	0.23	0.19	0.33	12.86	黒褐色	7.5YR3/1	82 粘質
011 ピット D8		楕円	0.27	0.20	0.24	12.30	黒褐色	7.5YR3/1	82 粘質
012 ピット D7		楕円	0.26	0.19	0.26	12.16	黒褐色	7.5YR3/1	82
013 ピット D7		楕円	0.23	0.17	0.16	11.81	にぶい黄褐色	10YR6/4	82
015 ピット D8		楕円	0.26	0.20	0.24	13.23	灰褐色	7.5YR4/2	82
016 ピット C8		円	0.23	0.20	0.25	13.35	灰褐色	7.5YR4/2	82
018 ピット C8		円	0.24	0.21	0.39	13.40	暗褐色	10YR3/4	82
019 ピット C8		円	0.31	0.27	0.47	13.45	黒褐色	7.5YR3/2	82
020 ピット C8		楕円	0.23	0.20	0.24	13.72	褐色	10YR4/4	82
021 ピット C8		楕円	0.25	0.18	0.16	13.73	黒褐色	7.5YR3/2	82
022 ピット D9		不正円	0.19	0.18	0.23	13.67	黒褐色	7.5YR3/2	82
023 ピット D9		円	0.24	0.22	0.23	13.74	黒褐色	7.5YR3/2	82
024 ピット D6		楕円か	0.29	0.12	—	—	—	—	上端のみ、完形でない
025 ピット D6,E6		楕円か	0.33	0.10	—	—	—	—	上端のみ、完形でない
027 ピット D7		楕円	0.35	0.29	0.34	10.74	灰黃褐色	10YR4/2	82
028 ピット D7		楕円	0.31	0.26	0.31	10.71	灰黃褐色	10YR4/2	82
029 ピット C9		円	0.24	0.24	0.12	14.36	褐色	7.5YR4/3	82
030 ピット D8		円	0.22	0.22	0.19	13.38	暗褐色	10YR3/3	82
031 ピット D9		円	0.26	0.24	0.47	13.66	暗褐色	10YR3/3	82
035 ピット E15		楕円	0.38	0.21	0.17	30.69	にぶい黄褐色	10YR5/3	84 細粒砂
036 ピット E15		楕円	1.30	0.30	0.07	30.67	にぶい黄褐色	10YR5/3	84 細粒砂
037 ピット E15		円	0.28	0.26	0.19	30.56	にぶい黄褐色	10YR5/3	84 細粒砂
038 ピット E15		楕円	0.37	0.26	0.17	30.83	にぶい黄褐色	10YR4/3	84 細粒砂
039 ピット E15		楕円	0.33	0.26	0.27	30.79	にぶい黄褐色	10YR4/3	84 細粒砂
040 ピット E16		円	0.26	0.23	0.24	31.09	暗褐色	10YR3/3	84 細粒砂
041 ピット E16		円	0.29	0.24	0.24	31.55	暗褐色	10YR3/3	84 細粒砂
042 ピット E16		楕円	0.44	0.27	0.16	32.00	にぶい黄褐色	10YR6/3	84
043 ピット E15		円	0.29	0.25	0.18	30.49	にぶい黄褐色	10YR5/3	84 細粒砂
044 ピット E16		円	0.23	0.20	0.14	31.46	にぶい黄褐色	10YR5/3	84 粘質
047 ピット E16		楕円	0.45	0.34	0.36	32.05	にぶい黄褐色	10YR6/3	84
049 ピット E16		楕円か	(0.46)	(0.25)	0.12	31.93	にぶい黄褐色	10YR6/3	84

連続名	グリッド	平面圖	上面の長径 (m)	上面の短径 (m)	突出量から の深さ (m)	床面の標高 (m)	埋土の色	押印 番号	備考
050	ピット E16	円	0.30	0.28	0.33	31.37	暗褐色	10YR3/3	84
051	ピット E16	椭円	0.32	0.23	0.29	31.45	暗褐色	10YR3/4	84
052	ピット E15	椭円	0.39	0.23	0.28	31.19	暗褐色	10YR3/3	84
053	ピット E16	椭円	0.36	0.29	0.27	31.17	暗褐色	10YR3/3	84
054	ピット E15	椭円	0.37	0.26	0.26	30.74	褐色	10YR4/4	84
055	ピット E16	椭円	0.28	0.23	0.25	31.24	暗褐色	10YR3/3	84
056	ピット E15	円	0.30	0.26	0.08	30.92	にぶい黄褐色	10YR6/3	84
057	ピット E16	椭円	0.50	0.33	0.12	32.45	にぶい黄褐色	10YR6/4	84
058	ピット E15	椭円	0.49	0.42	0.39	30.92	褐色	10YR4/4	84
059	ピット E16	椭円	0.41	0.35	0.22	32.49	にぶい黄褐色	10YR6/4	84
060	ピット E15	椭円	0.51	0.36	0.21	30.58	黒褐色	10YR2/3	84
061	ピット E15	椭円	0.65	0.44	0.19	30.52	黒褐色	10YR2/3	84
065	ピット D15	椭円か	(1.00)	(0.49)	0.15	30.97	—	—	84
066	ピット D15	椭円	0.31	0.24	0.09	30.83	褐色	7.5YR4/4	84 砂質
067	ピット D15,E15	椭円	0.32	0.26	0.04	30.87	黄褐色	10YR5/6	84 砂質
068	ピット E15	椭円か	(0.27)	(0.27)	0.03	30.83	黄褐色	10YR5/6	84
069	ピット E15	椭円か	(0.70)	(0.36)	0.08	30.65	にぶい黄褐色	10YR5/4	84 砂質
070	ピット E13,E14	椭円か	(0.77)	(0.48)	0.09	27.71	オリーブ褐色	2.5Y4/4	83
071	ピット E13		(1.86)	(0.17)	—	—	—	83	上端のみ
072	ピット D14	椭円	0.39	0.28	0.10	27.13	褐色	10YR4/4	83 砂質、落ち込みの上から經られている
073	ピット D14	椭円	0.67	0.32	0.13	26.97	褐色	10YR4/4	83 砂質、落ち込みの上から經られている
074	ピット D15	円	0.43	0.39	0.08	30.73	暗褐色	10YR3/3	84
075	ピット E15	椭円	0.55	0.36	0.03	30.32	黄褐色	10YR7/8	84 中粒砂～細粒砂、砂質
077	ピット E15	椭円か	(0.45)	(0.33)	0.19	30.75	にぶい黄褐色	10YR7/3	84
078	ピット E15	椭円	0.45	0.32	0.14	30.46	暗褐色	10YR3/3	84
079	ピット E15	円	0.46	0.46	0.37	30.37	暗褐色	10YR3/3	84
080	ピット E15	椭円	0.54	0.35	0.31	30.02	暗褐色	10YR3/3	84
081	ピット E15	不整形	1.04	0.54	0.19	29.88	暗褐色	10YR3/3	84
082	ピット E15	椭円	0.35	0.27	0.16	29.57	暗褐色	10YR3/3	84
083	ピット E15	円	0.36	0.32	0.16	30.17	暗褐色	10YR3/3	84
084	ピット E15	円	0.32	0.31	0.23	29.78	にぶい黄褐色	10YR5/4	84
085	ピット E15	椭円	0.35	0.29	0.13	29.88	にぶい黄褐色	10YR5/4	84
086	ピット E15	椭円	0.49	0.38	0.17	29.40	にぶい黄褐色	10YR4/3	84
087	ピット E15	椭円	0.50	0.40	0.24	29.19	にぶい黄褐色	10YR5/4	84
089	ピット E15	椭円	0.21	0.14	0.11	30.08	暗褐色	10YR3/3	84
090	ピット E12	円	0.23	0.20	0.10	24.21	暗褐色	10YR3/3	83
091	ピット E12	椭円	0.26	0.21	0.22	23.77	暗褐色	10YR3/3	83
092	ピット D12	円	0.30	0.28	0.11	23.46	褐色	7.5YR6/6	83 地山疊混じる
093	ピット D12	椭円	0.47	0.37	0.24	22.86	褐色	7.5YR6/6	83 地山疊混じる
094	ピット E12	円	0.30	0.29	0.25	24.17	褐色	10YR4/4	83
095	ピット E12	椭円	0.25	0.18	0.16	24.31	にぶい黄褐色	10YR6/4	83
096	ピット D14	椭円	0.49	0.28	0.27	26.34	暗褐色	10YR3/3	83
097	ピット D14	椭円	0.24	0.18	0.22	26.57	にぶい黄褐色	10YR6/4	83
098	ピット D12,E12	円	0.31	0.30	0.18	22.90	にぶい黄褐色	10YR5/3	83
099	ピット D12	椭円	0.38	0.28	0.21	22.59	にぶい黄褐色	10YR5/3	83
100	ピット E12	椭円	0.29	0.21	0.19	22.94	にぶい黄褐色	10YR5/3	83
101	ピット D12	円	0.29	0.27	0.29	22.45	にぶい黄褐色	10YR6/3	83
104	ピット D7	円	0.37	0.32	0.37	11.78	にぶい黄褐色	10YR4/3	82
105	ピット D8	椭円	0.39	0.29	0.29	12.10	暗褐色	7.5YR3/3	82
106	ピット D8	椭円	0.29	0.20	0.21	12.59	暗褐色	7.5YR3/3	82
107	ピット D8	椭円	0.32	0.25	0.13	13.76	にぶい黄褐色	10YR4/3	82
108	ピット D9	円	0.25	0.24	0.10	13.99	にぶい褐色	7.5YR5/4	82 粘質、練り良い
109	ピット D8	円	0.25	0.20	0.15	13.69	暗褐色	10YR3/3	82 締り良い
110	ピット D7	椭円	0.24	0.20	0.16	12.02	暗褐色	10YR3/3	82 粘質
111	ピット D7	椭円	0.28	0.24	0.30	11.70	暗褐色	10YR3/3	82 粘質
112	ピット D8	円	0.30	0.25	0.21	12.10	暗褐色	10YR3/3	82 粘質、灰
113	ピット D7	円	0.28	0.20	0.15	11.41	暗褐色	7.5YR3/3	82 粘質
114	ピット D7	円	0.20	0.17	0.25	11.49	暗褐色	10YR3/3	82 粘質

# 第5章 高丸遺跡発掘調査に伴う自然科学分析

渡辺正巳：文化財調査コンサルタント（株）

## 1 はじめに

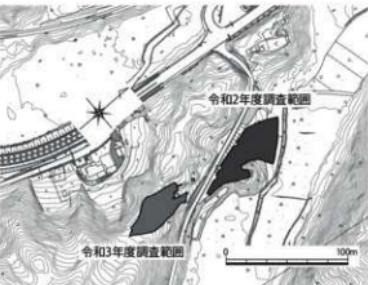
本報は、文化財調査コンサルタント株式会社が島根県教育庁埋蔵文化財調査センターの委託を受け、高丸遺跡内での農耕を含めた植生復元の目的で実施した花粉分析及び植物珪酸体分析、検出された炭窯の操業年代及び炭の樹種を明らかにする目的で実施したAMS年代測定及び樹種同定、及び堆積状況の記載を目的として実施した軟X線写真観察についての2年度にわたる調査報告書を、再編したものである。

また高丸遺跡は、島根県中央部、江津市黒松町地内に位置する。令和2年度調査区は日本海に注ぐ小河川沿いの斜面、令和3年度調査区は令和2年度調査区を見下ろす丘陵上に立地する。

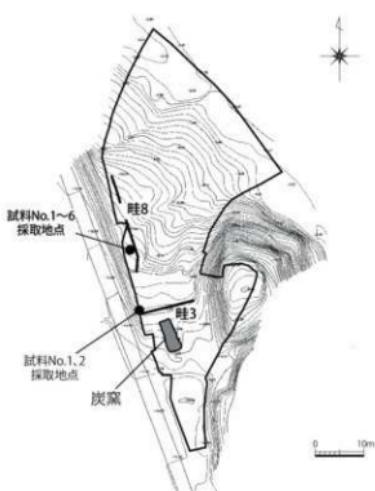
## 2 分析試料について

分析試料は全て、島根県教育庁埋蔵文化財調査センターとの協議の上、文化財調査コンサルタントが採取した。また、以下に示す平面図及び断面図は、島根県教育庁埋蔵文化財調査センターより御提供を受けた原図をもとに、作成した。

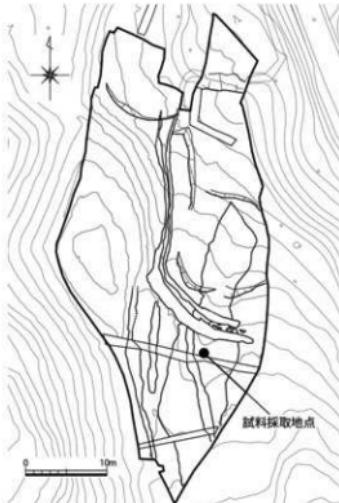
第1図に調査トレンチの配置を、各年度の調査トレンチ平面図（第2、3図）中に、試料採取地点及び炭窯の位置を示した。更に試料採取地点断面図



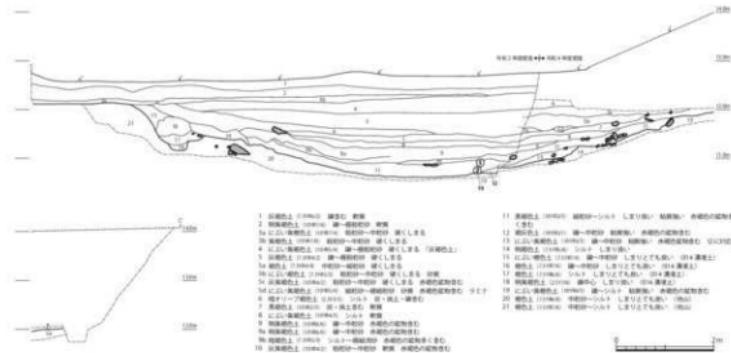
第1図 調査区位置図



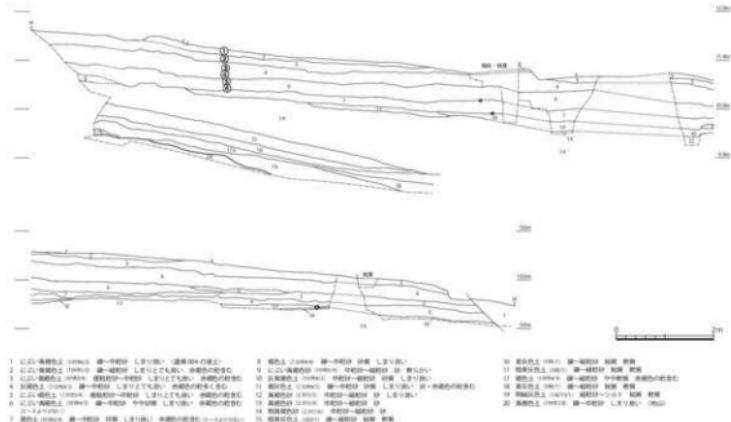
第2図 R2年度調査区平面図(試料採取地点)



第3図 R3年度調査区平面図(試料採取地点)



第4図 R2年度柱3試料採取位置



第5図 R2年度柱8試料採取位置

(第4～6図) 中に花粉及び植物珪酸体分析試料採取層準を「・」で示し、試料番号を「①、②、…」、軟X線写真観察試料の採取位置を□A、B、Cで示した。また、炭窯の平面図(第7図)中に樹種同定(年代測定)試料の採取位置を示した。

### 3 分析方法及び分析結果

#### (1) 微化石概査

##### 1) 分析方法

花粉分析用プレパラート及び花粉分析処理残渣を顕微鏡下で観察し、花粉(胞子)、植物片、微粒炭、珪藻、植物珪酸体、火山ガラスの含有状況を5段階で示した。

## 2) 分析結果

分析結果を第1表に示す。以下に、調査年度ごとに結果の概要を記す。

### 1. R2年度調査

花粉化石のほか植物片、珪藻の検出量は、全ての試料でごく僅かであった。一方、微粒炭は多く含まれ、植物珪酸体もやや多く含まれていた。

### 2. R3年度調査

微粒炭、植物珪酸体の検出量がほとんどの試料で多かった。また、試料No.5より下位では樹木起源の植物珪酸体が多く検出された。花粉化石の含有量はやや少なく、植物片の検出量は少なかった。珪藻化石は全ての試料で検出できなかった。火山ガラスが少なからず椰出されたが、堆積時期から二次的な堆積と考えられる。

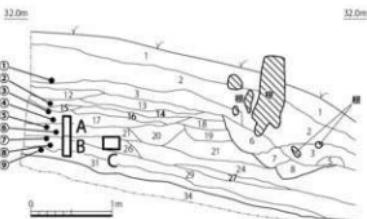
## (2) 花粉分析

### 1) 分析方法

渡辺(2010)に従って実施した。花粉化石の観察・同定は、光学顕微鏡により通常400倍で、必要に応じ600倍あるいは1,000倍を用いて実施した。原則的に木本花粉総数が200粒以上になるまで同定を行い、同時に検出される草本・胞子化石の同定も行った。また中村(1974)に従ってイネ科花粉を、イネを含む可能性が高い大型のイネ科(40ミリ以上)と、イネを含む可能性が低い小型のイネ科(40ミリ未満)に細分した。

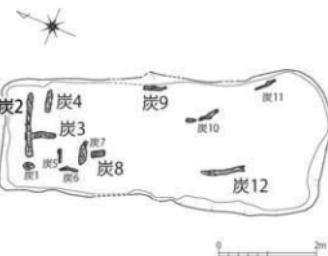
### 2) 分析結果

分析結果を花粉化石組成表(第2表)と花粉ダイアグラム(第8~10図)に示す。花粉ダイアグラムでは、分類ごとに百分率(百分率の算出では、木本花粉総数を基準にしている。)を算出し、分類群ごとに異なるハッチのスペクトルで表している。ただし、R2年度調査の全試料、R3年度調査の試料No.1、9では椰出木本花粉総数が50粒に満たないことから、椰出した分類群を「\*」で示した。また左端に、分類群ごとの割合を示す「総合ダイアグラム」を、右端に分類群ごとに含有量(湿潤試料1g中の粒数)の変化を示す「含有量ダイアグラム」を配置している。



- 1 稲穂土 (0.093m) 中粒砂～細粒砂 砂質 有機物多 有む (表土)
- 2 にじく黄褐色土 (0.093m) 中粒砂～細粒砂 砂質
- 3 にじく黄褐色土 (0.094m) 中粒砂～細粒砂 しまりよい 地山側か
- 4 黄褐色土 (0.094m) 中粒砂～細粒砂 しまりよい 地山側か
- 5 細色土 (0.094m) 中粒砂～細粒砂 しまりよい (薄) (表土)
- 6 黄褐色土 (0.094m) 中粒砂～細粒砂 しまりよい 24 が直し土 (薄) (表土)
- 7 細色土 (0.094m) 中粒砂～細粒砂 しまりよい 地山側か (薄) (表土)
- 8 黄褐色土 (0.094m) 稲穂土砂～細粒砂 しまりよい 地山側か (薄) (表土)
- 9 黄褐色土 (0.094m) 稲穂土砂～細粒砂 しまりよい 地山側か (薄) (表土)
- 10 黄褐色土 (0.094m) 稲穂土砂～細粒砂 しまりよい 地山側か (薄) (表土)
- 11 黄褐色土 (0.094m) 稲穂土砂～細粒砂 しまりよい 地の面あり 下の方は粒が粗く上の方が細かい、水面以上あるものが
- 12 黄褐色土 (0.094m) 稲穂土砂～細粒砂 しまりよい 色の濃淡あり
- 13 稲穂土 (0.094m) 中粒砂～細粒砂 しまりよい 黄色の濃淡あり
- 14 黄褐色土 (0.095m) 中粒砂～細粒砂 しまりよい 黄色の濃淡あり
- 15 黄褐色土 (0.095m) 中粒砂～細粒砂 しまりよい 黄色の濃淡あり
- 16 黄褐色土 (0.096m) 中粒砂～細粒砂 しまりよい 23と同じか
- 17 細色土 (0.096m) 中粒砂～細粒砂 しまりよい 23と同じか
- 18 にじく黄褐色土 (0.096m) 中粒砂～細粒砂 しまりよい 23と同じか
- 19 黄褐色土 (0.096m) 中粒砂～細粒砂 しまりよい 地山側か
- 20 オリーブ褐色土 (0.096m) 中粒砂～細粒砂 しまりよい 黒泥む
- 21 稲穂土 (0.097m) 中粒砂～細粒砂 しまりよい
- 22 稲穂土 (0.098m) 中粒砂～細粒砂 しまりよい 色の濃淡あり
- 23 黄褐色土 (0.098m) 中粒砂～細粒砂 しまりよい 黄色の濃淡あり
- 24 黄褐色土 (0.098m) 中粒砂～細粒砂 しまりよい 黄色の濃淡あり
- 25 黄褐色土 (0.098m) 中粒砂～細粒砂 しまりよい 黄色の濃淡あり
- 26 黄褐色土 (0.098m) 中粒砂～細粒砂 しまりよい 黄色の濃淡あり
- 27 黄褐色土 (0.099m) 中粒砂～細粒砂 しまりよい 黄色の濃淡あり
- 28 黄褐色土 (0.099m) 中粒砂～細粒砂 しまりよい 黄色の濃淡あり
- 29 黄褐色土 (0.099m) 中粒砂～細粒砂 しまりよい 29の上面で大きくな
- 30 黄褐色土 (0.099m) 中粒砂～細粒砂 しまりよい 黄色の濃淡あり
- 31 黄褐色土 (0.099m) 中粒砂～細粒砂 しまりよい 黄色の濃淡あり
- 32 黄褐色土 (0.099m) 中粒砂～細粒砂 しまりよい 黄色の濃淡あり
- 33 黄褐色土 (0.099m) 中粒砂～細粒砂 しまりよい 黄色の濃淡あり
- 34 黄褐色土 (0.099m) 中粒砂～細粒砂 しまりよい 黄色の濃淡あり

第6図 R3年度珪11試料採取位置

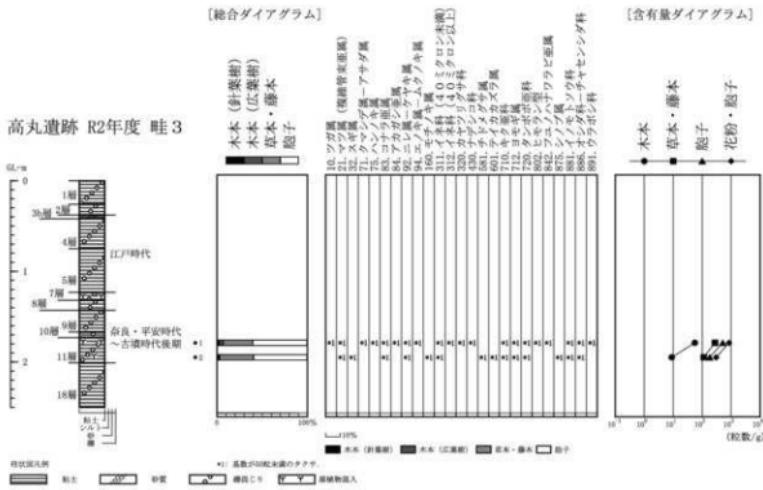


第7図 R2年度002炭窯試料採取地点

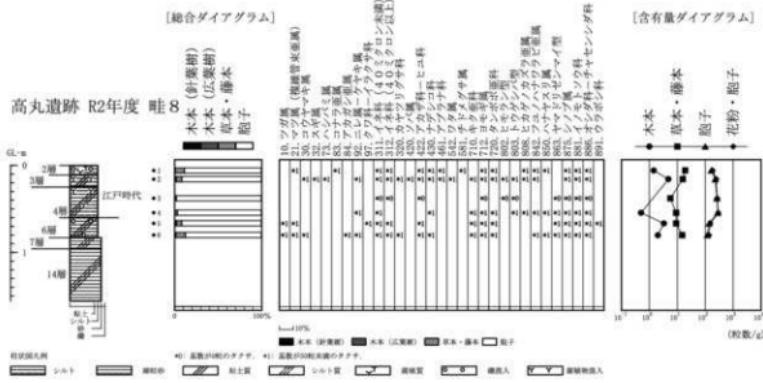
第1表 微化石概査結果

調査区	試料No.	花粉	微粒炭	植物片	珪藻	植物珪酸体	火山ガラス
R3	1	△	○	△×	×	○	△×
	2	△	○	△	△	△	△×
R2	1	△×	○	△	×	○	△×
	2	△×	○	△	○	○	△
	3	×	○	△×	×	○	△
	4	○	○	△	×	△	△
	5	△×	○	△	○	△	△
	6	△×	○	△	○	△	△
R3	1	△	○	△×	×	○	○
	2	○	○	△	×	○	△
	3	○	○	△	×	○	△
	4	○	○	△*	×	○	△
	5	○	○	△*	×	○	△
	6	○	○	△*	×	○	△
	7	○	○	△	×	○	○
	8	○	○	△*	×	○	△
	9	○	○	△*	×	○	△

凡例 ○:十分な数量が検出できる ○:少ない数量が検出できる △:非常に少ない△:椰めてまれに椰出できる ×:椰出できない



第8図 花粉ダイアグラム(R2年度畦3)



第9図 花粉ダイアグラム(R2年度畦8)

### 3) 花粉化石群集の概要

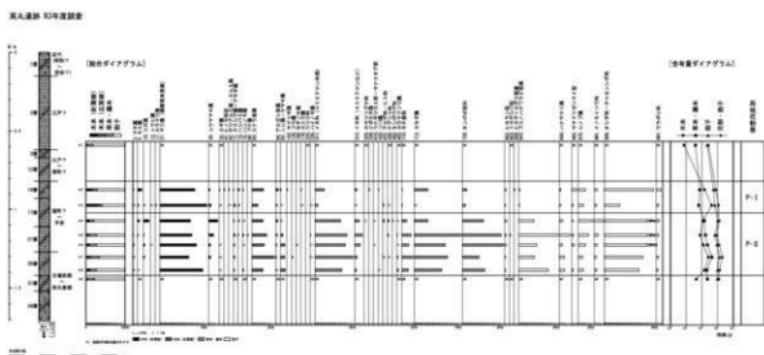
#### 1. R2年度調査：畦3

分析を行った2試料とも木本花粉の検出数が少なく数%に止まった。また、花粉・胞子化石の含有量も数100粒/gに止まり、胞子が2/3を占めた。

花粉、胞子の詳細な割合は上下2試料で類似し、木本花粉ではマツ属(複維管束亜属)、ニレ属・ケヤキ属が複数検出されている。草本・藤本花粉ではイネ科(40%以上未満)、キク亞科、ヨモギ属、タンポポ亞科、胞子ではオシダ科・チャセンシダ科の検出量が多かった。

#### 2. R2年度調査：畦8

花粉・胞子化石含有量は100～300粒/gに止まり、胞子の割合が90%程度以上を占める。一方、



第10図 花粉ダイアグラム(R3年度柱11)

木本花粉は0~2%とごく僅かで、数粒の検出に止まった。

草本・藤本花粉ではヨモギ属が全試料で検出され、イネ科(40ミリ未満)、タンボボ亜科が比較的多く検出された。また胞子ではオシダ科・チャセンシダ科の検出量が多かった。

試料No.2では栽培種のソバ属の外、ワタ属も検出された。

### 3. R3年度調査

ほとんどの試料で胞子の割合が、70~80%と高かった。木本花粉の割合は、試料No.2で18.9%、試料No.3で36.3%とやや高かったが、その他の試料では数~10%程度に止まった。木本花粉ではマツ属(複葉管束亜属)が50~75%と高率を示し、コナラ亜属が10~36%と続く。草本花粉ではイネ科(40ミリ未満)が5~60%、ヨモギ属が1~75%、タンボボ亜科が5~64%と高率を示す。胞子ではフユノハナワラビ亜属が2~62%、オシダ科・チャセンシダ科が25~98%と高率を示す。また、形態分類群であるが三条溝胞子が最大574%を示す。

#### (3) 植物珪酸体分析

##### 1) 分析方法

藤原(1976)のグラスピース法に従って実施した。プレパラートの観察・同定は、光学顕微鏡により通常400倍で、必要に応じ600倍あるいは1,000倍を用いて実施した。同定に際して、母植物との対応が明らかな、イネ亜科の機動細胞を中心とした分類群(第3表)を対象とした。また、植物珪酸体と同時に計数したグラスピースの個数が300を超えるまで、計数を行った。

##### 2) 分析結果

分析結果を植物珪酸体化石組成表(第4表)と植物珪酸体ダイアグラム(第11図)に示す。植物珪酸体ダイアグラムでは、検出密度を分類群ごとにスペクトルで表している(イネ科(機動細胞)は黒、樹木起源は白のスペクトルで表した)。また、寒暖の指標である「メダケ率」と、関東地方での積雪量の指標である「チマキザサ節型/ミヤコザサ節型グラフ」を示した。

##### 3) 植物珪酸体化石群集の概要

試料No.9~7ではマンサク科(イスノキ属)の検出密度が30,000粒/gを超えるほか、ブナ科(シノキ属)も2,500粒/gを超える。一方でササ類の検出密度が低い。また、断続的にイネが検出される。試料No.6, 5ではマンサク科(イスノキ属)が減少傾向を示すほか、メダケ節型、ネザサ節型が微増す

第2表 花粉化石組成表

試料No.	調査地名	R2年度調査地点					
		組3		組4		組5	
		17番	2番	3番	4番	5番	6番
3 <i>Podocarpus</i>	マキ属						
5 <i>Aleurites</i>	モク属						
10 <i>Tesia</i>	ツバキ属	2. 8.7%					
13 <i>Rhus</i>	トクセ属						
21 <i>Larix</i>	カブトガシ属						
21 <i>Laurus</i>	マツノキ(後期末至前期)	6. 26.1%	3. 37.5%	1. 50.0%		1. 14.3%	
30 <i>Scoyocarya</i>	コワヤマキ属						
32 <i>Cryptomeria</i>	スギ属						
41 <i>Cupressaceae-type</i>	ヒノキ属						
71 <i>Ceratopeltis-Juglans</i>	サルガム属—クルミ属						
71 <i>Ceratopeltis-Ostrya</i>	カタシメガシ属—アザダ属	1. 4.3%				1. 14.3%	
73 <i>Corylus</i>	ハシヅチ属						
75 <i>Alnus</i>	ハンノキ属	1. 4.3%					
80 <i>Fagus</i>	ブナ属						
84 <i>Crataegus</i>	コラマツ属	3. 13.0%	1. 12.5%	1. 50.0%		3. 42.9%	1. 100.0%
92 <i>Ulmus-Zelkova</i>	ニレ属—ヤケヤナギ属	7. 30.4%	2. 25.0%				
94 <i>Celtis-Aphananthe</i>	エキノキ属—ムラサキ属	1. 4.3%					
102 <i>Vaccinium</i>	クワガタムラサキ科						
120 <i>Liquidambar</i>	ツクツクノキ属						
160 <i>Betula</i>	モクノキ属						
170 <i>Acer</i>	カシカツチ属						
180 <i>Fraxinus</i>	ツバキ属						
229 <i>Symplocos</i>	ハイノキ属						
311 <i>Gramineae-(40)</i>	イネ科(40種クロン東)	34. 147.8%	18. 225.0%	6. 300.0%	2. 28.6%	1. --	5. 500.0%
311 <i>Gramineae-(40)</i>	イネ科(40種クロン以上)	2. 8.7%		2. 100.0%	3. 42.9%	1. --	
320 <i>Dipsaceae</i>	カマツカサ科	1. 4.3%					
418 <i>Echinochaetae-Panicaceae</i>	イネ科(40種クロン以上)						
420 <i>Fragrum</i>	ソイ属						
423 <i>Chenopodiaceae-Amaranthaceae</i>	アザキ科—ヒマ科			9. 450.0%	3. 42.9%	1. --	
450 <i>Convolvulaceae</i>	キヨウガ科			2. 100.0%	1. 14.3%		
455 <i>Thlaspiaceae</i>	カタツムリ科						
481 <i>Crassifoliae</i>	アブラナ科						
542 <i>Grossulariaceae</i>	ツブツブ属						
601 <i>Trichiliaceae</i>	テイカズカ属						
710 <i>Cardiaceae</i>	キク科	1. 12.5%	1. 12.5%				
711 <i>Artemisia</i>	日吉草属	7. 30.4%	38. 475.0%	1. 14.3%		3. 300.0%	
720 <i>Citriaceae</i>	シロクマ科	34. 147.8%	21. 262.5%	2. 100.0%	2. 28.6%	3. --	5. 500.0%
720 <i>Citriaceae</i>	シロクマ科	34. 147.8%	23. 282.7%	4. 200.0%	6. 85.7%	4. 400.0%	
803 <i>Urticaceae-nicotin type</i>	ヒメジ科	2. 8.7%					
803 <i>Urticaceae-nicotin type</i>	ヒメジ科						
804 <i>Subgenus Lycopodium</i>	ヒメノカズラ属						
841 <i>Selaginaceae</i>	フジノリパビドウ属	8. 39.1%		1. 50.0%	2. 28.6%		
863 <i>Ornithocheilus-Chromaneae type</i>	ハマヤマリソシイ属			1. 50.0%			
875 <i>Ovalaria</i>	シブ属						
881 <i>Plumbaginaceae</i>	イモノク科	7. 30.4%	4. 50.0%	8. 300.0%	3. 42.9%	3. --	5. 500.0%
886 <i>Aralia-Aralia</i>	オダマキ科—チャセンジン科	16. 69.6%	27. 337.5%	134. 870.0%	193. 2757.1%	136. --	176. 1760.0%
889 <i>MONOTONEA-TYPE-SPORAE</i>	クマノミ科	1. 4.3%					
889 <i>TRIATE-TYPE-SPORAE</i>	三葉粉孢子	41. 177.5%	36. 450.0%	39. 1950.0%	43. 400.0%	38. --	95. 9500.0%
木本(計量樹)		8. 2.3%	4. 1.5%	1. 0.4%	3. 0.8%		
木本(立木樹)		15. 4.3%	4. 1.5%	1. 0.4%	4. 1.1%		1. 0.2%
木本(灌木)		113. 32.7%	107. 27.4%	77. 23.7%	67. 6.4%	6. 2.1%	18. 2.1%
灌木		210. 80.7%	183. 59.7%	230. 89.8%	331. 91.7%	279. 87.8%	561. 98.7%
总数		246	272	259	381	284	580
合計量(粒数/g)		844	304	185	248	268	292

る。試料No.4～2ではマンサク科(イスノキ属)、ブナ科(シノキ属)が顕著に減少する。一方、メダケ節型、ネササ節型が著しく増加するほか、ウシクサ族Aも微増する。

#### (4) 樹種同定

##### 1) 樹種同定方法

渡辺(2020a)に従って観察試料の調整を行い、走查電子顕微鏡下で観察・同定を行った。

##### 2) 同定結果

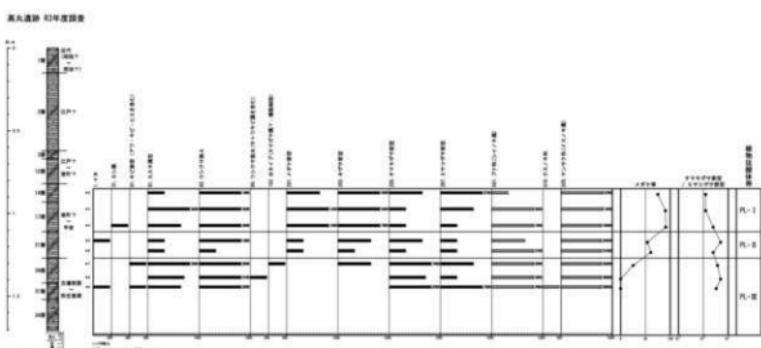
樹種同定結果を第5表に示す。以下に、記載を行ふとともに、代表的な試料(下線)の電子顕微鏡写真を第12図に示す。

第3表 微化石概査結果

同定レベル	コード	分類群		記述する微植物
		1	3	
被検植物と 対応が明ら かな分類群		1 イネ 3 イネ科属(過去の表面細胞)		イネ イネ科
		21 ヒメノリ属(過去の表面細胞)		ヒメノリ・オムギ
	41 オヒシ属(シコクヒエ型)			シコクヒエ
	61 キビ族			ヒエ・アワ・キビ
	62 キビ属			キビ
	64 ヒメノリ属			ヒメノリ
	64 ハコロコサ属型			アヲ
	68 ウシクサ属			サトウキビ
	91 モロコシ属			モロコシ
	93 ジュウダク属			ハムギ
4	11 サヤシキグサ属			サヤシキグサ・アシカキ
	13 マコモ属			マコモ
	23 ダンチク属			ココ
	25 スマガヤ属型			スマガヤ
	51 シバ属			シバ属
	71 トデシバ属			トデシバ属
	73 ハクサンヒバ属			スマカツ
	83 ウシクサ属A			ウシクサ属など
	201 メダケ節型			メダケ節
	205 ネササ節型			ネササ節
	206 チマキサ節型			チマキサ節・チマササ節
	207 ハクサンヒバ節型			ヒクサンヒバ節
	209 マダケ属			マダケ属
	309 カヤリソクサ科(スゲ属など)			カヤリソクサ
	39 シダ属			シダ属
	501 ブナ科(クイ属)			クイ
	502 ハコロコサ科(ウシクサ属)			ウシクサ属
	510 クヌノキ科			クヌノキ
	530 アワブキ科(イスノキ属)			アワブキ科
	540 モクレン属型			モクレン属
	549 モクレン属			モクレン
	550 マツ属			マツ属

		R3年度調査地点												
		R3		14番		17番		21番		29番		31番		
		5	6	1	2	3	4	5	6	7	8	9		
1	25.0%	1	20.0%		1 1.1%	1 0.8%		1 1.0%	2 1.8%	1 0.7%	1 0.8%			
					6 5.8%	3 1.5%	4 2.2%	1 1.0%	3 2.4%	3 2.0%	1 0.8%			
					1 0.5%	1 0.5%	1 0.5%	1 0.8%	1 0.8%	1 0.7%	1 0.8%	1 2.9%		
2	50.0%	1	20.0%	2 25.0%	49 55.7%	152 75.5%	61 48.8%	50 51.0%	73 58.4%	70 46.1%	83 66.6%	19 52.9%		
				2 25.0%	2 2.3%	8 4.0%	18 14.4%	8 8.2%	4 3.2%	9 3.3%	1 0.8%	2 5.9%		
				1 12.5%	1 1.5%	1 0.5%	1 1.7%					1 0.8%	1 2.9%	
3	25.0%	2	25.0%		1 1.1%	2 1.0%		1 1.1%	7 3.5%	2 1.8%	3 2.1%	2 2.4%	4 2.6%	
					2 2.3%	2 1.0%	1 0.8%	1 1.0%	2 2.0%	1 0.8%	2 2.0%	2 1.7%	1 2.9%	
					1 1.1%	1 0.8%	1 0.8%	1 0.8%	2 2.0%	2 1.8%	2 1.3%	1 0.8%	2 5.3%	
4	100.0%	5	100.0%	19 237.5%	13 14.8%	10 5.0%	51 40.8%	50 51.0%	81 48.8%	93 81.2%	52 43.0%	58 170.6%		
				1 20.0%	1 12.5%	3 3.4%	1 0.5%	9 7.2%	12 12.2%	11 8.8%	8 3.9%	3 2.5%	6 17.6%	
				1 20.0%	1 12.5%		1 1.1%	1 0.8%		1 0.8%				
5	25.0%	8	160.0%		1 1.1%	3 1.5%	3 2.4%		1 0.8%		1 0.7%			
				2 40.0%	3 37.5%		1 0.5%	3 2.4%	2 2.0%		1 0.7%			
					1 12.5%		1 0.8%	1 1.0%	1 0.8%	3 2.0%	3 2.0%	1 0.8%	1 2.9%	
6	25.0%	11	220.0%	5 62.5%	1 1.1%	3 1.5%	10 8.0%	15 15.3%	14 11.2%	27 17.8%	13 10.7%	34 100.0%		
				2 50.0%	9 112.5%	8 8.8%	10 8.0%	42 30.8%	61 62.2%	81 64.8%	40 28.3%	43 35.5%	40 117.6%	
				1 25.0%	2 12.5%		2 2.8%	3 1.5%	4 3.2%	3 2.0%	3 2.4%	2 1.5%	2 5.9%	
7	25.0%	7	140.0%	5 62.5%	1 1.1%	3 1.5%	10 8.0%	15 15.3%	14 11.2%	27 17.8%	13 10.7%	34 100.0%		
				2 50.0%	9 112.5%	8 8.8%	10 8.0%	42 30.8%	61 62.2%	81 64.8%	40 28.3%	43 35.5%	40 117.6%	
				1 25.0%	2 12.5%		2 2.8%	3 1.5%	4 3.2%	3 2.0%	3 2.4%	2 1.5%	2 5.9%	
8	25.0%	131	2820.0%	25 312.5%	69 78.4%	50 24.8%	121 98.4%	90 91.8%	113 90.4%	93 61.2%	87 55.4%	74 217.6%		
				1 25.0%	3 25.0%	9 8.8%	8 8.8%	6 6.1%	8 8.8%	11 11.1%	8 8.8%	6 6.1%	9 3.6%	
				1 25.0%	2 12.5%		2 2.8%	3 1.5%	4 3.2%	3 2.0%	3 2.4%	2 1.5%	2 5.9%	
9	25.0%	75	1500.0%	85 1963.3%	29 33.0%	53 25.3%	151 150.5%	150 159.5%	159 172.5%	68 43.4%	108 154.1%	140 141.8%		
				2 50.0%	121 1512.5%	200 227.3%	178 88.1%	717 572.5%	515 525.5%	603 482.5%	542 358.5%	354 457.5%	509 3494.1%	
				1 25.0%	4 50.0%	2 2.3%	1 0.8%	17 12.5%	17 12.5%	17 12.5%	17 12.5%	17 12.5%	3 2.3%	
10	25.0%	3	3	6 50.0%	2 2.3%	1 0.8%		3 2.4%	1 0.8%	1 0.8%	1 0.8%	1 0.8%	1 0.8%	
				1 25.0%	1 12.5%	3 8.0%	4 2.0%	1 0.8%	3 2.4%	5 4.0%			3 2.3%	
				1 25.0%	3 37.5%	10 11.4%	17 8.4%	29 23.2%	18 16.2%	15 12.0%	11 7.2%	10 8.9%	5 14.7%	
11	25.0%	3	37.5%	6 62.5%	4 4.5%	7 3.5%	17 13.6%	6 6.1%	6 4.8%	4 2.8%	5 4.1%	7 20.6%		
				1 25.0%	4 12.5%	2 2.3%	1 0.8%	10 9.1%	21 16.2%	23 17.7%	21 21.4%	18 18.1%	7 17.6%	
				1 25.0%	3 11.4%	4 14.5%	4 4.4%	9 8.9%	20 9.4%	17 13.6%	17 12.0%	18 15.1%	7 18.1%	
12	25.0%	393	87.5%	245 82.8%	398 71.6%	324 58.2%	1092 73.9%	1067 73.9%	1077 73.9%	727 77.7%	657 69.7%	871 74.0%	704 74.0%	
				1 25.0%	3 25.0%	2 2.3%	1 0.8%	1 0.8%	1 0.8%	1 0.8%	1 0.8%	1 0.8%	1 0.8%	
				1 25.0%	3 25.0%	2 2.3%	1 0.8%	1 0.8%	1 0.8%	1 0.8%	1 0.8%	1 0.8%	1 0.8%	
13	335	135	270	296 485	556	1,366	1,179	841	1,204	1,179	2,066	1,274	1,237	
				1 25.0%	3 25.0%	2 2.3%	1 0.8%	1 0.8%	1 0.8%	1 0.8%	1 0.8%	1 0.8%	1 0.8%	
				1 25.0%	3 25.0%	2 2.3%	1 0.8%	1 0.8%	1 0.8%	1 0.8%	1 0.8%	1 0.8%	1 0.8%	

左よりカウント数値・百分率



第11図 植物珪酸体ダイアグラム (R3 年度 11)

第4表 植物珪酸体化石組成表

調査地点	地層	R3年度調査地点						
		14層	17層	21層	29層	31層		
試料No.	2	3	4	5	6	7	8	9
1 イネ	—	—	—	1	—	—	—	1
31 ヨシ属	—	—	—	5	—	—	—	5
	—	—	—	0.19	—	—	—	0.19
61 キビ族型	—	—	—	—	—	—	—	—
81 ススキ属型	—	—	—	—	—	—	—	—
	1	4	2	1	1	5	2	2
	5	20	10	5	5	25	11	10
	0.06	0.25	0.12	0.06	0.07	0.32	0.13	0.13
83 ウシクサ族A	3	7	6	3	1	4	4	4
	16	35	30	16	5	20	21	20
84 ウシクサ族B	—	—	—	—	—	—	—	—
152 Bタイプ	—	—	—	—	—	—	—	—
201 メダケ族型	2	3	3	1	1	—	—	—
	10	15	15	5	5	—	—	—
	0.12	0.17	0.17	0.06	0.06	—	—	—
203 ネザサ節型	12	19	15	2	1	2	—	—
	63	94	75	10	5	10	—	—
	0.30	0.45	0.36	0.05	0.03	0.05	—	—
205 チマキササ節型	2	1	1	2	1	3	2	4
	10	5	5	10	5	15	11	20
	0.08	0.04	0.04	0.08	0.04	0.11	0.08	0.15
207 ミヤコザサ節型	4	2	1	1	1	2	1	3
	21	10	5	5	5	10	5	15
	0.06	0.03	0.01	0.02	0.02	0.03	0.02	0.05
501 ブナ科(シノキ属)	1	4	3	2	4	5	6	9
	5	20	15	10	21	25	32	46
510 クスノキ科	—	—	—	—	—	—	—	—
520 マンサク科(イスノキ属)	7	15	31	47	59	69	72	76
	37	74	155	245	310	352	386	385
	—	—	—	—	—	—	—	—
ブシント・オバール認数	230	352	359	381	473	561	584	624
カウント・ガラスピーズ数	472	476	483	460	466	463	464	483
カウント・总数	702	828	842	841	939	1024	1048	1107
試料重量( $\times 1000\text{g}$ )	8570	8970	8880	8880	8840	8940	8590	8800
ガラスピーズ重量( $\times 0.0001\text{g}$ )	232	232	237	236	237	231	234	236
メタケ率(%)	75.0	90.3	91.0	54.1	61.0	28.2	0.0	0.0
チマキササ節型 / ミヤコザサ節型	1.25	1.25	2.50	5.00	2.50	3.75	5.00	3.33

上段 検出粒数

中段 検出密度(単位:  $\times 100\text{粒/g}$ )下段 検定生産量(単位: kg/m<sup>2</sup>·cm)1. コナラ節(コナラ属・コナラ亜属) *Quercus* (sect. *Prinus*) sp.

No.炭8、9

記載: 大きい円形ないし楕円形の道管が単独で2~3列に配列する環孔材である。孔圈外では非常に小さい道管が、単独で火炎状に配列する。小道管は薄壁で、やや角ばっている。道管にはチロースがよく発達し、道管せん孔は单せん孔である。また、孔圈道管の周りには周囲仮道管が存在している。放射組織は同性ですべて平伏細胞からなり、多数の極めて低い單列放射組織と極めて幅の広い広放射組織からなる、典型的な複合型である。軸方向柔細胞は1ないし2細胞幅の単接線状柔組織を形成している。以上の組織上の特徴から、コナラ属コナラ亜属コナラ節と同定した。

2. クヌギ節(コナラ属・コナラ亜属) *Quercus* (sect. *Cerris*) sp.

No.炭2、3、4

記載: 円形ないし楕円形のやや大きい道管が単独で1~2列に配列する環孔材である。孔圈外では

第5表 樹種同定・年代測定結果

試 料						前処理	測定番号	
試料No.	調査区	出土地点 (遺構注記)	状況	重量(g)	推定期			
炭2	令和2年度 調査区	炭窯	炭化材 (クヌギ節)	3.4161	—	粗骨面洗浄 有機溶剤処理:アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸:1.2S, 水酸化ナトリウム:1.0N, 食塩:1.2S)	PLD-63913	
炭3			炭化材 (クヌギ節)	7.8352	—	粗骨面洗浄 有機溶剤処理:アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸:1.2S, 水酸化ナトリウム:1.0N, 食塩:1.2S)	PLD-63914	
炭4			炭化材 (クヌギ節)	0.26	—	粗骨面洗浄 有機溶剤処理:アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸:1.2S, 水酸化ナトリウム:1.0N, 食塩:1.2S)	PLD-63915	
炭8			炭化材 (コナラ節)	2.7504	—	粗骨面洗浄 有機溶剤処理:アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸:1.2S, 水酸化ナトリウム:1.0N, 食塩:1.2S)	PLD-63916	
炭9			炭化材 (コナラ節)	0.7875	—	粗骨面洗浄 有機溶剤処理:アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸:1.2S, 水酸化ナトリウム:1.0N, 食塩:1.2S)	PLD-63917	
炭12			炭化材 (エノキ属類似)	0.573	—	粗骨面洗浄 有機溶剤処理:アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸:1.2S, 水酸化ナトリウム:1.0N, 食塩:1.2S)	PLD-63918	
試料No.	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	$\delta^{13}\text{C}$ 補正無年代 (yrBP $\pm 1\sigma$ )	曆年較正用年代 (yrBP $\pm 1\sigma$ )	$^{14}\text{C}$ 年代 (yrBP $\pm 1\sigma$ )	$^{14}\text{C}$ 年代を曆年代に較正した年代範囲			
					1a 曆年代範囲	2a 曆年代範囲		
炭2	-27.54 $\pm 0.17$	965 $\pm 18$	923 $\pm 18$	925 $\pm 15$	1047-1083 cal AD (4.3%) 1127-1140 cal AD (10.4%) 1149-1162 cal AD (13.6%)	1040-1069 cal AD (95.4%)		
炭3	-24.15 $\pm 0.22$	941 $\pm 17$	954 $\pm 17$	955 $\pm 15$	1039-1047 cal AD (8.7%) 1083-1130 cal AD (48.0%) 1138-1150 cal AD (11.6%)	1031-1054 cal AD (17.7%) 1064-1158 cal AD (77.8%)		
炭4	-28.89 $\pm 0.16$	1006 $\pm 17$	942 $\pm 17$	940 $\pm 15$	1042-1052 cal AD (8.1%) 1078-1107 cal AD (25.1%) 1117-1155 cal AD (35.0%)	1037-1158 cal AD (95.4%)		
炭8	-26.39 $\pm 0.20$	934 $\pm 17$	911 $\pm 17$	910 $\pm 15$	1048-1082 cal AD (45.1%) 1151-1173 cal AD (23.2%)	1044-1087 cal AD (47.0%) 1092-1105 cal AD (3.9%) 1120-1180 cal AD (37.4%)		
炭9	-26.81 $\pm 0.15$	994 $\pm 18$	964 $\pm 18$	965 $\pm 20$	1033-1047 cal AD (16.3%) 1084-1127 cal AD (44.8%) 1140-1148 cal AD (7.2%)	1027-1063 cal AD (22.8%) 1077-1156 cal AD (72.7%)		
炭12	-26.26 $\pm 0.17$	991 $\pm 18$	970 $\pm 17$	970 $\pm 15$	1030-1047 cal AD (23.0%) 1084-1095 cal AD (13.6%) 1102-1124 cal AD (28.3%) 1143-1147 cal AD (3.4%)	1026-1051 cal AD (26.9%) 1080-1154 cal AD (68.6%)		

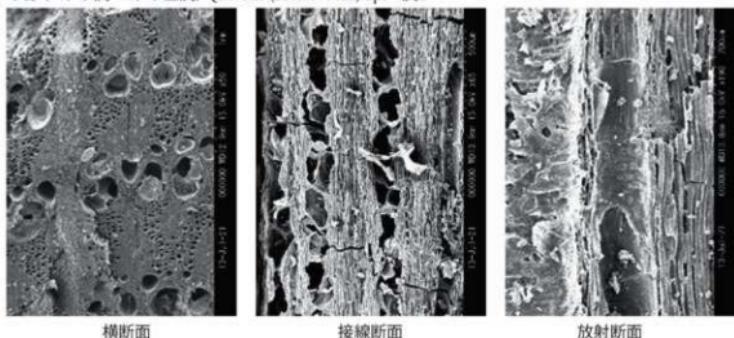
径を急激に減じた円形ないし椭円形の小道管が、単独で放射状に配列する。小道管は厚壁である。道管せん孔は单せん孔であり、一部の道管内腔にはチロースが認められる。孔圈道管の周りには周囲仮道管が存在している。軸方向柔細胞は單列ないし数細胞幅の短接線状柔組織を形成し、目立つ。放射組織は同性ですべて平伏細胞からなり、多数の低い単列放射組織と極めて幅の広い広放射組織からなる、典型的な複合型である。道管放射組織壁孔は柵状を示す。以上の組織上の特徴から、クヌギ節(コナラ属)と同定した。

### 3. エノキ属類似 cf. *Celtis* sp.

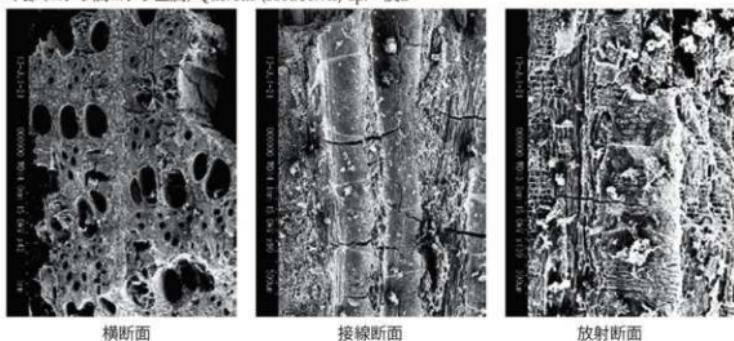
№炭12

記載: 年輪幅が狭い。中庸の道管が1~2列に配列する環孔材である。孔圈外では集団管孔を形成し斜線状に配列している。道管せん孔は单せん孔で道管内にはチロースがよく発達している。孔圈道管及び集団管孔を囲む周囲柔組織が存在している。放射組織は1~6細胞幅で上下端に長細胞を持つが、さや細胞は認められなかった。以上の組織上の特徴から、エノキ属の可能性が高いが、さや細胞が認められなかったことからエノキ属類似に止めた。

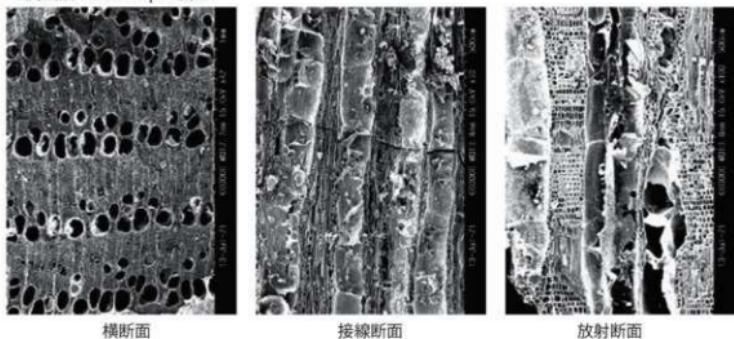
コナラ節(コナラ属・コナラ亜属) *Quercus* (sect. *Prinus*) sp. : 炭8



クヌギ節(コナラ属コナラ亜属) *Quercus* (sect. *Cerris*) sp. : 炭2



工ノキ属類似 cf. *Celtis* sp. : 炭12



第12図 樹種図版(電子顕微鏡写真)

## (5) AMS 年代測定

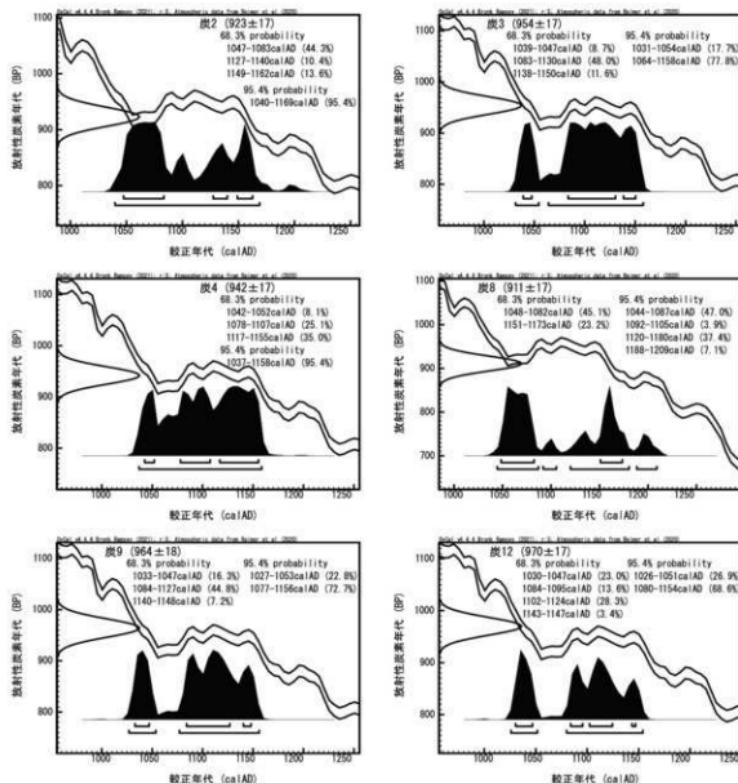
## 1) 年代測定方法

塩酸による酸洗浄の後に水酸化ナトリウムによるアルカリ処理、更に再度酸洗浄を行った。この後、二酸化炭素を生成、精製し、グラファイトに調整した。 $^{14}\text{C}$  濃度の測定にはタンデム型イオン加速器を用い、半減期: 5,568年で年代計算を行った。暦年代較正にはOxCal ver. 4.4 (Bronk Ramsey, 2009) を利用し、INTCAL20 (Reymer et al. 2020) を用いた。

## 2) 年代測定結果

測定結果を第5表、第13図に示す。

第5表には、試料の詳細、前処理方法、 $\delta^{13}\text{C}$  値と4種類の測定年代を示している。第13図には INTCAL20 (Reymer et al. 2020) を用いた暦年較正結果を示した。また、確率分布と $\sigma$ 、 $2\sigma$  の構成範囲を示している。



第13図 暦年較正結果

## (6) 軟X線写真観察

### 1) 分析方法

試料の調整、軟X線写真撮影、観察及び記載は、渡辺(2020b)に従って実施した。

### 2) 分析結果

第14、15図に、軟X線写真及び観察結果を示す。以下では、試料ごとに観察結果の記載を示す。

#### 1. 試料A・B(17~31層)

##### ① 17層

極粗粒砂混じり暗褐色粘土が主体で、灰白色の細粒砂から成る中礫サイズの亜円形ブロックと暗灰色の極粗粒砂混粘土から成る中礫サイズの亜円形ブロックが顕著である。中央やや下寄りに、円弧状の砂列が並んで認められる。径からモグラなどの這い跡の可能性がある。またこれらと重なって、根による擾乱が認められる。

軟X線写真観察では、亜角礫ブロック内部には亜角塊状～小粒状ベッドが認められるが、ブロック外周は比較的滑らかである。また全体に、根(ひげ根)跡に規制された細粒の亜角塊状ベッドが発達している。這い跡は全体に暗色を帯び、空隙が多いことが分かるほか、色調の明るい極粗粒部が円弧状に分布する。また、根による擾乱部(根跡)は暗色を帯び、空隙が多いことが分かる。

##### ② 21層

極粗粒砂混じり暗褐色粘土が主体で、灰白色粘土質中～極粗粒砂から成る不定形で大きなブロックが中央やや右に斜めに認められるほか、暗灰色粘土からなる中礫サイズで梢円形のブロックが右端に認められる。また、中央部に17層から続く根による擾乱が認められる。

軟X線写真では、中央部の根による擾乱部(根跡)は暗色を帯び、空隙が多いことが分かる。灰白色ブロックと重なって、根跡と考えられるチャンネルが密集しており、灰色ブロックが根跡(砂粒による充填)の可能性もある。一方でブロック部分が周囲より柔らかいために、根が密集した可能性もある。暗灰色ブロックは内部に、中～粗粒で中～強度に発達した小粒状ベッドを含むことが分かる。

##### ③ 29層

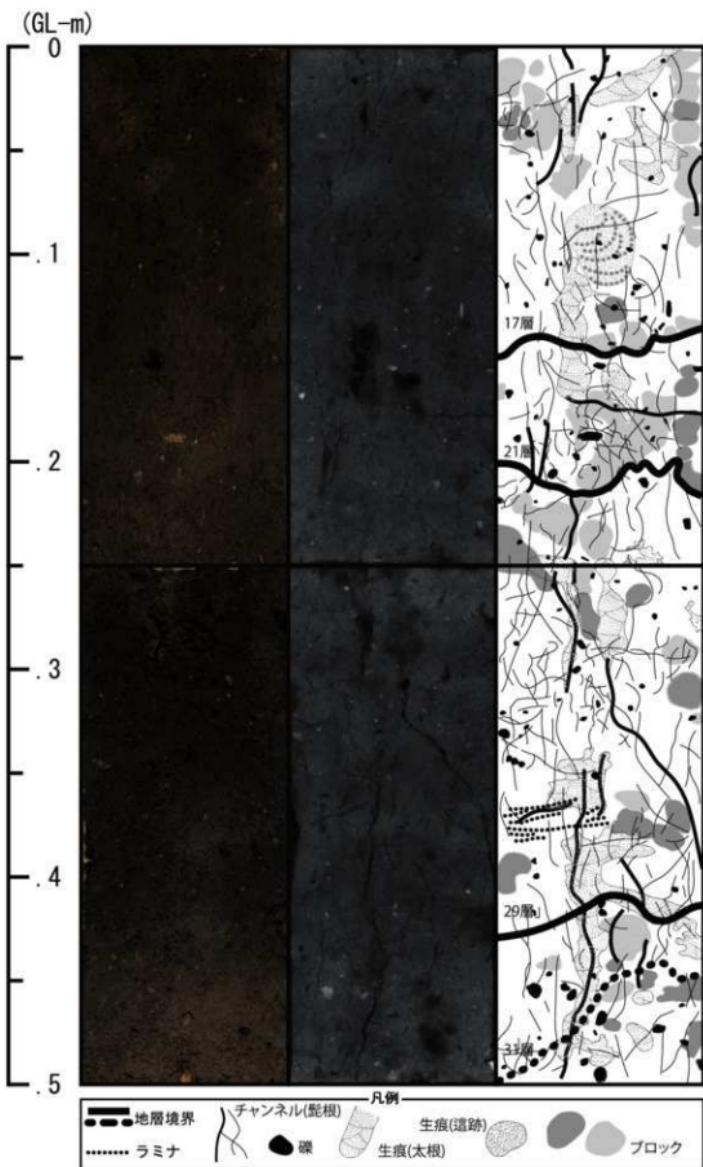
極粗粒砂混じり暗褐色粘土が主体で、灰白色粘土質中～極粗粒砂から成るブロックが21層から続き、更に周辺に散在する。またこれらに続き、根による擾乱部が二条認められる。灰白色ブロックには、21層から続くブロックとは無関係に散在するも中礫サイズで梢円形のブロックもある。このほか暗灰色粘土から成る中礫サイズで梢円形のブロックも散在する。根による擾乱部は下部にも認められ、31層まで続く。

軟X線写真では、中央やや下方、左側に粗～極粗粒砂のラミナが認められる。中央部まで連続するが、根による擾乱部で止まり、右側には続かない。暗灰色ブロックは内部に、中～粗粒で中～強度に発達した小粒状ベッドを含むことが分かる。一方、灰白色ブロック内には亜角塊状の中度に発達したベッドが目立つ。

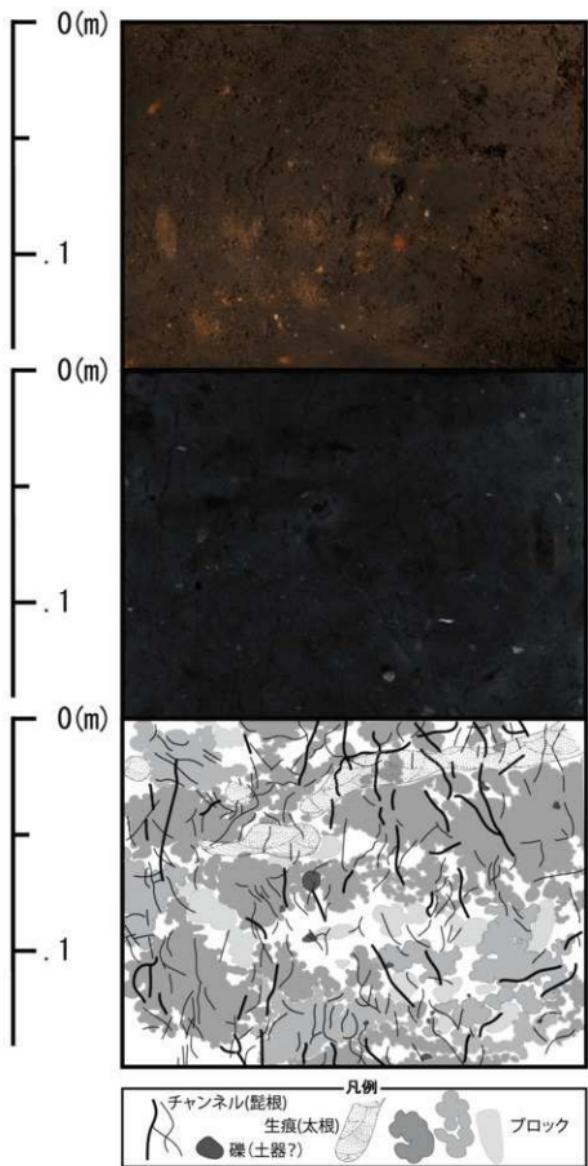
##### ④ 31層

下部は灰黄褐色極粗粒砂～細礫混じり粘土で、炭片も認められる。また、根による擾乱が29層から続く。上部には、下部由来の中礫サイズのブロックが多く含まれ、29層へ漸移する。下部には29層由来の中礫サイズのブロックが含まれる。

軟X線写真では、上部は擾乱を受けたために空隙が多いと考えられ、下部に比べ色調がやや暗い。



第14図 軟X線写真観察結果：試料A・B



第15図 軟X線写真観察結果：試料C

実視では見えなかった、梢円形の根跡が、黒い梢円形のブロック状に2ヵ所で認められたほか、実視で認められた炭片が黒い角張ったブロック状に認められた。また、上部、下部ともに細～中粒で中度に発達した亜角～角塊状ベッドが顕著に認められる。

以上の観察結果から、観察を行った17～31層は本来崩落土（あるいは埋土）で、その後根による擾乱を受けたものと考えられる。

## 2. 試料C（26層）

全体が26層である。

実視では、細～中礫（土器片？含む）が散在し、中礫サイズの明褐色ブロック、根による擾乱が顕著である。また、褐色～暗褐色の色調の違いにより中～大礫サイズのブロックが判別される。

軟X線写真では、中礫サイズの明褐色ブロックは周囲が比較的シャープであり、根跡（充填）の可能性も指摘できる。根による擾乱部は色調が暗く、空隙が多いものと考えられる。また、根による擾乱部周囲は褐色～暗褐色で中～大礫サイズのブロックで囲まれており、ブロック内及び外周には中～粗粒の小粒状ベッドが認められる。このため、根による擾乱部と各ブロックの境界はシャープには成っていない。ベッドには、小粒状ベッドのほか根（ひげ根）跡に規制された角塊状～亜角塊状ベッドも認められ、「土壤化」を受けるもののその程度は低いと考えられる。

以上の事柄から、26層は本来崩落土（あるいは埋土）であり、その後根による擾乱を受けたものと考えられる。

## 4 花粉化石が含まれなかつた原因について

花粉分析の結果、R2年度調査区ではほとんどの試料で花粉・胞子化石含有量が少ないと明らかになった。花粉化石処理の残渣を観察する微化石概査によると、微粒炭を除く微化石についても、植物珪酸体の含有量がやや多いものの、同様の傾向が認められた。

花粉化石の含有量が少ない原因について、一般には以下のようなことが考えられており、今回の微化石検出傾向と比べると、以下のようになる。

1. 堆積物の特性（粒度・比重）と花粉化石の平均的な粒径、比重が著しく異なり、堆積物中に花粉化石が含まれない。

今回の分析層準（試料）は粘土主体の層（試料）であり、このことは該当しない。

2. 堆積速度が速いために、堆積物中に花粉化石の含有量が少ない。

花粉の生産量が毎年ほぼ一定であると仮定すると、堆積速度が速いほど花粉化石の含有量は少なく、遅いほど含有量は多くなる。また、花粉化石に限らず、堆積中に付加される微化石の量は、堆積速度が遅いほど多くなる。

今回の分析層準（試料）のそれぞれの単層には堆積構造が認められなかったが、調査地の地形から洪水堆積物とは考えにくく、土壤化の影響が強いと考えられる。後述のように堆積速度は遅かったと考えられ、このことは該当しない。

3. 「土壤生成作用：土壤化」の及ぶ期間が短く、花粉の付加量が少なかった。

「土壤生成作用：土壤化」に伴って花粉粒が、炭片、植物片などの有機物とともに、堆積面から地中に取り込まれる場合もある。年間「付加量」が一定と仮定すると、「土壤生成作用」を受けた期間の長短によって、含有量の多少が決まる。

微化石概査では微粒炭、植物珪酸体の検出量が多く土壌化の影響が強く認められる。現地観察では畦3の分析層準（11層）は色調が他層準に比べやや黒く、土壌化が認められた。一方、畦8では炭片が確認できたが、顕著な土壌化は認められなかった。したがって畦3では土壌化を受けた期間が短く、また畦8では土壌化を受けた期間が極めて短く、花粉の付加量が少なかったと考えられる（花粉化石の含有量の差が、土壌化の期間と比例している可能性が示唆される）。

#### 4. 堆積の過程で、花粉粒が紫外線により消滅した。

一般に、花粉化石は紫外線によって劣化・消滅する。花粉粒は、地表面に落下した直後から、紫外線の影響下に置かれる（例えば畑作環境）が、水中で堆積した場合（例えば水田環境）、紫外線が遮断され、影響は軽減される。花粉分析結果では、コウヤマキ属、アブラナ科、キク亜科、ヨモギ属の外、胞子などが、選択的に高率を示す傾向にある。また、後述の「堆積後の化学変化による劣化・消滅」との区別は困難である。

今回の花粉分析結果では、ヨモギ属、胞子の割合が高く、紫外線の影響を受けにくい炭片や植物珪酸体の含有量が相対的に多いことなど、紫外線の影響で花粉粒が劣化・消滅した可能性が指摘できる。

#### 5. 花粉化石が本来含まれていたが、堆積後の化学変化により花粉化石が消滅した。

花粉粒や植物片などの有機物、珪藻や植物珪酸体など鉱物質のものも、グライ化などの化学変化に伴い（程度に差があるものの）分解してしまう（堆積後の化学変化は酸化鉄や酸化マンガンの沈着として現れ、多くは水田耕作における灌漑によるグライ化（鉄、マンガンの還元作用）と落水による鉄、マンガンの酸化作用の結果と考えられる）。一方炭片は化学的に安定しており、堆積後に消滅することがない。花粉分析結果では、コウヤマキ属、アブラナ科、キク亜科、ヨモギ属の外、胞子などが、選択的に高率を示す傾向にある。また、前述のように「紫外線による劣化・消滅」との区別は困難である。

今回の分析層準（試料）では、酸化鉄や酸化マンガンの顕著な生成は認められなかった。一方、花粉分析結果では胞子の割合が高く、ヨモギ属が比較的多く検出されるなど、堆積後の化学変化（あるいは紫外線）による影響を示唆する結果も得られている。さらに、化学変化に安定な炭片の検出量が相対的に多く、堆積後の化学変化の影響で花粉粒が劣化・消滅した可能性が僅かながらある。

#### 6. 有機物に極めて富む堆積物で、花粉以外の有機物（炭片、植物片など）が多く、希釈効果により花粉化石が回収できなかった。

多くの試料で花粉分析プレパラート内での炭片の含有量が多かった。一方、花粉・胞子化石含有量は100～1,000粒/gほどと、極端に含有量の少ない試料はなかった。これらのことから、花粉化石と比重の近い炭片や植物片が多量に含まれていたことによって花粉粒の濃縮が進まなかったと考えられる。

以上のこと整理すると、程度に差があるものの土壌化に起因して、植物質の微化石が濃集したと考えられる。しかし、それぞれの層が土壌化を受けていた期間は比較的短かったと考えられる。また、土壌化に伴い紫外線の影響を受けたと考えられるほか、堆積後少からず化学変化も受けている可能性がある。さらに、微粒炭による希釈効果によって検出した花粉粒が相対的に少なかったと考えられる。

## 5 花粉帯の設定

R2年度調査の花粉分析結果について、ほとんどの試料で木本花粉の検出量が極めて少なく、統計処理ができなかった。

R3年度調査の花粉分析結果を基に、P-II、I帶の局地花粉帯を設定した。また、試料No1、9は木本花粉化石の検出量が少なかったことから、分帯の対象から外している。以下に花粉帯の特徴を記載する。また、花粉化石群集変遷を明瞭にするため下位から記載を行った。

木本花粉では、マツ属（複維管束亜属）が高率を示し、コナラ亜属が続く。草本・藤本花粉ではイネ科（40ミクン未満）、ヨモギ属、タンポポ亜科が高率を示す。胞子ではフユノハナワラビ亜属、オシダ科・チャセンシダ科が高率を示すほか、三条溝胞子の割合が、極めて高い。

木本花粉の出現傾向は試料No8～2で大きな変化は認められないが、草本・藤本花粉、胞子の出現傾向が試料No8～4（P-II帶）と、試料No3、2（P-I帶）で大きく異なる。P-II帶では草地環境を示すイネ科（40ミクン未満）、ヨモギ属、タンポポ亜科やフユノハナワラビ亜属が高率を示すが、P-I帶ではこれらが急減した。

## 6 植物珪酸体帯の設定

植物珪酸体分析結果を基に、PL-III～I帶の植物珪酸体帯を設定した。以下にそれぞれの特徴を記載する。また、植物珪酸体化石群集変遷を明瞭にするため下位から記載を行った。

### （1）PL-III帶：試料No9～7

マンサク科（イスノキ属）の検出密度が30000粒/gを超えるほか、ブナ科（シイノキ属）も2500粒/gを超える。一方でササ類の検出密度が低い。また、断続的にイネが検出される。

### （2）PL-II帶：試料No6、5

マンサク科（イスノキ属）が減少傾向を示すほか、メダケ節型、ネザサ節型が微増する。

### （3）PL-I帶：試料No4～2

マンサク科（イスノキ属）、ブナ科（シイノキ属）が顕著に減少する。一方、メダケ節型、ネザサ節型が著しく増加するほか、ウシクサ族Aも微増する。

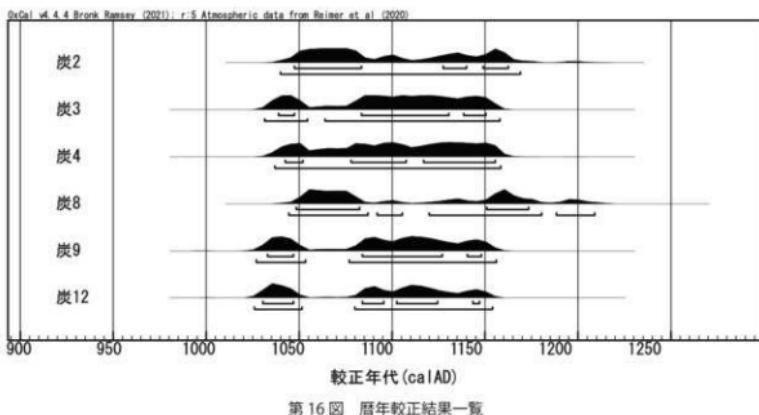
## 7 年代測定値について（遺構の時期）

前述の分析結果で示したように、全ての試料がおおよそ11世紀頃～12世紀中頃（20領域）の年代を示した（第16図）。このことから炭窯の操業時期は、試料は11世紀頃～12世紀中頃であったと考えられる。

## 8 遺跡内での農耕について

### （1）R2年度調査区 畠8

花粉化石含有量が少ないものの、3層（試料No2：江戸時代）から、ソバ属、ワタ属が検出された。特にワタは現地性が強く、調査地で栽培されていた可能性が指摘できる。規模は不明であるが、畑作が行われていたと考えられる。また、アカザ科・ヒユ科にもアカザのような雑穀やヒユのような野菜が含まれ、畑で栽培されていた可能性もある。



## (2) R3年度調査区

分析を行った14層から29層にかけての層準の色調が黒褐色を呈し、粗砂～細礫が含まれ、水田耕土と層相が似ることから、高所であるが水田等耕作が行われた可能性が示唆された。このため花粉分析、植物珪酸体分析及び該当層準の軟X線写真観察を行った。

軟X線写真観察の結果、土壤化を受けているものの、その程度は低いことが分かった。一方で花粉分析では栽培種であるソバ属が僅かであるが断続的に検出されたほか、植物珪酸体分析でもイネが僅かであるが断続的に検出された。また、花粉分析で草原に生育するフユノハナワラビ亞属の胞子が特徴的に検出されたり、植物珪酸体分析ではスキ属型やウシクサ族A型が多く検出されたりすることから、草地の広がりが推定できた。更に微化石概査の結果、黒色は微粒炭に由来することが明らかになっている。

以上のことと踏まえると、当該層準堆積時（弥生時代後期～室町時代？）に丘陵上では「焼き畑」農耕が行われていた可能性が高い。

## 9 植生変遷

花粉分析結果及び植物珪酸体分析結果を基に、高丸遺跡での弥生時代後期から室町時代頃の古植生変遷を推定する。

### (1) 弥生時代後期～古墳時代前期 (R3年度調査31,29層：試料No.9～7)

#### 1) 気候

タケ亜科植物珪酸体の検出量そのものが少ないとから、以下の考察は参考に止める。メダケ率が徐々に上昇し、温暖化傾向にあったと考えられる。一方、ミヤコザサ節型に対するチマキザサ節型の比は高く、多雪傾向が推定できる。

#### 2) 植生

丘陵上 (R3年度調査) の植物珪酸体では、草原植生を示すスキ属型、ウシクサ族A型の検出密度が高く、草原植生を示すフユノハナワラビ亞属胞子やイネ科 (40ミクン未満)、ヨモギ属、タンボポ亜科などの草本花粉が多く検出されることから、調査地近辺には草地が広がっていたと考えられる。

一方で前述のように、僅かであるがイネの植物珪酸体やソバ属花粉が検出されるなど、焼き畑が行われていた可能性が指摘できる。

丘陵上(R3年度調査)の木本花粉では、マツ属(複維管束亜属)やコナラ属などの二次林要素を示す花粉が高率を占める。島根県西部の低地では、この時期にスギ属花粉が高率を示すことが知られている。また、丘陵上には照葉樹林が広がっていたとされている(例えば、渡辺・石賀 2008)。今回の分析結果では、従来の結果と異なり、特異な花粉化石群集であることが分かる。また、やや時代がズレるが後述の古墳時代後期～奈良・平安時代(丘陵斜面下部:R2年度調査 畦3-11層)では、花粉化石の検出量が少ないものの、マツ属(複維管束亜属)、コナラ亜属の検出量が、スギ属、アカガシ亜属の検出量を上回っていた。これらのことから、今回得られた木本花粉化石群集は、調査地周辺での特異な植生を反映したものと考えられる。このことと、焼き畑が行われていたことを踏まえると、焼き畑によって出現した草原環境から二次林への遷移が示唆される。また、植物珪酸体ではイスノキ属、シイノキ属などの照葉樹林要素が多く検出された(これらの樹種由来の花粉は、一般には検出されにくい)。一方、焼き畑の放置期間とされる20年程度では、二次林から極相林である照葉樹林への遷移は不可能であり、これらはやや離れた場所から葉がもたらされた可能性が指摘できる。ただし、数十年の期間、放置されていたとすれば、この場所での照葉樹林への遷移も起こり得たと考えられる。

### (2) 古墳時代後期～奈良・平安時代：(R2年度調査畦3-11層：試料№2.1)

花粉分析では木本花粉の検出量が少なかったが、試料1、2ともにマツ属(複維管束亜属)、ニレ属-ケヤキ属が複数個体検出された。ニレ属-ケヤキ属は、谷沿いの低地(あるいは湖岸)に分布したアキニレやケヤキに由来すると考えられる。また、前述のようにマツ属(複維管束亜属)は、丘陵上の焼き畑に由来する可能性があるほか、遺跡周辺の斜面には小規模な地滑り跡も認められることから、ギャップを埋めていたとも考えられる。更に周辺地域には、カシ類を主体としてツガを混淆する照葉樹林が分布していたと考えられる。

また谷底低地は開放的で、アシ類やススキ類のほか、ヨモギ類などのキク科草本が繁茂していたと考えられる。

### (3) 平安時代～室町時代頃 (R3年度調査21層：試料№6.5)

#### 1) 気候

タケア科植物珪酸体の検出量そのものが少ないとから、以下の考察は参考に止める。メダケ率は50%程度で安定し、この期間では大きな気温の変化は認められない。一方、ミヤコザサ節型に対するチマキザサ節型の比も引き続き高く、引き続き多雪傾向が推定できる。

#### 2) 植生

植物珪酸体の検出密度が低下し、種類ごとの検出密度も伴って減少する。その中で、草原植生を示すススキ属、ウシクサ族A型が検出され、草原植生を示すフユノハナワラビ亜属胞子やイネ科(40ミリ未満)、ヨモギ属、タンボボア科などの草本花粉が多く検出される。さらに、僅かであるがイネの植物珪酸体が検出される。木本花粉の組成にも変化なく、前の時期同様、焼き畑からマツ類、ナラ類を主要素とする二次林への変遷が繰り返していたと考えられる。前述のように、照葉樹林への遷移も起こった可能性があるが、現在の一般的な焼き畑サイクルでは考えにくく、近辺の植生を示している可能性が高い。

## (4) 平安時代～室町時代頃 (R3年度調査17,14層：試料No.4～2)

## 1) 気候

タケ亜科植物珪酸体の検出量がやや高くなり、統計的に信頼できるようになる。メダケ率は75～90%と高く、温暖な気候であったと考えられる。一方、ミヤコザサ節型、チマキザサ節型の検出量は十分とは言いにくく、積雪量は保留する。

## 2) 植生

植物珪酸体では引き続き、草原植生を示すスキ属型、ウシクサ族A型が検出される。一方花粉分析では、17層下部で草原植生を示すフユノハナワラビ亜属胞子やイネ科(40ミリ未満)、ヨモギ属、タンポポ亜科などの草本花粉が多く検出されるが、17層上部、14層ではこれらが減少する。17層上部（あるいは14層）堆積時には調査地近辺の環境に変化があったものと考えられる。試料No.4ではソバ属花粉が検出され、17層下部（あるいは21層）までは焼き烟が統一していたものと考えられる。一方この時期に、木本花粉組成の変化は乏しいが、イスノキ属、シノキ属の植物珪酸体は減少する。低地の開発が進み「焼き烟」が行われなくなり、マツ類、ナラ類を主体とする二次林は、薪炭林として利用され始めたと考えられる。このため草地はササ類を主体とする林床植生に変わり、周辺の照葉樹林も薪炭林へと変化したものと考えられる。

前述のように、11世紀頃～12世紀中頃に操業していた炭窯からは、クヌギ節(コナラ亜属)、コナラ節(コナラ亜属)、エノキ属類似が検出された。これらの樹種はいわゆる「薪炭林」の構成要素であり、炭の用材としては一般的なものであった。炭窯では近辺の薪炭林から樹木を伐採してきたと考えられることから、調査地近辺には、ナラ類の優占する落葉広葉樹林(薪炭林)が分布していたものと考えられ、花粉分析から想定される周辺地域の植生と一致する。

## (5) 江戸時代 (R2年度調査8-3層：試料No.2)

## 1) 植生

前述のように木本花粉の検出量が極めて少なかったが、マツ属(複雑管束亜属)、コナラ亜属、ニレ属・ケヤキ属などが検出された。前時期とほぼ同じ種類が検出され、森林植生に大きな変化は認められない。

草本・藤本花粉では3層(試料No.2)から、ソバ属、ワタ属が検出された。特にワタは現地性が強く、調査地で栽培されていた可能性が指摘できる。規模は不明であるが、畑作が行われていたと考えられる。また、アカザ科・ヒユ科にもアカザのような雜穀やヒユのような野菜が含まれ、畑で栽培されていた可能性もある。

多量に検出されたオシダ科・チャセンシダ科は、陽当たりの良いところに生育するオクマワラビなどと考えられる。

## 10まとめ

高丸遺跡において、花粉分析、植物珪酸体分析、樹種同定、軟X線写真観察、年代測定を行い、以下の事柄を考察した。

(1) 軟X線写真観察では、観察を行った各層は本来崩落土（あるいは埋土）で、その後根による擾乱を受けたものと考えられた。当初推定された、水田耕作土の可能性は低い。

(2) 微化石概査の結果、R3年度調査で分析対象とした黒褐色土の黒色は、微粒炭に由来することが

分かった。

(3) 検出された炭の樹種は、クヌギ節（コナラ亜属）、コナラ節（コナラ亜属）、エノキ属類似であり、いわゆる「薪炭林」の構成要素であった。

(4) R2年度調査（花粉分析）では、統計処理に十分な量の木本花粉が検出できなかった。また花粉、胞子化石の含有量はやや少なく、胞子の割合が高かった。花粉化石、胞子の検出量が少なかった原因として、各層準が土壤化を受けた期間が短く、花粉化石の濃集が進まなかつたこと、土壤化（あるいは堆積後の化学変化）によって相対的に多くなった微粒炭のために「希釈効果」が生じたものと考えられる。

(5) 年代測定の結果、炭窯の操業時期は11世紀頃～12世紀中頃と考えられた。

(6) R2年度調査（花粉分析）の結果、江戸時代には丘陵斜面下部で、ソバ、ワタの栽培が行われていたことが分かった。さらに、アカザ科・ヒユ科にもアカザのような雜穀やヒユのような野菜が含まれ、畑で栽培されていた可能性も指摘できた。

(7) R3年度調査（花粉分析、植物珪酸体分析）の結果、弥生時代後期～室町時代？の時に丘陵上で焼き畑が行われ、イネ、ソバが栽培されていたことが推定された。

(8) 焼き畑の後の放置期間にマツ類、ナラ類を要素とする二次林に遷移していたと考えられた。このことは、炭窯から検出された樹種と矛盾しない結果であった。また、イスノキ属やシノノキ属を要素とする照葉樹林まで遷移を重ねた可能性もあるが、やや離れた場所から葉がもたらされた可能性が高い。

#### 【引用・参考文献】

- 中村 純（1974）イネ科花粉について、とくにイネを中心として、第四紀研究、13,187-197.
- 藤原宏志（1976）プラント・オーバル分析法の基礎的研究（1）－数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法－、考古学と自然科学、9, 15-29.
- Bronk Ramsey, C. (2009). Bayesian analysis of radiocarbon dates. Radiocarbon, 51 (1), 337-360.
- Reimer, P., Austin, W., Bard, E., Bayliss, A., Blackwell, P., Bronk Ramsey, C., Butzin, M., Cheng, H., Edwards, R., Friedrich, M., Grootes, P., Guilderson, T., Hajdas, I., Heaton, T., Hogg, A., Hughen, K., Kromer, B., Manning, S., Muscheler, R., Palmer, J., Pearson, C., van der Plicht, J., Reimer, R., Richards, D., Scott, E., Southon, J., Turney, C., Wacker, L., Adolphi, F., Büntgen, U., Capone, M., Fahrni, S., Fogtmann-Schulz, A., Friedrich, R., Köhler, P., Kudsk, S., Miyake, F., Olsen, J., Reinig, F., Sakamoto, M., Sookdeo, A., & Talamo, S. (2020). The IntCal20 Northern Hemisphere radiocarbon age calibration curve (0-55 cal kBP). Radiocarbon, 62.
- 渡辺正巳（2010）花粉分析法 必携 考古資料の自然科学調査法、174-177、ニュー・サイエンス社。
- 渡辺正巳（2020a）自然科学分析、城山公園整備事業に伴う県史跡 浜田城発掘調査報告書、90-94.、浜田市教育委員会、島根。
- 渡辺正巳（2020b）森原神田川遺跡大津地区の発掘調査に伴う自然科学分析、森原神田川遺跡大津地区 一級河川江の川直轄河川改修事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書一、2, 65-100、島根県教育委員会。
- 渡辺正巳・石賀裕明（2008）島根県西部益田平野における過去6400年間の環境変遷、植生史研究、16 (1), 3-10.



図 8 試料採取状況



図 11 試料採取状況 1



図 11 試料採取状況 2

## 第6章 総括

3年間に及んだ福光浅利道路の発掘調査では高丸遺跡と下和田遺跡の2遺跡の調査を行ったのみである。第2章第4図で示したように、近隣には古くから存在がわかっていた遺跡や最近になって調査が行われた遺跡が位置している。福光浅利道路の発掘調査を終了するにあたり、今回調査した遺跡がそれぞれの時代にどのように位置づけることができるのか示したい。

### 第1節 遺跡の位置づけ

#### 【縄文時代】

高丸遺跡では縄文土器は出土しなかったが、磨製石斧や黒曜石製石鏃が出土している。近隣では尾浜遺跡から縄文時代後期の土器が、埋築遺跡から縄文晩期の土器が出土した。

#### 【弥生時代】

高丸遺跡では弥生時代後期の土器がわずかに出土した。近隣では埋築遺跡から弥生前期の環濠の可能性のある溝の他、弥生前期～中期の土器を確認している。波来浜遺跡では弥生中期と後期の貼石墓を、高津遺跡では弥生後期の竪穴建物や水場遺構、溝を確認した。高津遺跡と埋築遺跡は約500m離れた位置にあり、高津遺跡と波来浜遺跡は約2km弱離れていることから、波来浜遺跡が単独で存在したと考えるよりも、やや距離はあるものの高津遺跡や埋築遺跡の墓域として波来浜遺跡を想定することができる。波来浜遺跡は南からの眺望を意識した可能性が指摘されており、南に位置する高津遺跡との関連が示唆される（江津市2012、15、16頁）。

#### 【古墳時代】

高丸遺跡では古墳時代前期の土器が少量出土した他、谷部から古墳後期の須恵器模倣土師器の环が出土した。下和田遺跡では古墳後期末の土器溜の他、手捏土器が出土した。土器溜は須恵器の甕や高环、脚付壺で構成されており、祭祀の様相が強いことがうかがえる。

近隣では、高津遺跡から古墳中期の竪穴建物や土器溜、粘土採掘坑、古墳中期～後期の土器が出土している。高丸遺跡の須恵器模倣土師器、下和田遺跡の祭祀的な遺構は、高津遺跡との関連で考えることのできるものであり、高津遺跡の外縁に位置する遺跡としての位置づけができる。

#### 【奈良・平安時代】

高丸遺跡では炭窯を確認した。下和田遺跡では掘立柱建物やピットを確認し、奈良・平安時代の土器が出土した。特に平安時代の土器が多い。墨書き土器や円面硯といった役所に関連する遺物がないことも特徴である。

近隣では隣接する波来浜遺跡で平安時代の土器が多く出土したこと、石帶（巡帶1、丸輪4）が火葬骨とともに出土した。波来浜遺跡は下和田遺跡と同時期に存在したと考えられる。下和田遺跡の前面には波来浜川が流れていることから、谷部と川を挟んだ砂丘上に集落や役人を葬った墳墓が存在していたことになる（江津市2012、16頁）。高津遺跡は古墳時代に比べて遺構や遺物の量はかなり少ないが、「郡」をヘラ書きした須恵器が出土している。この他尾浜遺跡、大堀遺跡、今井城跡でのこの時期の土器が出土している。都治農協裏遺跡では土器に加えて軟質の布目瓦が出土している。墳墓では古墳後期末に遡る可能性があるが、佐古ヶ丘横穴墓群で出土した土器の多くは奈良時代に属する。

下和田遺跡から1～2kmの範囲に遺跡が多く見つかっている（第93図上）。時期は奈良時代後半から平安時代にかけて存続するものが多い。波来浜遺跡からは須恵器だけではなく土師器の甕や土製支脚、移動式竈、櫃などの生活用具が出土しており、下和田遺跡と共に通する点がある。また、量は少ないが高丸遺跡でも似た傾向がある。下和田遺跡出現の背景として、砂丘上に位置する垂水遺跡（大田市静岡町）と砂丘が隣接するという点では共通する要素を指摘することができる。前述した墨書き土器や円面硯といった遺物がない特徴に加え、下和田遺跡から約400m南東に県道221号川平停車場線があるが、この道は「古代山陰道」の可能性が指摘されている（神2010、29頁、関2015、185頁）。設置時期の問題はあるが、「古代山陰道」の築造に関する遺跡として想定することもできる。

#### 【鎌倉・室町時代】

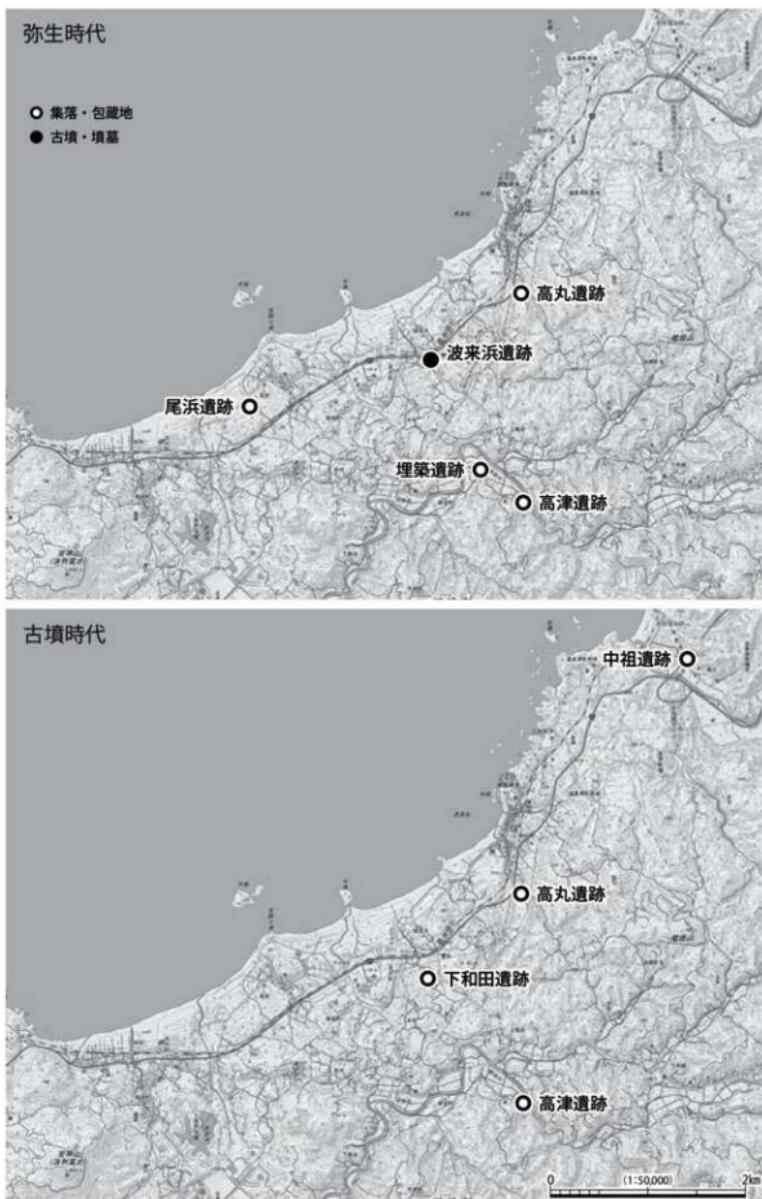
高丸遺跡では谷部から鎌倉・室町時代の土器がごく少量出土した。下和田遺跡では加工段、石列や集石土坑、SD01溝がある他、輸入陶磁器や中世の土師器が出土した。遺構・遺物の存在は少なく、当時は集落の縁辺部や山林の可能性が強い。近隣では埋築遺跡から掘立柱建物10棟と土坑墓を確認している他、波来浜遺跡では900枚以上の古銭が麻袋の中から出土した。

高丸遺跡では砂丘の砂層を確認した。時期は室町時代の可能性がある。波来浜遺跡の報告書では砂層の範囲を示しているが（江津市2012、28頁第1図）、倉谷川沿いを遡る形で砂丘が広がっていたと考えられる。また、下和田遺跡では砂層を確認できず、下和田遺跡の部分までは砂丘が及んでいないことが明らかになった。さらに、下和田遺跡と波来浜遺跡との間には後背湿地が位置していた可能性が強い（江津市2012、12頁）ことが明らかになった。

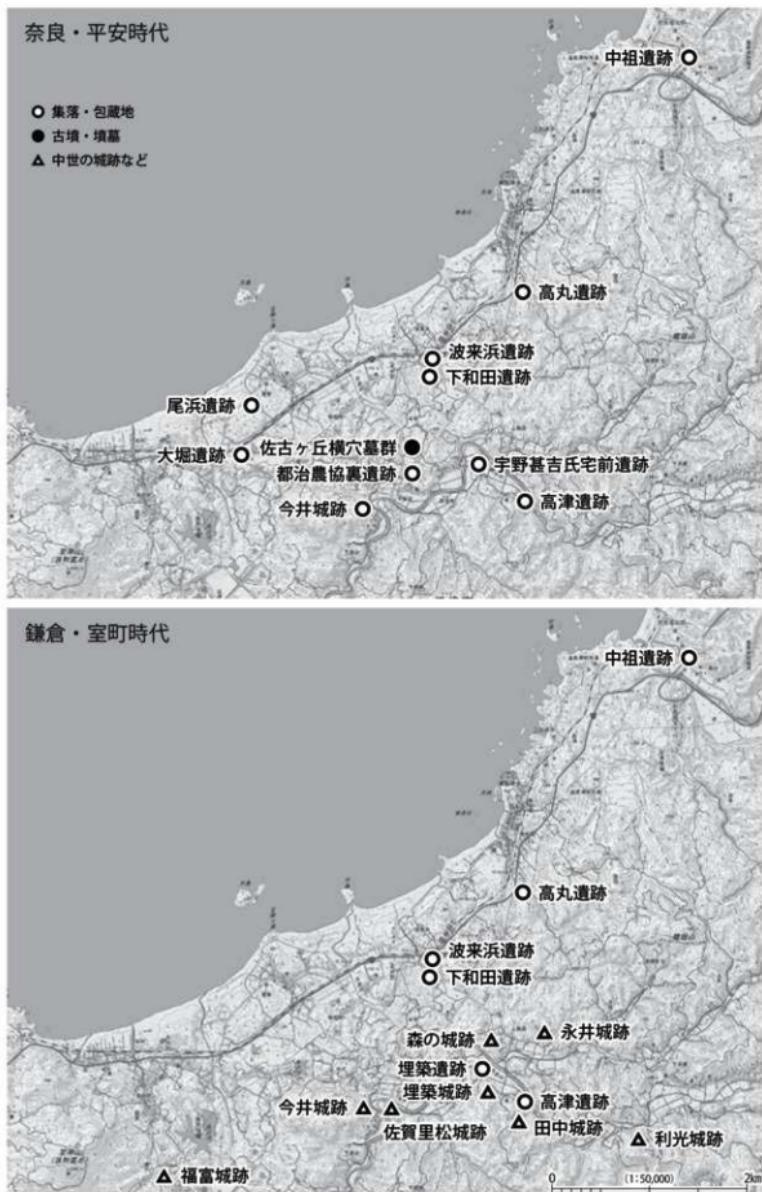
## 第2節 遺物の検討

下和田遺跡では総点数約21,200点、総重量約500kg強の土器が出土した。高丸遺跡では総点数1,365点、総重量約18.7kgの土器が出土した。これらの遺跡から出土した土器量を大田市鰐淵遺跡、垂水遺跡、御堂谷遺跡、江津市森原下ノ原遺跡と比較する。

- ・下和田遺跡では須恵器の全体に対する甕の比率が点数で約2割、重量で約3割強に対し、垂水遺跡では2～3割、鰐淵遺跡では甕と壺が約4割、御堂谷遺跡では点数が2割程度であり、同様の傾向を示す。森原下ノ原遺跡では須恵器の甕が66%と高く中型の甕を保管した施設の存在を想定している（島根県2022、184頁）。
- ・下和田遺跡では須恵器と土師器の点数比率は須恵器が2割前後であった。高丸遺跡では須恵器が1割5分程度、鰐淵遺跡では須恵器が1～2割程度と似た傾向を示す。垂水遺跡ではやや須恵器の比率が高く4割弱、御堂谷遺跡では須恵器の比率が8割を越えていた。
- ・下和田遺跡の土師器の甕は厚手のものが多いが、中には薄手のもの、焼きがよく薄手のもの、1mm前後の鉛物を多く含むものがあった。また、細片のため図示しなかったが、外面にタタキ痕を残す甕がE3グリッドの3層からのみ出土した。タタキ痕を残す甕は江津市飯田C遺跡（島根県1997）、古八幡付近遺跡（島根県2000）、大田市中祖遺跡（島根県2008）、邑南町輪之内遺跡（羽須美村2004）、順庵原B遺跡（瑞穂町2000）、沢陸遺跡（瑞穂町1998）、美郷町清源那遺跡（石見町1998）で出土している。須恵器の小型の壺（第37図127）とあわせて、中国山地山間部との交流をうかがうことができる。
- ・下和田遺跡では多数の土製支脚が出土し、高丸遺跡でも土製支脚が出土した。一方移動式竈は下



第92図 弥生・古墳時代の浅利地区



第93図 奈良・平安時代、鎌倉・室町時代の浅利地区

- 和田遺跡で数点の出土を確認するにとどまった。島根県東部では土製支脚と移動式竈、領形土器はセットで出土することが一般的であるが、下和田遺跡では移動式竈が少ないことが注目される。
- ・壺の取っ手には大型のもの、小型のもの、中ほどで大きく屈曲するもの、横に長いものなどがある。時期差や用途の違いが想定できるが、今回の報告では指摘するにとどめる。
  - ・下和田遺跡と高丸遺跡で出土した須恵器約3,000点について、本報告ではその生産地や周辺の遺跡出土須恵器と比較検討を行うことが十分にできなかった。今後の課題としたい。

### 【参考文献】

- 岩橋孝典 2019『古墳時代後期の炊爨文化からみた地域相—出雲西部地域と石見東部地域を事例として—』島根県古代文化センター編『国家形成期の首長権と地域社会構造』島根県古代文化センター研究論集第22回 415-429
- 石見町教育委員会 1998『清源那遺跡』石見町文化財調査報告書16
- 大田市教育委員会 2017『鯛岡遺跡』
- 江津市 1973『波来浜遺跡発掘調査報告書—第1、2次緊急調査概報—』
- 江津市教育委員会 2002『理栄遺跡』都治地区県営ほ場整備事業に伴う発掘調査報告書Ⅰ
- 江津市教育委員会 2005『高津遺跡』都治地区県営ほ場整備事業に伴う発掘調査報告書Ⅱ
- 江津市教育委員会 2012『波来浜遺跡—保存・活用のための確認調査報告書—』
- 島根県教育委員会 1997『石見の城館跡』島根県中世城館跡分布調査報告書第1集
- 島根県教育委員会 1997『一般国道9号江津道路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ 嘉久志遺跡・飯田C遺跡・古八幡付近遺跡』
- 島根県教育委員会 2000『一般国道9号江津道路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ 神主城跡・宮崎商店裏遺跡・古八幡付近遺跡・横路古墓』
- 島根県教育委員会 2008『中祖遺跡 ナメラ追遺跡』一般国道9号(仁摩温泉津道路)建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書1
- 島根県教育委員会 2019『重水遺跡 松林寺遺跡 庵守石塔群』一般国道9号(静間仁摩道路)建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書8
- 島根県教育委員会 2019『御堂谷遺跡 諸友大師山横穴JIV群1号穴』一般国道9号(大田静間道路)建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書3
- 島根県教育委員会 2022『森原下ノ原遺跡 1~3区 1. 古代~近世編』一級河川江の川直轄河川改修事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書4
- 神 英雄 2010『柿本人麻呂の石見』自照社出版
- 関 和彦 2015『古代石見の説い道 人麻呂と神々と道』今井出版
- 羽須美村教育委員会 2004『輪之内遺跡埋蔵文化財発掘調査報告書』羽須美村埋蔵文化財調査報告書第5集
- 藤岡大拙他編 1980『日本城郭体系第14巻 島取・島根・山口』新人物往来社
- 瑞穂町教育委員会 1998『沢陰遺跡発掘調査報告書』瑞穂町埋蔵文化財調査報告書第22集
- 瑞穂町教育委員会 2000『町内遺跡発掘調査報告書』瑞穂町埋蔵文化財調査報告書第23集



# **写真図版**

**下和田遺跡：図版 1～30  
高丸遺跡：図版31～64**





1 下和田遺跡完掘状況



2 下和田遺跡から日本海を望む



1 下和田遺跡調査前遠景(東から)



2 下和田遺跡調査前全景(東から)



3 下和田遺跡調査前近景(北から)



1 土器溜検出状況



2 SB01・SB02・SB05完掘状況



1 西斜面遺構検出状況(東から)



2 完掘状況(北から)



1 横断土層南端 (西から)



5 横断土層C3グリッド (東から)



2 横断土層E3グリッド (西から)



6 横断土層C3グリッド (東から)



3 横断土層D3グリッド (西から)



7 横断土層D3グリッド (東から)



4 横断土層北端C3グリッド (東から)



8 横断土層D3グリッド (東から)



1 縦断土層E2グリッド(南から)



5 縦断土層E3-D3グリッド(南から)



2 縦断土層E2-E3グリッド(南から)



6 縦断土層D3グリッド(南から)



3 縦断土層E3グリッド(南から)



7 縦断土層D4グリッド(北から)



4 縦断土層E3-D3グリッド(南から)



8 縦断土層D3-D4グリッド(北から)



1 土器窯下層検出状況(東から)



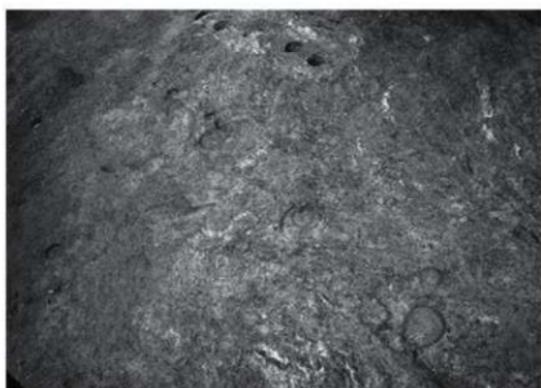
2 土器窯下部土層堆積状況(北から)



3 SB01・SB02検出状況(東から)



1 SB01・SB02検出状況(東から)



2 SB02完掘状況(東から)



3 SB02・P8遺物出土状況(東から)



1 SB01完掘状況



2 P1～P3検出状況(北から)



3 SB05検出状況(南から)



1 SB05完掘状況(東から)



2 加工段・石列検出状況(南西から)



3 SB03検出状況(北から)



1 SB03発掘状況（北から）



2 SB04発掘状況（南西から）



3 SB04発掘状況（北東から）



1 SB04発掘状況



2 SB03・SD03切り合い関係(南西から)



3 SD01発掘状況(南から)



1 加工段下部構造(東から)



2 加工段下部構造(南東から)



3 加工段・SB03・溝完掘状況(北から)



1 SB03・加工段・集石土坑発掘状況



2 集石土坑検出状況



4 集石土坑発掘状況



3 集石土坑検出状況



5 集石土坑発掘状況



1 集石土坑発掘状況



5 集石土坑掘削状況



2 集石土坑土層堆積状況



6 包含層遺物出土状況 (第37図140)



3 集石土坑最下層石検出状況



7 包含層遺物出土状況 (第16図11ほか)



4 集石土坑最下層石除去



8 包含層遺物出土状況 (第16図11ほか)



1 包含層遺物出土状況 (第19図28ほか)



5 包含層遺物出土状況 (第47図251)



2 包含層遺物出土状況 (第19図29)



6 焼土溜検出状況 (東から)



3 包含層遺物出土状況 (第47図251)



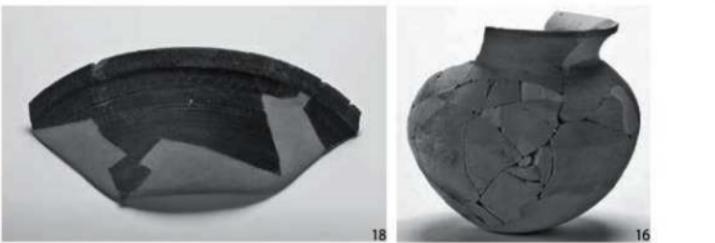
7 焼土溜発掘状況



4 包含層遺物出土状況 (第47図251)



8 焼土溜完掘状況 (北東から)



土器溜・土器溜周辺 1 (12～16,18)



17



20



19



21

22

23

24

25

26

27

220



30



31



32



33



34



42



41

土器窯周辺 2・遺構 (30~32)



28



35



36



37



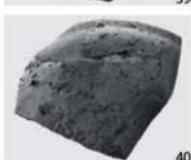
38



29



39



40



43



44



45



46

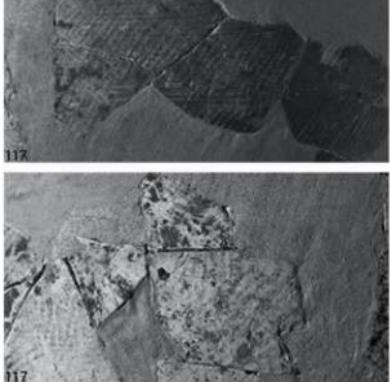


47

土器窓周辺 3 (28,29)・包含層 1



包含層 2・試掘確認調査 (1 ~ 4)





118



120



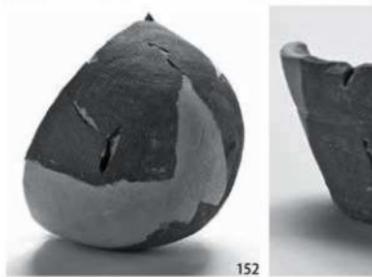
119



151



121



152

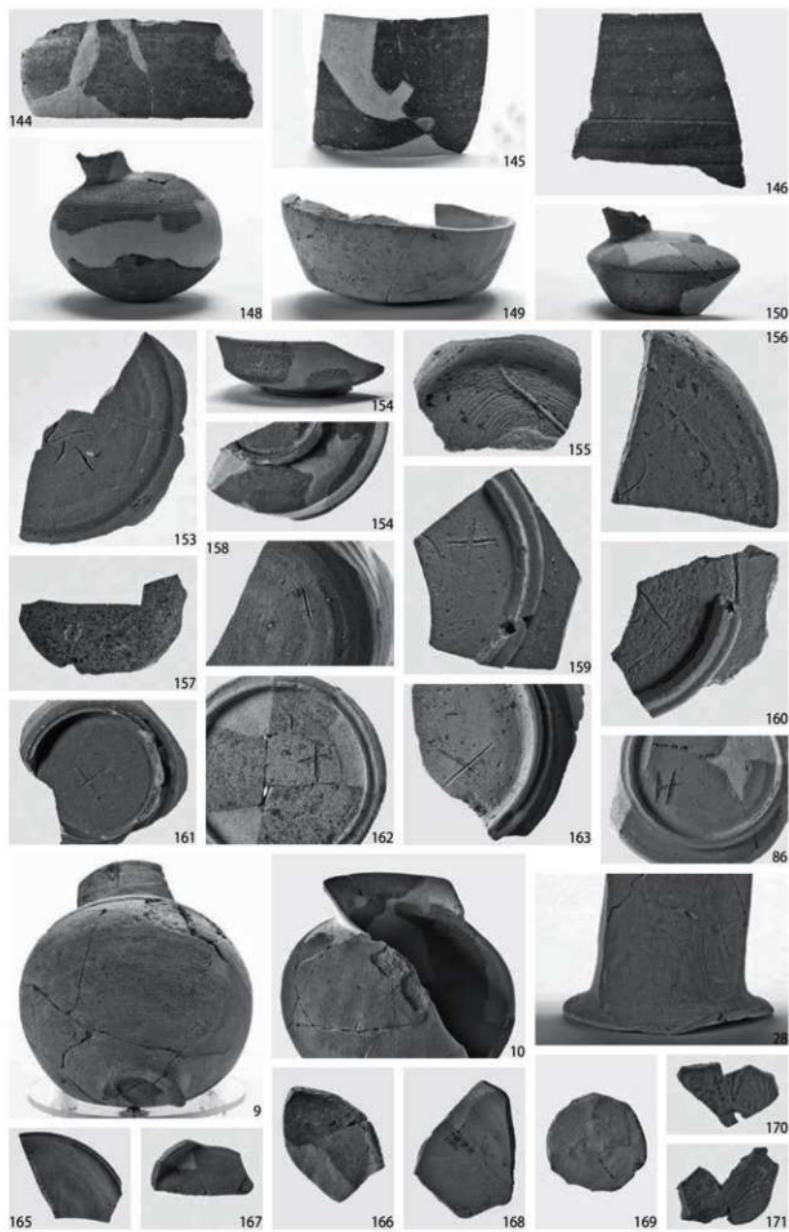


147

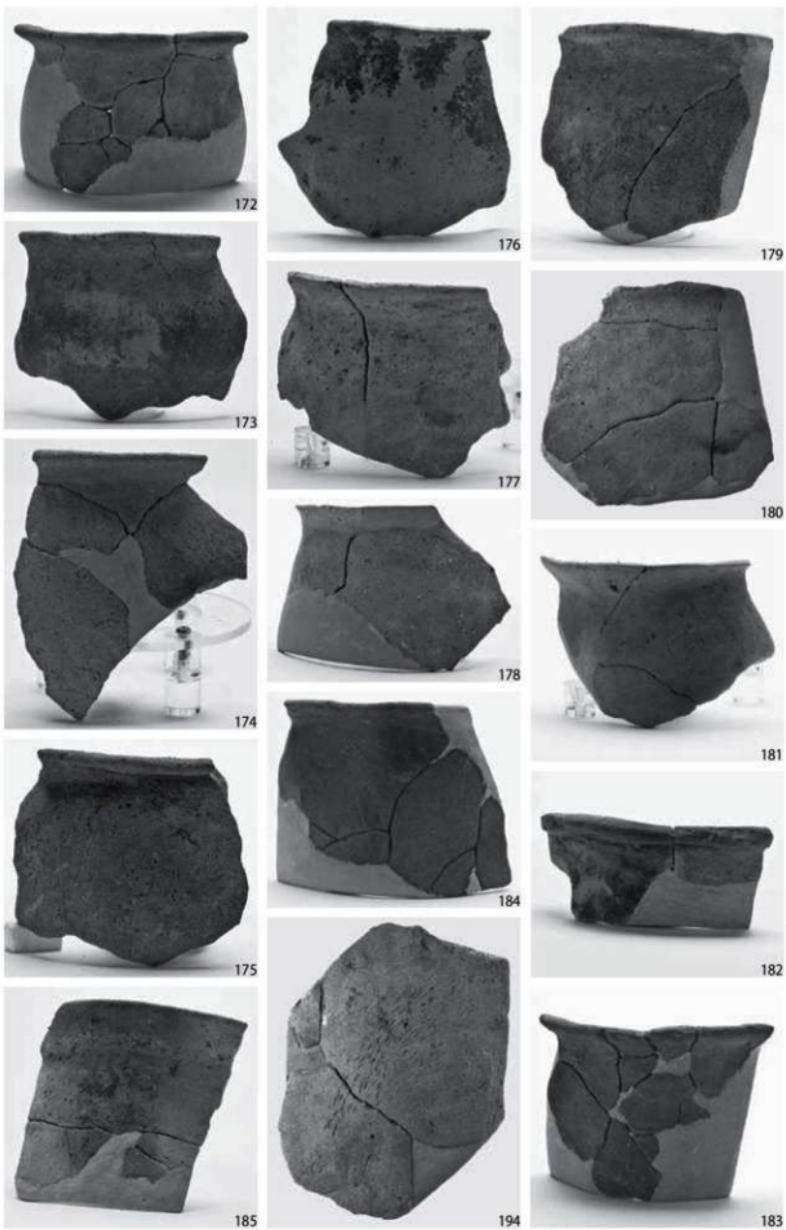


147

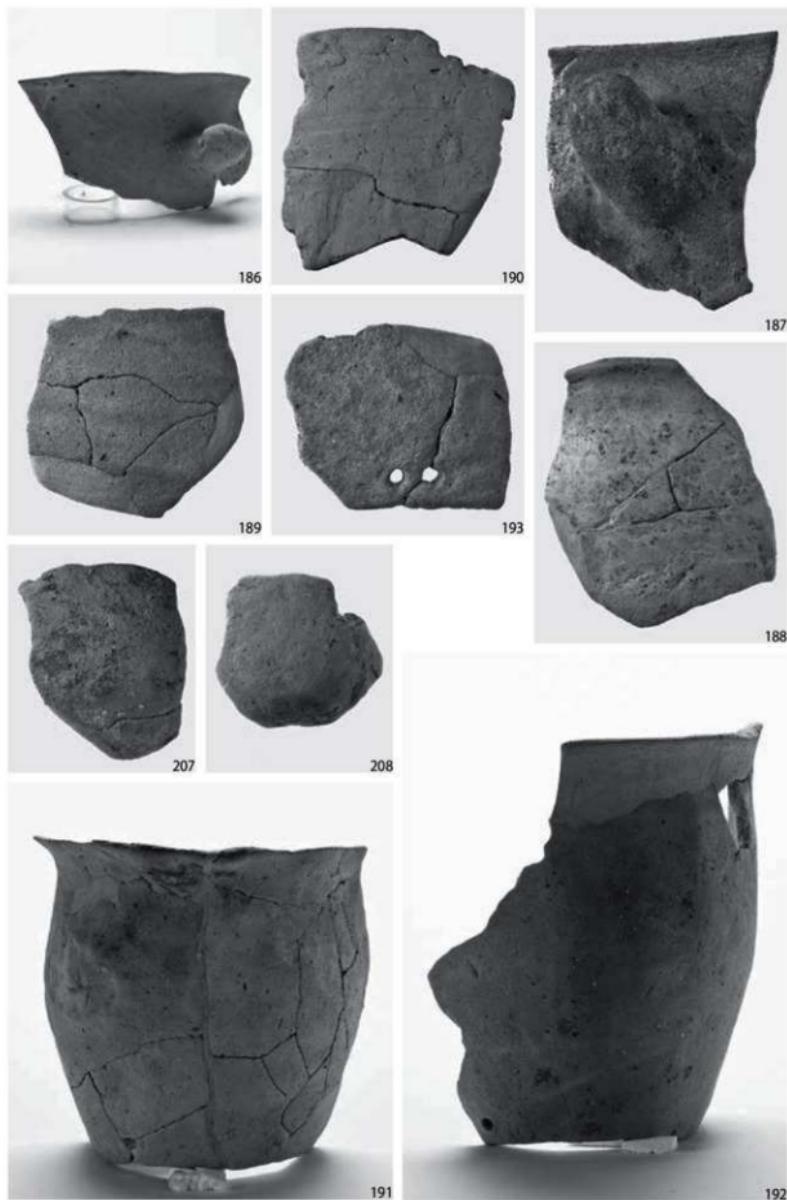




包含層 6



包含層 7

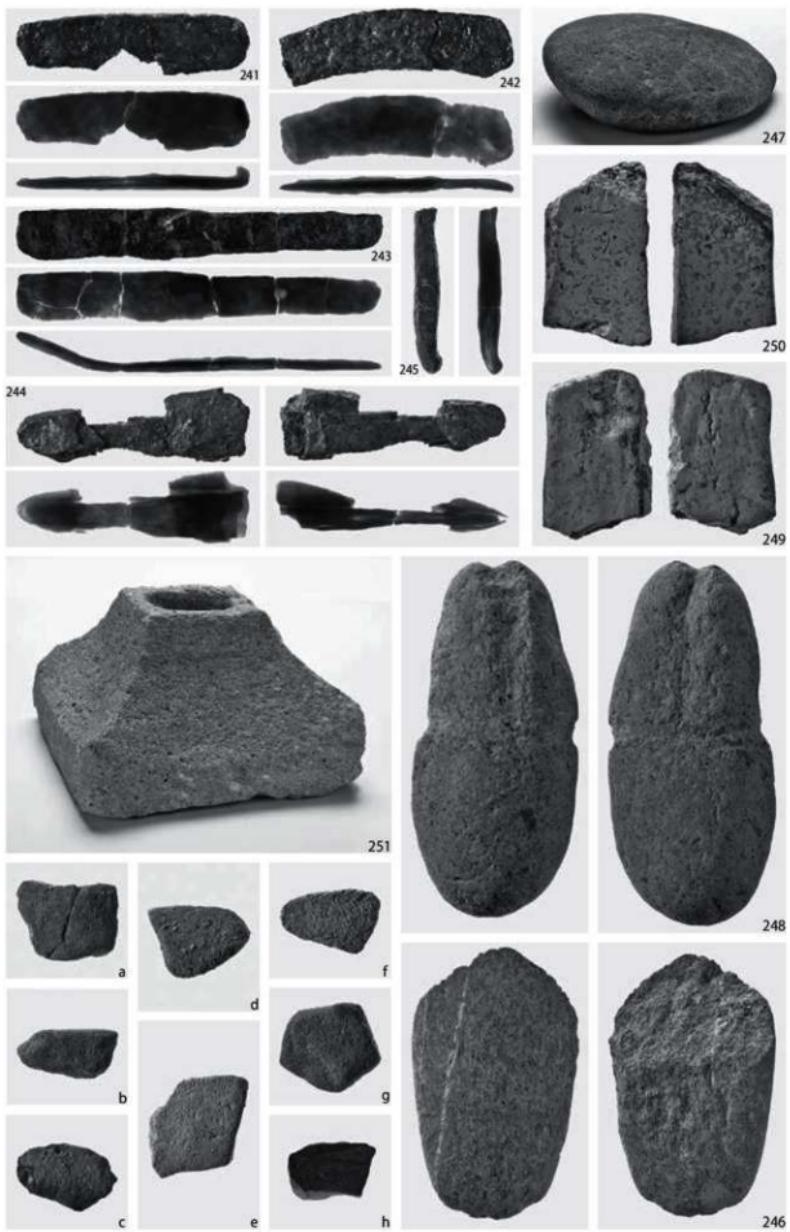


包含層 8

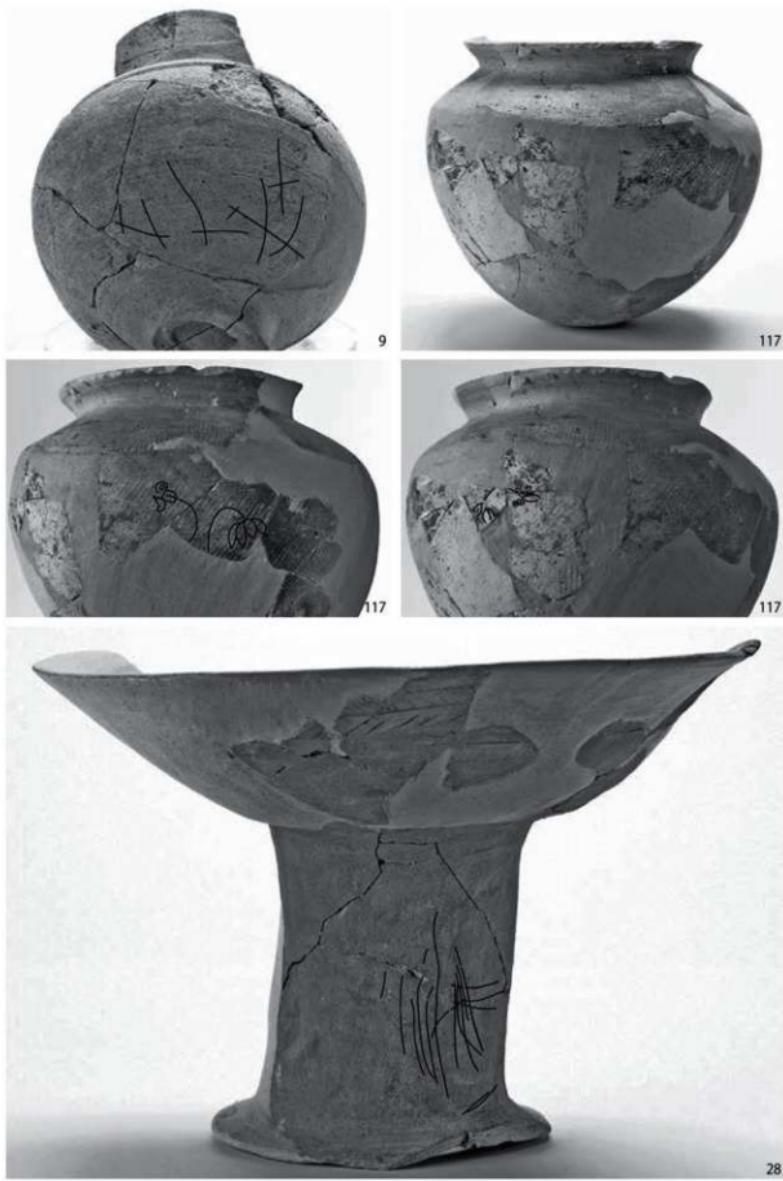




包含層10



包含層11・遺構 (a ~ h)



線刻（線を強調して表現）



1 Tr3



2 Tr4



3 Tr5



4 Tr7



5 Tr8



6 調査前空撮



1 調査前 1 (西から)



2 調査前 2 (南から)



3 調査前 3 (北から)



1 畦 2 土層 1 (西側)



2 畦 2 土層 2 (002炭窯部分)



3 畦 2 土層 3 (中央)



1 畦3土層1(中央)



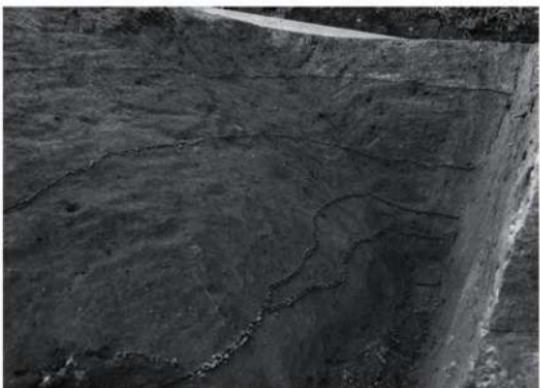
2 畦3土層2(東側)



3 畦3土層3(西側)



1 畦4土層1(中央)



2 畦4土層2(西側)



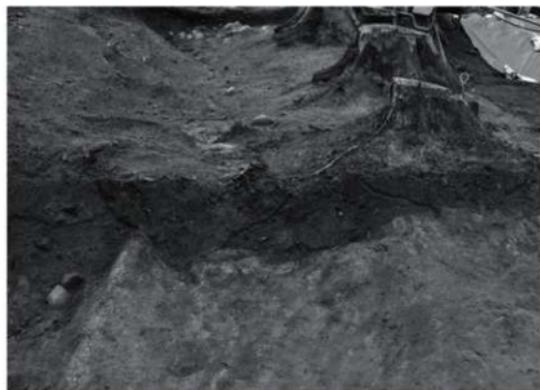
3 畦4土層3(東側)



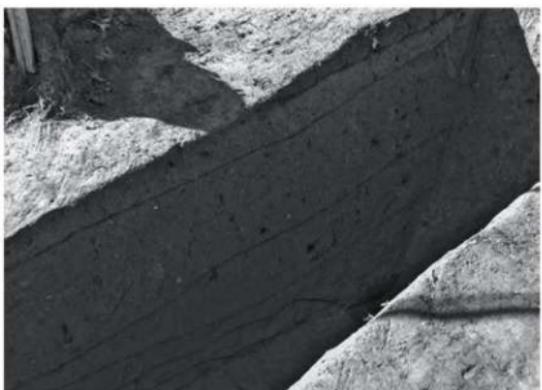
1 畦1土層



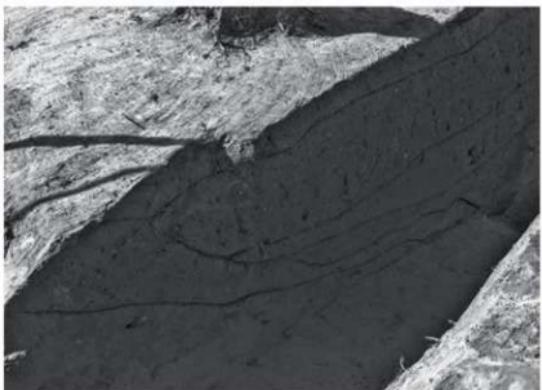
2 畦10土層



3 001溝土層



1 哉7土層1(西側)



2 哉7土層2(東側)



3 哉8土層1(北端)



1 畦8土層2(北側)



2 畦8土層3(中央)



3 畦8土層4(南側)



1 畦9土層1(北端)



2 畦9土層2(北側)



3 畦9土層3(中央)



1 畦9土層4(中央)



2 畦9土層5(南側)



3 畦9土層6(南側)



1 003造構検出



2 003造構検出



3 003造構土層



1 002炭窯検出



2 002炭窯検出



3 002炭窯完掘



1 002炭窯土層 (AA')



2 002炭窯土層 (BB')



3 002炭窯土層 (中央)



1 黒褐色土検出 1



2 黒褐色土検出 2



3 黒褐色土検出 3



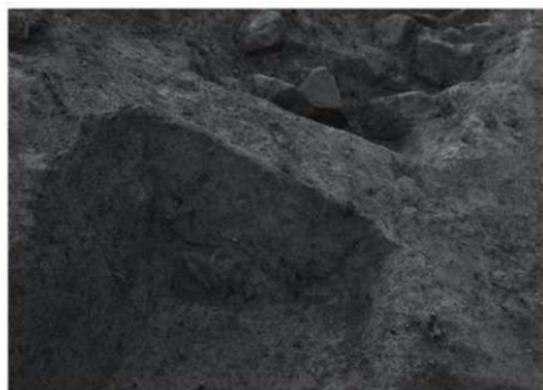
1 014溝検出 1 (AA'土層)



2 014溝検出 2



1 014溝土層 1 (CC)



2 014溝土層 2 (BB')



3 014溝土層 3 (AA')



1 畦11-2土層 1 (JJ')



2 畦11-2土層 2 (JJ')



3 畦11-2土層 3 (JJ')



1 畏11土層1 (KK'：南端)



2 畏11土層2 (KK'：南側)



3 畏11土層3 (分層前)



1 眣11土層 4 (分層後)



2 眣11土層 5 KK' : 北側



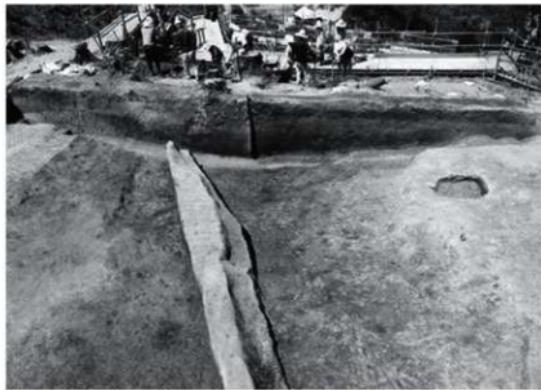
3 眣11土層 6 (KK' : 北端)



1 畦12土層1(西側)



2 畦12土層2(中央)



3 畦12土層3(全体)



1 畦13土層



2 畦14土層



3 畦15土層



1 畦17土層



2 畦18土層



3 畦19土層 1(南側)



1 畦19土層2(北側)



2 畦20土層



3 畦21土層



1 032溝検出 1 (北から)



2 032溝検出 2 (南から)



3 032溝完掘





1 046石列



2 062溝・063溝



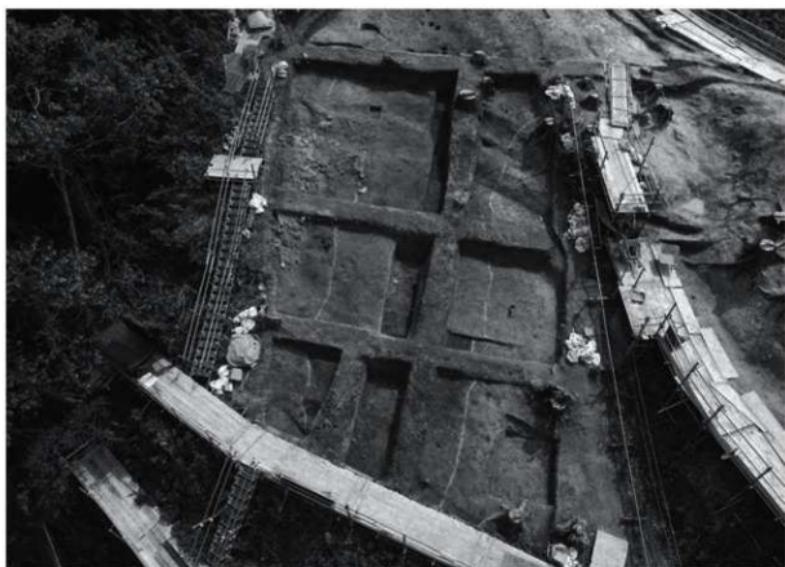
3 048土坑



1 頂部完掘



2 頂部完掘



1 落ち込み確認



2 丘陵部完掘



1 完掘状況 1（南から）



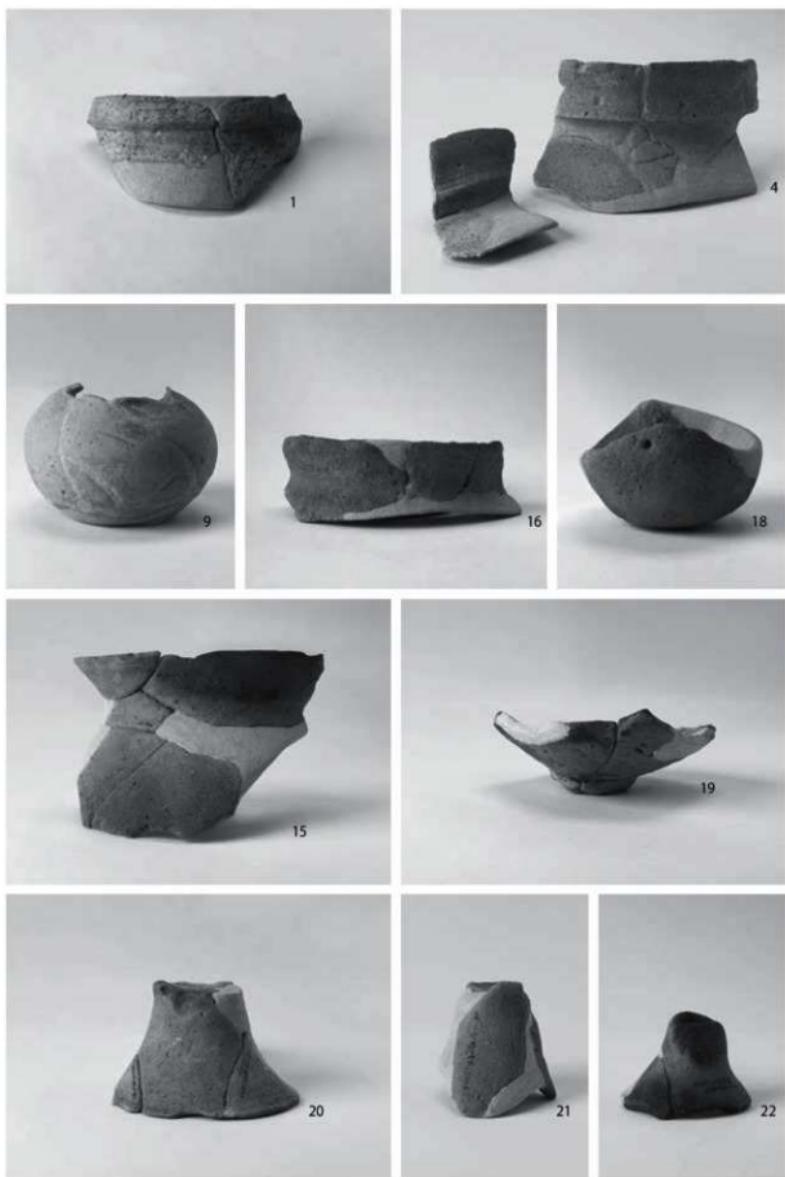
2 完掘状況 2（北から）



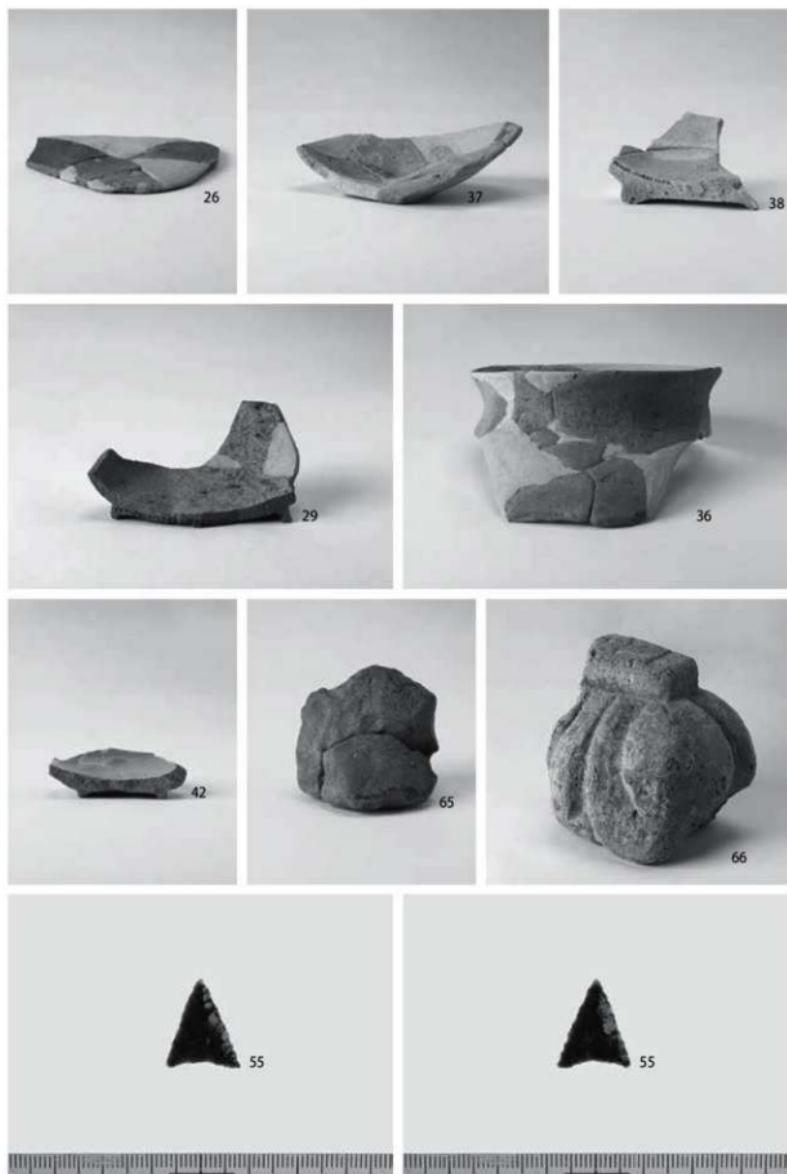
1 完掘状況 3



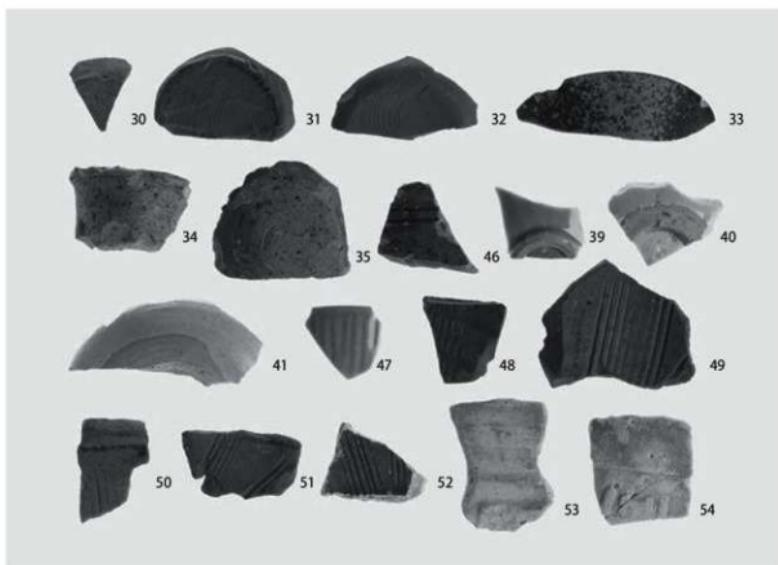
2 完掘状況 4 (東から)



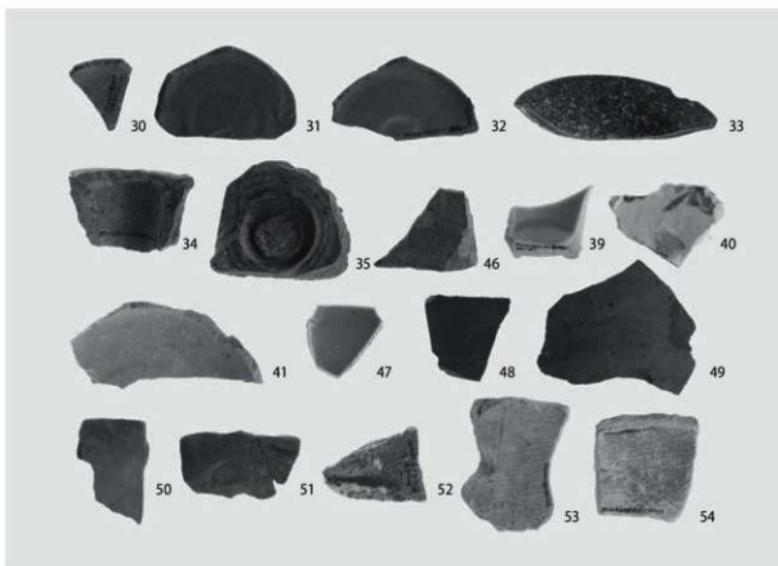
出土遺物 1



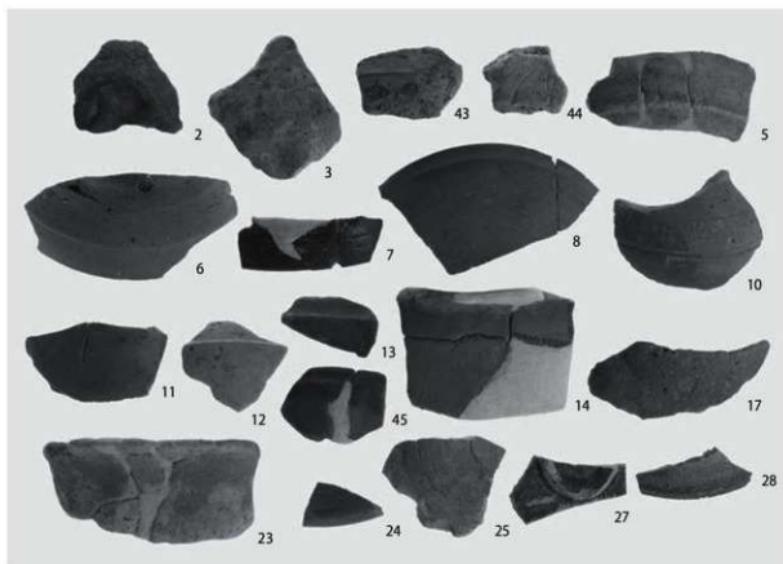
出土遺物 2



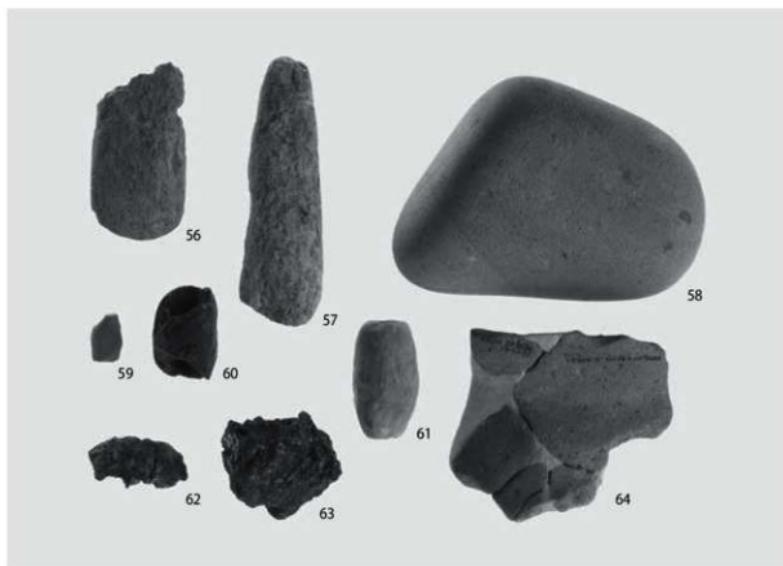
1 出土遺物 3-1



2 出土遺物 3-2



1 出土遺物 4



2 出土遺物 5

## 報告書抄録

# 下和田遺跡・高丸遺跡

一般国道9号(福光・浅利道路)改築工事に伴う  
埋蔵文化財発掘調査報告書

発行 2023(令和5)年3月

発行者 島根県教育委員会

編集 島根県教育府埋蔵文化財調査センター

〒690-0131 島根県松江市打出町33番地

電話 0852-36-8608

印刷 有限会社 黒潮社







